

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

恋空了春、夜空の下で

【作者名】

雪音

【あらすじ】

どんなに大切な人でも、時が過ぎれば修復が不可能なほどに変わってしまう。けど、不変のものだってある…そう信じたい。貴方が私にこのかんざしを送ってくれた時のあの言葉も、笑いながらふざけたあの日の記憶も。私の中では何も変わっていない。…貴方の隣はまだ…空いていますか？そこに私がいてもいいですか…？　オ
リジナルヒロインは、高杉の妹です。オチは銀時。話のオチは死ネタになりますので、苦手な方はご注意ください
(2011・06・

13 連載開始小説)

【第一訓】チンピラ警察も人の子

「紫苑^{しおん}、今日も綺麗でさア」

「ありがとう、総ちゃん」

ここは武装警察・真選組の屯所である。そして、紫苑と呼ばれた女は…一応、真選組の隊士だ。そして、その紫苑に「綺麗だ」と言ったのは真選組一番隊長の沖田 総悟である。ニコリと笑った紫苑に、同じように総悟も笑った。しかも、いつもの腹黒いSツ気漂う笑みではなく純粹な無垢な笑み。かといって、この2人が恋仲同士というわけでもなく…。沖田も紫苑も、ただ純粹に姉弟^{きょうだい}のように接しているのだ。

「今日はお仕事？」

「そうなんでイ。はー、かったりいったらありやしねえぜ…」

「フツ、そんなこと言ってるのとシにまた怒られるよ？」

「怒られたら返り討ちにしてやらア」

クスクスと笑う紫苑に、つられるように沖田も笑う。しかしそんな穏やかな時間も…

「総悟オオオオ!!! テメエ、やっぱりここに居やがったかアアア!!!」

スパーンと開けられた障子と、大きな声で終了となる。紫苑は大して驚いた様子も無く、例の如く笑っている。一方の沖田は小さく舌打ちしていた。この怒鳴り込んできた男こそ、さっき紫苑が「トシ」と呼んでいた真選組副長の土方 十四郎である。泣く子も黙る鬼の副長と名高いが…

「土方さん、そんなに怒鳴ってたら血管が切れますぜイ? そのままく

たばねコノヤロー」

「アア!? 誰のせいだ、誰の!! テメエがくたばね、コノヤロー」

まあ、いつもこんな感じである。紫苑も最初こそ驚きはしたが、毎日この光景が続けばなれるというものだ。

「おはよう、トシ。今日も朝から大変ね」

微笑みながら言えば、「そう思っなら総悟を甘やかすな」としかめっ面で言われる。しかし、決して怒っているわけではない。

「総悟、近藤さんが呼んでたからさっさと行って来い」

「分かりやした。じゃあ土方コノヤローは後で殺すという事で…」

「テンメエ…!!」

「じゃあ紫苑、また後で」

「うん、またね」

手を振って見送る紫苑の前に、今度は土方がやれやれと零しながら腰を下ろす。

「あれ? 今度はトシがサボる時間?」

「んなわけあるか!! ったく…」

とは言つものの、ばっちり勤務時間中だ。サボりではない息抜きだと言ってはいるが、言葉が違っただけで立派にサボりだと思っ紫苑である。

「最近はどうだ、体の調子は?」

「ん…良かったり悪かったり。けど今日は調子いいから、ちょっと外

に出てみよっと思っの」

「そうか。無理はすんなよ」

「ん、ありがとう」

フツと微笑みながら紫苑の頭を土方がなでれば、紫苑も嬉しそうに微笑んだ。土方と紫苑の仲も、恋仲というわけではない。やはり、姉と弟…そんな感じなのだ。

いや、真選組にいる誰もが…この紫苑という存在を大事な家族の一員として接している。

元々、紫苑は真選組の人間ではなかった。

それは…数年前まで遡る…。

見回りを追え、屯所に戻ってきた土方と沖田は屯所の前に大怪我をして倒れている女を発見した。慌てて連れ帰り、介抱したのだが…目覚めた彼女から聞いた名前と生い立ちを聞いて認識が変わった。

高杉 紫苑。彼女は、超過激派の攘夷志士である高杉 晋助の妹だった。当然ながら元攘夷志士であり、攘夷戦争にも参加していた。真選組に発見されるまでは高杉の率いる鬼兵隊の副官として動いていた。

しかし…昔の優しい兄から、復讐に駆り立てられどんどん変わっていく兄を見ていることが出来ず、力づくで止めようと試みたのだ。紫苑もそれなりに剣の腕前は強かった。しかし、晋助に敵うはずも無く返り討ちに遭い…命からがら逃げ出してきたのだ。

逃げる時に、何度も何度も幹部の者達に捕まりかけた。そのたびに刀を振るい、何とか追っ手から逃れてきた。

しかし、このままでは殺される。ただ、普通の暮らしをしているだけでは殺される。

それを恐れた紫苑は、一か八かの賭けで…天敵である真選組の屯所まで逃げたのだ。全てのことを包み隠すことなく話した紫苑は、当然ながら罪人として屯所の牢へと閉じ込められた。しかし、紫苑は悲観しなかった。怪我の手当てをしてもらったうえに、粗末とはいえ食べ物を与えてもらえる。そして何より、真選組という絶対的な安全圏内にいることが、紫苑を安心させていた。もちろん、この先に待ち受けている懲罰を考えると恐ろしい。死刑だって有り得る。しかし…変わっていく晋助を止めることも出来ない自分など生きていても無意味だと、牢屋の中で全てを捨てた。

ただ…一つだけ心残りがあった。

それは攘夷戦争で、彼女が愛していたただ1人の男の事。晋助と同じ紫色の髪を、綺麗だと言ってくれた人。大きな背中で自分のことをいつも護ってくれた人。自分の事を愛してくれた人。大切な幼馴染であり、大切な恋人。

しかしその恋人とはもう…ずっと、会っていない。

正しくは、生死すら分かっていないのだ。戦いの最中はぐれてしまい、紫苑は1人戦場に取り残された。晋助達と完全にはぐれてしまい、紫苑は攘夷戦争で孤独な戦いを強いられたのだ。そんな彼女が晋助と再会したのは攘夷戦争が終わってすぐの事だった。だが…再会した兄の姿は、自分の知る兄の姿からかけ離れてしまっていた。

左目の包帯。そして…ギラギラと輝く、復讐に囚われた獣のような瞳。

初めて紫苑は、兄が怖いと思った。

それでも、たった1人の家族。彼女は傍にすることを望み、晋助もそれを拒む事はしなかった。だがどんなに問うても、自分の愛した人の生死だけは教えてくれなかった。

牢の中で1人…愛する人から貰った最初で最後かもしれない贈り物のかんざしを見つめながら、紫苑は願いつけた。

生きていて欲しいと…。

牢に閉じ込められて1ヶ月程が経ったころ、近藤と土方が紫苑の牢にやって来た。いよいよ、自分の運命も終わるのかと…2人を見上げて、微笑んだ。

「何故…笑う？」

「さあ、何故でしょう…。私にも分かりません。しかしこれが報いだと…そう思っております」

「報い？」

「…兄を…晋助を変えられなかった…止めることのできなかった、出来の悪い妹の受けるべき報いだと…」

心残りはある。しかし、自分の想っていた人はとても優しく、とても素敵な人だった。例え生きていたとしても、もう離れ離れになって随分と時間が経ってしまっている。自分以外のいい人が出来て、結婚しているかもしれない。幸せを掴んでいるかもしれない。いや…生きていくかどうか分からない。

恋人も救えず、兄も救えなかった自分に、のうのうと生きている価値など…無い。

「だから、どんな所業にも私は耐えます。死を宣告するのであれば…
それをも、私は受け入れましょう」

それが、紫苑の覚悟だった。髪と同じ深い紫色の瞳は強く2人を見つめていた。だが予想に反して、近藤はニコリと笑い、土方もフツと表情を崩した。

「大したお嬢さんだ。流石は侍といったところかな？」

「だがな、ワリイが…アンタの望む所業とやらを告げにきたわけじゃねえよ、俺達は」

釈放。それが…2人の口から告げられた。

1ヶ月、紫苑を真選組の屯所に閉じ込めたのには理由があった。紫苑がスパイである可能性を考えて一定期間閉じ込めておく事を土方が提案したのだ。優れた監察方ならば、自ら己の身体に大きな傷を付け、同情を誘い潜り込む。そうだったら、仲間を取り返そうと敵が屯所に攻め入ってくるはずだ。紫苑の兄が晋助であるならば尚更だ。しかし、この1ヶ月…そのような事は全く無かったのだ。

そう説明する近藤に、紫苑は悲しげに微笑んだ。

「そうでしたか…。やはり、私は兄に見捨てられたのですね…。当然です、一番大きなわき腹の傷は…兄である晋助に斬られたものですか…」

もうあんな兄の姿を見なくていいのだという安堵と同時に…

「けれど、どこかで…兄が私を助けてくれる事を望んでおりました…」

本当に捨てられてしまったのだという悲しみに涙が溢れた。

「兄さんは…優しい人…だったから…ッ…、どこかで…望んでいた…ッ…」

もう、あの頃の兄は死んでしまったのだと。今、鬼兵隊を率いている兄は…確かに兄ではあるが、紫苑の知る兄ではないのだと。

めでたく釈放となったが、紫苑のことを考えるとおそらく頼るところも無いだろうと近藤は話を持ちかける。紫苑の剣の腕は攘夷戦争で生き残ったという時点で保証されている。それに、そのまま釈放してどこかに住むことが出来たとしても、また命を狙われる可能性だつてある。それを危惧した近藤・土方の両名は紫苑の真選組入隊を勧めた。最初はどうするか悩んだが…その申し出を甘んじて受ける事にした。

最初こそ隊士達との間には溝があった。晋助の妹という肩書きが、深い溝を作っていたのだ。しかし、刀を片手に攘夷志士達に立ち向かっていく彼女の姿と、仲間を助ける為に命を張って護る姿に…その溝もすぐに埋まった。

そして紫苑は“真選組”という大きな家族を得ることが出来たのだ。

充実した日々が続いていたが…そんな紫苑を病魔が襲った。突然、巡回中に咳き込み吐血したのだ。そのまま病院へ運ばれ、下された診断は…余命1年、治療は不可という宣告だった。

真選組隊士の誰もが絶望した。何より、本当の家族同然に可愛がっていた近藤がその宣告に涙を流した。医者につかみかかり、何とかしると怒鳴り散らした。ベッドで静かに眠る紫苑を目の当たりにして、彼女をどこか姉のように慕っていた土方はきつく拳を握って壁に叩

き付けた。

けれど…紫苑は、決して己の人生に悲観はしなかった。残された人生を全うしたいと…そう、望んだのだ。医者からは入院を勧められたがそれを断り、無理はしないという絶対条件の元、紫苑は屯所へと戻ってきた。

「ねえ、トシ？トシは今日…巡回に行くの？」

「ああ、パトカーで出るぜ。一緒に行くか？」

「うん、そうしたいな…。歩くのもいいけど、途中できつくなったら困るから…」

ニコリと笑う紫苑に、「準備をしてくるからちょっと待ってる」と言い残して土方は部屋を後にする。その間に、紫苑も髪を整えたり隊服を整えたりした。腰には…自分が屯所に逃げてくる時まで手放さなかった刀。攘夷戦争を共に切り抜けてきた大事な刀。しかし…もう、紫苑に以前と同じように刀を振るう力は残っていないかった。だが、真選組を名乗る以上、丸腰では話にならないと形だけ…帯刀しているのだ。

「おら、準備出来たぞ。総悟も一緒だ」

「うん、今行く…!!」

そつと障子を開けると、フワリと優しい風が部屋に入ってくる。

「もう春だね…」

攘夷戦争が終わったのも、兄と再会したのも春だった。

そして…

「紫苑、行くぜイ」

「総ちゃん、待って…歩くの早い…!!」

「おっと、すまねえ」

今年の春…

それが、彼女の受けた余命のタイムリミットだった。

【第二訓】 幸せと不幸は同時にやってくる

「銀ちゃん!! 酢昆布欲しいアル!!」

「ちよつと待てつて!! イチゴ牛乳の方が先だ!!」

「下らない争いはやめてくださいよ、恥ずかしい…」

スーパーであれを買う、これを買うと騒いでいる3人…(いや、騒いでいるのは2人なのだが)。彼らは「万事屋銀ちゃん」という何でも屋を営んでいる3人であり、銀髪の男が一応店主である。着流しを着て、腰には木刀。目は…死んだ魚のようだとよく比喻されるこの男の名は坂田 銀時。チャイナ服を着た女の子は天人・夜兔族の神楽。そして眼鏡を掛けた青年は志村 新八。今、この3人は仕事の依頼ではなく、久々に入った依頼料で思うままに食材やら切れていた日用品やらを買い込んでいた。

「にしても、今回は凄い大金でしたね…!!」

「ったくよ、たかが猫探しでこの大金だぜ? まあ、こっちは大助かりだけどな!!」

「ペットブーム万歳ネ!! 金持ちほどペットに金をつぎ込むアル!!」

「いや、大体合ってるけどさ…なんか神楽ちゃんが言うと…容赦ないね…」

「何だと、この駄眼鏡」

「眼鏡関係ねえだろオオオ!!」

こんな調子でワイワイと騒ぎながら万事屋に向かって足を進めていると、見慣れたパトカーが遠くに見えた。

「あれって、真選組のパトカーですね。何かあったのかな?」

「どおーせ巡回と称したサボりだろ? 総一郎君あたりが乗ってんじゃね。」

「いや、総悟さんですよ。いい加減覚えたらどうです？てかワザとでしよう絶対…」

「マヨも乗ってるネ!!……あれ？後ろの方に知らない奴乗ってるヨ……」

万事屋と真選組は言葉では表現できない腐れ縁という奴で…かといつて、仲がいい訳ではない。決して無い。まあ、神楽と沖田、土方と銀時が互いにライバル視？しているだけで、他の者達とはそれなりの関係だ。かといつて、真選組のメンバーを全員知っているわけでもない。

「どっかの物好きが新しく入隊したんじゃないの？ほら、就活の春!!って言っじゃない？」

「ああ、確かにその可能性はありますよね」

「ケツ、また税金ドロボーが増えたアルか!!」

ジト目でベーツと舌を出す神楽。すると、助手席の窓が開き…

「そののチャイナ。公務執行妨害で死刑でさア」

沖田がバズーカを構えてきた。

「はいイイイイ!!??ちよつと、何言ってるのあの人!？」

「おいおい、ただ素直な表現をしただけでこの扱いですか。表現の自由はこの国に無いんですか、コノヤロー」

「サド野郎、今日こそ決着をつけるネ!!」

「ま、狙いはお前だ神楽。お前1人で頑張つて来い!!」

「銀さんんんんッ!!サラッと面倒ごとを押し付けるなアアアア!!!」

毎度おなじみのこのやり取り。いつものように土方が馬鹿な真似はするなと止めに入り、内輪もめになる…。

そう、いつもだったらすうなるはずだった…。

パトカーの、後部座席の扉が開き後ろに乗っていた人物が下りてくるその瞬間までは…。

先に気付いたのは沖田だった。

「あれ、万事屋の旦那でさア、土方さん」

「だからどうした。俺達は勤務中だ。それに、野郎に関わるとロクな事がねえ…」

そのまま行くぞ、と土方が車を発進させようとした。だが、後部座席に乗っていた紫苑が不思議そうに首を傾げる。

「万事屋…って、トシ達がよく話してる…?」

「そうでイ。ちなみに、チャイナは俺の得物だ。絶対に譲らないぜイ」

「もう、そんなこと言ってる!! 女の子を苛めちゃ駄目よ?」

「言っておくが、万事屋は俺の得物だ。絶対に譲らねえ…」

「トシまで…!!」

クスクスと笑いながら、それぞれの得物を睨みつけている運転席と助手席に乗っている同僚を見つめる。口では2人ともこんなことを言っているが、本当は相手の力を認めている事を紫苑は知っている。

「何言ってるんですかイ、土方さん? 旦那はいい人ですア。そもそもアンタ一回負けてる事を忘れちゃいけませんぜイ?」

「バカ、総悟!!」

「へえ、トシが負けたの? 珍しい…!!」

「あれ、聞いてなかったのかイ?」

「うん」

「それはいけねェや、土方さん。自分の負けを話さないたア…」

「や、喧しい!!」

そんなやり取りを微笑みながら見守る。ふと…沖田が万事屋一向に目を向けた時、丁度…チャイナこと神楽が自分達に舌を出しているところを目撃した。

「…上等だ、コノヤロー」

窓を開け、ガチャツとバズーカを構える沖田。

「オイツ!! テメエ、何考えてやがる!!」

「そこのチャイナ。公務執行妨害で死刑でさア」

「そ、総ちゃん!!」

土方と紫苑が慌てて止めるがどうやら本気らしい。だったらせめて逃げてもらおうと、紫苑も窓を開けて叫ぼうとした。

しかし…その瞬間、ドクンと心臓が跳ね上がった。

万事屋の3人…もめているのだろうか？ 掴み合ったり、騒いだりしているその中心に…

目立つ、銀髪の男。

目が離せなかった。

見間違いかもしれない…都合のいい幻かもしれない…

そう思った。

しかし、見間違っはすが無い。夢でもなければ幻でもない。

その姿は…

「銀…時…?」

あの頃と…

攘夷戦争のときとなんら変わらない姿だった。

大切だったその人が…愛した男が…今、目の前にいる。

「おい、紫苑?お前、万事屋と知り合いなのか?」

土方の問いも耳に入らない。気付けば、紫苑はパトカーから下りていた。

「紫苑?どうしたんでイ?」

只ならぬ紫苑の様子に、沖田は構えていたバズーカを降ろし、問うが…やはり返事は無い。土方と沖田は顔を見合わせる。

しかし、次の瞬間…

「ま、待て紫苑!!走るな!!」

「走っちゃいけねエ!!身体に障る!!」

紫苑は、思うままに…駆け出していた。

「銀さん、後部座席から降りてきましたよ？女の人…かな…？」

後部座席から下りてきた真選組隊士を見つめて、首を傾げる新八。バズーカが下ろされ、沖田の視線が自分から逸らされたことに気付いた神楽も不思議そうに首を傾げた。

「真選組に女がいたアルか？」

ねえ、銀ちゃん？と神楽が問うが……銀時は固まったように、真選組のパトカーを凝視していた。

「銀ちゃん…？」

「どうしたんですか、銀さん？」

2人の問いに、返事は無い。顔を見合わせる神楽と新八である。

「おい、天パ!!無視とはいいい度胸ネ!!」

一発ケリでもかましてやろうと神楽が構えたが、それを新八が必死に止めた。

「待って、神楽ちゃん!!銀さんの様子がおかしい…」

「…？銀ちゃん？」

新八と神楽は改めてパトカーから下りてきた女性隊士を見る。遠目ではあるが、美人だ。いつもの銀時ならば「あんな美人が真選組にいるたあ勿体無い!!俺達が貰い受ける!!」ぐらいの冗談を飛ばしてもおかしくは無いはずなのに。まるで…そこだけ時間が止まったかのように、ただ呆然と女を見つめていた。そして…ポツリと呟く。

「紫…苑…？」

え？と新八と神楽が顔を上げると…

「銀…さん…？」

「どうしたネ…？なんで…？」

銀時の瞳からは、涙が零れ落ちていた。パトカーから下りてきた女が駆け出す。それにつられるように、銀時もまた女に向かって駆け出した。

「ちよっと、銀さん!？」

「ワケわからねえよ、銀ちゃん!!どうしたアルか!？」

慌てて2人も追いかける。パトカーから、土方と沖田も降りてきて慌てた様子で“紫苑”と呼ばれた女を追いかけていた。

2人には周りの声など聞こえてはいなかった。

銀時も、紫苑も…

「銀時…、銀時ッ…!!」

「紫苑ッ…!!」

ただ、互いの名前を呼び合っていた。

そして…伸ばされた2つの手は繋がり…

「銀時ッ…夢じゃない…銀時…だ…ッ…!!」

「バカヤローッ…!!夢だったら許さねえぞ…ッ…!!」

お互いに、抱きしめあった。それぞれを追っていた者達の足が、ぴ

たりと止まる。至近距離まで近づいてはいたが…まるで自分達の存在など見えていないかのよう、その空間だけ別であるかのよう…ただ2人は互いを抱きしめあっていた。

「新ハイ…あの女の人も泣いてる…」

「うん…。一体…誰なんだろう…？」

「土方さん、旦那が…」

「ああ…泣いてやがる…」

一体何が起きているのか分からない双方は、互いに視線を交わしあうが、それぞれ分からないと首を振るだけである。そこに居る誰もが、この2人の関係を知らない。知っているのはこの2人だけだ。

「…もう…会えないと思ってた…!!攘夷戦争で、はぐれて…独りになつて…。銀時が生きてるのかも死んでるのかも分からなくて、何処にいるのかも分からなくて…!!兄さんには何度聞いても、何も教えてくれなかつたし…ッ…!!こんな…こんなに近くにいたなんて…!!」

「ごめん…ごめんな、紫苑…。絶対に護るって…独りにしねえって約束したのに…!!気付いたらお前だけいなくて…!!けどよお、1人のために足は止められねえってツラの馬鹿が言いやがって…!!必死になつて晋助と説得したのに、辰馬とツラが却下しやがってよおッ…!!ずっと…ずっと後悔してた…!!なんである時、俺だけでも残ってお前を探さなかつたんだってずっと後悔してた…!!けど…」

「…やっと…会えた…」

更に強く抱きしめあう2人。銀時は紫苑の肩に顔を埋め、紫苑は銀時の胸に顔を埋めて…肩を震わせていた。

その時、真選組の2人だけは会話を聞いてすぐに分かった。

(ああ、コイツが紫苑の話していた…)

(攘夷戦争で離れ離れになった恋人ですかイ…。まさか、旦那だったとは驚きでスア…)

大切な人に貰ったかんざしを見つめながら、悲しげに話していたことを。自分には攘夷戦争が終わったら一緒にしろと約束した人がいたということ。その人の生死が分かっていないということ。

土方も沖田も…いや、真選組の殆どの者が知っている。

「あの、土方さん…」

いつの間にか近くまで来ていた万事屋の子供達。新八は控えめに土方を呼ぶ。

「何だ？」

聞かずとも、聞かれることは分かっていた。

「あの女の人は…？」

ああ、やっぱり…。

そんなことを考えながら、フーツと紫煙を吐き出す。そして口を開きかけたその時だった。

「ゴホッ…ゲホッ…ッ!!…ッ、ゴホッ…!!ツア…!!」

「おい…紫苑…？」

「だい、じょうぶ…、むせた…だけ…ッ、ゴホッ…!!」

ハツと土方は我に返る。すぐに視線を紫苑に向ければ、口元を押さえて苦しそうに咳き込んでいるその姿があった。

「おいっ、むせたって…そんなレベルじゃ……………」

ヒューヒューという呼吸をしている紫苑。そつと、口元から離された手には…べっとり赤いものが付いていた。

「…んで…かな、せ、かく…会えた…の…に……………」

涙を零しながら、しかし微笑みながら…

「な…んで…………、ぎ、と…れ……………」

「おいっ!!紫苑!!」

紫苑は、その場に崩れ落ちた。受け止め、銀時が何度もその名を呼ぶが、ただ苦しそうに呼吸をするだけで反応が無い。

銀時の頭が真っ白になる。

「ハハッ…おい、何の冗談だよ…?なあ、おい…お前、銀さんを騙して
るんだろ?そんな、手の込んだ冗談に引つ掛かるほど、銀さん…単純
じゃねえぞ?なあ、紫苑?ふざけるなって…。」

銀時が必死になって声を掛けるが、ただ紫苑の苦しそうな息遣いしか聞こえてこない。その表情も苦しそうで、一体何が起きたのか…銀時は分らずパニックに陥っていた。

「おいっ、すっかりしろ!!テメエがすっかりしねえでぶっつする!!」

そんな銀時を土方が叱咤する。土方を見上げる銀時の瞳は、今まで

見たことのない…悲しみに揺れるそれだった。いつもの銀時からは想像もつかないほど、とても弱々しい。

「とりあえず、パトカーで紫苑を病院へ運ぶ。おい、総悟…」

「病院には連絡を入れやした」

「そうか。万事屋、テメエも乗れ。…紫苑の傍に、居てやれ」

土方の言葉に、銀時は力なく頷く。いつものような覇気がない。突っ掛かってくるような、どこか憎たらしさが今の彼には無い。それほどまでに、紫苑の影響力は大きいのかとその場に居る誰もが思った。

「ワリイがお前達は一緒には乗せられねえ。定員オーバーだ。病院は大江戸病院だから、気になるなら…」

「分かりました。一度、万事屋に戻ってお登勢さん達に説明してから向かいます」

「ああ…」

いつもならば神楽が文句の1つや2つ言ってきたもおおかしくは無
い状況だが、流石の神楽もそんなことを言っている場合ではない事を
把握しているのか…ただ黙って新八と土方の言葉を聞いていた。

「じゃあ神楽ちゃん、一度万事屋に戻ろう」

「うん…」

パトカーに背を向け去っていく2人。去り際に、チラリと神楽は振り向いて後部座席に乗る銀時を見た。

「新八イ…」

「ん…？」

「あの女の人、銀ちゃんの知り合いネ…？」

「……分からない…、けど…」

銀時の女性関係は何となく、神楽も新八も“だらしが無い”という認識を持っていた。しかし思えば、あんなにも周りにいるんな女性がいるにも関わらず誰とも付き合っことをせず、あからさまな好意を抱いている女性がいてもそれすら見て見ぬふりをしていた。月詠やお妙、さっちゃん、すまいるのホステス達、吉原の花魁達…。彼女達以外にも、銀時に好意を寄せているものは多い。それとなく銀時にアタックしても、誰の目から見てもそうだと分かる行動を取っても、決して銀時はそれに答えない。

その理由が分かったような気がする。

「きつと……凄く、大切な人なんだと思う…」

あんなにも銀時が取り乱した姿を初めて見た。

それが…そうであるという答えではないかと、新八はそう思ったのだ。

「とにかく僕達も急ごう」

「そうネ!! 急いで帰るアル!!」

新八と神楽はかぶき町を駆け抜け抜け万事屋へと急いだ。一刻も早く銀時に会いたいと思ったからだ。自分達が辛い時、苦しんでいる時に銀時は不器用ながらも手を差し伸べてくれた。

「今度は僕達が…」

「銀ちゃんに手を差し伸べる番ネ…!!」

だったら今度は、自分達が…。

そんな想いを胸に秘めて…。

【第三訓】追憶　く君と別れた日く

話は…攘夷戦争の頃まで遡る…

「そろそろこの戦も限界が近そうだな」

そう言ったのは晋助だった。仲間はずつと倒れ、それでも天人達の数は減らない。

しかし、攘夷戦争…それが、彼らにとっての唯一の居場所だった。

「どついたもんでか…。このままじゃあ流石に、づつないぜよ…」

坂本の言う事ももつともで、このままでは僅かに残っている仲間も全員死んでしまう。

「だが、ここで白旗を振るつもりはないぞ。俺は最後まで戦う…」

しかし、誰の瞳も決して諦めてはいなかった。桂の言葉に銀時が頷く。

「当たり前だ!!俺らの江戸を…俺らの大切な人を奪った奴らに、これ以上好き勝手されてたまるかよ!!」

バツと立ち上がった銀時の姿は、上から下まで真っ白。その姿で敵を倒す事から、彼は白夜叉と敵からも、そしてあるうことか味方からも恐れられた。だが、それ以上に彼を慕う者の方が多かった。

彼女も…そんな1人。

「うん、私達は絶対に諦めない!!私達から松陽先生を奪った天人を決して許したりはしない!!」

紫苑は刀を握り締め、銀時と同じように立ち上がる。それに呼応するかのように、晋助・坂本・桂も立ち上がる。

「では、今日の出陣だが…どうする、晋助?」

「俺の鬼兵隊と銀時、辰馬とヅラ…今日はこれでいく」

「りょーかい」

「分かった」

「おまんら、どんな状況でも無理はしちやいかんぜよ!!」

「辰馬もね!!」

鬼兵隊は高杉が率いる軍であり、紫苑はその鬼兵隊の副官だった。だから、鬼兵隊が出動する時は必然的に晋助と共に出陣する事になる。

「今日は銀時と一緒にだね!!」

「そーだな!!まっ、危なくなったらデケエ声で呼べよ?絶対に助けに行くからな」

「うん」

「銀時より先に俺が助けに行つてやらア」

「晋ちゃん?それだと、彼氏としての俺の面目丸つぶれなんですけどオー?」

「知るか」

紫苑と銀時の付き合いは誰もが知っており、晋助も公認の仲だった。他の誰でもない銀時ならば、自分の妹を預けられる。それほどまでに、晋助は銀時を信頼していたのだ。

そつて…

「行くぜエ」

「」「」「おうっ!!」「」

運命の時が、訪れる。

「鬼兵隊は俺に続けエエエエ!!!!」

「オオオオオオツツツツ!!!!」

晋助の声に、鬼兵隊の者達が武器を掲げて声を上げる。そして、天人達の集団に飛び込み、次々に天人達を倒していった。

「鬼兵隊に遅れを取るなアアツ!!突撃イイイイ!!!!」

「オオオオオオツツツツ!!!!」

そして少し離れたところでは晋助同様に、銀時が己の率いる軍勢の士気を高め敵へと進撃していく。

互いに激しい攻防が続いている中、もちろん紫苑も刀を片手に戦う者。後ろには仲間、そして当然ながら…

「ぐふふっ、女だ…女がいる…」

「お譲ちゃん?ここはお譲ちゃんのような子が遊びに来る場所じゃないぜ…?」

目の前には敵がいる。2人の天人が下品な笑みを浮かべながら紫苑に近づいた。天人がそれぞれの武器を構えて紫苑に切りかかろうとするが、それを華麗にかわしてまずは1人の天人の首を刎ねる。ブシューウウという音と共に血飛沫が舞い、辺りに血の雨が降った。

「1人の女…!!」

ギロリと天人が紫苑を睨む。だが、その天人の動きがぴたりと止まった。紫苑から放たれる殺気。そして…

「ククツ…女だから何だというのだ？あまり女をなめるなよ、下衆が…」

返り血を浴びて不敵に笑う、女の姿にすっかり萎縮してしまったのだ。近づく紫苑、後ずさる天人。

「ヒィィィ!!!」

ついに悲鳴を上げて天人は背を向けてしまいが、それを逃すほど紫苑とて優しくは無い。

「背中を見せた時点で、貴様の負けだ…」

躊躇まようことなく紫苑は天人の心臓に刃を突き立て命を奪う。刀を抜けば、勢いよく血が噴出し、再び紫苑の体を赤く染めた。

「あーあ、また汚してしまった…」

折角綺麗に洗ったばかりなのに、と死んだ天人を冷たい目で見下ろしながらそう呟き、刀をヒュンと振って付着していた血を振り払う。

「副官!!増援が来ました!!かなりの数です!!」

「高杉あにの指示は？」

「そのまま迎撃せよとのこと!!」

「ならば遅れを取るな!!そのまま進めエエエツツ!!」

戦場においての紫苑は、晋助とよく似ていた。敵に情けはかけず、

口調もいつもの柔和なそれから冷徹なものへと変わる。笑い方もどこか、晋助に似ていた。しかし、鬼兵隊からの信頼はとても厚く、晋助同様、紫苑の命令もまた鬼兵隊員の間では暗黙のルールで絶対のものとなっていた。

「副官、白夜叉様と呼んでおられます!!」

「分かった、そっちへ行く!!ここは任せたぞ!!」

「了解です!!」

襲い来る敵を倒しながら、白夜叉…銀時の元へと急ぐ紫苑。駆けつければ、そこには白い羽織を真っ赤に染めながら戦っている銀時の姿があった。

「銀時!!」

「おう、紫苑!!ちよっくら手エ貸せや!!流石にこの数はキツイわ!!」

「これだけ殺つといてよくそんなことが言えるな!!」

「これでも、こちとらギリギリよ!!ほおら、来た来た!!」

「銀時、背中は任せた!!」

「紫苑、俺の背中もな!!」

フツと互いに笑みを零してダツと駆け抜ける。

斬って、斬って、斬って、斬って。

殺して、殺して、殺して、殺して。

「邪魔だああ!!」

「死ねええええ!!」

ひたすら刀を振るう2人の周りには、沢山の天人の屍と、その屍が

ら流れ出た赤で染まっていた。

しかし、銀時も紫苑も…刀を手にしながら思う事はいつだって同じなのだ。

一体、いつまでこんな戦いが続くのかと…。

「まあ、ざっとこんな感じか？」

「ここら辺は落ち着いたな…」

それから暫くの攻防が続いたが、紫苑と銀時という圧倒的な力に天人はなす統べなく次々と倒されついに2人の周りには立っている天人は居なくなった。だが、遠くからは砲撃音などが聞こえる。

「副官、白夜叉様!!更に増援です!!」

鬼兵隊の1人が2人の元にやって来て現状報告をする。それに、2人は同じタイミングで苦にがそうな顔をした。

「チツ…キリがねえなあ…」

銀時の呟きに全くだと紫苑が溜息を吐くが、悠長な事を言っている場合でもない。

「高杉はどうした？」

「先陣を切って戦っております!!巽そん(現在の南東)を攻めていた桂軍・坂本軍もこちらに加勢に来ているとのこと!!」

「……銀時…!!」

「ああ…流石に晋助と鬼兵隊だけじゃ、やばそうだ!!俺達も行くぞ!!」

ダツと駆け出し、すぐに鬼兵隊本隊の加勢へと向かう。

駆けつけたときは、すでに桂・坂本両軍の増援も到着しており、酷い混戦状態となっていた。

「晋助エ、ツラア、辰馬ア!! 誰か近くにいるかア!! 居たら現状報告しやがれコノヤローツ!!」

「おお、銀時やかっ!! おんしも、こっちに来ちよったがなあ!!」

「私も居る!! 辰馬、現状報告宜しく!!」

どうやら近くに居たのは坂本らしく、銀時の言葉にいち早く反応した。坂本の報告によると、周りから攻めてきていた天人の集団はこちらの戦力を分散させるための陽動だったらしく、本隊は鬼兵隊と晋助の首を狙ってきていたことが分かった。それを知った坂本と桂は軍を率いていち早く鬼兵隊の元へと駆けつけたのだ。

「クソツ、こっちの力をそぎ落とそうつてのが作戦かよ!!」

「けんど陽動とはいえ四方八方から、こじゃんち来ちゆう敵を野放しにも出来ん!! どうするかが一番えいが!」

四方八方からやってくる敵を放置しておけば、いずれは本隊であるこちらに合流する。そうなれば、いくら最強の鬼兵隊と言えど、いくら最強の白夜叉と言えど分が悪くなるのは目に見えていた。

「……私が鬼兵隊の一部を率いて離れる!!」

「紫苑、本気か!」

「本気だ!! 幸い、今までの様子を見る限りだと陽動で送り込まれる敵の数は少ない!! 十分だ!!」

「けどなあ、紫苑!! 一度、晋助にも報告をして…!!」

「その兄さんが何処にいるか分かんないんでしょ!! 良かれと思った事は自分で判断して動け!! これこそ私達が絶対とする、鬼兵隊総督が言っていた言葉だ!!」

銀時が紫苑を見つめる瞳は、敵を射殺す冷たい瞳ではない。大切な人を心から想う優しい眼だ。とても、戦場に居るものが見せる瞳とは思えないソレ。そんな銀時に、紫苑はフワリと笑った。

「大丈夫…銀時、私を信じて？ 私は絶対に負けないから…!!」

「…分かった!! こっちが片付いたら絶対に応援に行く!! それまで、何が何でも持ちこたえろよ!!」

「了解!!」

パンツと互いにハイタッチをして、紫苑は銀時の横をすり抜ける。

「死ぬなよ、紫苑」

「銀時も、死んだら許さないからね」

互いにそう誓い合う。

それが…銀時と、紫苑の最後の会話だった。

「辰馬ア!! 私は鬼兵隊の一部を率いて本隊から離れる!! 陽動でやってくる兵をこっちに近づけないようにする!!」

「了解ぜよ!! けんど無理は禁物じゃき!!」

「分かってる!!」

そして…

「鬼兵隊!! 私に続けエエエエ!!!!」

「オオオオオオオツツツ!!!!」

紫苑と鬼兵隊の一部は、本隊から離れて陽動部隊の殲滅へと向かった。

その日の殲滅を終え…辺りは天人達の屍と、仲間達の屍の山となる。

いつも…戦いの後は同じ光景が広がっていた。

そして、決まって戦場には雨が降る。

まるで…世界が、この惨状を悲しんでいるかのように。

それを銀時はいつも見上げていた。

自ら殺した者、死んでいった仲間…

それらを弔うかのように、その場に残って。

いつもだったら、その隣には自分の大切な恋人…紫苑がいる。

しかし、その日…紫苑は居なかった。

「辰馬、ツラ!!紫苑は何処だ!?鬼兵隊の一部を率いたまま、まだ戻って来ねェ!!説明しろ!!」

「ワシらも分からんちゃ…。陽動部隊を殲滅する言^ゆって離れて行った後はさっぱりじゃ…」

「…ッ!!探してくる!!」

「待て、晋助!!迂闊に動いては危険だ!!」

「ツラア!!じゃあ、紫苑を見殺せてエのか!」

「そうは言っておらん!!もしかしたら、銀時と一緒に居るかもしれんだろっが!!」

「それでも紫苑は必ず、一度こつちに顔を出す!!」
「とにかく落ち着くぜよ!!」

戻らない妹を心配して1人戦場に戻ろうとする晋助を、何とか止めようとする坂本と桂。そこに、ずぶ濡れになった銀時が戻ってきた。

「銀時…!! 紫苑は…!?!」

縋るような思いで、晋助は聞く。しかし、銀時の表情は驚愕のそれへと変わった。

「紫苑…居ねえのか…!?!」

絶望…という言葉がまさに似合うであろうその言葉と表情に、晋助の表情は歪む。もしかしたら銀時と一緒に、いつものように雨に打たれているのかもしれないと思っていた。しかし、戻ってきたのは銀時1人だけだった。

「…紫苑ッ!!」

刹那、銀時は再び雨の降る戦場へと駆け出す。

「待て、銀時!!」

「あっ、こら晋助!! たく…言っ事を聞かない奴達ばぶれもん達ぜよ…」

銀時に続くように晋助も雨の降る戦場へと駆け出していく。そんな2人の背中をただ、坂本と桂は見ていることしか出来なかった。

「分かっているさ、お前達がどんなに紫苑を大切に想っているかぐらい。『兄妹』と『恋仲』…。大切に想わん方がおかしいだろうって…」

しかし、ここは戦場だ。その思いが命取りになる事もあるのだ。

そんな桂達の心配をよそに、ひたすら晋助と銀時は戦場を走り続けた。降り続ける雨が鬱陶しくて仕方がなかったが、それにも負けずひたすら走る。

「銀時イ!!紫苑はどの方角へ向かった!？」

「離(現在の南)の方角だ!!鬼兵隊も一緒だった!!だが、四方八方から来る陽動隊を殲滅するつつつてたから…離の方角に留まっているとは限らねえ…!!」

「だが可能性はそこだ!!とにかく、離の方角へ急ぐぜエ!!」

「おう!!」

ひたすら2人は走り続ける。彼女が向かったであろう場所へ。

しかし…

とうとう、紫苑の姿を見つけることは出来なかった。

沢山の天人と鬼兵隊なにかまむくろの軀むくろが転がっている。そこに、生き残っている者は居なかった。それでも、銀時と晋助は諦めることなく探し続けた。

生きていても、軀と成り果てていても…必ず連れ帰ると、そう誓って。

しかし、どんなに探しても紫苑を見つけることは出来ず…

「…晋助、銀時…もつ、これ以上は…」

中々戻らない2人を案じた桂が止めに来た。

「何言つてんだ、ツラ。言つとくが、俺ア諦めねえぜ?」

「俺もだ。行きたきゃ1人で行けや…」

「ッ…!!銀時、晋助!!」

己の方を見ない銀時と晋助の肩を掴み、無理矢理その手を止めさせ桂の方へと体を向けさせる。すると、2人の瞳は「邪魔するな」と…そう物語っていた。しかしそれに臆することなく、桂は静かに言う。

「いいか、よく聞け。晋助…お前は仮にも鬼兵隊の総督だということ
を忘れるな。頭が不在の兵隊は脆くなる。今、我々にとって鬼兵隊
は唯一無二の戦力だ」

そして…と、今度は銀時に視線を向け桂は更に続ける。

「銀時、お前は我々の軍全体にとっての希望だ。お前は“白夜叉”な
んぞという名で呼ばれて、あまりいい気はしないだろう。しかし、そ
の名がどれだけ仲間を奮い立たせているか、そしてその名がどれだけ
天人どもを恐れさせているか…。その名の通り、お前の力は強い。必
要不可欠な力だ。だが、お前の力を今失えば…間違いなく、我々の軍
は…消滅する。鬼兵隊も白夜叉も、今の俺達には絶対的に必要な存在
なのだ!!」

そんな桂の言葉に、2人の鋭い視線が向けられる。

「おい、ツラア…だから何だつてんだ?アア?」

「まさか、オメエ…紫苑を見捨てろつて言つんじやあるめえな?」

2人の視線が痛い。だが…言わねばならないこともある。

しかし…

「…とりあえず、今日はもう遅い…。それに、さっきの戦いで体力も消耗している。そんな中でこれ以上雨に打たれれば、身体を壊す。特に銀時、お前はずつと雨に打たれればなしだろう…。休むことも大事な勤めだ。紫苑は強い。今は…紫苑の強さを信じる事も大事ではないのか…?」

自身が思っていたこととは全く違う言葉が己の口から飛び出す。本来であれば「もう諦める」と言う筈だった。しかし…

(お前のそんな顔を見たら、言えるものも言えんわ…)

今にも泣き出しそうなの…そんな銀時の表情を見て、言葉を飲み込んだのだ。

桂の言葉に納得したわけではなかったが、このままでは身体を壊すと言われては反論も出来ず、結局その日は陣地へ戻る事となった。

戻る際…銀時も晋助も、何度も何度も後ろを振り返る。

もしかしたら、そこに紫苑が居るかもしれないと…そう思って。

翌朝、昨夜の雨が嘘のように外は晴れる。

それと同時に…晋助と銀時にとって、残酷な宣告がなされた。

「我々は進軍するぞ。」そのままここに留まり続けては危険だ」

桂の言葉に、真っ先に反応したのは銀時だった。桂の胸倉を掴み、恐ろしい形相で睨み付ける。それはさながら、戦場にいるときの銀時

…否、白夜又そのものだった。鋭い殺気に、近くに居た兵士達は恐れをなしたのかどよめく。そんな彼らに坂本が「大丈夫ぜよ」と苦笑しながら呟いて落ち着かせた。

「おいおい、ツリア。お前、昨日と言ってることが違うじゃねえか？
アア!?昨日のアレは、俺と晋助を騙して連れ帰る為の嘘だったのかよ!!」

怒気を隠すことなくありのままをぶつけければ、桂はそれに動じた様子もなく真っ直ぐと銀時の目を睨み返す。その瞳もまた強い。

「昨日、ああでも言わなければお前達はずっとあの場に留まり続けた
だろう?違うか、銀時、そして晋助よ…」

「アア、違わねエ。そりゃ、自分の妹を想って探してんだ。可能性のある限り探し続ける。それが当たり前だ。この気持ち、オメエには分かるめえよ…」

「大切な人が1人で戦ってるかもしれない、傷付いて動けずにいるかもしれないねえ…。そんな奴を見捨てろってのか!!仲間を…: 大事な人を見捨てろってのかよ!!もしこれが「あの人」だったら、お前はそれでも同じことが出来たのか!?アアッ!」

ギリツと胸倉を掴む銀時の手に力が籠る。晋助はその場から動きはしなかったものの、殺気は銀時にも負けず劣らずのものだった。場の空気は明らかに悪い。兵士達の顔色も蒼白だ。幹部同士の喧嘩ともなればこうなるだろうと、どこかで坂本は諦めてはいた。だが思いの他、予想以上に雲行きが怪しくなってきた。しかし…: 今はまだ口が挟める状況ではないと悟り、何も言わずそれぞれを見守っている。坂本には両者の言い分…: どちらが正しいのか、判断しかねているのだ。

大切な仲間を見捨てて行くのかと問われれば、それは出来ないと断

言できる。

しかし、他の仲間を危険に晒してまでこの場に留まり続け、たった1人の仲間を探し続けるのが得策かと聞かれればその答えも否だ。

(げにまっしと、参ったぜよ...)

しかし…と坂本は考える。今後のことを考えると、晋助と銀時には残酷のようではあるかもしれないが…桂と同様の意見だった。

「では聞くが…晋助、銀時。貴様らは……1人のために、大勢の仲間を命を危険に晒すつもりか？」

「……ッ……!!」

まさに坂本が口を開こうとした時、言おうとしたことを桂が口にする。その言葉を受け、銀時が目を見開き息を呑んだのが分かった。そして、晋助は小さく舌打ちをする。

2人とも、本当は分かっていたのだ。桂が言っていることが正しいという事も、自分達の行いが軍の足を引っ張っているという事も。

「けどオメエ…紫苑だって大事な仲間だろうよ。その仲間を見捨てるっていいのか？」

静かな晋助の声。明らかに怒りを露にしている。正論を言われたからと言って、晋助も銀時も引き下がるつもりはないらしい。ギリギリとした瞳で晋助が問えば、桂の表情は歪む。

「貴様…俺が…何も感じていないとも思っているのか…？」

悔しそつに…しかし、仕方ないのだと自分に言い聞かせるように桂は2人に怒鳴る。

「俺が何も感じずに、紫苑を見放すと言っているとしても思っているのか!? そんなわけないだろう!! 俺達は幼い頃から共に過ごしてきた幼馴染だぞ!? 同じ時間を過ごし、共に笑い、共に泣き、共に戦に出ようと…先生の仇を討とうと誓い合った仲間だぞ!! 何も思わないはずがないだろうが!!」

「だったら!!」

「だがな!! 俺達は今、何の為にここに居る!? 遊びに来てるわけではないのだぞ!!」

「……………」

面と向かって怒鳴られ、銀時の手から力が抜ける。今まで胸倉を掴んでいた両手はだらりと下がり、ガクリと頂垂れた。

「だったら…どうしろって…言っただよっ…」

「…俺達は戦う為にここに来た。戦場に赴く前に立てた誓いを忘れたか…?」

その言葉に、銀時と晋助はハツとなる。

もし、戦場で離れ離れになっても振り返らずに、前を見て進み続けよう…。

見捨てるんじゃない…信じて待つんだ…!!

「…俺は紫苑を信じている。紫苑は強い。天人ごときにやられるとは思えん。もしかしたら、どこか別の軍勢に救われた可能性もある。お前達2人が散々探し回っても…紫苑の軀はなかったのだろう?」

「ああ……………」

答えない銀時の代わりに、晋助が頷く。沢山の天人、そして鬼兵隊^な_か^ま

の軀はあつたが、晋助と同じ…紫色の髪の間は、そこに横たわってはいなかった。

「……おまんらのことに、口を挟むつもりはなかったが…」

それまでずっと、3人のやり取りを見ていただけだった坂本が、少し落ち着いたのを見計らって口を開く。3人の視線が坂本に集中した。それぞれが、戸惑いや怒りなどを含んでいる。それに苦笑しつつ、坂本は続ける。

「ワシヤ…ヅラの意見に賛成じゃ」

「辰馬、テメエ…!!」

「もし、おまんらの誰かがおらんようになっても…ワシヤ同じ判断をするぜよ…」

それはつまり、紫苑だけが特別なのではない。ここに居る誰かが紫苑と同じ状況に陥っても、その仲間を探すのではなく前に進む事を考えるということ。

「それが、ワシの結論じゃ…」

「…辰馬の言う通りだ。もし俺が紫苑の立場であつたら…俺は、自分を見捨てても先に進んで欲しいと…そう思う。自分のせいで軍1つが潰れ、大義が成せなくなったとあれば…一番悲しむのは誰だ？他の誰でもない…紫苑ではないのか？」

考える、もしお前達が戦場で軍とはぐれたその時…何を思うか。

そう、桂に問われ…晋助も銀時も黙り込む。

そして考えた。

もし、自分が1人取り残されたら？

皆に危険を冒してまで留まって探して欲しいと思っただろうか？

それで自分達の軍が潰れるようなことがあったらどう思っただろうか？

その時にもし仲間から、「お前を待っていた。だが軍は潰れてしまった」と言われたら…どう思っただろうか？

「……………チツ…、何でこんな時に限ってヅラも辰馬もそんなクソ真面目な…逃げ道もねえ様な話を出して来るんだ…」
「約束、か…。んな約束もしたなア、そっぴゃ…」

銀時は悔しそうに拳を固く握り唇をかみ締める。晋助はどこか諦めたように、悲しげに笑いながら天を仰いだ。

「確認ぜよ。ワシらは今から進軍じゃ…」
「異論はないな？」

坂本・桂の問い。それは、確認であり異議は認めないという言葉であった。

「アア…分かった…」
「俺達は…紫苑の生存を信じ、進軍する…!!」

苦渋の決断…。今までもそれ相応に選択を迫られる事はあった。しかし、こんなにも辛く思い選択を迫られる日が来ようとは思わなかった。

大切な妹を見捨てて行く選択など、
大切な想い人を置き去りにして行く選択など、

こんな選択…あつて欲しくはなかった。

「…ワリ、迷惑掛けたな…」

銀時が力なく謝ると、その肩に桂が手を掛ける。

「いや…俺もすまなかった。本当に…すまない…」

銀時、そして晋助に向けて桂は頭を下げて謝る。

もうそれ以上、誰も何も言えなかった。

分かっていた。

誰が悪いわけでもないのだと。

ただこれが、戦いくさに身を委ねる者の定めなのだ。

進軍までの時間、銀時は1人陣地から少し離れたところで天を仰いでいた。そこに、晋助が歩み寄ってくる。

「…晋助、ワリイ…。俺があの時、紫苑を止めてりや…こんなことにはならなかった…」

あの時…、陽動部隊と戦つてくると鬼兵隊を率いていく紫苑を止めていれば。いや、あるいは自分も共に行っていれば。

こんな事にはならなかったのかもしれない。

「銀時のせいじゃねえ…」

そんな銀時の背中に己の背中を預け、晋助も同じように天を仰ぎながら言っ。

「アイツは俺の言葉に……良かれと思った事は自分で判断して動け」という鬼兵隊の道理に従ったただだ。銀時のせいじゃあるめえよ。強いて言うなら、んな事を鬼兵隊に教え込んだ俺のせいだ……」

紫苑は鬼兵隊の副官として、自分のやるべき事を全うしようとしていた。

ただ…それだけなのだ。

「……………ッ!!」
「……………」

2人は何も言わない。だが、背を預けたまま……

「紫苑ッ……」
「……すまねえ……ッ……」

「……晋助ッ……」
「……銀時イ……」
「……すまねえ……」

声を殺して、泣いていた。

そして……攘夷戦争は終結する。

幕府が降伏するという形で。

「……負けた…？それがどうしたってんだア…？俺達鬼兵隊はまだ戦える…そうだろう、テメエら!!」

「俺も刀を手放すつもりはない。俺は先生の仇をとるまで歩みを止めんぞ」

「銀時イ…」

「お前はどつする？」

それぞれが、それぞれの選択をする。

しかし、銀時は…

「もう…俺ア疲れた…」

戦う事から退いた。

「国の為に戦ったのに国に裏切られ、仲間もたくさん死んで、そして…」

目を閉じれば鮮明に浮かぶ、プレゼントしたかんざしを嬉しそうに受け取ってくれた紫苑の笑顔。

「恋人すら護れなかった…」

自嘲に歪んだ銀時の口から零れたのは…

「もう、俺ア何も護れる自信がねえわ…」

事実上の、戦線離脱の言葉だった。

あれから…どれ程の年月が流れただろうか？

しかしどんなに時が流れようと、銀時の中から紫苑という存在が消える事は無かった。生きていると…きつとどこかで元気にやっているのだと…そう信じていた。

万事屋をやりながら、何か情報が入らないかと待ち続けた。

僅かな情報でも…可能性があればすぐに調査した。

何度も何度も空振りして、その度にやけ酒に溺れ、崩れそうになる自身を何とか保っていた。

そんな日々が続いて、やっと…やっと再会できたというのに……

「こんなに待ち続けて…探し続けて…」

その大切な人は、今…

「何で…ッ…!!」

大江戸病院の、集中治療室の中で眠っている。

ガラス窓一枚…それが隔たりとなり、触れたくても触れられない。目の前に居るのに、話しかけたくても声が届かない。

「万事屋…」

銀時の後ろには紫苑を病院に運んだ土方と沖田、そして連絡を受けて駆け付けた近藤がいる。事情を聞いた近藤、そして状況を把握した土方と沖田は…何も声を掛ける事が出来ず、ただ銀時の背中を見つめる事しか出来ない。

ダンッ…!!!

銀時が壁を殴る。その音に驚き、沖田が「旦那？」と声を掛けるが…それすら銀時には届いていなかった。

そして…銀時は呟く。

「何が攘夷戦争の英雄だ…何が白夜叉だ…!! 結局、俺ア…」

その場に、ズルズルと崩れ落ち…

「最後の最後まで…何も護れなかったじゃねえか…ッ…!!」

頭を抱え、口元を歪ませながら涙を零した。

今…万事屋は何かとてつもない事を口にしなかっただろうか…?

そんな事を、真選組の3人は思った。

しかし…

それを追求することなど、今の3人にはとても出来なかった。

否…

「いじめん…、いじめん…ッ…紫苑…ッ…!!」

今の銀時にかける言葉が、何も見つからなかった…。

【第四訓】 追憶 く貴方と別れた日く

今まで、神様なんて存在は信じたことがない。

いつだって、私が信じていたものは…

己の剣と、兄と、仲間と、大切なあの人だけだった…。

「……私が鬼兵隊の一部を率いて離れる!!」

そう言って、紫苑は鬼兵隊の一部を率いて本隊から離れた。襲い来る天人を切り倒しながら、それでも紫苑を筆頭とした鬼兵隊は止まることなくひたすら走り続ける。

「副官!!向かう方角は?」

「離り(現在の南)の方角だ!!聞いた話によると、あの辺りに奴らの本拠地があるとの噂!!そこを潰すぞ!!」

「オオオオオオオツツツツ!!!!」

紫苑が刀を掲げて言えば、それに呼応するかのように鬼兵隊の隊士達もそれぞれの武器を掲げて声を上げた。

目的地に到着してからの戦いは、予想以上に苦戦を強いられるものだった。

(やはり、本拠地というのは強ち間違いでは無さそうだな…!!)

襲い来る天人をなぎ払いながら、返り血に染まった頬を拭う。気付けば、己の着ていた羽織は敵の血で変色してしまっていた。

(これ、気に入っていたのに…)

冷静にそんなことを考えていると、背後に気配を感じた。

「死ねエエエエ!!!」

背後を取ったと言わんばかりに襲ってくる天人に、紫苑は振り向きざまに刀を横に振る。

「馬鹿が…気付いていないとでも思ったのか…」

その体は上下真つ二つに割れてドサリと崩れ落ち、大量の血が地面を赤く染める。

(やけに静かだな…)

相当な数を倒したが、もうすべて殲滅したのだろうか？いや、それにしても静か過ぎる。仲間の声すら聞こえない。不審に思い、紫苑が辺りを見渡すと…

そこには、大量の天人と、自分の率いてきた鬼兵隊なかもの軀むくろが転がっていた。

「…ッ…!!…クソッ…!!」

今、その場で生きているのは…紫苑ただ1人だけだった。率いてきた鬼兵隊の隊士達も恐らくは天人の攻撃にやられてしまったのだろう。その表情は、どれも恐怖と苦痛で歪んでいた。

「すまない…護って…やれなんだ…」

鬼兵隊副官として、部下を護ることができなかったという罪悪感。もし、自分が本隊から離れて来なければ…ここで命を落とすこともなかったのかもしれないと…そう思えば、何と軽率な行動だったのだろうか、今更ながらに後悔した。

「やはり…兄さんを探し出して指示を仰ぐべきだった、か…」

空を見あげれば、ポツポツと雨が降り始める。

戦いの後は決まってそうだ。

まるで、死んでいった天人や人間達を弔うかのように。

そしてこの惨状を嘆くかのように。

空が泣く。

「……………」

それを、いつも紫苑は見上げていた。

冷たい雨に打たれ、恋人である銀時と手を繋ぎ…ひたすら空を見上げていた。

だが…今、紫苑の隣には誰もいない。

「独り、か…」

ポツリと呟いたその言葉は、雨の音にかき消され…誰の耳にも届かなかった。

暫く雨に打たれ続けていると、雑木林の方からガサガサと音が聞こえた。バツと振り向くと、そこには数人の天人。それぞれ、手に武器を構えている。

「へへッ、鬼兵隊の副官がたった1人で居るって言うから確認に来てみりゃ…ホントだぜ…!!」

「何だア？総督さんから見捨てられたってかア？」

「ぎゃははは!! 違えねえ!! 女は使い物にならないからなあ!!」

「そもそも、女を副官にする総督ってのが馬鹿なんだよ!!」

「意外と鬼兵隊の総督さんも、頭悪いんだなあ!!」

ゲラゲラと笑い飛ばす天人達。しかし次の瞬間、ヒュンという音が鳴る。と同時に、1人の天人の首が飛んだ。大地を濡らす雨と共に血の雨が降り注いだ。

「……私を侮辱するのは大いに結構。だが……」

ギラギラと怒りに揺れ、深い紫の瞳が天人達を睨み付ける。凄まじい殺気は、それだけで天人達の動きを完全に止めた。

天人の返り血を浴びた姿。紫苑の瞳と殺気、そして…

「総督を…我が兄を侮辱する奴は…許さねエ……」

腹の底から這い出てきたような低い声。とても女の声とは思えないソレに、さっきまで強がって笑っていた天人達から笑みが消え、代わりに恐怖が支配する。

「ギヤアアアア!!!」

「ば、ば、化け者だあああ!!!」

紫苑の殺気に当てられた天人達はそれぞれ、思いのままの言葉を口にしながらか逃げ出していく。雑木林に逃げ込んでいったが、それを紫苑はゆっくりと歩きながら後を追う。

「逃げられると思うなよ……。この鬼兵隊副官の私から……逃げられるなぞ……」

ギリリと輝く刀は返り血で真っ赤に染まり、そして紫苑自身も返り血に染まり。

「た、頼む見逃してくれ!!」

「黙れ、下衆が」

ズシャッ……

何度も何度も刀を振るう。

「わ、悪かった!!だから、どうか命だけは……!!」

「助けると思うか? 甘いな、ここは戦場だぞ?」

ズブッ……

何度も何度も刀を突き刺す。

「く、来るな!!来るな!!化け物……化け物……!!」

「化け物? それはオメエ……お互い様だろうよ……」

ザシユッ……

そして…

何度も何度も、殺し続ける。

「……随分、奥まで入り込んでしまったか…」

紫苑がハツと我に返ったときは、既に日も落ちており辺りは真っ暗になっていた。それに、理性が切れた状態で敵を追いつつ森に入ったため、帰る道も森の出口も分からない。

「完全にはぐれてしまったなあ…」

本隊の陣地に、戻る事が出来ない…。

「……ははっ…本当に、独りになっちゃった…」

つまり、完全に紫苑は本陣から離れてしまったのだ。連絡手段も、帰る方法も無い。

「…「ごめん、みんな…心配してるよね…」」

怒りに狂い、敵を深追いしてしまった自分に今更ながら自己嫌悪する。しかし、今となってはもう後の祭りだ。ましてやここは広い戦場。たった1人の人間を探す事も、そして1つの軍を探す事も極めて困難。それに、たった1人のために、本陣がいつまでもその場に留まり続けることも危険極まりない。

恐らく…本陣は自分を置いて進軍する。

それは、考えずとも分かりきっていたことだった。

(ああ、けど何でだろ…。兄さんと銀時が必死に、コタローと辰馬に食って掛かる様子が目に浮かぶよ…)

フツツと笑いながら、紫苑はクタクタの体を大きな木に預けてその場に座り込む。

(けど…大丈夫、私は…生きてる…)

スツと空を見上げれば、木々の間から見える空。うつすらと掛かった雲から見え隠れする三日月。

(だから、私のことは構わず…進軍して…)

ギュツと己の刀を握る。本当は軍に戻り、また皆と一緒に戦いたかった。兄や仲間、そして大切な人とこの国のために刀を振る位だった。

しかし…この現状が、それを決して許してはくれない。

帰りたくても…紫苑には帰る道しるべがないのだ。

(大丈夫、生きていたら必ず会えるよ。だから…)

辛うじて返り血を浴びていなかった部分で自分の手をゴシゴシと拭き、懐にしまっていたあるものを取り出す。それは、戦争に身を委ねる前に銀時が紫苑に贈ったかんざし。

この戦争が終わったらよ…、一緒に暮らそう。だからな、その…俺の嫁さんになって下さいッ!!!マジでお願いします!!紫苑以外の奴とか、俺には考えられねェ!!マジでお願い!!断られたら、俺泣い

ちやう!!

銀時らしい言葉のプロポーズ。紅く優しいその瞳は、いつだって紫苑を見て優しく笑ってくれた。このかんざしを受け取り、答えを返したときもまた、その瞳はとても嬉しそうに紫苑を映していた。

「……………銀時ッ…!!」

ずっと、ずっと一緒だよ…?

そう言って、紫苑は彼の言葉を受け入れ抱きついた。

まるで昨日の事のように思い出されるその映像は、紫苑にとってはかけがえのない思い出であり、そしてその約束を自ら違^{たが}えてしまったのだという自責に苛^{やこ}まれるものでもあった。

「うめん…うめんね、銀時ッ……………!!」

誰も居ない、森の中で。

紫苑は1人…

「うめっ…うめんなさいっ…!!銀時、銀時ッ…!!」

謝罪と、大切な人の名前を繰り返しながら…

泣いていた。

* * * * *

それから後、紫苑は孤独な戦いを強いられる。本陣に戻れない以上は1人。襲い来る敵はもちろん、自分で倒さなければならぬ。しかも、紫苑が鬼兵隊の副官だという事は天人達にも知られている。襲い来る天人達は、1人しか居ない紫苑に容赦なく多勢で襲いかかった。

それでも…

「どげエエエエエ!!!」

凄まじい気迫で刃を振るうその姿は、まさに「鬼兵隊の副官」という名に相応しい姿であった。

天人達の間で、ひそかに紫苑の噂が広がる。

元鬼兵隊の副官、あれは天人以上の化け物。

怨念を抱いたあの紫の目は天人を食らう鬼だと。

そしていつしか…

“紫怨^{しおん}の鬼”と…天人達の間では呼ばれるようになっていた。

皮肉なことに、自分の名と同じ呼び名で…。

紫苑を見る天人達の目が変わった。中には、紫苑の姿を見ただけで逃げ出す天人も居た。しかしそれでも、紫苑は容赦なく天人を切り捨て続けた。

これが…自分にできる唯一の事だと信じて。

ここで少しでも多くの天人を亡き者にすることで、本陣の仲間達の戦いが楽になるのであれば…。

それこそが、本陣から離れてしまった自分の役目だと言わんばかりに…

「ヒィィィィ!!紫怨しおんの鬼が来たぞオオオ!!」

「ククツ…言ってる、化け物どもが…」

紫苑は己の刃を振るい続け、迷うことなくその手を赤く染めた。

一体いつまでこんな孤独な戦いが続くのだろうかと思わない日々は無かったが…終りは以外にもあっけないものだった。

国の裏切り。

天人の力に幕府が降伏し、国を明け渡したのだ。

それにより、攘夷戦争は何ともあっけない幕引きとなる。

と同時に、天人が国の中枢に入り込みある条例を絶対のものとした。それは、侍達の暴動を恐れての行動。

“ 廃刀令 ”

国は負けを認めただけではなく、侍から刀をも奪った。

しかし、紫苑はそれでも決して己の刀を手放さなかった。

「これは…私の魂。絶対に手放さない…!!」

共に攘夷戦争をくぐり抜けてきた刀。手放せるはずが無かった。

やがて天人の介入により、江戸の町はすっかりと変わってしまった。昔のどこか質素な町から、ゴチャゴチャとした街へと姿を変えた。

そして、廃刀令違反や攘夷志士達を取り締まる“武装警察・真選組”の存在を風の噂で聞く。

(…刀を持ったまま江戸の街に降りるのは捕まりに行くようなものね…)

もしかしたら、かつての同志がそこにいるかもしれない。大切な人がそこに住んでいるかもしれない。しかし…紫苑は江戸の街に降りることなく、そっとその場を後にした。

(生きているならきっと、いつかまた会える…だから、私は…)

昔と変わらない静かな場所で暫く時を過ごそう。

そして、少し落ち着いた時に江戸に出てみよう。

それから…それから…

紫苑が目指した場所、そこは…故郷の萩だった。田舎ということもあり、江戸の街のような華やかさは無く、幼いころとあまり変わらない。しかし、戦の爪痕いくさがそこかしこに残されている。

そして…

「……「じいも、じいも」のままだったのね…」

紫苑達が通っていた私塾で松楊の家だった場所。松楊が自分達に色々な事を教えてくれた思い出の場所であり、自分達が楽しい時間を過ごした場所…。

だがそこは、紫苑達にとって悲しい思い出の残る場所でもあった。

「…銀時が一番辛かったのよね…」

松楊は殺され、その軀は私塾ごと焼き払われてしまった。松楊が殺された瞬間を見たのも、松楊を殺した犯人を見たのも…全ては銀時だけだった。

紫苑達が駆け付けた時、銀時は轟々と燃える炎の前で茫然と立ち尽くし…無表情のまま涙を零していた。

それが…銀時、桂、晋助、そして紫苑達を戦争へと駆り立てるきっかけとなった。

そんな、いろんな思い出のある場所に…紫苑は1人戻ってきた。焼け落ちた私塾の前で、紫苑はそっと手を合わせる。軀が見つからなかった為、必然的に松楊の墓代わりとなっているのだ。もっとも、きちんとした墓は別にあるのだが…やはりここに松楊が眠っているのだと思うと、形だけの墓よりもこちらに足が自然と向く。

ゆっくりと目を開け、その場に紫苑は腰を下ろす。あの業火の中で、唯一残った1本の桜の木が花を咲かせている。満開だ…。

「もう、春なんだね…」

どおりで温かい筈だと…紫苑は微笑む。それは、暫くぶりの…穏や

かな笑みだった。

「ごめんなさい、先生…。先生は、護るために剣を振るいなさいと私に教えて下さったのに、私は結局…何も護れませんでした…」

空を見上げながら、舞い散る桜の花びらを見つめ…一人呟く。

「貴方が愛していたこの国も、大切な仲間も…」

生きているのか、死んでしまったのか…それすらも分からない、幼馴染達。そして、唯一の家族。

「けれど…“きっと無事だ”と信じることは出来るんです。不思議ですよね…。本当に無事なのかどうかも分からないのに…」

もしかしたら、自分がただ信じただけなのかもしれない。それに縋って生きていただけなのかもしれない。

しかし…それだけではなかった。

きっと彼らならどこかで生きていると信じる事が出来たのだ。

「笑っちゃいますよね？根拠も何も無いのに。けれど…不思議とそう思うんです…」

けれど…刀を奪われた彼らが一体どのようなように生きていくというのだろうか…？江戸では攘夷を掲げて、刀を手放すことなく倒幕を狙っている者達もいる。

その中に、幼馴染や兄もいるのだろうか…。

もしそうだとしたら、やはり自分はその道を選ぶのだろうか…？

それは本当に正しい道なのだろうか…？

「先生、は…どう、思いますか…？」

陽気な春の日差しが眠気を誘う。普段ならばこんな開けた場所で眠ることなど決してないのに。

まるで…

お疲れ様です。少し眠って疲れを取るといいですよ。私がそばに居ますから…。ね？紫苑…

松楊がその場で、紫苑に休むよう促しているかのように…。

「せ、んせえ…」

そのまま、紫苑は夢の世界へと旅立った。

やっぱり神など居るわけがない。

もし居たなら…何故、こんなにも残酷な仕打ちをする？

何故、国の為に立ちあがった我々に微笑んでくれなかった？

だから…神などという曖昧な存在は嫌いなんだ…。

【第五訓】 追憶　く再会、そして決意

穏やかな春の日の下、大切な恩師が眠るその場所ですっかり寝入っていた紫苑をたたき起こしたのは…

「起きるッス!!」

聞きなれない女の声。明らかに自分に向けられたものだと把握した時には、反射的に己の刀に手を掛けていた。腰を落とし、いつでも抜刀できるように構える。そんな紫苑を見て、目の前の女も同様に二丁の銃を抜いて攻撃態勢を取る。

(何者だ、この女…!?)

長い金髪を右側に留めており、服装は和服ではなく…かなり露出が高い。

(天人…ではなさそう。けど…こんな武器を持ってるんですもの。 “一般人”でない事は確かね…)

互いに何も言わない…武器を構えた状態の沈黙が続いたが、やがて女が口を開く。

「アンタ、紫怨の鬼」で間違いないッスね？」

それは…天人達が自分を呼ぶ時に使っていた二つ名だった。銀時が“白夜叉”と呼ばれたように、紫苑もまた高杉 紫苑という本名よりも、二つ名の方が先走りしたのだ。

(なるほど)、銀時が白夜叉って呼ばれるのを嫌う理由がよく分かるわ

…)

戦いの時はさほど気にならなかったが、しかしこうして面と向かって言われるとあまりいい気分ではない。思いつきり紫苑は顔をしかめる。

「確かに…間違いではないが、そう呼ばれる事はあまり好きではない。貴様…何者だ？」

ギロリと睨めば、それに怯むことなく女も紫苑を睨み返す。そこで、ほう…と紫苑は少し感心してしまふ。

(私が睨んでも怯まないとは、大した女だ…)

しかし、相変わらず…ピリピリとした空気は変わらない。いい加減、この空気を何とかしたいと、今度は紫苑が口を開いた。

「どこの手先だ？ 何処いすこかの攘夷志士か？ それとも真選組か？ 生憎私は、攘夷に参加するつもりも、真選組に捕まるつもりもない。力づくでというのであれば…斬る」

決して脅しては無い、本気だと殺気を込めてそういえば僅かに…女が息を呑んだのが分かった。

「…ッ、そ…それでもっ!! 私にとって、あの方の言葉は絶対ッス!! とうかつ!! 何で、私があの方の為に女なんかを連れ帰らなきゃいけないんスか!! こういうのは武士先輩の仕事じゃないんスか!! あーもうっ!! とにかく、この来島 また子と一緒に来てもらっッス!!」

どうつやら、女の名前は来島 また子というらしい。そして、彼女自身不本意で紫苑の元に訪れたのだらう。それは、彼女の口ぶりからし

てすぐに分かった。というか……この口ぶりからして、”惚れている男の元に何故、別の女を連れて行かなければならないのか”と云っているようなものだ。

「……本当に何者だ？その様子からして…真選組、ではないな…？」

もしこの女が真選組だとしたら、国も終りだな…などと頭の片隅で考えていると、女…来島の表情が曇る。

「あんな幕府の犬と一緒にされたとおっちゃん、胸糞悪いツス!!こっちは国をぶっ壊す鬼兵隊ツスよ!!何であんな奴らと一緒にされなきゃいけないんスか!!おい、女!!あのお方が生かして捕えよと言ってるから生かしているが、今度同じ事を言ったらただじゃおかないツス!!」

ギャンギャンと来島は吠えるが…そんな彼女の言葉も、最後の方は全く頭に入っていないかった。

今…彼女は何と言っただろうか？

“鬼兵隊”と…そう言わなかっただろうか？

「鬼、兵隊……？」

「そう!!アンタも攘夷戦争で戦った女なら分かるはず!!あのお方は、お前なら絶対に分かると言ってたツス!!」

先ほどから来島が“あのお方”と言っている人物。恐らくは彼女の上に立つ者の事だろうということとは紫苑にもすぐに分かった。

鬼兵隊の隊長は自分の兄である晋助だった。

いや、もしかしたらその名前を拝借している攘夷志士かもしれな

い。

しかし……こんな偶然が果たして、あるのだろうか？

「教えて欲しい事が…あるの…っ…」

「へ…？な、なんスカ急に大人しくなって…!？」

刀から手を離し紫苑はただ来島の瞳を真つすぐと見つめた。その時ふと、来島はある違和感を覚える。

(あれ？何だ…？この女……誰かに似てるような気が…)

一体誰だろうかと考えている間に、目の前の女は口を開いた。

「何故、貴方の言う“あの方”は私を鬼兵隊に勧誘しているの…?」

紫苑の鼓動がバクバクと高鳴る。相手にも聞こえているのではないかと思うほどに。紫苑の問いに、来島は一瞬呆けたがすぐに我に返ってその問いに答える。

「あの方がどうしてもその力を欲しているからッス!!どこの馬の骨かも分からないアンタを、副官にするとまで言ってる…!!なんなんスカ…!!」

鬼兵隊の副官というポジション。それは攘夷戦争で紫苑が身を置いていたポジションだ。

少し…紫苑の呼吸が荒くなる。

「もう、一つだけ…教えて…」

声が震えてしまっ。

もし、もし本当に来島の言う鬼兵隊が自分の知っている…自分が身を置いていた鬼兵隊だというのであれば…

「貴方の言う、あの方」とは……っ、鬼兵隊の総督の……名前は……ッ
……!？」

まるで縋るような、懇願するかのようなその問いにさすがの来島も一瞬戸惑った。さっきまでは気丈に振るっていたのに、突然このような事を聞いてくる。しかも酷く…取り乱している。

「……あ、あの方の名前は…鬼兵隊の総督の名前は……」

その名を聞き、紫苑の瞳からは涙が零れ落ちた。ボロボロと留まることなく瞳からは雫が落ちる。

「なっなっ!？ちよ、何いきなり泣いてるんスカ!? 訳分からなッス!!
!!アンタ……!!」

「兄さん……ッ……!!」
「は……?」

「…私の…私の名前は…高杉 紫苑と言います。高杉 晋助は……私
の…の兄ですッ……!!」
「え………?」

突然の告白に、さすがの来島も何も言えず…目の前で泣き崩れる紫苑をただ見ている事しか出来なかった。と同時に、ああ…と来島は納得する。

(誰かに似てると思ったけど…そっいつ事ッスカ…)

紫苑を見た時にふと「誰かに似ている」と思った。それは…

「よかつ…よかつた…!! 兄さんは…生きて…た…!!」

彼女の兄である、晋助に似ているのだと。

その紫の髪も、自分を鋭く睨んでいた時の瞳も。言われてみれば確かに、どれも晋助にそっくりだ。

「…えっと…、その…」

さすがに、晋助の実の妹とあっては先ほどのように強気に出る事も出来ず。かと言って、泣き崩れている紫苑にどう声を掛けたらいいのかも分からず。来島は戸惑ったが…とりあえず頭を下げた。

「あのっ…その、さっきは失礼したツス…。まさか、晋助様の妹様とは知らずに無礼な事を…」

バツが悪そうに謝る来島を見上げて、紫苑は涙に濡れた瞳でフツツと笑う。

「な、何スか？」

「いいえ、何だか似合わないなあと思って…」

「何が…ツスか？」

「晋助様、だなんて……」

まさか、兄がそのように呼ばれていよつとは思ひもしなかったと…紫苑は穏やかに笑った。

「兄さんは攘夷戦争の時、みんなから「総督」って呼ばれていたから…」

「そうなんスか？」

「ええ…。あと、幼馴染は名前で呼んでいたけれど……」

そこまで話して、ハッと紫苑は我に返る。

晋助がいまだに鬼兵隊を率いているという事はすなわち、攘夷活動を行っているという事。ということは…桂や坂本、銀時も…同じ場所にいるのだろうか？

いっそ、来島に全て聞いてしまえば楽になるのかもしれないと思っただが…

何故か、聞くのが怖かった。

そんな奴は知らないと言われるのではないかと……

その3人は死んでしまったと…そう言われたらと思つと…

怖くて聞けなかった。

「うわっ!!ヤ、ヤバいッス!!もうこんな時間……!!」

「え…!?あ、なんかごめんなさい…!!兄さんが呼んでいるというのであれば、私は拒むつもりはありません。えっと、来島さん…」

「そんな堅苦しい敬語も堅苦しい呼び方もしないでいいッスよ!!普通に話してください!!それでもって、普通にまた子でいいッス!!」

「うん、じゃあ…また子ちゃん」

紫苑は来島の瞳を真っすぐと見つめる。それは先ほどの殺気の混じったそれとは違い、真の通ったとても強い瞳。

「私を兄の元へ連れて行って。私を鬼兵隊の一員に……」

そして、その言葉もまた真つすぐと…己の魂を貫き通すという決意のよつに思えた。

「もちろんッス!!というか、さつきも言ったけど…紫苑様のポジションは既に副官で決定ッスよ!!」

「あ、いや、その…紫苑様っての無しにしない?呼ばれ慣れてないのよ…」

「け、けど晋助様の妹様を気安く呼び捨てにするなんて畏れ多くて…!!」

「うーん、じゃあ…まだちょっと早いかもしれないけど、“副官”でいいわ。私は鬼兵隊に所属していた時、みんなからそう呼ばれていたの」

「…副官…!!了解ッス!!」

「」つして、紫苑は来島に案内され兄の元へと舞い戻った。

(兄さんに会える…やっと…やっと会えるんだ…!!)

どんなにこの日を待ち望んでいただろうか?どんなに再会の日を待ち続けただろうか?

その瞬間が、今…訪れようとしている。

案内されたそこは、屋形船。来島に聞けば、本拠地は別にあるがとりあえずはここで話を、との事だった。来島は用があると行って先に戻って行ったが、紫苑は分かっていた。

(気を利かせてくれたのね…)

恐らくは兄妹水入らずでと思ってくれたのだろう。その気持ちに

感謝しつつ、逸る気持ちを抑えながら…そつと屋形船の暖簾をくぐる。

だだっ広い座敷の窓際で煙管キセルを吹かしている…

兄の姿があった。

「アア…やあ…」

見間違いなどではない、確かに自分がずっと求め続けた兄がそこにいる。

呼ばれて…兄…晋助は紫苑の方へ視線を向ける。

その瞬間、紫苑は驚愕と戸惑いが生まれた。

「兄さん…ッ…？」

「アア…久しぶりじゃねえか、紫苑…。無事で何よりだぜエ…」

以前の晋助あにと…身に纏う空気が何か違うような気がする。晋助は確かに、鬼兵隊の総督として時に隊員達から恐れられることがあった。しかし、不器用ながらも優しい人だった。

だが…目の前にいる晋助は…本当に同一人物なのかと疑ってしまうほど…変わってしまった。

紫苑ですら近づく事を躊躇ためらってしまいそんな空気。常に晋助に纏わりついている殺気。そして何より…

「アア…やあ…アア…」

左目に巻かれた包帯…。一瞬、近づくと事を躊躇ったが、我に返った紫苑は慌てて近づきそつとその頬に触れる。

「…アア、オメエとはぐれた後にやられた…」

「そんなんっ…!!」

ギユと晋助の身にまとっている着流しに縋りつき必死に涙をこらえた。

まさかあんなにも強かった晋助がこんな大きな負傷を負うなど、誰が予想しただろうか？無事であったという安堵。しかしその左目に巻かれた痛々しい包帯が…攘夷戦争という過酷さを改めて知らしめる。

「それより、紫苑。俺ア…オメエが無事だった事が何よりだぜエ…」

ギユッと抱きしめられたその温もり。久しぶりに見た晋助はあまりにも変わりすぎてしまって、一瞬戸惑ってしまったが…この温もりは、間違いなく兄である晋助の温もりだ。

「兄さん…ッ、兄…さんッ…!!ごめっ…ごめん、なさいっ…!!私が、はぐれて…ッ…!!ごめ…っ…!!」

流れ落ちる涙と零れる謝罪。それは攘夷戦争で離れ離れになってしまった事であろう事は、もちろん晋助にも分かった。そつとその頭を撫でながら、晋助は続ける。

「オメエはオメエの思ったままに動いた。俺の言葉に忠実に従った。ただそれだけだろうよ…。謝ることはあるめえ…」

晋助の言葉に、紫苑は顔を上げる。自分を見下ろす晋助の表情は…

『紫苑、お前マジで銀時と一緒になるつもりかア？まあ……銀時ならいつか…』

過去の優しいそれとは程遠かったが…

キラキラと輝くその瞳の奥に、僅かに温かい色が見えた。

それだけでも、紫苑にとっては十分だった。

「ただいま、兄さんっ…!!」

「アア、お帰り…紫苑…」

幸せそうに微笑みながら抱きつく紫苑。

しかし、晋助の表情は…

野望に満ちた、怪しげな笑み。

もちろん、可愛い妹との再会も喜ばしかった。

しかしそれと同時に…

(これでようやく、鬼兵隊の復活だア…)

己の理想とする鬼兵隊が元のあるべき姿へ戻ることへの喜びの妖笑でもあった。

それからすぐに、鬼兵隊の本陣へと案内される。案内された先は…
巨大な船だった。

「兄、さん…？これ…」

「あア、天人どもの技術を拝借した賜物たまものってやつだ…」

「……………」

「気に食わねえか？」

「ううん、そんなことないわ…」

とは言ったものの、やはり釈然としないというのが紫苑の本音だった。怨むべき天人の技術を当たり前のように使う時代…。今はそれが普通なのだろう。無理矢理そう納得させ、晋助の後ろに付いて歩いていく。

そして突き当たりの部屋にたどり着いた。いくなれば、晋助の為の個室だろう。「入れ」と促され紫苑が入ると、そこには自分を晋助の元まで案内してくれた来島と、見知らぬ男が2人…。どこかで、幼馴染がいるかもしれないと期待した。しかし、そこにいたのは…全く知らない人だった。

(やっぱり、世の中そんなに上手くはいかないか…)

小さく嘆息し、気持ちを切り替えてそれぞれに視線を向ける。来島とは既に面識があるため、目が合った時に微笑みかけた。すると少し恥ずかしそうに、来島も微笑み返してくれた。

「えっと…兄さん？この方々は…？また子ちゃんちゃんは名前も聞いてるか
ら知ってるけど…」

「あア…今の鬼兵隊の幹部達だ」

「今の鬼兵隊」という響きに、違和感を覚える。それについて口を開こうとしたが、それより先に晋助が口を開いた。

「来島は既に知っているたア思うが、俺達の新たな仲間だ。俺の妹…高杉 紫苑。コイツにゃ鬼兵隊の副官をやってもらう。異論はあるめえ?」

そう問われ、来島は「もちろんッス!!」と元気よく頷く。他2人の男については、イマイチ納得しきれていないようではあったが、元鬼兵隊の副官であり、「紫怨の鬼」と呼ばれていた事はもちろん知っている。そして何より、晋助の妹だ。その腕はなかなかのものであるうことは明白だった。

「私は異存ありませんよ」

「他ならぬ晋助の決定であれば、拙者も異存はござらん」

こうして、紫苑は再び鬼兵隊の副官として迎え入れられた。

「申し遅れました。私の名前は武市 変平太と言います。好物はかわいらしい娘さんです」

「先輩、変態丸出しじゃ副官が気持ち悪がりますって…。ロリコンも大概にして欲しいッス」

「ロリコンじゃありません、フェミニンストですよ」

「拙者は河上 万斉でござる。……お主、晋助と同じリズムを持っているぞいぢやるな…」

「え、リズム…ですか?」

「ふむ…。普段はクラシックのように静かなメロディ。しかし、ひとたび刀を抜けば…激しいロックを奏でる…。いや、ロックなんて生易しいものではござらん。例えるなら、そう…」

「ええつと…?」

「河上先輩!!副官が困ってるッスよ!!」

「これは失礼した、副官殿…」

「あ、いえっ…!!」

頭を下げて謝る河上に、紫苑も慌てて手を振る。しかし…と紫苑は心の中で盛大な溜息を吐いた。

(何と言っか…個性派揃って感じね。いや、あの時の仲間も個性派揃いだっただけさあ…。この人達…剣の腕はどうなのかしら？また子ちゃんは銃を構えていたから多分それ相応の使い手。武市さんは腰に帯刀…ということは、得物は刀ね。河上さんが背負ってるのは…三味線かしら？…なんで三味線？)

本当にこれが、今の鬼兵隊の幹部なのだろうかと思わず疑ってしまうが、晋助が言うのだ。間違いないだろう。

「紫苑、最初は慣れねえたア思うが暫くすりゃあ慣れるだろうよ。…そんじゃ、オメエの部屋に案内する。ついて来い…」
「待って兄さん!!」

すぐにその場を後にしようとした晋助を紫苑が止める。幹部達は驚いて紫苑を見たが…その紫苑の瞳は真剣そのものだ。

「何だア？」
「…聞きたいことがあるの。どうしても、聞きたいことが…」

確認しなければならぬ。鬼兵隊の幹部がここに居る3人だという事は分かった。しかし、幼馴染達は…恋人である銀時は…同じ船にいるのだから？この、今の鬼兵隊に彼らはいらるのだろうか？意を決して、紫苑は口を開く。

「…他の3人は…？コタローは？辰馬は？…銀時は…？一緒ではないの？」

紫苑の問いに、ピクリと晋助の肩が跳ねる。と同時に、僅かに殺気

を感じた。それに今度は紫苑が顔をしかめる。

「……何で、んな事を聞くんだった？」

「何でって…仲間じゃない!!兄さんの安否は分かった…けどっ!!他の3人の事は私、何も知らない…!!ねえ、無事なの!?兄さん!!」

懇願するようなその声に、晋助はハアと溜息を吐きながら紫苑に向き直る。晋助の瞳には…感情の欠片もない。その瞳が酷く、恐ろしく感じた。暫くの沈黙の後、晋助が口を開く。

「生きてるぜエ…?」

生きている。

その言葉に安堵し、紫苑の胸が熱くなった。

しかし…晋助はそんな紫苑に構うことなく続ける。

「だがなア、アイツらは好き勝手進みやがった。俺達ア、最初こそ同じもんを目指していたと思ってた。だがよオ、結局は全員違う場所を見ていたってこったア。辰馬は天人を相手に商いあきなをする“快援隊”の社長となって宇宙を飛び回ってやがる。ツラは…まあ、俺とは違うやり方で倒幕を考えてらア…」

坂本も桂も、形は違えど自分達の出来ることを考えているのだろう。坂本に至っては、攘夷戦争の時から宇宙に思いを馳せていた。そしていつか、宇宙を飛び回りたいと言っていたことを紫苑は覚えている。その夢を叶えたのだろう。

しかし、何故桂は…同じ倒幕を目指しながら、晋助と違う道を歩んでしまったのだろうか?そこに紫苑は疑問を感じずにはいられ

なかった。

そして、何より…肝心な人の名前が…紫苑がもつとも知りたい人の名前が、晋助の口から出てこない。

「兄さん、銀時…ッ、銀時は…生きているの？」

必死に、縋りつくように紫苑が尋ねる。

だが…

「知るか」

そんな懇願も、恐ろしい殺気とたった一言の言葉で切り捨てられた。

「知るか、って……なんで？だって、一緒に攘夷戦争を乗り切ったんでしょ？何で辰馬とコタローのことは知ってるのに、銀時のことだけ知らないの？何で…教えてくれないの!?兄さん!!」

必死に叫びながら恋人の生死を意地でも聞き出そうと詰め寄るが、その刹那…紫苑は目を見開く。

「ちょ、晋助様!?な…何をしてるッスか…!!」

来島が…いや、その場に居た武市、そして河上也驚いたように晋助を見つめる。

しかしそれ以上に、紫苑が誰よりも驚愕していた。

否、信じたくなかった。

「同じことを何度も言わせるな、紫苑。俺ア、銀時ヤロウのことア知らねエ。今度同じことを聞いたら…例えオメエでも、容赦なく叩つ斬る」

紫苑に向けて刀を突き付けたのだ。紫苑の目の前に、晋助が向けた刀の切っ先がある。

何の冗談だろうか？

これは夢だろうか？

優しくかった兄が、自分に刃を突きつけるなど…何かの間違いではないだろうか？

「兄…さん…？」

驚きと悲しみの入り混じった声で兄を呼ぶが…

「…来島、オメエが紫苑を部屋まで案内してやれ。気が変わった」

「えっ!? あ、はいっ!!」

その声は、届かなかった。

晋助が部屋から出て行き、部屋を支配していた緊張が一気に解ける。と同時に、紫苑はその場に崩れ落ちた。

「大丈夫でござるか？」

その身を案じた河上が紫苑に声を掛けるが…

「な、んで…っ…、兄さんッ…」

河上の声は紫苑には届いておらず、その瞳からはパタパタと涙が零

れ落ちていた。

そして…

「ねえ…生きてるよね…？無事よね…？」

唯一、安否の分からない…

「銀時ッ…、銀、時ッ…！！」

恋人の名前を、何度も何度も呼び続けた。

再び兄の元に戻り、そして鬼兵隊の副官というポジションに戻った。しかし、紫苑の心はいつも晴れず…。宛がわれた自室に居る時は、いつも窓の外を眺めてボーッと考え事をしている。時々、来島が来てはワイワイと女同士の話に花を咲かせるが、それ以外で紫苑が感情を表に出す事は無かった。

兄である晋助の前ですら…もう、以前のように笑う事は出来なくなっていた。

日課と言えば、新聞に目を通す事と、テレビのニュースに目を通す事。それは、仲間だった桂の安否を確認すると同時に、銀時の情報を得るためだった。直接晋助から聞けないのであれば、自分で探す。そう意気込んだものの、鬼兵隊は今や超過激派の攘夷志士であり、真選組が常に目を光らせている。何処から流れたのか、紫苑が鬼兵隊の副官となったことも世に知れ渡り、迂闊に外には出られない状態となってしまうた。

紫苑にとって、唯一の情報源はもはやテレビと新聞だけなのだ。

一度、幹部の誰かに聞いてみようかと思ったこともあったが…そこから晋助の耳に入るとは明白だった為、やめた。

(私は…今の鬼兵隊の幹部を、心の底から信じることは…出来ない)

来島は純粹に自分を慕ってくれている。それは有り難かったし、唯一紫苑も来島にだけは本来の自分を見せることができた。しかし、武市と河上…否、この鬼兵隊に所属する誰もが自分の敵であるかのようにならずに感じたのだ。

「……………最初は、嬉しかったんだけどね……………」

晋助と再会した時は心の底から安堵したし、とてつもなく嬉しかった。

しかしそこから、奈落へと叩き落されたのだ。

鬼兵隊副官と呼ばれてはいるが、実質…紫苑はただ船の中に居るだけで何もしない。もちろん、攘夷戦争の時とは違うから毎日が戦いくさというわけではないことは百も承知だ。紫苑自身、戦う事はあまり好きではないため戦わないのならそれにした事は無いと思っではいるが、祭まつりだと言っいて江戸の町に下りる時も…他の幹部は従えるのに、晋助はいつも紫苑だけを船に残して行く。まるで…混乱に乗じて逃げ出してしまつことを危惧しているかのようだ。いつも「本陣はオメエに任せる」と言っいてはいるが…どこまでが本心なのか、分からない。

“鬼兵隊の副官”という名の鎖でつながれている気分にならずに陥る。

「私は…何の為に呼び戻されたのかしら…？何の為の、“副官”なのかしら…」

鬼兵隊の隊士達と剣の手合わせをすることもあるが、それも最近では数が減ってきた。武器が剣ではなく、もっと優れた銃などに様変わりしたからだ。剣の相手をしている時が、唯一自分の存在を認められているかのようにすら思えたのに……今ではもう、それすら感じない。

「…ただ、ここに居るだけ。私は、鬼兵隊の副官」という人形……」

鬼兵隊の作戦会議には当然副官として出席する。しかし、そこでなされる話は……どうやって敵を制するかという話ではない。

“どうやって、敵を陥れるか”、そして“誰を駒として利用するか”という話ばかりだ。

一体……何処で、晋助の人生は狂ってしまったのだろうか……何度も何度も思った。しかし、考えれば考えるほど……

自分が攘夷戦争の時に、本軍から離れてしまったせいなのではないかと……そう、思ってしまう。

だから、言いたくても言えなかった。

“もう、こんなことはやめましょうか？先生はこんなこと、望んでないわ……”

昔の晋助ならば、この言葉も容易に届いただろう。しかし、今の晋助は遠すぎる。

もはや……今の鬼兵隊を率いる兄は、紫苑が誇りに思い、目標としていた兄ではなかった。

ただの“復讐の鬼”と化した、鬼兵隊の総督でしかなかった。

もう、あの頃の優しい兄はいない。しかしそう思っても、分かっていても…どうしても、晋助の姿を見るたびに“もしかしたら”という淡い期待を抱いてしまつのだ。

「何で…兄さん、私の着物を着ているのよ…。信じたいって思っちゃうじゃない…ッ…」

それは、晋助の身に纏っている着物。あれは元々、紫苑の着物だった。蝶柄の着物で、その模様が気に入った紫苑は攘夷戦争の最中、物資調達で店に立ち寄った時に2着の着物を買ったのだ。柄は同じで色違い。片方は紫、そしてもう片方は桜色。本陣から離れてしまった為、結局どちらも紫苑が袖を通す事はなかったのだが、その片方を晋助が身に纏っている。どうせ答えてはくれなйдらうと思いつつも理由を聞けば、その時だけ酷く穏やかな表情で…

『紫苑という存在を忘れたく無かったからだ』

そう、言ったのだ。生憎、もう片方の桜色の着物の行方は分からないままだが…自分が欲して買ったそれを、晋助が好んで着ている。他の誰でもない、紫苑という存在を忘れない為に…。

まだ、晋助の中に紫苑という存在は確かに存在しているのだ。鬼兵隊の副官としてではなく、1人の大事な妹として。

「もう…ワケが分からない…」

晋助が今、何を考えているのか。倒幕とは言っているが、本当にそれだけを目論んでいるのか。常に晋助は、“この国をぶっ壊すだけだ

”と言っているが、その言葉の真意が分からない。来島と話した事もあったが、やはり来島も同じらしく2人で首を傾げたくらいだ。

国を壊すというのは、幕府を討つという意味なのか。それとも本当にこの国諸共破壊するという意味なのか。

晋助の真意が…分からない。

「こんな時…銀時だったらパッツと言い当ててくれるのにな…」

彼から貰ったかんざしを見つめながら、紫苑は思いをはせる。誰かが間違った道に進みそうになったら、必ずそれを誰かが止めていた。時には晋助が、時には紫苑が、時には桂が、時には坂本が、そして…時には銀時が。そうやって支え合って進んできた道も…今となっては先の見えない迷宮だ。

今の鬼兵隊に、晋助を止める者は居ない。紫苑がどんなに止めても、その声は届かない。だったら止めても無駄だと…いつしか紫苑も諦め、口を挟むことをやめた。

何もかもが無駄だと…そう、諦めた。

「……けど、本当にこれで…いいの…？」

諦めたつもりでいた。けれど、諦めようとするほど…

『よっしゃ、次の戦いは俺最前線で行くわ!!』

『おー、銀時は気合が入っちゃるのお!!』

『先に突っ走るのはいいが、くれぐれも迷子になるなよ』

『そんな時ア、お前を放って行くだけだ』

『うわーっ、兄さんってば容赦ないねえ〜!!大丈夫、私が大声で天

パァッって叫んであげるから!!」

『何、その探し方!? 限りなく嫌がらせに近くね!?』

アハハハハッ!!!

他愛ない事で、皆で笑い合っていた昔の事を思い出す。

まるで、諦めるなど…そう言うかのように…。

しかしどうすれば晋助が自分の言葉に耳を傾けてくれるのかも、どうしたら以前の優しい兄に戻ってくれるのかも…今の紫苑には分からない。あるいは、晋助の望みを…討幕を成し遂げれば以前のような優しい兄に戻ってくれるのかもしれない。しかしそれでは何の解決にもならないのではと…紫苑は悩む。

本当の意味での解決は、晋助の望みを叶える事ではない

本当の意味での解決は……

「…できるかしら…今の私に…」

晋助の目を覚まさせること。

これ以外に無いのだ。

晋助にとって、まだ自分の事を大事な妹と想ってくれてるのであれば…。

何度も何度も言い続ければ…届くかもしれない…。

「……だって、戦いくさに行く前にみんなで約束、したじゃない……」

戦争が終って、全員が無事に生きて戻れたらその時は……………

「まだ、あの時の約束…果たせていないわよ…？」

だから、こんな事はもうやめましょう…兄さん…？

瞳を閉じ心を落ち着け、そしてゆっくりと目を開ける。

その深い紫色の瞳は、強く真つすぐと先を見据えていた。

（覚悟を決めよう。…………鬼兵隊から抜ける覚悟を。兄と妹という縁を切るといふ覚悟を。…………最悪、兄さんに殺されるという覚悟を…）

ギュツと刀を握る手に力が籠る。

何度も感じていた事だ。

自分と“鬼兵隊”の温度差。

そこに紫苑の居場所などない。

復讐鬼と化した兄の姿。

それを止めるのは妹である自分の役目であり使命。

紫苑が求める居場所は、殺伐としてはいたがそんな中でも互いを思いやる優しさに溢れていた鬼兵隊。

紫苑が求める晋助^{あに}は、厳しく不器用ではあったがとても優しく自分と仲間を大事にしていた人。

決して、今の鬼兵隊ではない。

決して、今の晋助^{あに}ではない。

“今”に、紫苑の求めるものは何も無いのだ。

「……………初めてね、兄さんに反抗するなんて……………」

下らない事で喧嘩をする事は何度かあったが、それでも次の日には互いに謝って笑い合って許し合った。

しかし、刀を片手に喧嘩というのも物騒なものだと…紫苑は悲しみの微笑みを浮かべる。

だが、思い残すことは…この鬼兵隊には何も無い。

ただ、最後に…いつも良くしてくれた来島にだけは会っておきたかった。

(もう、二度と会えないだろうから…さよならを言わなきゃ…)

唯一、鬼兵隊の中で心を許せた存在。晋助以上に心を許せた存在…。一方的な思いだったかもしれないが、“友達”だと思えた存在。

そんな彼女にだけは…別れを言わなくては。

きつと引きとめられる事だろう。

けれど、誰に引きとめられようとも…もう紫苑の決意は揺らがない。

刀を持ち、紫苑は自室だった場所を後にする。持ち物は2つ。

刀と、大切なかんざし。

(元より私は、これしか持ち物が無かったのだから…)

極力人に見つからないようにそつと移動し、来島の部屋へと向かう。扉をノックすれば元気のよい返事が聞こえてきた。

「誰ツスか？」

「私、紫苑よ。また子……ちょっといいかな？」

「紫苑ツスか？もちろん!!」

共に時間を過ごすことで、堅苦しい呼び方は無くなった。普通に話すようになって笑いあつて……。思えば、女友達は彼女が初めてだったなあと……そんな事を考える。開かれた扉からは、いつもの露出度の高いそれとは違う着流し姿。もう寝る準備をしていたのだろう。しかし、紫苑の姿は……初めて来島と対面した時の姿。つまりは、戦装束だ。

「……どうしたツスか？そんな格好して……？晋助様から何か……」

「また子、話があるの。あまり人に知られたくないから……」

「だつたら中に入るツス!!」

迎え入れられた来島の部屋で、紫苑は椅子に座るよう促されるが……それを断り真っすぐと来島を見つめる。

「また子、私の話を何も言わずに聞いて。そして出来れば……何も言わずに、見送って……」

「紫苑……？」

不安そうな来島の声に微笑を浮かべながら、そして……

「私は……これより、兄・晋助の元に行き……鬼兵隊の脱退を申し出る」「なっ……!?何を言ってるツスか!!そんなことしたら……!!」

来島の言わんとしている事は分かっていた。鬼兵隊の脱退は直結して裏切りとなり、その場で処刑となる。晋助の機嫌が良ければ、その場で即処刑ではなく…逃げ出すターゲットを幹部達や鬼兵隊の隊員達に追わせてじわじわと追い詰めるという処刑になるゲームこともある。また、晋助が手放したくない存在である場合も然り。そうすることで「こんな仕打ちを受けるぐらいなら戻った方がマシだ」と言って戻ってきた者も少なくは無い。

「分かってる、処刑…されるわ」

「だったら、何で…!？」

何故、と問われればいろんな思いが交差する。

理由は沢山あった。

けど、確かな理由があるとすれば、それは…

「今の兄は…私の尊敬した兄ではない。攘夷戦争で共に動いていた時の兄は……」

『いいか、副官の紫苑の命令は俺の命令だと思え。紫苑に付き従う者は、紫苑に命を預ける。我ら鬼兵隊は、俺と紫苑、そしてお前達力があってこそその鬼兵隊だ!! 戦いくさに出る時は覚悟を決める!! 死ぬ覚悟じゃねエ!! 戦い抜いて、生き抜く覚悟だ!!』

「仲間を思い、常に先陣を切って走り、傷付いた仲間の為に怒って敵を制する…そんな人だった」

「……紫苑……」

「今の兄さんからはね、“復讐”という感情しか感じられない。昔の兄さんは優しくして仲間をとて大切にしていたの。……私の話を聞

いても信じられないでしょ？正直に言っていていいわ。誰にも言わないから……」

「……正直、信じられないッス。優しい晋助様というのが……。いいや!!今も十分優しいッスけど……!!」

「うん、そうね……また子の言う通り、今も優しいとは思う。けれど……」

今の晋助の瞳は、昔のそれとは随分と変わってしまった。

あんなにもキラキラとした……獲物を狙うハンターのような瞳では無かった。

「昔はね……あんなに鋭い瞳じゃなかったの。もっと……温かい、優しい瞳だった……」

「そう……なの……?」

「うん、そうなの。多分、あの時の仲間が見たら……今の兄さんからは離れてしまっわね……。コタローが何故、鬼兵隊に入らなかったのか……分かったような気がする……」

そして、もし銀時が今の晋助を見たら……間違いなく、殴り飛ばすだろう。「なんっつー目をしてんだ、コノヤロー!!」と言いながら……。

「そんな事を色々考えてたらね、私の居場所は今の鬼兵隊には無いって……そう思った。それと同時に……兄さんの目を覚まさせなければならぬとも思った」

来島は小さく「まさか……」と漏らす。それに紫苑は小さく頷いた。

「喧嘩、してくる。久々の兄妹喧嘩を……ね?」

「喧嘩って……!!駄目ッス!!そんなことしたら、紫苑が……!!」

「本当に馬鹿よね。刀をぶつけ合う兄妹喧嘩なんて……。命がいくつ

あっても足りないわ」

けど、と…来島の目を真つすぐと見据え、微笑んでいた口を横一文字に正して…

「今、兄さんが行っている行為は…間違っている。確かに国が…幕府が憎いという気持ちは私も同じ。けれどこんなやり方は…誰も、望んでいないの。攘夷戦争で共に戦い散って逝った元鬼兵隊の仲間達も、今もどこかで己の信念を貫こうとしている幼馴染達も、そして…」

目を閉じれば鮮明に浮かぶ…恩師の笑顔。

「私達がとても大切に思っていた、今は亡きあの人も…」

そして、何より紫苑自身が…望んでいないのだ。

復讐にしか興味を持たない晋助の姿など…。それによって関係のない一般人が巻き込まれて犠牲になることなど…。

「けど、今の兄さんを止める事は誰にもできない。だから…」

今の幹部達は晋助に従うだけで自分の意見は決して言わない。

晋助を止める、なんてことは絶対にしないだろう。

だったら、その役目は…

「せめて、妹である私が命を掛けてでも目を覚まさせなきゃね…」

妹である紫苑の役目だ。

ふわりと笑う紫苑に、困惑する来島。

来島は幹部の立場だ。もし、紫苑の処刑が決まれば…その場に同席しなければならなくなる。それが直接、晋助が手を下すにしても、ゲームと称した処刑をするにしても…結果的に、紫苑の処刑には必ず居合わせなければならぬ。

止められるものなら是が非でも止めたい。

しかし…

「止めても駄目よ？私、兄さんと一緒に頑固だから…一度決めた事は何があっても曲げないの」

それを見越して、紫苑が言った。

「そんな事言われたら…止められないじゃないっすか…」

「うん、また子は優しいから…きつと止めると思って。だから、自分が止められなかったせいって…そんな風に苦しんで欲しくなかったから…その言葉を言わせなかった。ごめんね？私、卑怯よね…？」

そつとその頭を撫でれば、来島は俯く。泣くまいと我慢しているのだろう。そんな来島を抱きしめ、そして…

「ごめんね、ありがとう。この鬼兵隊…私にとっては居心地が悪かったけれど、また子との時間はとても楽しかったわ。私にとって貴方は、唯一の友達だった…。また子が私の事をどう思っていたかは分からないけれど…私にとって、貴方は唯一無二の女友達だった…」

紫苑の言葉を受け、来島も紫苑に抱きつく。紫苑の胸に顔を埋め、

肩を震わせる。ポンポンとあやすようにその背中を撫でていると、小さな声が聞こえてきた。

「私にとって…紫苑は姉上のような存在だったッス…!! 凄く優しく、頼りになつて、話してて楽しくて…ッ!! 姉上がいたらきつと、こんな感じなんだろうなつて…!! 紫苑みたいな姉上だったら欲しかったなつて…そう、思ったッス…!!」

震える声から紡がれた言葉は、来島の心からの言葉。それを受け、紫苑は驚いたように目を見開いたが…フワリと笑い、ギュツとその身体を抱きしめる。

「うんうん、そうだね…。また子みたいに可愛くて、おてんばで…けれど優しく素直な子が妹だったら、私も幸せだったなあ…」

けれど、これから紫苑がしようとしている事は鬼兵隊を…来島を裏切る行為。

「こんな、駄目なお姉ちゃんでごめんね、また子…」

「そんなこと、無い…!! 私は凄く楽しかったし、幸せだったッス…!!」

「それが聞いてうれしいよ。ああ、もう悔いはないや…!!」

互いに離れると、来島の頬にはいく筋もの涙の痕が。紫苑の表情は…悲しげな笑み。

ああ、できる事ならば…

本当の兄の姿を知って欲しかった。

出来る事ならば…

今の鬼兵隊ではなく、あの頃の鬼兵隊で出会いたかった…。

そんな思いを紫苑は一瞬にして払拭し、スツと来島に背中を向ける。

「じゃあ…さようなら、また子。次に会う時は…」

処刑場で…

悲しい響きに、また…来島の頬を涙が伝う。

パタン、と扉を閉め…紫苑は扉に背中を預けて天井を仰ぐ。

「別れも告げた…もう、思い残す事はない…。いや、1つだけ…」

結局、最後の最後まで銀時の生存は…分からないまま。何度も来島に聞いてみようかと思ったが、それにより来島に迷惑が掛かってはいけなさと自重していた。

「銀時…どこかで、生きてるよね…？銀時は強いから…。けど、ごめん…私はもしかしたら、これが最後になるかもしれない。折角プロポーズ…してくれたのにね…。ごめん…ごめんねっ…!!…愛してる…ッ、大好き…!!今も、この気持ちは…変わらないッ…!!」

貴方が幸せならば、私も幸せ。だから、貴方は貴方らしく…いつものように、笑っていて下さい…。

自然と零れる涙を拭い、紫苑は深呼吸を繰り返す。目を閉じ精神を落ちつかせ…カツと目を見開いた。

「……さて、喧嘩といきますか……」

ニイツと口角を吊りあげて、紫苑はその場を後にする。

向かう先は……

兄である晋助の部屋……。

その気配が去るまで、ずっと扉の前に居たまた子は……紫苑の言葉に驚愕した。

「プロポーズ……って、何ツスカ……？それって……結婚が決まってたって事ツスカ……？」

その時、来島は今までの人生で初めて深く後悔した。

まさか、銀時と紫苑の関係がこんなにも大切なものだとは思ってもしなかったのだ。晋助からは「坂田 銀時の生存については紫苑には言うな」という緘口令かんこうぜいが布かれていた。故に、伝えたくても伝える事ができなかったのだ。

しかし、こんなことになるならば……そつと教えてあげてくらししてもよかったのではないかと、今更ながらに悔やんでしまう。

そつすれば、目を盗んで会うことぐらいは出来ただろう。何せ、高杉一派と銀時は機械技師かたくしを巻き込んだ祭まつりの時に出くわしていたのだから……。

「……ッ、できの悪い妹で……ごめんッス……ッ」

愛する者の生存も分からず、愛する者との再会も叶わず、処刑されるなど……何と悲しい結末だろうか……？

しかし、どんなに後悔しても……もう紫苑の歩みは止まらない。

例え全力で来島が止めたとしても、恐らく紫苑は来島を気絶させてでも晋助の元へと向かうだろう。

もはや、この先の運命は…

紫苑と晋助にしか分からないのだ…。

【第六訓】 追憶 ー 決別 ー

長い長い廊下は、まるで死刑台に向かっているかのようだ。

時々、すれ違つ鬼兵隊の隊士達が紫苑の戦装束いでたちに驚いたような表情を見せるが、何より紫苑から零れ出ているただならぬ殺気に誰も、何も言う事が出来ずにいた。何か言えば、その場で斬り捨てられそうなの…そんな雰囲気をかもし出していたのだ。

紫苑とすれ違つた者達はそれぞれ、思った。

流石は、あの高杉 晋助の妹だと…。

晋助の部屋の扉の前まで辿り着くと、紫苑は小さく深呼吸をした。一応は話し合いのつもりだが…あの言葉を決して忘れたわけではない。

例えオメエでも、容赦なく叩つ斬る

それは、銀時の生存について聞いたときに言われた言葉。その殺気からして、言葉に偽りは無い。一応、「話し合い」のつもりで来たが、それと同時に「喧嘩しやげい」も覚悟の上で来ているのだ。

(私の言葉が届かないのならば…)

ギョツと己の刀を握り締める。もし、言葉が届かないのであれば…もう、力づくで止める以外に方法はない。晋助に勝てるとは最初から紫苑も思っていないが、一矢報いるくらいは出来るだろうと思っていた。

(ホント、世界一不器用な兄妹きょうだいよね、私達…)

今となつてはこんな方法でしか晋助を止める事ができない。刃を交えなければ話をする事も出来ない。

昔は…違っていたはずなのに。

小さく息を吐き、意を決したように扉をノックする。すると、中からは晋助とは違う男の声が聞こえた。

(…万斉がいるのか…)

これはまた面倒な、と内心で悪態を吐く。

「夜分に失礼、兄さん…大事な話があるわ」

「ほお…そんな大層な殺気を身に纏って、話 たア…確かに大事な話らしいなア…」

ククツと喉を鳴らして笑う兄の声が聞こえる。

やはり、気付いていたかと嘆息し…ゆっくりと扉を開けた。

部屋には最初に返事をした河上と、武市もその場に居た。何でよりもよつてこんな時に揃っているのかと、何度目か分からない悪態を内心で吐く。一方の河上らは、突然現れた紫苑にも驚いたが、その出で立ちにも驚いた。紫苑の出で立ち、それは戦装束…。

「よお、俺おれに会いに来るのに、随分とめかし込んでるじゃねえか…」

まるで全てを見透かしていると言わんばかりのその瞳。

本当は、口で直接言いたかった。

貴方は間違っている、と…。昔の貴方に戻って、と…。

しかし、紫苑に向けられた視線が、紫苑に向けられた殺気が…全ての言葉を拒絶すると物語っている。

どこかで諦めてはいた。もう…言葉は届かないだろうと。

ならば自分は今もう、今の鬼兵隊に用はない。紫苑は晋助の座る場所まで歩み寄り、そしてスツと頭を下げた。

「……………紫苑さん？」

武市が不思議そうに紫苑を呼ぶ。河上は何も言わず、ただその様子を傍観していた。そして、当の晋助は…

「……………」

冷徹な瞳で、頭を下げた紫苑を見下す。

(これは、予想以上にやばそうね…)

凄まじい殺気に、紫苑の額に冷や汗が伝う。しかし、もう後戻りは出来ないし、するつもりもない。

紫苑の口が…開く。

「本日限りで、鬼兵隊を脱退させてもらいたく参上しました」

武市・河上が驚く中、晋助だけはまるで予想していたと言わんばかりに口角を吊り上げる。

「だろつなァ…。いつそつ言って来るかと楽しみにしてたぜエ…？」

楽しみにしていたとは果たしてどういう意味なのか…。やはり、今の晋助が考える事は分からない。そんな紫苑の困惑をよそに、クツと口角が吊り上ると同時に、鋭い視線が紫苑を睨み付ける。

「まァ、興味はねえが…一応理由を聞いてやろつじゃねえか…。鬼兵隊副官というポジションにいながら、何が不満なんだ？アア？」

何が不満かと問われれば、色々グチグチと言いたくなる。

しかし、シンプルに一言で片付く言葉を紫苑は持ち合わせていた。

何が不満なのか、その問いの答えは…

「全て」

晋助を含めた“今の鬼兵隊”を否定する言葉だった。晋助の予想と違っていたのか、一瞬…晋助の表情が変わったがすぐに余裕の笑みを浮かべる。それと同じように、紫苑もまた口角を吊り上げた。

「全てたァ、また随分と曖昧じゃねえか…。なんだァ？攘夷戦争ん時みたいに、最前線で人殺しでもしたいってか…？」

「馬鹿言っつてんじゃねえよ、このクソ兄貴。私は…このイカした鬼兵隊の全てが気に食わねえつってんだ…テメエも含めてなァ…」

突然豹変した紫苑の言葉。人生で初めて、紫苑は兄に向かって暴言

を吐く。攘夷戦争ではいくらでも敵に対して吐いた暴言。しかし、仲間と兄にだけは決してこのようなことは言わなかった。

だが、紫苑はもう“話し合い”は諦めていた。

「面と向かって否定する。私はこの“鬼兵隊”を…“鬼兵隊”だとは認めない」

そして…と、続けざまに…

「今のアンタを、兄とも思わない」

言った。

出来れば、一番言いたくなかった言葉。どんなに変わってしまったても、晋助が自分の兄である事に変わりはない。しかし、もうこんな復讐に囚われるだけの兄など見たくはなかったのだ。

昔…まだ子供の頃に私塾で桂に教えられた事…。

『いいか、紫苑？もし、晋助のことが気に食わないと思ったときには思いつき晋助に向かって“嫌いだ”と言ってみる。あ奴のことだ、必死になって許してくれと言ってくるぞ』

何気ない会話だった。悪戯っぽく笑いながら桂の言った言葉に、じゃあいつかそんなことがあったら試してみるねと紫苑は言った。

(まさか、それが今だなんて…ホント、笑っちゃっ…)

ピリピリとした空気に、明らかに武市がオロオロし始めた。河上は成り行きを見守るようじただ見ていただけだ。

スツと…晋助が立ち上がる。

と同時に…

キィィィン!!!

晋助が抜刀した。それに素早く反応し、紫苑も抜刀して晋助の太刀を己の刀で受け止める。

「ほお、随分言うようになったじゃねえか、紫苑…」

「いつまでもアタの後ろをチヨロチヨロついて回る私だと思っな」

「今の鬼兵隊が鬼兵隊じゃないだア？今の俺が、俺じゃないだア？」

晋助の押す力が増した事に気付いた紫苑は一度、離れて間合いを取る。刀を構えたまま晋助は床を見つめていた。紫苑は刀を構えたまま、いつ晋助が攻撃してきてもいいように体勢を整える。

「ククッ…」

「何が可笑しい？」

「そりゃ、可笑しいぢ…」

その言葉と同時に、一瞬紫苑の目の前から晋助の姿が消えた。

だが僅かな気配で、俊敏に反応する。再び、刃の交わる音が部屋に響き渡った。

ガチガチという刀同士がぶつかり合う音。そして、ぶつかり合う鋭い視線。

真っ直ぐと、自分を見つめる晋助の瞳、そして自分に向けられたそ

の言葉で…

「そりゃ、テメエが変わっちまったからだろうよ。俺ア昔から何も変わっちやいねエ。ただ、先生の仇を討つ、そしてこの世界をぶっ壊す。昔も今も、俺の思いは変わらねえし、鬼兵隊もまた変わらねえ。それを変わったと感ずるってこたア、単にテメエが腑抜けになっちまっただけだア、紫苑…」

紫苑の中に僅かに残っていた希望も、音を立てて崩れ落ちた。その瞬間、紫苑も決意を改める。

話し合いは不可。

だったら…

「そう、私が変わったと…そう言いたい…。だが残念だったな…」

もう、手を抜いた罅迫り合いなど無用だ。紫苑はありったけの力を込めて、晋助を押し返した。予想していたのか、今度は晋助が後ろに飛び退き何事も無かったかのように着地する。

「…私とて今も昔も変わらない。ただ…」

紫苑、お前は優しい子だから大切な者を護るためにこの剣を振るいなさい。そして、仲間が誤った道を歩もうとした時は…お前が止めてあげなさい。きっと、お前の優しい言葉ならばどんな者にも届くでしょう…。

「ごめんなさい、先生…。護るためじゃない刀を…他の誰でもない兄に向ける事になってしまいました。けれど…」

「己の剣で、己の信じる道を切り拓く…それだけだっ!!」

もう、兄には私の言葉など届かないのです。剣の道しか知らない私達は…

「切り拓くだア? テメエ、まさかこの鬼兵隊から無傷で逃げられると思っっているわけではあるめえな?」

「はっ、言ってる!! 私は、攘夷戦争終盤は独りで戦い続けた!! 確かにアスタは強い。けど…」

「じつすることですか…」

「簡単にやられるほど、やわじゃないっ!!」

もう、分かり合えないみたいです…。

「ごめんなさい、先生…。」

貴方は私達に、いつまでも仲の良い兄妹きょうだいでありなさいと仰っていましたが…

どうやら、それも今日で終わりのようです。

そちらでもし、お会いすることがありましたら…存分に私を叱ってくださいな。

私は貴方の説教を、甘んじて受けましょう。

互いの斬り合いを、ただオロオロと狼狽しながら「やめなさい、紫苑さん!! 晋助様も落ち着いてください!!」と何とか鎮めようとしている武市とは打って変わって、河上はサングラスの奥から2人の様子を

見つめるだけ。そしてクツと口角が釣り上がる。

(やはり兄妹でござるな。静かなクラシックから…ロックへ…。いや、やはりロックなんて甘っちょろい曲調ではござらん。これを例えるならば、激しさの中に更に激しさを持つ…音楽の中でもっとも荒々しい…へビメタ…)

これは面白くなってきたと、河上はただただ2人の戦いを傍観していた。

「言うだけあって強くなったじゃねえか、紫苑…。やっぱ、テメエは『紫怨の鬼』だなア…」

「その名を…呼ぶなアアアツツ!!!」

二つ名を他の誰でもない兄に呼ばれ、完全に理性が切れた紫苑は腰から抜いた鞘で隙だらけだった晋助の脇腹に一太刀入れる。流石に反応仕切れなかった晋助は、それを受けて膝をついた。

「……………ツ…!!ククツ、剣と鞘を使つての戦い…。久々に見たぜエ、テメエの本気をよオ…」

まさかあの晋助が膝をつくほどの攻撃を繰り返すとは思わなかった武市と河上は流石にこのままではまずいのではないかと思いは始める。しかし、晋助からの指示が無いまま手を出せば、標的が自分に代わることは目に見えていた。

(とりあえずは様子を見ますか…)

(面白くなってきたでござる)

睨み合う2人、そんな2人をただ見ているだけの2人。だが…さすがに…と、河上は静かに手を上げた。

「何だア？」

「邪魔すんな、万斉」

殺気と明らかな怒気の籠った2人の声に、武市が「何余計な事しちゃってるの!？」と頭を抱えていたが、それを綺麗に無視して河上が口を開く。

「このような狭い場所では、折角の殺し合いも楽しみめまい。ここは一度、場所を移してはどうでござろうか？拙者も、主らの戦いのリズムに興味が湧いた。このような狭き場所で奏でるには、惜しいリズムでござる…」

その河上の言葉を最後に、部屋はシンと静まり返る。最初に沈黙を破ったのは紫苑だった。

「知るか、何処で殺し合おうが私の勝手。テメェに口出しをされる筋合いはねエ…」

叩きつけられた殺気を綺麗に流しながら、河上は晋助の方に視線を向ける。

「晋助、お主も同じ考えでござるか？」

問われて、晋助は…

「ククッ…何事もやるんだったら派手な方がいい…。もちろん、殺し合いもだ…」

ニイツと口角を吊り上げ、河上の提案に乗った。紫苑は何処で戦っても同じだと再び吐き捨てて晋助に切りかかったが、それを晋助はひ

らりとかわす。

「同じじゃねエだろうよ…。折角の殺し合いだ…。しかも、他の誰でもねえ、テメエと殺り合おうってんだぜエ？これを楽しまずに何を楽しむってんだ…」

「ふざけるな!!私は楽しんでなどいない!!ただこの決着を早く終わらせる、それだけだ!!」

「だったら…。俺ア場所を移さねえ限り、剣は抜かねえし、テメエとも殺り合わねえ…」

どうだ、それでもそんなことが言えるか？

晋助に問われ、チツと小さく舌打ちをする。そして、ギロリと河上を睨んだ。

「余計な事をしてくれたものだ…」

このまま晋助が動かないというのであれば意味が無い。それどころか、自分は一生この居たくも無い場所で飼い殺しにされてしまっただったらここは素直に従うべきかと…。不本意ながら、構えていた刀を下ろした。

「いいだろう、場所を移してやる。どこだ？」

「どこだ、だと？ククッ、テメエが一番分かってるだろうよ…。場所は…」

船内が慌しくなってきた。その理由が分かっている来島は、ベッドに潜り込み固く目を閉じていた。

いつ自分が呼ばれてもおかしくない。こんなにも船内が騒がしい

と言う事は、もう紫苑が行動に出たということだ。外からは「副官が晋助様に斬りかかったらしいぞ!」という声も聞こえた。

(紫苑ッ…!!)

果たして、紫苑は無事なのだろうか?以前話してくれたときは、「自分の剣は到底兄さんには及ばないわ」と苦笑していた。その言葉が何度も何度も、来島の脳内を掠める。

「あーっ、もう!!消えろ!!消えろオオッ!!」

嫌な言葉を払拭するように枕を殴り続け、そのままボスンと枕に顔を埋める。

(私は…どうなって欲しいんだ…?紫苑に勝って欲しい…?けどそれなら、晋助様が…。…ッ、どうしたらいいのか…分からない…)

紫苑を死なせたくはない。だが、紫苑が生き残るということは即ち晋助が斬られるということだ。来島は晋助を崇拜している。そして、勝手ながら好いている。しかし、同じくらい紫苑のことも好きだ。

好きな人同士がこんなことになってしまっなんて…。

やはり、何をしてでも止めれば良かったと今更ながらに後悔しながら、慌しい通路の声に耳を傾けた。

「おい、闘技場の方に移動したらいいぜ?」

「闘技場?いやいや、この場合は処刑場って言った方が正しいだろう…」

「ああ、確かになあ…。しかしまあ、副官も相当な手馴れと聞くが…お前、どっちが勝つと思っ?」

「はあ？…そりゃオメエ…いや、わからんなあ…」

嫌だ、聞きたくない。

そんな話を、何で私の部屋の前でする？

「やっぱ晋助様じゃねえのか？」

「バーカ、相手はその晋助様の妹だぜ？しかも、“紫怨の鬼” だろ？こりゃ、久々に面白い戦いが見れそうだ…!!」

何が面白いものか。

兄妹^{きょうだい}同士の殺し合いなど…悲しいだけではないか。

ぐるぐると渦巻く来島の思いは…

「テメエら!!ここが来島 また子の部屋の前と知っての騒ぎッスか!!
煩くて眠れないじゃないッスか!!静かにしやがれ!!」
「ヒィッ!?!す、すみません!!」

扉の向こうに居る部下達への八つ当たりという形でひとまず、落ち着いた。

その時、来島の携帯が鳴る。着信は河上からだった。

(…ッ、つまり…闘技場^{しよけいじやう}に来て事ッスか…!!)

自分は幹部であり、そこに同席する必要がある。幹部として、裏切り者の結末を見るといって使命がある。

いつもは馬鹿な奴だと鼻で笑っていたが…

「…冗談、きついッスよ…」

その表情は、悲しみに歪んでいた。

いつもは鬼兵隊の隊士達が互いの腕を磨き合う闘技場。しかし、そこは時と場合によって姿を変える。

罪人を裁く、処刑場へと…。

今まさに、闘技場はその姿を変えていた。周りにはこの戦いに興味を持った鬼兵隊の隊員達、そして河上・武市・来島といった幹部ら。

闘技場の中央には…

「じゃあ、仕切りなおしといっしょ…」

「ふん…」

鬼兵隊の総督である晋助と、鬼兵隊の副官である紫苑の姿。

2匹^{きょうだい}の鬼がまさに、殺し合いを始めようとしていた。

「精々、俺を楽しませてくれや…」

「楽しませる？残念だったな…私はそういう嗜好は…」

ダツと紫苑と晋助が地面を蹴る。

刀同士がぶつかり合う独特の金属音が響いた。

「…持ち合わせていないッ…」

「じゃあ、テメエは何の為に戦う？アア？」

「最初はアンタの目を覚まさせる為だった。昔のアンタに戻って欲しいと思っていただけだった。だが…」

腰帯から鞘を抜き、ヒュンと振り翳すが今度はそれをギリギリでかわされる。

「それが叶わないなら、私は鬼兵隊を抜ける。そのために刃を振るう！！」

「鬼兵隊を抜けてその後はどうする？真選組はテメエを鬼兵隊副官として追っているぜエ？」

「だったら私は身の潔白を証明する為に、真選組に捕まるう。そこで洗いざらい、鬼兵隊について…吐いてもいいんだぜエ…？」

ニヤリと口角を吊り上げる紫苑の姿に、その場にいた誰もがゾッとした。

今、晋助と対等に戦っているのは…本当にあの紫苑なのか？いつも自分達と手合わせしてくれていた…厳しい中にも、優しさのあったあの女性なのだろうか？

そこに居るのは…

「ほら、かかって来い…。テメエの剣、叩つ斬ってやる…!!」

「ククツ、上等だ。やれるもんならやってみな。俺が、テメエを、叩つ斬る…!!」

“鬼”ではないのか…？

「やはり、じつでなくては面白くないでしゅね」

「しかしまさか、あの美しいお嬢さんがこんなにもお強いとは…。銃

を撃つ以外脳のない猪女のまた子さんとは本当に大違いですね」

「武市変態、煩いッス。黙って死ねや」

「テメエが死ねや」

こんな軽口を叩いてはいるが、来島の内心は正直複雑であった。どちらかが勝てば、どちらかが必然的に重症を負う。下手をすれば、命を落とす。

(……晋助様…、紫苑……)

自分は…どっちに勝って欲しいのだろうか…？そんな葛藤の中、凄まじい斬り合いをただ呆然と見つめていた。

2人が剣を交えて…どれほどの時が経っただろうか？長いようであり、短いようであったが…

「ハッ…ハア…ッ…!!」

「…ッ、どうした、紫苑？息が…上がってるぜエ…？」

「…その、言葉…そっくりそのまま送り返してやらア…!!」

時間が経つに連れて、2人の息は上がっていく。それでも決定的な致命傷を互いに与える事が出来ず、双方の身体には各所に浅い刀傷が付いていた。紫苑の着ていた戦装束も所々ぱっくりと割れており、そこから鮮血が滲んでいる。

双方、力は互角。

一体…誰がこんな展開を予想しただろうか？否、誰もが予想してないなかった。まさか、こんなにも長く、こんなにも壮絶な戦いになるなどとは…。

「もうかれこれ1時間ですか…」

「…流石にどっちもきつそうッスね…」

肩で息をしている2人を、武市と来島が見つめる。しかし、河上だけがそんな2人を違う目で見ていた。

(「いいや、アレはまだ牙を隠しているでござる。晋助も、紫苑も…どちらもまだ、ようやく前奏を奏で終わつたに過ぎぬ。これからが…」)

「よお、紫苑…ダラダラやっても仕方あるめえ。そろそろ本気の殺し合いといーじつや…」

「同感だ。さっさと終わらせて…」

(鎮魂歌という名のフィナーレでござるよ…)

クツと口角を吊り上げながら、河上はサングラスをクイツと上げる。双方をその瞳に捕らえ、それぞれのリズムを感じながら…この殺し合いを静かに見つめていた。

「私は鬼兵隊を抜けるッ!!」

先に仕掛けたのは紫苑だった。タンツと地面を蹴り、深く腰を落とす。

(足を切り落とすつもりか? いやア、この目は…)

足目掛けて白刃が迫るが、しかし紫苑の瞳は違つところを捕らえている。そう…晋助の瞳だ。

(最初から、狙つは…)

(おもしれえ、初っ端から…)

(貴様の首だ!!)

(俺の首を狙ってきやがった)

ガキイイイン!!!!

凄まじい金属音が、先程のそれとは比べ物にならない。そこでようやく、そこにいる全員が把握した。まだ2人とも、本気など微塵も出していなかったのだと…。

感じる殺気も、気迫も…数十秒前とは比べ物にならないほどがらりと変わった。場の空気が一変したのだ。

そっそれは例えるならば…

「あの頃を思い出すなア…そうだろ、紫苑…?」

「攘夷戦争か? フン、思い出したくもない…あんな、無意味な負け戦^{いくな}などッ…!!」

攘夷戦争さながらの戦い。

2人が攘夷戦争で刃を振るっていたことはもちろん、この場に居る全員が知っている。だからこそ、思った。

攘夷戦争では、この程度の腕は当たり前なのだろうかと…。

「その負け戦^{いくな}を糧に俺ア鬼兵隊を作り上げた。そして俺は、今度こそ…幕府をぶっ潰す…!!江戸の奴らが恐怖し逃げ惑う様は、大層見ものだろうよオ…!!」

「…貴様ッ!!無関係の人間まで巻き込むつもりか!?!」

「この世界から天人を排除するためだ…仕方あるめえよ…」

ニイツと笑う晋助、一気に頭に血が上る紫苑。バツと飛び退き、再び紫苑は刀を構える。同じように腰を落とし、狙いを定めた。

「同じ事を繰り返したところで無駄だぜエ…？」

また首を狙ってくる。それは紫苑の目を見れば分かった。再び刀で防ごうと構えたが…

カンッ…!!

晋助の構えた刀に当たったのは、白を基調とした刀の鞘。

「…ッ!!…チィッ!!」

晋助の舌打ちに、ニヤリと紫苑が笑う。と同時に、紫苑の白刃がシュッと薙ぐ。晋助の首元から血飛沫が舞った。

「…ククッ…どうだ？見下していた奴に斬られる気分は…？」

「アア、悪くねえ…。それでこそ、殺りがいがあるってなもんだ…」

辛うじて体を捻ることで、白刃の軌道は逸れたが…晋助の首に赤い筋が出来る。深く傷付いたそこからは、ドクドクと鮮血が流れ落ちていた。

「さあ、私が切り刻むが先か…貴様が失血死するのが先か…見ものだな…」

「いや、その前に…俺がテメエを…叩っ斬る…!!」

そう言いつち否や、今度は晋助が低く身を屈める。それを察知した紫

苑は、鞘で地面を突き高く飛翔する。

(よし、かわした…!!)

(チツ、飛翔びやがった……!!)

晋助が難いだ剣は空を切っている。今、晋助は隙だらけ。上から一突きにすればそれで終わりだ。紫苑が刀を構える。

これで、終わる。

殺せ、殺せ…!!

けど……

本当ニ、ソレデイイノ？

(……ッ!!)

刀を構えた刹那、紫苑の脳裏を過ぎったのは…

『おい、紫苑…考え直せや。こんなチャランポランのどこがいいんだ？天パだぜエ？』

『こらアアア!!晋助!!テメエ、天パは余計じゃあああ!!』

『あ、怒るところはそこなんだ…』

『アツハハハ!!げにまっこと、銀時は面白いのう!!』

『自分がチャランポランと言われて否定しないという事は、認めているという事か…』

『おい、紫苑…今からでも遅くねエ。コイツにお前の将来を預けるのかと思うと……幸先不安すぎて眠れやしねエ…』

『そして晋助は心配性じゃき…!!人は見かけによらんっちゅーが…おまんら、これがよか例やとは思わんかえ?』

『確かに…』
『兄さん、遠回しにシスコンって言われてるよ?』
『テメエら、よっぽど死にてえらしいなア…!!』
『ギヤアアアア!!!晋ちゃんタンマ!!何で怒りの矛先が俺エエエエ!?』
『そこにテメエが居たからだ、この腐れ天パ!!』
『八つ当たりすんな、低杉イイイ!!!』

(な、んで…!!何で…何で…!!)

『ねえ、攘夷戦争が終わったら…私達は何して暮らす?』
『そうさなア…、全員で一緒に暮らすかア?』
『はあ?冗談!!俺は紫苑と2人で暮らす!!もう決めてるしい?』
『ワシヤ宇宙に行くぜよ!!』
『お前は相変わらずだな、辰馬。……そうだな俺は……まあ、好きなように生きるわ』
『んだよ、結局全員バラバラになるんじゃないかねえか…。まあ、俺は絶対に紫苑と2人暮らし希望だけどなっ!!』
『フフツ…それも楽しそうだねえ…!!あ、いいこと思いついた!!私達の故郷!!私塾は焼けちゃったけど…桜の木が1本残ってたでしょ?』
戦争が終って、全員が無事に生きて戻れたらその時はその桜の木の
下で、宴会しようよ!!』
『マジでか?いや、あんま騒ぐと先生にうるせえって怒られるぜ?』
『他ならぬ先生だ、その時ぐらい大目に見てくれるだろうさ』
『桜の木の下で宴か…。確かに、悪かねエ…。それが夜の月見酒ならもっとオツだなア』
『ほりゃあ楽しみじゃ!!こら、簡単に死ぬわけにゃいかんぜよ!!』

じゃあ、約束だよ…?死んだら仲間はずれだからね…!!

(今更ツ…!!)

楽しそうに騒ぐ仲間達と、優しく笑う晋助《あに》の姿。

(もう、あの頃の晋助あにと今の晋助コイツは…違うのよっ…!!)

必死に否定しようと刀を振り下ろすが…

(何でっ…動かないのよっ…!!)

紫苑の腕はカタカタと振るえ、微動だにしなかった。

「……紫苑のリズムが狂ったでござる……」

ポツリと呟いた河上の言葉に、武市と来島が「え？」と一瞬視線を外す。河上の方に視線を向けたそのホンの数秒の間。

その数秒の間に…

「オイオイ…考え事たア、余裕じゃねえか……。なあ、紫苑…?」

ズシャッ…!!

「余所見してっつと、はらわた…引き摺り出すぜエ…?」

僅かに乱れた紫苑の動きから隙を突いて、体勢を整えなおした晋助が紫苑の脇腹に刃を突き立てた。反射的に紫苑も体を捻らせたが完全にタイミングが遅れる。

「ガハッ…!!」

深く挟られた脇腹からは血飛沫が飛び、口内には鉄の味が広がった。そのまま、ドシャリと紫苑は地面に叩きつけられ、紫苑が蹲るそ

ここにはじわじわと赤が広がり、血溜まりができる。少し離れたところに居た晋助は、ゆっくりゆっくり紫苑に近づく。刀を構え、ニヤリと笑いながら。

(このままじゃ…殺される…!!立たなきゃ…!!立って戦わなきゃ…!!)

しかし、さっきのことで紫苑ははつきりと分かった。

どんなに憎んでも、どんなに…今と昔では違つと言い聞かせても…

やはり、兄は兄であり…晋助を殺す事など…出来はしないのだと。

「悔しいか？ テメエで仕掛けた戦いくに負けて…」

容赦なくドカツと足で体を蹴られ、強制的に仰向けにされる。目に映るは、闘技場の天井と自分を見下す晋助の姿。そして…

目の前に突き立てられる、晋助の刀の切っ先。

赤く染まったそれは、ライトに照らされ不気味な色をかもし出す。

ああ…もう、死ぬんだ…

そう思ったとき、フワリと…紫苑の表情が緩み…微笑む。

「……何故笑う…？」

感情の欠片もない声で晋助が聞けば…

「分からない…けど…やっぱり、これでよかったんだって…」

紫苑はそう答えた。

「……死ぬ事が出来て満足か？」

何故今更そんなことを、と……晋助の表情が訝しげに歪む。そんな晋助の表情を視界にとらえてゆっくりと首を横に振った。

「兄さんを殺すなんて……やっぱり、私には出来ない……」

例え昔と違ってしまっても。

もうあの時のように微笑んでくれなくても。

それでも……

「コタローにも、辰馬にも、銀時にも……もう会えないけど……」

その刃の切っ先を見つめながら……

「兄さんの手に掛って死ぬならば……いいかも、しれないなあ……」

穏やかに微笑んだ。

そんな紫苑を見て、小さく晋助は舌打ちをする。

(……何だっつてんだ……、何で……テメエはそんなに……真っすぐであり続けられる？何で、俺の色やしかたに染まらねエ？何で……ッ……!!)

『にーさん!!出陣するよー!!置いていくよー!!』

『バーカ、お前が先に行っても迷子になるだけだ』

『あーっ!!さりげなく方向音痴に仕立て上げたな!!』
『…ツラと共に離(り)現在の南)の方角へ向かえと言ったのに、真逆に進軍していたのはどこの大将だったか…』
『わーっわーっ!!それまだ引きずる!?もうその話は忘れようよ!!』
『ツラが大変だったってへばってたなア…』
『うっわ…その笑い方ホントに、ムカつく…!!』
『お前も似たような笑い方だ』
『イヤァッ!!私、こんなドスマイルしてたの!?イヤァッ!!』
『お前は俺をなんだと思ってるやがるんだ…』

晋助の脳裏を過ぎったのは、攘夷戦争中に交わした他愛ない兄妹(きょうだい)の会話。当たり前のように笑っていた妹と、そんな妹のコロコロと変わる表情を面白可笑しく見つめていた自分。

そして思い出したのは…

紫苑と戦場で離れ離れになってしまったときの絶望。
銀時と背中合わせに涙を流したあの日の虚無感。

今…自分は何をしようとしている？

この刃を向けて、自分は今、何をしようとしている？

折角出会えた唯一(いもつと)の家族に刃を向けて何をしようとしている？

自ラ、マタアノ虚無ヲ生ミ出ソウトシテイル…? ?

(……………何やってんだ、俺ア……………)

自覚はあった。

最初に再会した時は素直に嬉しかったはずなのに、次第に紫苑が、以前のように笑わなくなっていく姿を見て…苛立ちを覚えていた事くらい。

いつしか自分を見る紫苑の目が変わったことに、気付いていながら気付かないフリをしていた事くらい。

そして……

いつか絶対に、紫苑がこんなことを起こす事くらい。

手に取るように分かっていた。

しかし、必死にあがき、そうではないと…違うのだと、晋助は己に言い聞かせてきた。

その結果が…

(…笑えねエ…)

ギリツと歯を食いしばる。

目の前に横たわる傷付いた妹は、“晋助に殺されるならそれでいい”と微笑った。

その笑顔がずっと…ずっと見たかった。

やっと取り戻したのに…

何故、自分が刃を向けた時にその笑顔を見せる？

何故、死の間際にその笑顔を見せる？

あるいは自分ではなく、他の誰かの前だったら…

紫苑はその笑顔を向けていたのだろうか？

例えば、同じ鬼兵隊の来島であつたら？

例えば、共に攘夷戦争で戦った桂や坂本であつたら？

例えば…恋人だった銀時であつたら？

では何故、紫苑はその笑みを己に向けなくなった？

昔はあんなに笑ってくれていたはずなのに。久々に再会した時は戸惑いながらも笑ってくれていたはずなのに。

いつから、彼女は笑わなくなった？

(ああ…そうか…)

紫苑が笑わなくなった理由。それをようやく…晋助は理解した。

(オメエから笑顔を奪ったのは…俺か…)

私はこの“鬼兵隊”を…“鬼兵隊”だとは認めない。今のア
ンタを、兄とも思わない…

(オメエの居た鬼兵隊はあの頃の鬼兵隊であり、そしてオメエの兄は
あの頃の俺ってことか…)

紫苑から笑みが消えていったのは、思えば自分が銀時の情報を一切
与えなかったあの日からだったような気がする。そして日に日に、“

今の鬼兵隊から消えたい”と望むような目で自分を見つめるようになっていった。

もしあの時、何か少しでも銀時に関することを教えていれば？生存しているという事実だけでも知らせていれば？

あるいは、この状況も変わっていたのだろうか？

しかしそれももう、すべては過ぎてしまった事。

時間は巻き戻せないし、言葉を取り消す事も叶わない。

(結局、俺ア…オメエを救ったつもりでいただけで、オメエを苦しめていただけだったって事が…)

鬼兵隊副官というポジションに紫苑を置き、鬼兵隊を完全復活させることで自分の野望を果たそうとしていた。それと同時に副官である紫苑は本陣に残ってもらい、本陣の守りを固めるという理由で紫苑自身をも護っていた。いや、護ったつもりでいた。

しかしそのどれもが…紫苑を苦しめていたに過ぎないのだ。

そしてその結果が、鬼兵隊の脱退。

そして、この現状。

晋助あにの刃により傷付き、倒れた紫苑いもつとの姿。

(……………ククッ、本当に…変わったしまったのは俺の方だったってことか……………)

微笑む紫苑の姿を捉えながら、晋助は口元に弧を描く。しかしそれは、いつものニヒルな笑みではなく…

「じい、ちゃん？」

どこか…寂しげな笑み。

「……動きが止まりましたね…」

「ふむ、晋助のリズムも変わったでござる。まるで弦の切れたギターのようにござるな…」

「また分かりづらい例えッスね…」

急に静まり返った闘技場内に、見ていた者達が困惑するようにざわめく。と同時に、幹部達もまた何が起きたのかと中央の2人を凝視していた。幹部達がいる位置からだ、晋助は背中を向けている為…どんなやり取りがされているのか、それを知ることが出来ない。

ただ…

(らしくも無い…。今の晋助から感じるのは“戸惑い”と“悲しみ”でござる…。見事に先程のリズムから狂ってしまった。一度狂ったリズムを、さっきまで奏でていたリズムに戻すことも出来ずにさ迷っているでござる。さて、晋助よ…。この迷子になってしまったリズム、お主はどうやって奏でなおすか…見物でござるな…)

河上だけが冷静に見つめていた。

「……………おい…」

「え…？」

晋助は静かに呟く。決して、誰にも聞こえないように…紫苑にのみ

聞こえるように。紫苑は驚いたように晋助の瞳を見つめる。

その瞳は…どこか悲しげで、しかし紫苑の良く知るあの頃の兄の瞳。

「まだ…動けるか？」

「……何を、言ってる…？」

殺されると思っていた紫苑に、明らかな戸惑いが生まれる。何故急に、晋助はこんなことを問うてきたのだろうか？否、何故このように昔を思い出させるような瞳をしているのだろうか？

まだ何か…考えているのだろうか？

更に自分をどん底まで叩き落す打算でもしているのだろうか？

晋助を信じたいという気持ちと、もう優しかった兄は死んだのだという葛藤からか…紫苑はただ戸惑うだけだった。そんな紫苑に晋助は再度問う。

「まだ、動けるかって聞いてんだ…。答える」

静かな言葉ではあったが、先程までにじみ出していた冷たさや殺気などは全く感じない。それは、攘夷戦争の時の…

『紫苑!!まだ動けるか!?答える!!』

『何とか動けるけどっ…!!』

『だったら、怪我した奴らを連れて一度ここから離れる!!このままじゃ圧倒的に不利だ!!』

『了解!!』

傷付いた仲間を逃がすときの言葉の響きと酷似していた。

どう…答えればいいのか分からない。ついさっきまで、晋助は紫苑を殺す気で斬りかかってきていたのだ。それが突然、何でこんな状態になってしまったのか…。しかし晋助の瞳は真剣そのもので…絶対の答えを求めていた。

(…動けるかですって？無理に決まってるじゃない。こんなに斬られて、体力も限界で…。けど…)

ギョツと紫苑は自分の刀を握りなおし、フラつく足取りで、何とか立ち上がる。動くたびにビチャビチャと…斬られた横腹からどす黒い赤が零れ落ちたが、紫苑はそれに気付かぬフリをした。そして…

「言った、はず…だ…。私、は…鬼兵隊を、抜ける…!!それまで、この、歩みは…決して、止めない…!!」

強い瞳で、晋助のそれを見つめる。それを受け、フツと晋助は微笑^{わら}った。いつものニヒルな笑みとは違う…優しい笑みに、一瞬紫苑は目を見開く。しかし次の瞬間には、さっきのそれは嘘のような…いつもの姿に戻っており、ククツと喉を鳴らして笑っていた。

(私の見間違い？違う…、確かに兄さんは…)

一体、晋助は何がしたいのだろうか？まだ動けるかと聞いてみたり、突然微笑んだり…。紫苑の思考が完全に乱れる。

殺した筈の思いが…“昔の兄に戻ってくれるかもしれない”という希望が…再び沸き起こりそうになる。

手を伸ばせば、届くのではないかとさえ思えてしまう。

しかし、そんな紫苑の思いは…

「興が削がれた。それに…そんな状態になってまで立ち上がるたア、やっぱり手放すのは惜しいなア…」

簡単に碎け散る。

いつもと同じ笑みで、同じ口調で、同じ声色でそう言っているのは紛れも無く晋助だ。

しかし…何か矛盾しているような気がした。

(だって…兄さんが、動けるかって…聞いて…っ…!!)

だからこそ、紫苑は立ち上がった。どこかで兄が逃がしてくれるのではないかと、そう思っていたのかもしれない。

それ程までに、さっきの響きはとても懐かしく紫苑の良く知るそれだったのだ。

だが、次の瞬間、晋助の口から零れた言葉は…

「後はテメエらが好きにしろや。俺はもう飽きちまったア。あとはテメエらで遊んでやれ。こいつは、鬼兵隊から逃げる”つもりだ。俺の言いてえこたア分かるな？」

「……………ッ!!き、さま…!!」

「何を勘違いしたかはしらねエが、俺がテメエを逃がすとも思ったか？裏切り者には死あるのみ。逃げ切りたきや……………テメエを襲ってくる奴らを片っ端から殺してから逃げ出しな」

鬼兵隊長として紫苑を突き放す言葉であり、例の気まぐれゲームによる処刑の幕開けとなる言葉だった。

信じたいと思っても…

そう思おうとした瞬間に裏切られる。

「……………!!」

分かってもそれに縋ってしまいそうになる自分が…

「うわアアアアアアアツツツ
!!!!!!」

紫苑は許せなかった。紫苑の絶叫が闘技場に響くが、それを無視して晋助は闘技場を後にする。

ざわめく闘技場。

自分達はどつするべきなのか？

「おいおい、まさか俺達に副官を斬れってか？」

「……………けど、そういうことなんだろうぜ？ だってほら、晋助様はそう仰った…」

「だったら…」

周りの困惑が、殺気に変わる。それに気付かぬほど、紫苑も鈍くはない。刹那、四方から銃弾が飛んできた。それを最小限の動きでかわすが、そのたびに晋助に斬られた脇腹が傷む。

しかし…

「ククツ…アハハハハツ…!!!殺れるものならやってみろ…!!死にたい奴からかかって来い!!相手をしてやらア!!」

そんな殺気をねじ伏せるほどの凄まじい威圧と殺気を叩きつける。騒がしくなった闘技場が一瞬静かになったが、それもまた怒号にかき消され流れ込むように闘技場に鬼兵隊員達が迫ってくる。それぞれの武器を片手に紫苑を追い詰めようとしている事は明白だった。

(幹部はどう動く…?)

襲い来る隊員達を斬りながら、チラリと幹部達3人が座っていた場所に視線を向ける。しかし、既にそこには幹部達の姿は無かった。

(…万斉と武市は間違いなく私を止めに来るだろう。どっちかというとな万斉が厄介だな。戦い方が分からん…。そもそも、奴の戦っている姿など見たことが無い。そして…)

脳裏を過ぎるのは、鬼兵隊脱退を申し出る前に別れの言葉を交わした来島の姿。

(…また子がどう出るか…それが分からない…)

退路を確保しつつ、闘技場を駆け出す紫苑。それに続くように追いかけてくる隊員達を振り向きざまに斬りつけながら、来島のことをぼんやりと考えていた。

【第七訓】 追憶　く鬼の目にも涙く

「どうしたでござるか？ 晋助…お主らしくも無い…」

「万斉か」

一方、闘技場が騒がしくなった頃。自室へと足を運んでいた晋助を呼び止めたのは河上だった。そう…晋助の乱れた感情リズムに違和感を覚えただ。

「拙者、終盤よりお主のリズムが乱れた事には気付いていたでござる」
「流石だな。んなもんに気付くのはオメエぐらいのもんだろつよ…」

ククツと喉を鳴らし笑う晋助に、なおも河上は続ける。

「お主であれば乱れたリズムから再び新たなリズムを作り出すことも、また乱れたリズムを立て直す事も可能であるはず。何故なにゆえ、あの状況で退いたひきのか…それが気になったでござる」

遠回しな河上の言い方に、いつに無く晋助はイライラしていた。それは河上も感じ取っていたのか、いつ晋助が斬りかかってきてもいいように、一見は無防備に見えるがそれなりの構えはとっている。

「言いつてエエことがあるならばはっきり言えや。俺ア、回りくどく言われるのは好きじゃねエ…」

「ならば単刀直入に申そう。お主、わざと紫苑を逃がしたのでは…？」

河上が言い終えるか否かの間際。

ガキイイイイン!!!

刀と刀のぶつかる音が通路に木霊する。凄まじい殺気と共に晋助が河上に向けて刃を振り翳すが、それを寸前で受け止めたのだ。

(…ッ、流石に今のはヤバかったでござるな…)

一瞬でも気を抜いていたら、間違いなく真っ二つになっていただろう。それ程までに凄まじい一太刀だったのだ。

「テメエが何を勘違いしてるかは知らねえが、俺アただ殺し合いに飽きたから引き上げただけだ。アレをわざと逃がしたア？んな得にもならねえ事をして何になる？俺ア、ただ…」

ぶつけていた刀を鞘に収め、いつもの冷たい笑みを浮かべながら…

「いっそ殺してくれと…こんな仕打ちを受けるぐらいならまた副官にしてくれと…、俺に懇願してくるアイツの顔が見てみたくなっただけだ」

そう言った。その目はいつもと同じ、ギラギラとした獲物を狩る瞳^め。河上が知る、鬼兵隊隊長・高杉 晋助の瞳^めだ。

「そうでござったか。それは失礼致した…」

叩き付けられていた殺気が無くなったことを確認し、河上も刀を三味線の中へとしまふ。そして、踵^{かかと}を返して晋助の元から去っていった。

「お主らの戦いを見ていたら、拙者も一手交えてみたくなっただでござる。晋助よ、紫苑は残念ながら生きては戻らぬが…よいでござるな」
「？」

「好きにしろ」

去り際に確認の意味を込めて聞くが、結局最後まで…晋助の思惑が河上に分かる事はなかった。

「やれやれ、どんなリズムを奏でてくれるかと期待していたら…とんだ茶番でござった。ここからは拙者の独奏ひきとなりそうぞござるな…」

船内から聞こえてくる船員達の叫び声と怒号を聞きながら、河上はクツと口角を吊り上げる。

「これは楽しみぞござる…」

怪しげな笑みを浮かべ、その姿は戦場と化した通路へと消えていった。

一方、晋助は自室に入るなり目に飛び込んでいたその姿を一瞥した。部屋の前で河上と話していたときから、誰かが自室に居る事は分かっていた。

「何をしている、来島ア…。オメエも紫苑を追いかけねえか。幹部は全員処刑者を追いかけるのが仕事だぜエ？」

そこにいたのは来島だった。本来であれば晋助の言う通り、幹部は全員参加となるこの処刑。しかし、来島はその処刑に参加することなく…晋助の前にいる。黙ったまま、俯いたまま何も言わない来島に痺れを切らし、晋助は小さく舌打ちをする。

「オメエも紫苑と一緒に鬼兵隊を抜けるってかア？」

「ッ!?ち、違いますッ!!そ、そんなんじゃないッス!!私は…ッ…!!」

来島は後ろに隠していた救急箱をバツと前に差し出した。一瞬、撃たれるのではと思った晋助だったが予想外の事に呆ける。

「怪我…。特に首の怪我は放って置いたら致命傷になるッス。なので、その…私なんかで宜しければ手当てを…」

モゴモゴと口籠る来島。いつもであれば、そんなことはいいから仕事を全うしろと追い出すところだ。来島も当然、そうなるだろうと思っていた。

だが…

「アア、流石にこのままじゃアイツの言った通り失血死しちまいそうだ。来島ア、頼む…」

「は、はいッ!!」

予想に反して、晋助は来島の言葉をすんなりと受け入れた。

(よかった…!!私が紫苑を討ちたくないからここに来たってことはバシでない…!!)

手当てももちろん理由の1つではあったが、やはりどうしても…来島に紫苑を討つことなど出来なかった。しかし幹部は強制的に処刑に加わらなくてはならない。それを承知の上で尚且つ上手くそれに参加しなくてもいい正当な理由。それを考えた時に思いついたのが、「傷付いた晋助の手当て」だったのだ。晋助の手当てができ、そして紫苑と戦わなくて済む。来島にとってはある意味、一石二鳥だったのだ。

だが…

(うまく言い逃れたつもりでいやがるな、「イツは…」)

そんな来島の思惑も、晋助はもちろん気付いていた。

「手間ア掛けさせてワリイな」

「とんでもないッス!!」

しかしそれを追求する事も、咎める事もしなかった。

(来島は唯一、紫苑が慕っていた幹部であり、来島もそんな紫苑を慕っていた。そりゃ辛エだろうよ。自分^{デメエ}が慕っていた奴を手に掛けるのは…。どっちもなア…)

晋助が紫苑と戦っていた時に垣間見た紫苑の表情。確かに、“殺す”と口では強く言っていたが…その表情はどこか辛そうにも見えた。自分も…そんな表情^{かお}をしていたのだろうか…?

当然だ。家族^{きょうだい}同士で斬り合っているのだから。

そんな思いをもう、紫苑にはさせたくない。

少なくとも、唯一今の鬼兵隊で心を許す事の出来た来島くらいは、最後まで紫苑の味方でもいいのでは？

それが…晋助の下した判断だった。

(俺も…まだまだ甘エな…)

自嘲に歪む口元は、来島の位置からは見えなかったらしく来島も気付いていない。

騒がしい船内。

あちこちから隊員達の声や銃声、はたまた砲撃音にも近い音が聞こえてくる。

「ククッ…派手にやってやがる…」

「えっと、武市先輩と河上先輩は…？」

控えめな来島の問いに、晋助は口を開く。

「武市は知らねエ。だが、万斉は動いた。野郎が動いたってこたア…紫苑もしめえだな…」

晋助の言葉に思わず来島の手が止まる。

しかし晋助はそれに気付かないフリをした。

そして…

「しかし、紫苑も強エ。手負いだが、奴はそれでも己の道を切り拓くと決めたらどんな状態でも己の意志を貫く女だ。ククッ、結果が楽しみだなア、おい…」

そう言いながら、窓の外の月を眺める。今宵は綺麗な満月だった。

「……かぐや姫は満月の夜に月に帰る、か……。もともと、奴に帰る場所なんざありやしねえが…」

「……晋助様？」

「いや、なんでもねエ…」

煙管キセルに火を点け吹かしながら…満月を眺め、小さく微笑わらう。

それは、来島が今まで見てきた中で一番優しく、そして一番綺麗な姿だった。

* * * * *

「こんな…満月の夜だったなア、あの夜も…」

ふと漏らした晋助の言葉に、目の前でバクバクと白米に食らい付いていた青年は手を止め、「コテンと首を傾げる。

「んん？何が？」

「…いやア？数年前…俺の手元から妹が逃げて行った日も、こんな満月の夜だったなと…そう思ったただけだ」

「へエ、タカスギにも妹がいるんだねえ。その子、強いのか？」

白米から晋助の話に興味が移った青年…春雨第七師団団長であり夜兎族の神威はズイツと晋助に顔を近づけて問う。夜兎の本能からか、強い者に目が無い神威は純粹に興味を抱いたのだ。晋助の強さは知っている。その妹となればやはり強いだろう。

問われて、晋助はクツと口角を吊り上げる。

「あア、強い女だった…」

自信に満ちたその目からは、自分の妹の強さを自慢しているようにも見えた。それに思わず神威は声を殺して笑う。

「なんだかそういうの、嫌がる人かと思ってたけど…アンタも人間だ

ね。やっぱり血の繋がった妹は可愛いつてわけだ？」

「ちあ、どつだろつなア？」

クイツと酒を流し込みながら、月を肴さかなに晩酌をする。あの夜と比べれば、今日は何と静かな夜だろうか？…そう思ってしまったくらいだ。

「けど、当然…鬼兵隊にはいないんだよね？逃げたって言ってたし？それらしい女も居ないし。まさか、あの金髪の女が妹さんとか言わないよね？」

「んなわけねえだろ。アイツは…紫苑は鬼兵隊から抜けた。生きてるのか、死んじまったのか…それすら分かりやしねエ」

「へえ？自分の妹なのに気にならないんだ？流石は血も涙もない“鬼のタカスギ”だね 春雨の天人達はみーんなそう言っただけタカスギの事を恐れているよ？」

「ククッ、そうかい…」

再び白米に手をつけ始めた神威を呆れたように眺めていたが、ふと晋助はあることを思い出す。それは、万事屋を営む銀時の傍に居た従業員の姿。紅桜の時に単身、晋助の乗り込んできたチャイナ服を着た少女…。その少女と神威の繋がりを、晋助は知っている。

「神威、オメエにも妹がいるだろうよ。しかも地球にいて居場所も分かってんだ。兄妹きょうだいなんだろうオ？オメエこそ会いてえとは思わねえのか？」

素朴な疑問、だが真面目な質問ではない事は晋助の表情を見てすぐに分かった。その表情は、いつもの怪しい笑みだ。

「んー？俺は興味ないよ。だってアイツ…あ、タカスギは知ってるんだっけ…妹のこと。…神楽は弱いからね。俺は強い奴にしか興味がないから。まあ、神楽もちょっとは強くなつたみたいだけど…俺の

血の渴きを満たしてくれるような強さではないね」

「そーかい。そりゃまた、血に忠実なこった…」

ククツと笑いながら煙管キセルを吹かし、再び月を眺める。

例え強くても弱くても…晋助にとって、紫苑が妹であることに変わりはない。

見事、“鬼兵隊から脱退”を果たした紫苑のその後は、分からぬまま。

一部情報では、真選組に囚われたという情報も入ったが…晋助が動く事はなかった。

事実かどうか分からなかったということも理由の1つにあったが…もう彼女を“鬼兵隊”という鎖で縛りたくはないと、そう思ったからだ。

ただ自由に生きて欲しいと、そう思ったからだ。

生きていれば、どこかで銀時と再会することもあるだろう。何せ銀時は、ここ最近騒ぎばかり起こしている。目立たないはずがないのだ。銀時と再会し、共に時間を過ごす。それが紫苑の幸せならば、それでいいと…そう晋助は結論付けた。

あの事件の後…全くといっていいほど紫苑の情報は入らなくなり…いつしか、誰も紫苑の名を口にすることはなくなった。

もう、誰の中にも紫苑という人物は存在していないのかもしれない。

ただ、晋助のみが…まだ忘れられず、満月を見るたびに思い出しているのかもしれない。

「ねえ、タカスギ？もし、タカスギの妹さんに会ったら…戦ってもいいかな？タカスギの妹ってことは、侍^やなんだよね？」

「あア？…好きにすりゃあいい。ただ…」

クツと口角を吊り上げ、猪口の酒をクイツと喉に流し込みながら呟く。

「アイツは…紫苑は強いぜエ？オメエでも手が付けられねえかもしれねえ程になア…」

「アハツ!!そでこそ殺^やりがあるってもんじゃないのへえ、女の子なのにそんなに強いなんて…!!ホント、神楽とは大違いだ…!!」

楽しげに笑う神威を一瞥し、小さく溜息を吐いて空になった猪口に酒を注ぐ。

「本当に、強い女だったよ…最後の最後まで…」

ボソリと呟いた晋助の言葉は神威の耳に届く事は無く、ドタドタという騒がしい足音にかき消された。

「団長オオオオ…!!こんな所にいたのか、探したぜ!!」

「あれえ？阿伏兔じゃないか。どうしたの？」

「どうしたの？じゃねえよ、このすつとこどつこいが!!つたく…!!あー、うちの団長が失礼しました…」

「ククツ、なあに気にしちゃいねエ。オメエもどつだ？」

スツと猪口を差し出すが、阿伏兔と呼ばれた神威の補佐官はそれをやんわりと断る。

「いや、そりゃありがたいんだが、また別の機会にってことでいいですかい？ちよいとこちらも、春雨関係の仕事がありましてね。おら、团长!!行くぜ!!」

「えー、俺も居なきゃ駄目なの？仕方ないなあ。じゃあ……飯ご馳走さま、おいしかったよ!!またね、タカスギ」

「あア……」

グチグチと文句を言う阿伏兔と、それを聞いているのか聞いていないのか分からない笑顔で隣を歩く神威。

そんな2人の姿をぼんやりと眺めていたが、部屋から居なくなると再び晋助は外に視線を向ける。

「今ならオメエの気持ちか痛エほど分からア……」

兄さん、銀時……ッ、銀時は……生きているの？

あの時、必死になって銀時の安否を確認してきた紫苑の姿が脳裏を掠める。

「紫苑……、オメエは……」

生きているのか？

そう、問おつとした言葉は……

PPPP……PPPP……

「何だア？」

けたたましくなる携帯の呼び出し音によって遮られた。

やれやれと溜息を吐きながら携帯を開く。

電話の相手は…

「おいおい、何の冗談だこりゃア…」

袂を別った筈のかつての同志であり、妹が心の底から愛していた男の名前だった。

「銀時に番号を教えた覚えは…」

そこまで考え、チツと小さく舌打ちをする。攘夷戦争で共に戦った仲間全員の番号を知る人物が唯一人だけ居た。

「辰馬の野郎か…。俺の携帯にまで細工しやがって…」

暫く、その電話に出るか否か悩んだが…

何故か…

「よお、銀時イ…。袂を別ったはずの teme が、俺に何の用だ…？」

その電話には、出なければならぬと晋助の本能が…そう警鐘を鳴らしていた。

そして、電話口の向こうから聞こえてきたその声と言葉に驚愕する。

アア…本当にどうして、こんな方法でしか俺達は会えねえんだらう

なア…

それから…暫く通話は続き、「じゃあ、考えといてくれ…」という銀時の言葉で電話は切れた。

通話を終え、頭を抱えて肩を震わせる。

「クククッ…」

口元は笑っていたが…

「……ッ、本当に…俺もただの、人の子ってか…ッ…」

右目からはパタパタと、雫が零れ落ちていた。

銀時からの電話は…

妹である紫苑が生きていたという知らせであり、その命の灯火が消えつつあるという事実だった。

「今更、どんな面^{ツラ}して会いに行けっただ…ッ…」

悲しげな問いに対する返事は、誰からも返って来ることはなく…

「…けど…約束” だったからなア…」

晋助は猪口に残っていた酒を流し込むと、そのまま横になって天を仰いだ。

相変わらず窓から見えるのは大きな満月。

「桜の木の下で月見酒……。頃合じゃねエか……」

流れ落ちる涙を隠すように目元を腕で覆いながら笑う。

しかしその笑みはいつもの冷たい笑みとは違う……

とても、優しいものだった。

【第八訓】 追憶　く逃走、そして今

「追えッ!! 出口の方に向かったぞ!!」

「絶対に船内から出すな!!」

闘技場で行われた、晋助と紫苑の戦いは晋助が放棄するという形で幕を閉じ、晋助の一言で紫苑の命は鬼兵隊員達に委ねられた。自分の手柄にしようと、次々に紫苑を襲ってくるが、紫苑はそれらを全て一撃で沈める。といっても、ただ動けなくしているだけで命までは奪っていない。いや、今の紫苑に敵の生死を確認するほどの余裕は無かった。

(は、やく…!! 船の、外に出なくては…ッ…!!)

晋助との戦いで消耗しきった体力に加えて、晋助によって負わされた脇腹の深い傷。歩くたびに脇腹からは見るに耐えない程の血液が流れ落ちていく。しかし紫苑は、それでも決して歩みを止める事はしなかった。

(幹部が、来る前に…!! せめて、船の、外に…!!)

来島と武市の強さがどれほどからは分からないが、危険なのはその2人ではない。もっとも危険で、尚且つ戦い方の検討が付かない河上が紫苑にとっては一番の不安要素であり、一番敵視するべき対象なのだ。

「逃がすな!! 追え!!」

「…………ッ、邪魔だアアアアア!!!」

追ってきた数人の隊員達を一太刀で一気に薙ぎ払えば、続いて追っ

てきた者達はその気迫に尻込みする。向けられた鋭い瞳と殺気に「ヒッ」と誰もが息を呑んだ。

「……死にたい奴から掛かってきな。お望み通り……殺してやらア……」
手負いで、立っているのもやっとのはずなのに。

しかし目の前にいる女は何だ？

倒れるどころか、凄まじい殺気を叩き付け、その場に居る者達の戦意を消失させる。

目はキラキラと輝いており、その視線だけで射殺されてしまいそう
だ。

「ヒイイイ!!」

「俺達には無理だ!!」

「こ、こら!!お待ちなさい!!晋助様の命めいに逆らうつもりですか!?

「命が惜しい!!俺はまだ死にたくないッ!!」

逃げ惑う隊員達を慌てて叱責する声。それは、幹部の1人である武市の声だった。

(チツ……!!近くに武市が居るな。これはもう構わず走り抜けるか……)

果敢に立ち向かってきた隊員の1人を斬り伏せて、傷む脇腹を押さえながら駆け出す紫苑。それを視界に捉えた武市は慌てて叫んだ。

「紫苑さんが逃げますよ!!早く捉えなさい!!」

「む、無理ですよ!!晋助様が互角に戦っていたお方です!!俺達が敵うわけないじゃないッスか!!」

武市の焦りをよそに、部下達はどんどん紫苑から距離をとり始める。追うどころか、背中を向けて逃げ出すものまで現れる始末だ。どんなに武市が追えと言っても、紫苑の殺気に当てられた者達は完全に戦意喪失していた。酷い者は気絶している。かと言って、武市自身が紫苑と刃を交えるのかというと…：そういうわけでもないらしい。あくまで武市は部下達に指示を出しているだけだ。

(貴方達に言われずとも…紫苑さん相手に二三程度が敵わないことくらい百も承知ですよ。しかし建前上、みすみす逃したとなれば晋助様に言い訳が出来なくなるでしょうが…!!)

武市は一通りの剣術は身に付けているが、それは自分の部下達と変わらないレベルの腕だ。武市が幹部の座にいる理由は、謀略家としての知能の高さ故。来島や河上が腕を買われたといっているのであれば、もっぱら武市はその頭脳を買われたといっても過言ではないだろう。実際、武市の繰り出す策略はどれも晋助を満足させるものであった。

だが、今回の事は完全に計算外であり…流石の武市も、予想をはるかに超えたこの状況を收拾できる作戦は持ち合わせていない。咄嗟の機転で部下達を船唯一の出入り口に配置したが、それも結局は無駄に終わった。

「やれやれ…本当に紫苑さんは敵に回すと恐ろしい…」

今までは鬼兵隊の一員だったからこそ、安心して傍に居る事が出来た。しかしそれが敵となれば話は別だ。武市の額に汗が流れる。

「美人でお強い…。本当に魅力的なお方だったんですけどねえ…」

「ここに来島がいたら」変態も大概にしろ」とツッコミが飛んだこと

だろう。しかし、武市は紫苑が消えていった出入口を眺めながらポツリと漏らす。

「……貴方が私達をどう思っていたかは分かりませんが、少なくとも私は貴方を“仲間”だと……そう思っていたのですよ?」

消えてしまったその背中に、もはや武市の言葉は届かないだろう。あるいは、この言葉がもっと早くに紫苑に届いていれば……こんなことにはならなかったのかもしれない。

言うべきことはもっと早くに言うべきだったのかもしれない。

いつものポーカーフェイスの下で、そんな事を思いながら深々と溜息を吐く。すると、背後から気配を感じた。紫苑が居なくなってしまうた今、背後に誰かがいるとすればそれは敵ではなく同じ鬼兵隊のメンバーだ。武市は態々振り返ることはしなかった。

「武市殿、紫苑はどこでござるか?」

「ああ、貴方だったのですね」と漏らし、スッと武市は出口を指差す。

「紫苑さんならあの先ですよ」

「目の前に敵を捉えながら、みすみす逃がしたでござるか?」

突き刺さるような河上の言葉に、相変わらずのポーカーフェイスで武市も言葉を返す。

「あまり良い響きではありませんね、それは。私の力では紫苑さんに敵わないと判断した為、追うのをやめたのです。自ら命を投げ捨てる必要もないでしょう。部下達も……見事に紫苑さんの殺気に当てられて逃げ出しましたよ。中には気絶する者もいましたねえ……」

河上が一瞥すると、そこには紫苑が斬り捨てたであろう鬼兵隊の者達の亡骸や、深手を負っている者達、もしくは武市の言った通り気絶しているだけの者達。

「なるほど、三下の手には負えぬというわけでござるな」
「そういふことですよ。私も剣の腕前は全くですからね」

随分前…まだ紫苑が鬼兵隊の副官として勤めを果たしていた時、一度だけ紫苑に「武市と剣を交えてみたい」と言われたことがあった。しかし武市はそれを必死に誤魔化して逃げたのだ。あの晋助の妹で、しかも“紫怨しおんの鬼”と恐れられた彼女に自分が敵うはずがない。例え、練習試合でも命を落とすぞと…それを恐れて。それから紫苑が武市に剣を交えたいと言ってくる事は無かったが…その時の判断は正しかったと、今更ながらに思う。

「では、拙者が紫苑と手合わせしても問題はないのござるな」
「…もちろん、異存はありませんよ。しかし、殺してしまうのはいかがなものか…。お美しく、そしてお強い。そんな方を失うのは、私としては惜しいと思いますが…」
「確かに、紫苑の力は晋助のそれと対等で本当に強いのござる。故に…」

スツと河上は三味線から刀を抜き、出口に向かって歩き出す。

「再び鬼兵隊に牙を向く前に、その牙を折る必要があるのござるつ。
不協裏切り和音は鬼兵隊に不要でござる…」

その河上から感じる殺気に、武市はブルリと震え上がった。

（ハア、とびついでに…この船にはこんなにも血気盛んな人が多いの

か…)

そこまで考え、ああと武市は納得する。

「類友ってやつですかね…」

晋助の強さに惹かれて鬼兵隊に入った者は多い。その者達が血気盛んな事はある意味、必然的なことなのかもしれない。来島は銃の腕を、武市はその頭脳を晋助に買われて鬼兵隊に勧誘された。しかし河上だけは違い、彼自身が晋助の力に惚れ込み、またそんな河上の力に晋助も興味を示したという関係なのだ。

「晋助様よりかは穏やかな性格ですが…」

それも一度刀を抜けばどうなるか分からない。

まだ、この鬼兵隊で見たものは居ないのだ。

河上 万斉が刀を抜き、本気で戦うその姿を…。

「…とりあえず、船からは脱したが…」

ハアとコンテナに背中を預け、その場にズルズルと崩れ落ちる。押さえている脇腹からは留まることなく血が流れ落ちていく。

(このままだと失血死だな…)

幸いな事に、追っ手はどうやらないらしい。先程叩き付けた、ありったけの殺気で殆どの者が戦意を無くしたのであることは、紫苑自身すぐに分かった。

(かといって、のんびりとここで休んでいるわけにもいかない。あの場には武市が居た。恐らく…幹部が動き出す。…また子の姿は無かったが…だからといって、襲ってこないとは限らない。いや、また子よりも厄介なのは…万斉か…)

また子は銃を得物としている。二丁の銃を使つての攻撃は確かに厄介だが、銃弾の軌道を読み、発射される弾数を数え、弾が尽きてリロードする時に一気に畳み掛ければ容易く制する事はできる。他の誰でもないまた子だから、出来れば傷付けずに気絶させる程度で済ませたいと思っている。そう…紫苑が一番敵視している存在、それは河上なのだ。

(結局、奴の戦う姿は最後まで見る事が出来なかった。武市は一度、手合わせを願つたらものっせい勢いで断られたなあ…。あれは多分、こそこの腕でしかなのだろう。しかし万斉は…)

得物らしい得物は持ち歩いていない。持ち歩いているのは背中の三味線のみだ。まさかあれが武器だというわけではないだろうと考えるが…天人の力により色々な技術が特化した世の中だ。どんな武器があつてもおかしくはない。

(とりあえず…少しでも遠くに…、船から離れなくては…)

刀を携えていれば、警察か…もしくは真選組に捕まるだろう。しかし、それでも…鬼兵隊に捕まるよりかはマシだ。グツと足に力を込めて立ち上がる。フリリと体が傾いたが、何とか踏みとどまり片手をコソテナについて歩き出す。

その様子を…

「見つけたぞ」

「気配を殺した河上が、上から見ているとも知らずに。」

(妙だ…静か過ぎる…)

暫く歩き、紫苑はふとこの状況に違和感を覚えた。自分は追われている身。にも関わらず、船から出てからというもの…追っ手らしき者の気配を全く感じない。ゆっくりとはいえ結構歩いた。船からは随分と離れただろう。もう少し歩けば恐らく、港から出られる。更に歩けば、港から一番近いかぶき町に辿り着くはずだ。

あまりにも…上手いき過ぎている。

本来であれば楽観視するところも、相手があの晋助を筆頭とした鬼兵隊となれば話は別。ゲームと称して処刑を行うくらいだ。もっと刺客を送ってきてもおかしくはないはずなのに、その気配が全くない。部下は愚か、幹部の者達が追ってくる気配すらないのだ。

そこまで考え、ぴたりと足を止める。

(…まさか…既に尾行けられている…?)

気配は何も感じないが、もしも相手が手馴れで尚且つ死線を潜り抜けていた者であれば、気配を殺す事など造作でもないだろう。チツと紫苑は舌打ちをする。

(鬼兵隊の中でそんな事が出来る人物が居るとすれば兄さんだが…既に兄さんはこの戦いからは退いている)

あの「興が削がれた」という言葉が本心であれば、もう晋助がこの処刑ゲームに身を投じてくる事はまず無いだろう。となれば、必然的に思い浮かぶ名前は……

「……万斎、か……」

「ほう、よく分かったでござるな」

「兄以外にこんな芸当が出来る人間はそうそういないだろう。また子や武市も恐らくは出来ない。こんなことが出来るのは……お前ぐらいしかいないと思ってな。どうやら……私の予想は当たったらしい」「ククッ、流石は晋助の妹でござる」

河上だった。名を呼べばあっさりとコンテナの上より姿を現し、スタンと紫苑の前に飛び降りる。片手には刀。背中には……相変わらず三味線を背負っている。

「得物は刀か。何処に隠し持っていたのやら……」

「拙者も侍。常に刀は忍ばせているでござる。もっとも、拙者には表の顔もある故……そうせざるを得ないというのが本音でござるが」「なるほど、仕込み杖ならぬ、仕込み三味線という事が……」

どうりでどんなに探しても得物が分からないはずだと妙に納得してしまふ。しかしそんな暢気な考えをすぐに払拭し、紫苑は刀を構えた。相変わらず傷口からの出血は酷い。しかし、紫苑の瞳とその姿はそれを思わせない程の気迫だった。

「お主、そのまま動き続けなければいずれは死ぬでござろう……。ここはひとつ、大人しく鬼兵隊に戻らぬか？ さすれば、拙者もお主に危害は加えぬ。……良い話だとは思うが？」

「良いもクソもねエな。んな話、ハナ最初から願ひ下げだ。私の目的はただ一つ……」

ゆっくりと呼吸を整え、そして紫苑が地面を蹴る。

キィィィン!!!

「鬼兵隊からの脱退…、それだけだッ!!」

港に刀同士のぶつかる金属音が響く。静まり返っているせいもあり、やたらその音は大きく聞こえた。

「それほどの傷を負いながら、これだけの力…。なるほど、流石は紫怨しおんの…」

「その名は…呼ぶなど、言っただアアアアッッッ!!!」

紫苑の絶叫が響いたと同時に、万斎は肩に重い衝撃を受ける。一瞬、あまりの素早さに何が起きたのか理解する事が出来なかったが、少し前の晋助と紫苑のやり取りを思い出し現状を理解する。バツと身を引き、間合いを取って紫苑の手元を確認すれば右手には刀、左手には白い鞘という独特のスタイル。

「なるほど、これは確かにキツイ一撃でござるな…」

あの時、晋助もモロにその一撃を食らって膝をついたが…なるほど、これが刀であれば間違いなく肩から下はバツサリと斬り捨てられていた事だろう。

「それほどの腕ならば、二刀流という戦い方もあろう。何故、なにゆえ1本の刃でのみ戦うっ？」

問われて紫苑は刀と鞘を構えたまま鋭く河上を睨む。暫くの沈黙の後…紫苑が口を開いた。

「私も最初は二刀流という戦い方を考えたさ。だが…」

脳裏を過ぎるは、自分と兄が恩師と慕った優しい松陽の姿。

『お前達は奪う為ではなく、護るために刀を振るうのです。護るための刀は1本あれば事足りるでしょう。紫苑、お前は確かに2本の刀を巧みに使い、敵を制する事に長けています。しかし、それは同時に2つの命を奪うという事にも繋がります。1つの命でも十分重いというのに、一太刀で2つの命を奪い、2つの重みを背負うことがどんなに辛いか…。今は分からずとも、いずれそれを後悔する日が必ず訪れるでしょう。だから…そうなる前に、もう1つの刃は捨てちゃいなさいな。私は紫苑の、その綺麗な顔が悲しみに濡れる姿などみたくありませんからねえ…』

恩師の言葉で、紫苑は迷うことなく二刀流から一刀流の道へと歩みを変えた。それが正しかったのかどうかは今となっては分からないが、松陽の言った通り紫苑は1本でも十分に戦えた。

そして護ることが出来た。

もし、この手にもう1本刀を持っていたら…

自分はただの、人斬りに成り下がっていたらどう。

「護る刃は1本で十分。私は私の護りたいものを護るために刀を抜く。テメエらのように私利私欲のために斬る為の刃ではない」

「私利私欲？それは誤解というものでござる。拙者達は倒幕という1つの理念の元、晋助の周りに集った。拙者達が斬り捨ててきた者達は、その目的のための犠牲にすぎぬ。何事にも犠牲はつきものでござる」

「…関係の無い人間を巻き添えにし、倒幕のためにのみ突き進む、か

…。いや、「倒幕」などという生温い考えではなかったな。兄はいつも言っていた。「この世界をぶっ壊す」と…」

晋助の言う「世界」が何なのかは結局、紫苑には理解できなかった。だが、国そのものを破壊すると言っているようにしか聞こえないのだ。そうなれば必然的に、何の関係も無い市民が巻き込まれるのは目に見えている。

「私は、そんなやり方が気に食わないだけだ。幕府が憎いのは確かに同じ。私達に戦わせるだけ戦わせて裏切り、あまつま剩れ我々侍から刀を奪ったのだから」

「ならば、拙者達とお主の理念は同じでござらうか？」

分からないと訝しげな表情を見せる河上に、紫苑は喉を鳴らして笑った。

「ククッ…。テメエらと一緒にだと？笑わせるなよ…」

刹那、紫苑の姿が一瞬消えた。だがすぐに空気の流れと零れ出る殺気でその気配を感じ取る。再び、刀同士がぶつかる音が木霊した。

「「倒幕」は確かに望んでいる。だが私は「国を壊すこと」は望んでなどいない…」

感情の消えた声に、思わずゾツとするものを感じたが河上は片手で握っていた刀にもう片方の手を添えてガツと力を込める。力任せに押せば、僅かに紫苑の体がよろめいた。

「国を壊す事は望んでいない…。それは、かつての同胞がこの国で生きていくからでござるか？それとも…」

白夜叉が生きているかもしれないからか？

河上の言葉に、一気に紫苑の頭に血が上る。凄まじい殺気が河上に叩き付けられるが、それでも河上は僅かなサングラスの隙間から紫苑を冷たい目で見下していた。

「そんな下らぬ理由のために晋助の足を引っ張るといっているのであれば、この独奏はこじで幕引きでいじめる」

スツと刀を高々と掲げ紫苑に向けて振り下ろす。

(紫苑は体勢を崩している。その体勢から、この太刀は…かわせぬ!!)

河上には確信があった。この一太刀で終わらせられるという、確信が。

しかし…

ガツンツツ…!!

響いたのは、肉や骨を切り裂く音ではなく…無機質なそれがぶつかった音。

「…貴様…ツツ…!!」

「ほう、テメエでもそんな口を利くのか…初めて知った…」

鞘を盾とし、刀で体勢を整え直した紫苑の姿がそこにあった。かなりの力で刀を振り下ろしたにも関わらず、それは女の腕一本…しかも鞘で受け止められている。とても満身創痍の女が成せる技とは思えない。

「その表情からして…私を斬ったという確信があったらしいな。だが言っただろうよ。私はそんなに…」

鞘で河上の刀を受け止めたままグツと身を屈める。闘技場で紫苑が見せたモーシオンだ。首を狙ってくる、咄嗟に万斉は刀を引き後退したが…

「甘くはねエッ!!」

首目掛けて刀を突き上げるモーシオンではなく、そのまま河上の胴を狙い真っ直ぐに刀を突いてきた。

「クツ…!!」

判断を誤ったとすぐに刀で攻撃を受けよつとするが、完全に受け切る事はできず…

「…腕1本…貰った…」

逸れた太刀筋はそのまま、河上の右手の甲から肩にかけて傷を作った。ブシュウと血飛沫が飛ぶ。

「やってくれたでござるな。侍は腕が命だというのに…」
「テメエのような輩に、侍を語って欲しくはねえなア…」

その傷は決して浅くは無かったらしく、血はボタボタと留まることなく溢れ出ていた。

「万斉、そのままだとテメエ…失血死だぜエ？」

ニヤリと笑った紫苑の表情。

それが…

『オメエの腕、気に入った。今日からオメエは鬼兵隊の一員だ…』

紫苑の兄である晋助のそれと重なる。

(流石は兄妹きょうだいでござるな)

万斉もニヤリと口角を吊り上げながら立ち上がる。相変わらず出血は酷かったが、まだ河上にはもう1つの切り札がある。それは、河上が絶対の自信を持つ切り札だ。

「確かに腕はもう使い物にならんでござる。だが…拙者にもまだ切り札はあるでござるよ」

スツと背中に背負っていた三味線を持ち、河上が構えた。突然の不可思議な行動に、紫苑もぐら付く足を叱咤して刀を構える。

(何だ…？三味線なんぞ持ち出して、奴は何をしようとしている…？)

一瞬…河上の姿が目の前から消えた。だがすぐに…

ブブンッ…

耳元で聞こえた三味線の音で、すぐ隣にまで河上が迫っている事に気付く。

「オメエ、何の真似だ!!馬鹿にしてんのか…!!」

わざと音を出し、まるで自分の居場所を教えているかのようなその行動。理解ができないと紫苑は吐き捨て、隣にいるであろう河上に向けて刀を薙ごうとした。だが…

「な…ッ!?」

紫苑の体はぴくりとも動かない。出血しすぎたせいで、とうとう身体が動かなくなったのではないかと一瞬思ったが、そうではない事は明らかだった。まるで金縛りにでもあったかのように、指一本動かす事が出来ないのだ。

「紫苑…確かに剣では拙者の負けでござる。満身創痍の身でありながら、拙者にこれほどの傷を負わせたことは流石。いや…もしもそのような満身創痍な状態でなければ、あるいは拙者の命はここで尽きていたやもしれぬ。素直に負けを認めよう…」

横にいたはずの河上だったが、声は背後から聞こえる。僅かな時間で移動した事は明白だった。だが、紫苑は自分の身体に何が起きているのか…それが分からず混乱していた。

「テメエ、何をした…ッ!?私の身体に何を…!?」

「別に知る必要も無かるう。お主には、もはや死の道しか残されておらぬのだから。しかし…そうでござるな、このまま仕舞いというのもつまらぬ。結果次第では…そのまま見逃してやっても構わぬが?」
「なっ…!?」

声で分かった。河上が今、笑った事に。

それが無性に腹立たしく、力任せに腕を動かそうと試みた。

その刹那。

「いつ…!？」

手首に鋭い痛みが走る。視線を向ければ、痛みの走った手首に赤い筋が出来ており、そこからパタパタと鮮血が流れ落ちていた。

(なんだ…? 万斉は何もしていない。今もなお、私の背後にいる。そこから動いていない。気配で分かる。じゃあ何で…私の手首は傷付いた!?)

思考が追いつかない。それどころか、僅かに残っている意識すら遠退きそうになっていた。

(クツ…流石に血を流しすぎた、か…? だが、ここで倒れるわけには…ッ…!!)

更に今度は足を動かす。辛うじて動いたが、やはり同じように鋭い痛みが走った。確認せずとも、先程と同じだった為結果は明白。

(何だ? 私が…動くたびに斬れる…?)

必死に現状を理解しようと頭をフル回転させている紫苑の姿を背後で見つめながら、クツクツと河上は笑った。

「理解ができぬでござるっ?」

「ッ、変な小細工を…。だが、動けば斬れる。それは分かった…」

「なるほど、それは正解でござる。が…理由が分からなければ、お主はそのまま動くことは出来ぬ。そしてその場で失血死…。もしくは…」

鋭い殺気を感じ、思わず刀を握る紫苑の手に力が入った。

「拙者が後ろから一突きにして命を絶つという演出も悪くはない…。そうは思わぬか、紫苑？」

「ハッ、馬鹿言ってんじゃねえよ。こんな小細工使いやがって…。こんなものを使う奴を侍だとは言わないんだよ!!」

「だがしかし、お主が“侍”と認めぬその存在に殺される。それは目に見えた運命でござる。さぞ無念でござるじ…」

「テメエに斬られて死ぬくらいだったら、自分で舌を嚙んで死んでやらアッ!!」

背中越しに叩き付けられる殺気にクッと河上の口角が上がる。

どんな状況に陥っても、決して諦める事は無く。

どんな絶望な状況下でも、侍としての誇りは捨てずに最期まで侍であることとするその姿。

(本当に面白い女でござるな…)

普通の人間ならば、いつそ殺してくれと願うか、鬼兵隊に戻らせてくれと懇願してくるところだ。

しかし、紫苑はそのどちらの選択肢も選ばず…

己の道を切り開くという、極めて困難な選択肢を選んだ。

(これは見物でござるな…)

構えた刀を下ろし、見苦しくもがく紫苑の背中を見つめながら…河上は静かに嘲笑った。

そんな河上の視線を感じつつも、紫苑は必死に現状を打開しようと脳みそをフル回転させる。

(冷静になれ、落ち着け。意識が遠退きそうになっているが…覚醒させる…!!)

ガツと少し強めに腕を振れば、手首のときとは比べ物にならない激痛が二の腕に走る。それにより、遠退きかけていた意識が戻った。

「無駄でいじめる。それとも、腕一本落としたいでいじめるか？」

神経を逆撫でするような河上の言葉を一切無視し、紫苑は全神経を自身の身体に集中させる。

(動けば斬れる。これはまず間違いない。3回とも同じ事が起きたんだ。動けば斬れる…。では、私の動きを制しつつ私を斬り付けているものは何だ？万斉は私の背後にいる。動いてはいないから何もしていない。ただ見ているだけだ)

そこまで考え、さっきの河上の動きが脳裏を過ぎった。

(私の横を通り過ぎた時…三味線の音が聞こえた。その直後、私の身体はこの有様。まさか、音を使った催眠術のような攻撃か？いや…この痛みは紛れも無く現実だ。それに、いくら天人の技術が特化しているとはいえ、さすがに飛躍しすぎだな。もっと身近な方法が無いかな？)

ちらりと…斬られた二の腕に視線を向ける。そこからは、パタパタと鮮血が流れていたが…ふと、妙な光景がその瞳に映る。

(血が…下に落ちずに宙を流れている…？…血を流しすぎてついに錯覚まで見えるようになったか…？いや、まさか…？)

今度は手首に視線をやる。同じように、血液が宙を流れている。いや、正確には何かを伝えて流れている。そこまで考えた時、紫苑はハッと目を見開いた。

(そんな事がありえるのか…!!いや、しかしそれ以外に考えられない…!!)

残念ながら確認する方法は無い。もしあるとすれば、首を動かし河上の方を向く事だろう。だがそれをすれば、間違いなく首を深く挟られる。

何か、確認する方法は…!?

その時、雲に翳^{かげ}っていた満月が姿を現す。月明かりが、紫苑の姿を照らし出した。

その影に映った紫苑自身の姿を見て…紫苑は確信する。

(万斉が背中に背負っていた三味線、身動きひとつ取れない身体、動けば斬り刻まれる現状…。更に、こうなる前の万斉の行動からして考えられる事は、ひとつ…!!)

紫苑の口元が弧を描く。

暫くの沈黙の間、ずっと河上は紫苑の姿を背後で見ていた。必死になって、身体が動かない原理を見出そうとしているその姿を。

しかしそれにも、そろそろ飽きてきたと…そう思い刀を構えようとした時だった。

(…紫苑を取り巻きリズムが変わったでござる…)

突然、紫苑から感じられる雰囲気が変わった。そして…

「よお、万斎…。随分と腑抜けな小細工をするじゃねエか…」

確信に満ちた声が聞こえた。

「ほう、その口ぶり…。お主の身体を捉え斬り刻むものの正体があったとしても言いたげでござるな」

「言いたげもなにも…分かったんだよ、このボケが」

ググツと紫苑が腕に力を込める。例の如く、ブシュツという音と共に肉が切れて血が噴出した。

「動けば…斬れる、身体…。動かせない、身体…!!」

更にもう片方の腕にも力を込める。同じように肉が切れ、血が溢れ出る。

「テメエが私の横を通り過ぎた時に聞こえてきた三味線の音…ッ、そして…この月明かりに映し出された…無数の糸ッ!!」

今度は右足に力を込める。いや、紫苑は全身に力を込めていた。身体のいたる所が斬れ、そこから血が噴出す姿をただ河上は眺めていた。

「答えは“三味線の弦”だ…!!」

紫苑の言葉に僅かに目を見開く河上であつたが口角を吊り上げ、パチパチと拍手をする。

「正解でござるよ、紫苑。たったそれだけの事でその答えに辿り着くとは恐れ入った。まさか、この月明かりがお主に味方をすると予想外でござったが…」

もがく紫苑を見つめ、ククツと喉を鳴らして河上は笑う。

「もはやお主は拙者の弦に囚われた状態。いわばクモの巣に掛った蝶でござる。動けば…言わずとも分かるでござるわ」

「ああつ、分かるさ…!! テメエの、小細工が…私の身体をズタズタにしていくこと、ぐらいつ…!!」

「ならば無駄なあがきはやめるでござる。そしてそのまま大人しく、拙者の刃に黙って貫かれて死を迎えるがいい…」

「ッぞっけんな…!! 私、は…こんなつ、糸イトとキに……負け、は…しないっ…!!」

しかし、紫苑がもがけばもがくほど、弦は深く肉に食い込み容赦なく決る。その度に血が噴出し、もはや紫苑の戦装束は元の色が分からないほど血に染まっていた。

「その心意気は良し。しかし逃げ出せぬのも事実。もしその弦から逃れられたあかつきには…」

紫苑…お前を見逃してやるわ…

河上の言葉に、紫苑が目を見開く。

「い、ま……何て…?」

「聞こえなかったわけではあるまい? それに、さっきも言ったでござるわ。結果次第では見逃してやる」と

「はったり…か…?」

「いいや、はったりではござらん。拙者の命にでも誓えば満足か? た

だし…あくまで“逃げられたら”の話。その弦は鉄と同じ強度ゆえ…いくらお主といえど、そう簡単に引きちぎる事はかなわん。それに無理に動けば…もはや言うまでもござらん」

弦に絡め取られた四肢と胴体、そして首元。辛うじて首だけは無傷だったが、その他はいたるところに裂傷ができており、紫苑の立っている場所には赤いシミが出来ていた。

この系地獄からは決して抜け出せない。

その絶対の自信が河上にはあったのだ。

「ククッ…、万斉…、その言葉…後悔、すんなよッ…!!」

しかし、紫苑は力を緩めるどころか更に全身に力を込める。ついに首にまで弦が食い込み、血が噴出した。

「…血を流しすぎて、まともな考えも出せぬようになってしまったでござるか？」

何をしても無駄だと笑う河上に、同じように紫苑も笑う。しかしその笑みは穏やかで…とても、戦いに身を投じている者が見せる笑みとは思えない。僅かに見えたその笑みに…河上は訝しげに問う。

「何故、笑う？ついに血を流しすぎておかしくなったでござるか？」

河上の問いに、紫苑は笑いながら…

「オメエには分かるめえよ…。例え鉄の系だろうと、何だろうと…!!」

更に力を込める。弦が肉に食い込み、出血量も更に酷くなる。それ

に加えて、晋助から受けた脇腹の傷からもボタボタと容赦なく血が流れ落ちていた。

それでも、紫苑は力を緩めない。それどころか、更に力を込める。

「私の…この、想いは…」

『ね、銀時？一緒に暮らすときはさ、どこか静かな場所がいいな』

『そうさなあ、萩で静かに暮らすか？』

『うんうん、それがいいかなあ!! 私達の故郷だもんね』

「自由になりたいと、願う…この、想いは…ッ…」

『ねー、何でコタローは兄さん達にツラって呼ばれてるの？』

『知るか!!俺が聞きたいくらいだ!!』

『そりゃ、おまんがツラじゃからじゃ!!のう、銀時、晋助!!』

『そうそう、辰馬の言う通り!!』

『だからいい加減に、その長つたらしくて鬱陶しい髪型からすっきりした髪型に変えろや…』

『貴様ら…そんなに死にたいかッ!!俺はツラじゃない、桂だ!!そしてこれは、地毛だアアアッ!!!』

『わーっ!!狂乱の貴公子が怒った!!ちょっと、マジギレしてるよ!!どつすんの!?!?』

『逃げるぜよっ!!』

『ラジャーッ
了解!!』

『ツラも意外と短気だなッ、ククッ…』

『貴様らアアア!!!だから、ツラじゃない桂だアアア!!!』

『うわあああっ!?!私も巻き添え!?!何でエエエ!!?!?』

ブチンッ!!

「なっ!？」

紫苑を絡め取っていた、鉄の強度を誇る弦の1本が音を立てて切れた。否、1本だけではない…

ブチブチッ…!!

次々と、弦が音を立てて切れていく。血に染まった弦が1本、また1本と地面に落ちていった。

そして…

「例え、鉄の糸であろうと…、何であろうと…ッ…、私を…止められはしないッ!!」

ブツン!!

紫苑を捕らえていた弦の全てが切れ落ちた。ただ河上は呆然とその様子を見つめる事しか出来ない。信じられなかったのだ。この鉄の強度を誇る三味線の弦を、まさか刀も使えない生身の…しかも力任せという荒業（あきわざ）で断ち切ってしまうという事が。

「ゲッ…!!」

完全に糸からの呪縛が解け、紫苑はその場に倒れ込む。だがすぐに、刀を杖代わりにして立ち上がった。河上には背を向けたまま、ただ港の出口のみを見つめている。

「万斉…約束は、きっちり守ってもらおうぜエ…?」

僅かに振り向いた紫苑の表情。それは勝ち誇った笑み。

「ククッ…流石に二味線の弦まで敗れたとあっては、拙者の完敗でござるよ。約束通り見逃そう…。何処へでも好きなところへ行くがい…」

しかし、と…河上はその背中に告げる。

「何処に行こうとも、鬼兵隊は常にお主を狙うであろう。そしてまた、幕府もお主を鬼兵隊副官として命を狙う。どちらにしても、お主は容易く生きてはいけぬということだ…」

河上の言葉を受け紫苑は歩みを止める。天を仰ぎ、大きく深呼吸をして今度は真っ直ぐと河上の方に顔を向けた。

「確かに…鬼兵隊からも幕府からも追われる身となるだろう。だが、それでも私は…」

必ず、生き抜いてみせる。

強い眼差し。

傷付きボロボロの身体でありながら、いつだって絶望する事も諦めることも無く、ただその瞳は前だけを見据えていた。

「…惜しいじゃないかな…」

「何が？」

「今更ながら…もう少し、お主の奏であるリズムを聞いてみたいと思っただけじゃない。独唱ではなく、兄妹揃っての二重唱を…」

「…残念、もうそれも叶わないわ。だって、私と兄さんの心は…」

もう、離れてしまったから…

それだけを残し、紫苑はふらつく足取りで河上の前から姿を消した。

先程までの喧騒が嘘のように静まり返る。

そんな中、紫苑の消えていった闇を見つめながら河上はポツリと呟いた。

「晋助の心が紫苑から離れた？…そんなわけがなかるう。いつだって、晋助は…」

『よう、万斉…』

『何でござるか、晋助？』

『紫苑に…銀時のことを伝えなかった事は…間違いだっただと思っ？』

『何故、そのような事を問う？お主らしくもない』

『さア、なんでだろうなア？ただ…』

『ただ？』

『アイツの…紫苑の心はどんどんこの鬼兵隊から離れていく。俺ア、アイツを鬼兵隊の副官に戻す事でアイツを護ったつもりでいたが……』

『……晋助？』

『いや、何でもねエ。聞かなかった事にしてくれや…』

「誰よりも、お主のことを考えていたでござるよ。本当に兄妹でござるな。不器用なところなどそっくりでござるぬ…」

あるいは無理矢理にでも連れ帰り、再び鬼兵隊の副官に就かせることも出来ただろう。しかし、河上がそうしなかったのは、それを晋助が望んでいないと分かっていたからだ。

「さて、紫苑よ…。再び独りとなったお主が、今度はどのような人生メロデーを奏でるのか…拙者も興味が湧いたでござる。次、会う事があったらその時にでも聞かせてもらいたいものだ…」

口元に弧を描きながら、河上はくるりと踵かかとを返してその場を去る。
戻る場所は鬼兵隊本陣。

「さて…。晋助に何と言いつてやるか…そこまでは考えていなかったでいけん…」

ポリポリと頭を掻きながら、河上もまた闇に消えていった。

ようやく手に入れた自由。

だが…

「ハアッ…ハア…ッ…!!」

晋助との戦い、更には河上との戦いで傷付いた身体はとっくに限界を迎えていた。

しかし、そんなときに限って…

「おい、あの女…高杉一派の…!!」

「鬼兵隊の副官か!？」

「だが…ククッ、随分と弱ってるみたいだなア…!!」

「こりゃ、絶好の機会だぜ?」

高杉一派を良く思わない浪人達が紫苑を狙う。ふらつく足取りの

紫苑をグルリと囲むように浪人達が立ちふさがり、紫苑の行く手を阻んだ。

「どけっ…、私は…先を急いでいる…!!」

「まあ、そんなに急がずともすぐに行かせてやるさ…あの世という終着点になっ!!」

一斉に切りかかってきた浪人達を一瞥し、紫苑は小さく舌打ちをした。

「面倒だ…、そして…目障りだッ!!」

一気に気迫と殺気を叩き付け、そして刀を抜く。一太刀で数人が吹っ飛び、殺気だけで何人かは気絶した。

「ヒイツ!? な、何だこの女…!!」

「ば、化け物だアアア!!」

結局、紫苑をあの世に送ると意気込んでいた浪人達の殆どは逃げ出し、紫苑の前から姿を消す。

「命が惜しくば…もう二度と、私の前に現れるな…」

倒れた浪人達を一瞥し、紫苑はその場を後にした。暫くして目覚めた浪人達は不思議そうに首を傾げる。確かに斬られた筈なのにと。だが体のいたるところから、打たれたような鈍い激痛が走る。そう、確かに斬られたのだ…刀の峰で。

「おいおい、まさかあの女…!!」

「峰打ち…!!」

「峰打ちで、俺達はこのザマなのか…!!」

自分達はとてつもなく恐ろしい相手に喧嘩を吹っ掛けてしまったのだと、血の気が失せた。そして逃げるように、その場を後にする。

その後も、似たような事が何度か起こり、その度に紫苑は刀を抜いて峰打ちで浪人達をねじ伏せた。

(別に…斬る必要はない。たかが浪人だ…。それに…)

ふと脳裏を過ぎったのは、ニヒルな笑みを浮かべる晋助の姿。

(恐らく鬼兵隊は、恨まれて当然の事をしてきたのだろう…)

ならば傷付いた鬼兵隊の副官を襲ってくるのも道理というものと、自嘲の笑みを浮かべながらひたすら紫苑は足を進めた。

別に目的地などは無い。ただ…

自由に過ごせるならば、どこでもよかった。

しかし、河上も言った通り…必ず鬼兵隊は紫苑を見つけ出そうとするだろう。

何処に居ても、命の保証などない。

(どうせ…命の保証がない、と…いつのであればっ…!!)

朦朧とする意識の中、電柱の看板を頼りにその場所を目指した。

紫苑が目指した場所、それは…

(フッフッ、そう言えば兄さんに……売り言葉に買い言葉で、真選組に捕まって、鬼兵隊について洗いざらい吐く)なんて言っただけ……?)

攘夷志士達にとっての天敵である、武装警察・真選組の屯所。

「目的地、に……とっ、ちやく……………」

そこで、紫苑の身体はついに限界を迎える。否、限界などとうの昔に超えていた。それを、紫苑は気力だけで保っていたのだ。ある意味、奇跡にも近かった。ドサリと音を立ててその身体が地面に崩れ落ちる。じわじわと紫苑の周りには血溜まりが出来た。脇腹から、首元から、身体のいたるところから出血している。その肌は、血の気が通っているのか疑わしくなるほど蒼白だった。

次第に薄れゆく意識の中で……

「土方さん、屯所の前に誰か寝てやすぜ?」

「大方、酔っ払いだろう。ったく……」

「屯所の前で寝こけるたア、大した奴でさア。しかも見てみなせエ、腰に刀を差してやすぜイ?」

「チツ、真選組も舐められたもんだ……」

「それは…土方さんのせいですねイ」

「んでそうなる!!」

声が聞こえた。

「土方さん、いっつア……!!」

「…………ツ…………!!総悟、至急救護班を叩き起こせ!!おい、しっかりしろ!!俺の声が聞こえるか!?おい!!」

それは…

「クソッ、意識がはつきりしてねえな。だが安心しろ!! 絶対に死なせはしねえ!!」

天敵である真選組副長の声であり…

(……フフッ……鬼の副長、なんて言われている割に……随分と優しい人じゃない……)

命の恩人となる相手の声だった。

思えば…あの時は真選組に処刑される覚悟で屯所まで身体を引き摺っていった。

それがどういっわけか生かされ、そしてあることが憎むべき幕府の犬である真選組に身を投じる事となった。

幕府を憎む紫苑にしてみれば、真選組とて憎むべき相手であった。

だが…命の恩人で、しかも居場所をも与えてくれる者達を心の底から憎む事など出来るはずも無かった。

悩んでいた紫苑が心を決めた瞬間、それは…

「俺達も別に幕府のために真選組なんざやってるわけじゃねえんだ。ただ俺は…頭かしらである近藤さんのためにココに居る。あの人は、一度は奪われた刀を再び俺達に与えてくれた。どんなに感謝しても、し足りない程に恩を感じている。だから、俺達は俺達の大将である近藤さんを護るためにこの刀を抜く。もしも幕府が近藤さんに刃を向けるつてんなら……俺達は迷うことなく、幕府を叩っ斬るぜ……?」

土方の真つ直ぐな信念を聞いた時だった。

確かに彼らは幕府側の人間ではある。だが、真選組は幕府という柵しがらみに捕らわれることなく、それぞれが“侍”としての魂を心に宿している。

幕府を護るためではなく、近藤 勲という自分達の頭かしらを護るために刀を抜いている。

その姿が……

『いいか!!俺達は絶対に生きて攘夷戦争を切り抜ける!!そして、必ず4人でこの萩の地に戻る!!』

『うん、先生のために…江戸のために私達は戦う!!』

『先生が教えて下さった“護る剣”…。今こそその剣を振るう時…!!』

『ああ、絶対に俺達は生きて戻るぞ。そして、先生を殺した憎き仇を…叩つ斬つてやらア…!!』

4人でこの剣に誓おう!!俺達私達は、この国を護るために戦うと!!

攘夷戦争に参加する前の自分達の姿によく似ていた。

国を護りたい、大切な人を護りたい。

それぞれの信念の元、全員が同じ思いで刀を掲げた。

結果、幕府の裏切りという形で想いは儚く散ってしまったが…

「…元攘夷志士…しかも、鬼兵隊の副官だった私でも…また、真選組

で護るために刀を振るう事は出来るでしょうか…?」

「それはお前の気持ち次第だ。近藤さんはお前の入隊を望んでいる。俺も、近藤さんの言う事に異論は無い。お前自身から嘘偽りの無い真実を全て聞いたからな。…後は、お前次第だ」

護れるものがあるなら、護りたい。

この刀でまだ何か護れるなら…

…
晋助あにを変えられなかった罪滅ぼしになるかは分からないが、それでも

「土方副長、どうか私をこの真選組に置いて下さい。私は、私の護るべきものを護りたいのです」

「お前の護りたいものとは…何だ？」

「私の護りたいものは…」

『紫苑、今日は先生が道場を自由に使っていていいってさ!!一緒に稽古しようぜ!!』

『うん!!銀時、手加減はなしだよ?』

『当たり前だ、バカヤローツ!!』

「愛する者が住まう…この江戸です」

貴方が生きていかもしれないこの江戸の街を…護りたい。

それが、紫苑の出した答えだった。

それから数年の年が流れ、平穏…とまではいかずとも、真選組でも有意義な毎日を過ごした。

自然に笑える自分が真選組にいた。

しかし…

銀時のことを、必死に探している自分がいた。

桂という名を聞く度に、複雑な心境になる自分がいた。

晋助と鬼兵隊の名を聞く度に、胸が締め付けられるような思いになる自分がいた。

坂本が宇宙を飛び回りながら別の方法で国を正そうとしている姿を、どこか羨ましく感じる自分がいた。

身体は真選組にあっても、本当の家族のように思っている。

いつも…紫苑の心は別のところにあった。

心だけはいつだって…かつての仲間の元にあった。

折角…会えたのに、ごめんね銀時…？

急に倒れてしまったから、吃驚したわよね…？

ゆっくりと紫苑が目を開けると、目に映ったのは屯所にある見慣れた自室の天井ではなく真っ白な天井。

そこが病院の集中治療室だと気付くまでに時間など掛かりはしなかった。

（そっか、私…走ってしまっただけ…。それにしても、随分とまた懐か

しい夢を見たわね…)

銀時の姿を確認した時、止める土方と沖田の声が聞こえたが…それでも身体は止まらなかった。

銀時が生きていると分かって、目の前にいると分かって…感情が抑えられなかったのだ。

銀時は今、どうしているのだろうか？心配しているのだろうか？

(ああ、どうしてかしら？…今にも泣きそうな顔をして凄く心配している姿が目に見えかぶわ…)

もう随分会っていないのに、その仕草や表情が手に取るように分かる。

そんな事をぼんやりとした意識の中で考えていたら…

ダンッ…!!!!

壁を叩きつけるような激しい音が聞こえた。

(何かしら…?)

音がした方にゆっくりと視線をめぐらせる。そこには、ガラス張りになった壁に背を預けている銀時の姿があった。

(銀時…)

その名を呼びたいのに、思うように声が出ない。やっと呼べるのに、やっと届くのに…。

今度は病がそれを邪魔する。このたった一枚の壁が、銀時と自分を隔っている。

もっと名前を呼びたい、もっとその温もりを確かめたい。

なのに…それが許されない。

紫苑の瞳から涙が零れ落ちた。

やっと、やっと会えたのに…

「何が攘夷戦争の英雄だ…何が白夜叉だ…!! 結局、俺ア…」

ああ、どっしして…

「最後の最後まで…何も護れなかったじゃねえか…ッ…!!」

私は、貴方を悲しませる事しか出来ないのだろうか？

「ごめんなさい、ごめんなさい…」。

(貴方が悪いわけではない…。銀時、貴方は何も悪くないの…。ただ、私が弱かっただけ。だから、そんなに自分を責めないで？そんなに苦しまないで?)

ぼんやりとする意識の中で、必死に手を伸ばそうと力を込める。だが、その手に力は入らない。恐らくは薬のせいだろう。

(大丈夫、私は大丈夫だから…)

だから…、ねえ、銀時…？

「お、ん…うれ…」

笑って？

その優しい…夕焼けのような紅い瞳で、また私に笑いかけて？

「…銀、時…」

ねえ、あの時の約束…覚えてる？

みんなで一緒に、萩に行こう？

「銀…時…」

みんなで一緒に、花見をしよう？

「銀時…ッ…!!」

きっと、松陽先生も待っているわ。

だから…

「もう、桜…満開、だから…ね…っ…?」

みんなで、帰ろう…萩に…

僅かに聞こえた紫苑の声に、最初に気付いたのは沖田だった。驚いた表情で自分を見つめている沖田に、紫苑は力なく笑った。そして口を動かす。

「私は、大丈夫、よ…」

声は恐らく聞こえていないだろう。しかし口の動きで分かっただらしい沖田は、慌てて近藤と土方の肩を叩いていた。安堵したように息を吐きながら立ち上がり突然座り込んだ土方と、ガラスにへばり付き滝のように涙を流している近藤、そんな近藤を呆れながら見つめつつも、紫苑の無事に同じように安堵している沖田。

そして…土方に支えられるようにして立たされた、銀時。

目が合った。

(ああ…ごめんなさい、私が泣かせてしまったのね…)

その瞳は、遠目から見ても分かるほど濡れていた。

だから、紫苑は…

「銀時…私は、大丈夫よ…」

その視線の先に居る、最愛の人に向けてフワリと笑う。

目を丸くして驚く銀時だったが…

濡れた瞳を、着流しの袖でゴシゴシと拭って…

(ああ、私の良く知る銀時だ…)

昔と変わらない笑みを見せてくれた。

(今…幸せ、だ…)

攘夷戦争で独りになり、

晋助や鬼兵隊から殺されそうになりながら逃げてきて、

自分は何の為に生きているのだろうかとうと何度も考えた事があったが

…

(生きてて…良かった…)

一番見たかった笑顔を見た瞬間、

生きる事を諦めずに突き進んできた人生に、初めて誇りが持てた。

自分はこの瞬間のために生きていたのだと。

最愛の人と再び出会うために生き延びたのだと。

(もう一度、言わせて…?)

ガラス張りの向こう側に居た近藤が忙しなく走り去ったかと思うと、医者を無理矢理引っ張って戻ってきた。恐らくは紫苑の目が覚めた事を必死に伝えようとしているのだろう。

そんな中でも、銀時と紫苑…この2人だけは、まるでその空間だけ切り取られたかのように、ジッと互いを見詰め合っていた。

例えガラス越しでも、今は触れられなくても…

生きていれば、時間が経てばすぐに触れられる。

そして…

「やっと…」

「会えたね…」

この声は、いつだって届く。

銀時と紫苑。

二人の言葉は二人にだけ届き…

二人は嬉しそうに笑い合った。

【第九訓】 誰も悪くない

銀時と見知らぬ女性との一連の出来事。それは、万事屋の子供達にはどんなに考えても理解の出来ないことだった。とりあえず、大江戸病院に向かう前に下の階にいるお登勢に伝える事を伝えなければと、新八と神楽は走った。

「おや、こんな真昼間からどうしたんだい？ やつと家賃でも払う気になったかい？」

「神楽様、新八様…どうなされたのですか？ 呼吸、心拍共に酷く乱れております」

「アホノ坂田サンハ、一緒ジャナインデスカ？」

それぞれ言いたいことを言いたい放題言っているが、とりあえず要点を伝えなければと新八がお登勢の元へ駆け寄る。

「えっと、家賃はすみませんがもうちょっと待ってください…!!」

「アアンツ!? もう十分待っただろぅが!! さっさと払うもん払いな!!」

「ババア!! とりあえず、その話は後アル!! まず私達の話聞くヨロシ!! 大事な話ヨ!!」

家賃よりも大事な話があるものかと更に続けようとしたが、ふと…お登勢はあることに気付いた。それは、子供達が必死であると同時にどこか不安そうな表情をしているということ。

(こりゃ、銀時絡みで何かあったね…)

やれやれ、本当に家賃どころじゃ無さそうだね…。

小さく溜息をつきながら、煙草を吹かし新八に視線をやる。

「まあ、いいさ。とりあえず、その大事な話とやらを聞かせてもらおうじゃないかい。たま、コイツらに水を持ってきておやり。随分急いで来たみたいだからね」

「了解しました」

たまがカウンターから奥へと姿を消すと、新八と神楽は顔を見合わせる。自分達だって何かを知っているわけではない。だが、これから暫く銀時が万事屋には戻らずあの女性の元に付ききりになることは何となく分かった。だから、万事屋を暫く空けることを話そうと思っていたのだ。

「あの、僕達も何が起きたのか良く分からないんですが、実は銀さんが…」

とりあえず、自分達が見た光景をありのままお登勢に伝える。話している途中で、たまが水を持ってきてくれたので、それをありがたく頂きながら、出来る限り詳しく話した。といっても、新八達が見た真選組の女性隊士は初めて見る人だった為、それが誰なのかは分からない。故に、その女性について詳しくは話せなかったが…しかし。

「僕の勝手な思い込みかもしれませんが…あの女の人、銀さんにとって凄く大事な人なんじゃないかって思ったんです」

「そうネ。だって銀ちゃん…あの女^{ひと}見たとき泣いてたヨ。それに…いつもの銀ちゃんじゃないみたいだったアル…」

いつもグータラしていて、めんどくさがりで、久々に入る仕事も面倒だ何だと文句ばかり並べる銀時ではなく、あの時銀時が見せた表情は…それこそ、いつぞやに銀時自身が言っていた、「死んだ魚のような目だけど、いざという時は輝く」という表現にぴったりだったのだ。

「……アンタ達、その女の名前は分かるかい？」

お登勢に聞かれ、神楽と新八は顔を見合わせる。

直接の面識は無い為、名前と言われても分からない。

だが、確かに銀時は…

「『しおん』と言っていました。確かそうだったよね、神楽ちゃん？」
「そうアル」

そう呼んでいた。新八が口にした名前を聞くと、お登勢は小さく笑った。そしてフーツと紫煙を吐き出しながら小さく呟く。

「そうかい、ようやく…目的の人に会えたんだねえ、アイツも…」

「……？お登勢さんは、何か知っているんですか？」

「あの女と銀ちゃんのこと知ってるネ？」

「なあに、アタシも酔いつぶれた銀時が話しているのを聞いただけさね。あと……まあ、これも別にアンタ達なら話しても構わないだろう。銀時が何で万事屋なんて儲からない仕事を始めたか…知っているかい？」

お登勢に問われ、そういえば…と新八は思う。銀時は結構器用だ。万事屋なんて、あまり仕事が入らない職業なんかより、その無駄に高いスキルを何故他に役立てないのかと思う程に。それに、当然と言えば当然だが銀時の剣の腕は凄い。用心棒なり、何なり…もっと彼の力を役立てる仕事はいくらでもあったはずだ。

それが何故、仕事が1週間に1回来るか来ないかの超幸先不安な、しがない万事屋なんてやっているのだろうか？

そんな事、考えた事もなかったと…新八も神楽も首を横に振る。

「やっぱり、アイツは何も話しちゃいないんだねえ。過去を話したがるんないのは本当にアイツの悪い癖さ…」

「お登勢さんは知っているんですか？銀さんが、万事屋を営む理由を…？」

「ああ、知ってるよ。…一人の女の為さ…」

一人の女。そう聞いてすぐに二人の脳裏には先程の、真選組の女性隊士が思い浮かんだ。

「銀時が攘夷戦争に出ていた事は知っているね？」

「それは知ってるアル!!」

「はい、桂さんからも聞きましたし、銀さんの口からも直接聞きました…」

「じゃあ、アイツに婚約者がいたことは…まあ、その様子からじゃ知らないんだろうねえ…」

お登勢がさらりと口にした言葉に、一瞬…神楽も新八も思考回路が停止する。

今、お登勢は何と言っただろうか？

え、なんて言った？

「んやくしゃ？」

「んやくしゃ、って何だっけ？」

ああ、婚約者の事か。

夷戦争で鬼兵隊の副官だった女さ」

お登勢の言葉に、新八と神楽は首を傾げた。あの高杉 晋助に妹がいたのだろうか。しかし紅桜の一件の時は、それらしい人物は居なかった。幹部には確かに女がいたが、彼女は自分の事を「来島 また子」と名乗っていた為、違っただろう。と、そこまで考え…新八はハツと顔を上げる。

「それって、さっき銀さんが名前を呼んでいた…真選組の女性隊士!？」

そう、最後にお登勢から聞かされた高杉の妹という人物の名は…

紫…苑…?

まさに、銀時が心底驚いたように紡いでいた名前だった。

「その紫苑という名の女と銀時は、互いに互いを大切に想い合っていた仲らしい。それに、兄や仲間ともそれは仲が良かったそう。だが、攘夷戦争の過酷さは…アンタ達も何となくは分かるだろう?」

問われ、新八も神楽もコクリと頷く。時々…本当に時々ではあるが、攘夷戦争関連の依頼が万事屋に来ることがある。その時の内容を聞く限りでは、本当に悲惨な戦争だったのだと…思わず目を背けたいくなるような内容だったりもする。それに、銀時自身が一度だけ…ポツリと漏らした事があった。

『攘夷戦争終盤辺りは、そりゃもう悲惨なものだったわ。ろくに飯にもありつけねえ、けど天人は次々に襲い掛かってくる。あのツラが、天人に殺されるくらいなら潔く腹を切って、せめて最期ぐらいは武士らしく死のう』と言ったほどになあ…』

その時の銀時は、何とも悲しげな表情をしていた。故に、それ以上を聞くことは出来なかったのだ。それでも、銀時が攘夷戦争関連の依頼を断る事は決してなかった。いや、今思えば…その依頼に縋り付いて何かを探していたようにすら感じる。

「お登勢さん…、その…銀さん達は攘夷戦争で…何かあったんですか？」

何故、桂はテロリストなんかになってしまったのか？何か、高杉と袂を別つ程の出来事があったのだろうか？

そして何より、何故今まで…紫苑という、将来を約束した人を放っていたのか。

否、あの様子から放っていたというよりも…会いたくても会えなかったという方が正しいのではないだろうか？

暫くの沈黙の後、お登勢が静かに口を開く。

「攘夷戦争で戦っている最中…、銀時達と紫苑ははぐれちまったんだそうな。かといって、たった1人のためにずっと同じ場所に留まり続けることはある意味、大勢の仲間を危険に晒すことさね…」

「まさか、見捨てたアルか!? 婚約者を見捨てたアルか!？」

神楽が凄い勢いでお登勢に掴みかかりそうになるのを、何とか新八が押さえる。しかし、新八も心中は神楽と同じだった。

大事な人…ましてや婚約まで決まっていた人を見捨てるなんて、どうかしてる…。

大事なものを護ると銀時はいつも言っていた。何度も何度も、自分

達は銀時に護ってもらった。

しかし…

本当に護るべき人を、何故過酷な戦場に見捨て来たのか…？

新八が押さえたことにより、神楽もようやく黙る。新八も黙ったまま。しかし、その瞳からは明らかに…戸惑いと怒りが垣間見えた。そんな2人を見て、小さく溜息を吐きながらお登勢は続ける。

「アイツは…銀時はね、ずっと後悔していたさ。何故、自分だけでも戦場に残って探さなかったのかと。何故…紫苑が敵を引き付けると言って部下を引き連れて離れて行った時に、自分も一緒に行かなかったのか…あるいはそれを止めなかったのかと。けどね、戦場は遊び場じゃないのさ。常に命のやり取りが行われている場所さね。アンタ達が思っているような綺麗事が通用するような場所じゃないのさ」

「綺麗事、ですか？大事な人を見捨てる事が正しくて…その人を探したいと思っただけでその場に留まる事が綺麗事ですか？大事な人を…婚約者を戦場に1人残すなんて…ツ…!!銀さんがそんな酷い事をするなんてツ…!!」

「そんなのおかしいヨ!!だって銀ちゃん、その女の事好きだったんでシヨ？大事だったんでシヨ？だったら何で、何で…1人で置いてきたアルか!!そんなの酷すぎるアル!!銀ちゃん、見損なつたネ!!」

新八と神楽の言葉に、お登勢が鋭い視線を向けた。そのあまりの凄みに思わず2人がビクツと肩を弾ませる。

「…アンタ達、本気でそんな事を言ってるのかい？ずっと銀時の傍に居たっつのに、本気でアイツが何も思わず苦しまず…大事な人を戦場に置き去りにしたと思っただけなのかいッ!」

いつもと違う、お登勢の怒鳴り声。家賃を取り立てるとき時とは違う、怒りを露にした声だ。只ならぬ雰囲気、キャサリンもたまも口を挟めず…ただお登勢達のことを見ていることしか出来なかった。

「…なんでアイツが万事屋なんて儲からない仕事を始めたか…。それは…。」

短くなつた煙草を揉み消しながら、お登勢は呟く。

「高杉 紫苑を探す為さ…」

「攘夷戦争で見捨てた人を、ですか？」

若干、棘のある新八の言葉。しかしそれを気にした様子も無く、お登勢は続ける。

「そうさ。生きてるのか、死んでるのかも分からない。けど僅かでも攘夷戦争に参加していた人間の情報が入れれば、例えどんなに危険な仕事でもアイツは木刀一本携えて、形振り構わず飛び出して行ったさ。何度か命を落としかけた事もあったねえ…。それでもアイツは諦めなかつたよ。空振りして帰ってくるたびに、煽るように酒を飲んで、溺れて…いつも涙を流し紫苑の名前を口にしながら謝っていたさ。そして決まって言っていたよ。『もし、アイツが死んでたら…アイツを殺したのは攘夷戦争時の俺だ』ってねえ…。紫苑とはぐれた当日は、紫苑の兄と銀時は…それはもう死に物狂いで探したそうさね。それを止めたのが、桂さんともう1人の坂本っていう男だったそうだよ。最後まで見捨てる事は出来ない譲らなかつた銀時達を、無理矢理説得して先へと進ませたのは桂さん達だったと…本人がそう話していたさ。桂さんもまた後悔してるんだらうねえ…。銀時が今でも苦しんでいる姿を見て…。アンタ達に、そんな銀時や桂さんの気持ち分かるってのかい？あんなに強い銀時が、涙を流しながら謝る程後悔しているってのに、それでもアンタ達は銀時が“酷い人間”だと思

うのかいッ!？」

お登勢の話をも黙って聞いていた神楽と新八は、その言葉に胸が締め付けられるような思いがした。

自分達は…一瞬とはいえ、何て酷いことを思ってしまったのだろうか。

あの銀時が…、何だかんだ言いながらも自分達の事を家族のように思ってくれている銀時が。

最も大切な人を、何も感じずに見捨てるはずが無い事など少し考えれば分かるはずなのに。

なのに…何故、“何て酷い人だ”と…思ってしまったのだろうか。

「……戦争というのはね、たった1人の行動が他の大勢の仲間の命を左右するのさ。1人のために仲間全員が死ぬか、1人を犠牲にして大義を成し遂げる為に先に進むか。……本当に、究極の選択さね……」

けどね、とお登勢は続ける。

「どちらを選択したとしても、最終的に残るのは後悔という最も苦しいものさ。ましてや、1人の仲間と沢山の仲間の命を天秤にかけるんだ。そりゃ、悩むだろうし苦しむだろうねえ。だからこそ、銀時はいつだって大切なものを護ることに強くこだわっているのさ。決して見捨てることなく、最後まで己の士道^ルを貫き通す。その護ることの大切さと難しさを、くしくも惚れた女に教わったところさね……」

ちらりとお登勢が子供達に視線を向ければ、神楽は肩を震わせて泣いており、そんな神楽の頭を撫でながら…新八も何とも言えない表情

をしていた。

「誰も悪くなんかないのさ。銀時も、桂さんも、高杉って男も、坂本って男も、もちろん紫苑という女も。それぞれがそれぞれの感じたままに動き、そして己の魂に従ったまでさ。もし、何が悪いのか…それを決めるとすれば…そうさねえ…」攘夷戦争「そのものだろうさ。こんな馬鹿な喧嘩せんかくさえないけりゃあ…」

「…きつと、桂さん達はずっと仲の良い幼馴染であり続ける事が出来た…」

「そして銀ちゃんはッ…好きな人とずっと一緒に居れたネ…ッ…」

そう…攘夷戦争関連の依頼が来た時に、銀時が縋るような思いで何かを探していたように感じたのは確かに間違いではなかったのだ。その依頼から、紫苑という存在が見つからないか…それを必死に探していたのだ。

それを思うと、また…胸が締め付けられるような思いがした。

「銀さんは…一体、どんな思いで…愛した人をその場に置いてきたんでしょうか…ッ…」

ポツリと呟いた新八の言葉。しかし…その答えを、誰も持ち合わせなどいない。

もし、その問いに答えることが出来る人物がいるとすれば、銀時かもしくは…

「……銀時は、紫苑を戦地に残すぐらいなら自分も死ぬと……。だから、何があっても紫苑は絶対に自分が護ると…そう、常に言っておった…。正直、紫苑とはぐれた後の銀時と高杉は見ていて辛かった。当時の銀時と高杉の悲痛な叫びが今でも忘れられんよ。あの時の、俺達の

判断は正しかったと思っただけだ……今でも思い出すたびに、そして僅かな情報を頼りにして、銀時が紫苑の手がかりを死に物狂いで探している姿をみるたびに……もっと別の方法があったのではと後悔しない日は無い……」

その戦場で共に戦った仲間だろう。

突然聞こえてきた声に、子供達はバツと顔を上げて入り口を凝視する。そこには見知った指名手配犯で、そして銀時の友である桂の姿があった。

「桂さん……!!」

「ツラァ……ッ……!!」

悲しげに表情を歪める2人に、これはまた何事かと……そして何故、紫苑の名が今この場で出ているのかと疑問に思いつつ、「失礼」とお登勢に断りを入れて店内へと入った。

「どうしたんだい？まだ店は開けちゃいないよ？」

「いや、銀時の元に来たのですが……不在だったのでそのまま帰ろうとしたら……」

「なるほど、コイツらの声がココから聞こえてきたから顔を出したってことだね？」

「そんなと……」

苦笑しながら神楽の隣に座ると、思わず桂はギョツとする。神楽が泣いていたからだ。いや、神楽だけではない。新八も……何とも形容しがたい、辛そうな表情をしている。

「お前達、何かあったのか？というか、銀時はどうした？それに、何故……紫苑の話など……？」

紫苑という名前を出した途端、新八までもが泣き出してしまったため、桂は何事かと困り果てる。助けを求めるようにお登勢に視線を向ければ、煙草に火を点けながら、子供達から聞いた話を同じように桂にも話した。

すべての話をお登勢から聞き、なるほど…と腕を組む。

「紫苑は…無事だったか…」

「おや、随分と冷静だね。もしかしてアンタ、紫苑という女が生きていた事を知っていたんじゃないのかい？」

お登勢の言葉に子供達が「えっ!？」と顔を上げて桂を凝視する。お登勢からの問いに、小さく嘆息すると静かに口を開いた。

「攘夷戦争の時、紫苑は…俺達のいた本隊と離れた後、音信不通となりました。しかし…天人達を殲滅している途中、妙な噂を聞くようになったのです」

「噂、ですか？」

「ふむ。」「口」に居る皆、銀時がかつて「白夜叉」と呼ばれていたことは知っておるさ…」

その問いに、一同は首を縦に振る。ただ、たまだけは分からなかったのか首を傾げていたが、「また後でちゃんと話すよ」とお登勢が言う。

「それと同じように…もう1つの名が、天人達の間で恐れられるようになった。もっとも、こちらは白夜叉ほど露見しなかった為、殆どの者が知らぬが…」

「その名前って何ネ…？」

「…紫の髪を振り乱し、鬼のように強き者あり。その瞳に映るは、天人

への怨念。その名は“紫怨の鬼”：天人を食う鬼なり…”。白夜叉同様、天人達の間で当時噂されていた謳い文句だ」

「“紫怨の鬼”、ですか…」

「銀ちゃんの好きな人と同じ名前ネ!!」

「いや、リーダーの言う通りなのだが、漢字が違うのだ」

懐から紙とペンを出し、“高杉 紫苑”と流暢な文字でその名を綴る。

「これが、彼女の名前だ。そして…」

その隣に、今度は“紫怨の鬼”と綴った。

「こちらが、天人達の間で広まった誰かの二つ名だ」

「なるほど、怨念の怨の字を取っているんですね…」

「恐らく。…紫の髪など当時は、銀時の銀髪と同じくらい珍しかったからな。それこそ、高杉と紫苑ぐらいのものだった。だから、俺達はこの“紫怨の鬼”と紫苑は同一人物ではないかという結論に達したのだ…」

しかし、そこには何の確証も無く…結局それが紫苑本人なのかどうかも分からないまま、攘夷戦争は終結。そして現在に至るという話だった。

「だが攘夷戦争終結後、今度は攘夷志士達の間で妙な噂が広がってな…」

「今度はどんな噂だい？」

「丁度、高杉の鬼兵隊が復活したという噂が広がった頃と同じ時期でした。鬼兵隊に、女の副官がいるという噂が出たんです」

「そ、それって…!!」

「ああ、俺ももしや紫苑では？と思った。高杉……、晋助と紫苑は

兄妹だ。そして紫苑は元々、攘夷戦争時の鬼兵隊副官だった。そのポジションに紫苑が居てもなんらおかしくは無い…。晋助も紫苑のことを大層大事にしておったからな。鬼兵隊副官の席は、紫苑が抜けた後も空席のままだった…」

「それは、つまり…」

紫苑を信じている。生きていると信じている。だからこそ、副官という席を他の誰にも座らせるつもりは毛頭ない。鬼兵隊副官という席は紫苑が居てこそそのもの。それが…晋助の強い思いだったのだろう。

「晋助が何を思い、そうしたのは分かん。しかし、恐らくはそういうことなのだろうと、俺は思っている」

「けど、ちょっと待ってヨ!!何で生きてるって分かってて銀ちゃんに教えてあげなかったアルか!?!」

神楽に問われ、静かに桂は目を閉じる。神楽の問いは、最もな事だ。他の誰でもない、銀時が一番知るべき事実。それを何故、銀時に教えなかったのか。

「リーダーの言う通り、何度銀時にこの事を話そうと思ったか。だが…確証が無かった。紫苑が確かに生きているという確証、そして新たな鬼兵隊副官が紫苑であるという確証が…。確証を得てから、銀時に伝えるべきだと…そう思ったのだ。もう…あ奴が、酒に溺れて苦しむ姿など見たくは無かったからな…。だからこそ、紅桜の事件の時に探りを入れたのだ」

「…あの時…」

そう…もし本当に紫苑が鬼兵隊にいたのであれば、どこかに紫苑がいるはずだと。そう思い、桂は敵の目を盗みつつ紫苑の姿を探した。

だが…

「結局、紫苑らしき人物は見当たらなかった。しかも、鬼兵隊の構成が総督である晋助、そして幹部達という構成だった。そこに“鬼兵隊副官”というポジションは存在しなかった…」

「つまり、鬼兵隊に紫苑さんは居ないと…そう判断したんですね？」

「その通りだ…」

結局、情報は掴めず。それどころか、紫苑は鬼兵隊に居ないという悪い情報しか得る事が出来なかった。晋助と対峙した時に直接聞くことも出来たのだが…桂自身、聞くのが怖かったのだ。

紫苑など居ないと…晋助自身の口からその答えが返ってくることを、どこかで恐れていた…。

「その後も…紫苑の情報は何も入らず仕舞いだった。それでも銀時は諦めずに、攘夷戦争関連の情報を洗っていたようだ…」

そこまで言うと、複雑な表情で桂が溜息を吐く。

「まさか、真選組に身を置いていたとは…」

一体、どのような状況でそうなったのかは分からない。最初、お登勢から話を聞いたときは捕まってしまったのかと肝が冷えたが、そうではないらしく真選組の隊服を身に纏っていたという。それはつまり、真選組の一員という事だ。

「紫苑とて…幕府が憎かった事に変わりはないはずだ。それなのに何故、真選組などに身を置いているのか…」

そもそも、それを晋助が把握できていなかった事が不思議でならな

かった。今の鬼兵隊には、変人謀略家・武市や、紅い弾丸・来島、そして人斬り万斎という凄腕の幹部達がいる。幹部達の力を使えば、情報を集める事など容易い。にも関わらず、真選組に紫苑がいるということが何故分からなかったのだろうか？

「それって…逆に言えば桂さんもそうですよね？」

「む？何故そこで俺の名が出る？」

「そうアル。ツラはいつも真選組に追われてるネ。それに、ツラだって真選組に探りを入れたりしてたんでシヨ？何で分からなかったアルか？」

「いや、確かに俺も真選組に追われてはいるが…俺を追ってくるのはいつも、土方や沖田だ。それに、真選組に探りなど入れたことは無いぞ？そのような自殺行為…考えただけでも恐ろしい…!!」

「アンタ、本当に高杉さんと同じ攘夷志士ですか？」

「新八君!?それ、どっこういう意味かなーツ!？」

「ツラの部下と、片目野郎の部下の違いネ!!きっと片目の部下の方が優秀アル!!」

「リーダーッ!?なんでそうなるのオオオ!?俺の部下とて優秀だ!!エリザベスに何度助けられたか…!!」

「あれはペットだろうが」

「ペットじゃない、エリザベスだアアア!!!」

思いつきり脱線しつつある話は、「アンタ達、まともに話しな!!」と一つお登勢の毎度の怒声で見事に軌道修正された。改めて、桂は真剣に考える。

「…やはり、謎が多すぎる…」

「噂でも、鬼兵隊の副官になったという話があったぐらいですからね…」

「そういうのを、“火のないところに煙は立たぬ”っていうんだよ。もしかしたら、本当はそこに居たんじゃないのかい？」

「いえ、それだとしたら紅桜の時の説明がつきません…」

結局、何故紫苑が「鬼兵隊副官になった」という噂が立ったのかも、本来は恨むべきはずの真選組の元に紫苑が居たのかも、その事について晋助が何故把握していないのかも…何も分からないまま。

ただ、分かった事があるとすれば…

「それで、その…紫苑の身体は…？」

桂が聞きにくそうに問うた、それだけだった。

重い空気の中、新八が口を開く。

「最初は銀さんと抱擁していました。そしたら急に咳き込んでから倒れて、吐血…したんです…」

「それ以外のことは分からないヨ…。私達は、今から大江戸病院に行くアル。そうすればきつと何か分かるネ…!!」

新八と神楽は互いに強い眼差しで見詰め合って頷きあう。しかし、桂は複雑な表情を見せていた。

「俺もリーダーや新八君と共に紫苑の元に行きたい。紫苑の身体のこととももちろん気がかりだが…銀時の精神状態も心配だ…。だが…」

「今、アンタがホイホイそこに行つてごらん。あつという間に真選組に捕まっちゃうよ」

「やはりそう思われますか…」

「同然のことさね」

そう、桂は絶賛指名手配中の攘夷志士だ。新八達の話聞く限りでは、紫苑とそれに付き添った銀時は真選組のパトカーで病院まで運ば

れたとのこと。そして、紫苑が現在真選組の隊士だということであれば…そこには、彼女の身を案じた真選組隊士達がいる事だろう。迂闊には近づけない。

「クソッ…!! 戦友の… 幼馴染の安否すら… 俺は知る事も許されんのか…ッ…!! 銀時が苦しんでいる時に、俺は何も出来んのかッ…!!」
「桂さん…」

大切な友が苦しんでいる。

出来るものならば今すぐにでも駆けつきたい。不安であろう銀時の元で、「お前がしっかりしないでどうする」と叱咤するのは自分の役目のはずだった。しかし、それすら出来ない。病に苦しむ幼馴染に、大丈夫だと声を掛けることすら出来ない。

真選組という壁、そして攘夷志士という肩書きが…桂と幼馴染達の間には立ちはだかっているのだ。

「桂様」

その様子を、ただ黙って見ていたたまが突然桂を呼ぶ。一同の視線がたまへと集中した。

「私が新八様と神楽様に同行し、大江戸病院に行きます。そこで見た映像を記憶し、こちらに持ち帰れば見る事が可能です。直接は会えないかもしれませんが。ただ、見るだけでは桂様の苦しみが無くなることは無いかもしれませんが…」

不安そうな表情をみせるたまに、桂は苦笑する。

正直…たまの、その気遣いが嬉しかった。

「たま殿、頼んでも宜しいか？直接は会えずとも、その姿さえ見れば…無事、生きていたという確認さえ出来れば…俺はそれだけで十分だ…」

本当に会おうと思えば、捕まる事を覚悟で会いに行く事も出来る。しかし、自分が捕まってしまえば…沢山の部下達が路頭に迷ってしまう事になる。そうなれば、攘夷云々どこの話ではない。それに、「高杉一派のストッパー」という役割も居なくなってしまうっては、間違いない晋助が公言した通り…世界は破壊されてしまっだろう。

（結局、あの時も今も…俺は他の仲間や部下達を護ることしか出来なんだ…）

もっとも大切な幼馴染のために何もする事が出来ない自分が歯がゆかった。きつく握られた拳を、2つの手がしっかりと握る。

「新八君？リーダー？」

「桂さん、大丈夫です!!銀さんは僕達が何とかしますから!!」

「だから、ツラは自分を責めちゃ駄目アル。ツラが悪いわけじゃないネ。そんな辛気臭い顔してたら、また銀ちゃんに笑われるヨ!!それに…しーちゃんも言ばないネ」

「……リーダー？しーちゃんとは誰の事だ？」

「ああ、神楽ちゃんまた勝手にあだ名を付けて…。多分、紫苑さんのことだと思います」

なるほどと笑う桂の表情は、いつものそれだった。

「では、新八君、リーダー、それからたま殿…。紫苑と銀時のことを頼んだ…」

「分かりました!!」

「任せるネ!!」

「了解しました」

力強い言葉に、ふと…桂は思う。

(銀時よ、お前は本当に幸せ者だな…)

こんなにも銀時の事を心配してくれる人がいる。銀時のために必死になってくれる人がいる。

「たまが行くってんなら、アタシも行こうかね」

「才登勢サンガ行クナラ、私モ行キマス」

「何でそうなるネ!? ババア達は要らないアル!!」

「うるせえ!! 銀時がどんな腑抜けた面ツラをしてるか見てやろうじゃないかい!!」

「坂田サンガフラレル姿ヲ見レルト思ウト、楽シミデ仕方アリマセン」

「ちょ、アンタらどんだけ歪んでんだよ!? 純粹に銀さんの心配してください!! てか、銀さんフラれてませんからね!?!」

攘夷戦争の時は自分達が同じように笑い合って、ぶざけあったりしていた。

それが今では、見事にここに居る者達にそのポジションを取られてしまった。

しかし、桂はそれでよかったと…そう思っている。

(銀時…やはり今のお前に攘夷活動は似合わんな。このかぶき町で、新八君やリーダーと共に万事屋を営む…。それが、今の銀時の居場所だな…)

少し寂しいような気もする。桂は今もどこかで、銀時を自分の攘夷党に入れたいとそう思っていた。だが何度も断られ、その度に銀時は自分達とは違う方法で護るべきものを護っている姿を見てきた。

もう二度と、紫苑の時のような悲劇を繰り返さんとするかのよう

に。

(俺とて、何度もやり方を考え直すそうと思ったさ。だがな、銀時よ…)

攘夷活動から退くべきなのかと、そう思ったたびに…

『銀時!! ねえ、銀時!!』

『おいっ!! 松陽先生は…松陽先生はどこだ!?!』

『お前、一緒に居たんだろ!?! 松陽先生はどこに居んだよ!!』

あの日…

『あそこ…』

『…え…っ…?』

『松陽、先生は…あそこ…』

『…ッ…!!』

『先生ッ!! 松陽先生エッ!!』

『晋助、危険だ!!』

『兄さん、嫌だよう…!! うえっ…ヒクッ…!!』

轟々と音を立てて燃える自分達の私塾を呆然と見つめる銀時の姿が。

『……………た…』

『銀時?』

『俺…松陽先生に…護られた。俺…松陽先生を…護れなかった…。俺

の…目の前で、先生……殺された……』

そう呟き、感情の欠落した瞳からボロボロと涙を零す銀時の姿が…
脳裏を過ぎるのだ。

(やはり、俺は許せんよ。俺達からあの人を奪った幕府を。俺達に癒えぬ傷を与えた、憎き天人を…許せるはずも無い…)

師を殺された恨み、攘夷戦争であろうつことか幕府に裏切られた恨み、あまつさえ刀まで奪われた恨み。

積み重なった恨みは、桂を攘夷活動という場所に留め続ける。そしてそこに集う仲間達もまた、そんな桂を慕い志を同じくしているのだ。

(銀時…俺はお前が羨ましい。この世界を一番憎んでいるはずのお前が、こんなにも笑って過ごせる日々が…羨ましい…)

最初は、何故そんなにヘラヘラしていられるのかと…そう思った。真選組と銀時達の関係が腐れ縁という形容し難い形につながっている事に、釈然としなかった事も事実だ。

だが…それこそ、銀時のやり方なのだと。そうやって、護るべきものを護っているのだと。

破壊する事しか出来ない自分と、護ることを一番に考える銀時。

(なるほど、どんなに俺が誘おうとも…お前が俺と手を組むはずも無い…いついつか…)

もはや、銀時の居場所は攘夷活動の場所ではない。

銀時の居場所は…

「えっと、僕達だけで行くんだっいたら定春に乗って行くつもりだったけど…タクシー呼んだ方がよさそうですね」

「本当に迷惑なババア達アル!! たままでなら、ギリギリ定春の定員許容だったネ!!」

「うるせえ!! おら、とつとと行くよ!!」

「タクシーハ、私ガ呼びマスネ」

「接客モードから外出モードに切り替えます」

「この、騒がしくも笑顔の絶えない万事屋なのだ。

「……新八君、リーダー…ひとつ、俺からの頼まれごとを聞いてはもらえんか?」

「え、何ですか?」

「依頼料は酢昆布でヨロシ!!」

「いえ、無料でいいですよ」

「何でヨ!? これも立派な依頼ネ!!」

「依頼料が酢昆布っておかしいだろ!! てか、それだと僕には依頼料無いよね!!」

「駄眼鏡新八に依頼料は払わなくてヨロシ」

「コラアアアア!! 新八と書いて駄眼鏡というルビを打つな、作者アアアアア!!!!」

そんな彼らのやり取りを苦笑しながら見守っていたが、神楽には酢昆布、新八には寺門 通のニューシングルを買ったという事でとりあえず落ち着く。

「それで、その頼みごとって何ネ?」

「…銀時と紫苑に、“そろそろ桜が見頃だぞ”と…そう伝えてはくれ

んか？」

「え、それだけでいいんですか？流石の銀さんも、それだけじゃ……」

「いや、銀時も紫苑も……これだけで分かるはずだ。……約束を、忘れていなければ……」

「約束、ですか……」

「どんな約束アルか？」

子供達に問われたが、結局どのような約束だったのか桂が口を開く事はなかった。

桂は万事屋の方で新八達の帰りを待つということになり……応接間兼リビングのソファに1人座っている。暫くポーツとしていたが、それに飽きたのかゴロンとソファに寝転がって、いろいろな思考をめぐらせる。

(紫苑は今でも晋助と連絡を取っているのだろうか？もしか、紫苑の真選組入隊はスパイ行為なのか？いや、だが……それにしてもあまりにも危険すぎる。何より、鬼兵隊の副官自らが行うような事ではないだろう。それに、お登勢殿の話によれば銀時も……紫苑が真選組に居たということとは知らなかったようだ。……あんなにも真選組と関わってきた銀時が気付かなかったという事は……真選組は紫苑という存在を隠していたのか？だが、銀時が攘夷戦争で白夜叉と呼ばれていたことまでは……まだ、真選組の連中には勘付かれていない。紫苑も簡単には話したりしないだろう……。……やれやれ、本当に皆……好き放題・やりたい放題だな……)

それでも、そんな幼馴染達を心の底から憎むことなど……出来ない。

(どいかに、信じているからなのだろう……)

桂自身が、その繋がりを信じているから。

晋助とは結果的に、袂たもとを別わかってしまっただが…それでもまだ、何とか説得が出来ないものかと考えている。次に会った時は全力で叩ツ斬ると宣言はしたものの、恐らく…それは出来ないだろうと桂は薄々思っている。それは桂だけではなく銀時もそうなのではないかと思っただ。

それ程までに、銀時・桂・晋助・紫苑・坂本という5人の絆は強いのだ。

「晋助、お前とて忘れたわけではあるまい。あの約束を…。萩の…私塾の桜の木の下で花見をしようという約束を…」

こんな未来が待ち受けているとは思ひもしなかった為、あの時は笑いながらそんな約束もしたが…今や晋助と桂は指名手配犯。恐らくはそれも難しい事だろう。ましてや、紫苑はその指名手配犯を捕まえる真選組の隊士だ。

「本当に…未来とは予想のつかんものだな…」

何故、晋助の元には行かず…事もあろうに真選組の隊士になってしまったのかと嘆息する。

「紫苑、お前は知っているか？お前が攘夷戦争の時に買った2枚の着物…。その片方を、晋助が好んで着ていることを。お前を忘れまいと…その身に纏っている事を。…そして、もう1枚は……」

紫苑の忘れ形見となった、蝶柄の2枚の着物。

同じ柄で色違いの2枚の着物の行方…

一枚は兄である晋助の元に。

そして、もう一枚は…

「まあ、花見の時の楽しみにしているといいたさ…」

万事屋の開放された窓から、ひらりと桜の花びらが舞い込んでくる。

「…夜桜の下で月見酒…。頃合だぞ…。月見酒がしたいと最初に言ったのは晋助、お前だ。まさか、それを無下むげにするなどという無粋な事はしないだろうな…？」

それは、約束の時間が近づいている事を知らせているかのようだった。

【第十訓】 隣と居場所

処置室から集中治療室へと運ばれた紫苑の姿を、ただ銀時は呆然とガラス越しに見ていることしか出来なかった。

何が起きている？

何が起きた？

何故こうなった？

まさか、このまま……目を覚まさないのでは？

真っ白の部屋に横たわる紫苑の姿を見て、何度も何度も同じ言葉が銀時の脳裏を過ぎる。ただ呆然と立ち尽くしている銀時の姿を、何も言えない表情で土方と沖田は見つめていた。

そして、銀時と同じように土方と沖田も考えていた。

何故もつと早くにこの事実が分からなかったのかと。

まるで運命の悪戯とでも言うかのように、銀時達万事屋と真選組が接触する時…紫苑は決まって別の任務についていたり、もしくは体調が優れずに床に臥せていたりした。また、近藤・土方・沖田を始めとした真選組隊士の殆どが、銀時のことを名前ではなく、“万事屋”と呼んだり、“旦那”と呼んだりする。それは紫苑の前でも例外ではなく、また紫苑もそれが何という名前の人なのかとか、その容姿とかを聞いてくる事も無かった為、万事屋・坂田 銀時の情報が紫苑に流れる事は無かったのだ。また同時に、紫苑も銀時の名前は一切口にしなかった。それは恐らく、かつて攘夷戦争に関わった人間の名前は出すべき

ではないと…そう思ったのだろ。指名手配となっている桂や、自分の兄である晋助のことは、既に真選組は把握していた為、そこは偽ることなく出していた。しかし、婚約者の名前だけはいつも“あの人”や“彼”としか言わなかったのだ。近藤達も、紫苑が相手の事を考えてあえて名前を出さないのだろと思ひ、興味本位で聞くような事はしなかった。

故に、双方が紫苑の婚約者の情報を得る事が無かったのだ。

まさかこんな形で再会するなど思ってもいなかった。

そしてこんな最悪の形で再び引き裂かれるなど…誰が想像しただろうか？

本人達を始めとした誰もが、恐らくは予想できなかったに違いない。このような悲しい現実が待ち受けているなど…。

シンとした何とも言えない空気。銀時が居ればいつも騒がしくなるその場所が、やけに静かに感じる。土方も沖田も…何も言えず、ただ銀時と紫苑の事を見ていることしか出来なかった。

その何とも言えない空気を裂いたのは…

「トシ、総悟!!」

「…近藤さん…」

紫苑が倒れたと聞いて駆けつけた近藤の慌てた声だった。ふとそこに、本来であればいないはずの人物がいることに気付き首を傾げる。

「万事屋…？何故ここに…？」

胡乱気に聞く近藤。しかし、銀時はその言葉に全く反応を示さず…ただ呆然と、集中治療室に横たわる紫苑を見つめているだけだった。もう一度、銀時を呼ぼうとした近藤に土方が待ったを掛ける。

「近藤さん、ちょっと話がある。総悟、ここは任せた。何かあったら俺の携帯に連絡を入れろ」

「分かりやした。紫苑のことも旦那の事も…何かあったらすぐに連絡しやす」

いつもは素直じゃない総悟も、流石にこの状況ではそんな馬鹿げたことをしている場合ではない事ぐらい理解していた。今、最も危険なのは紫苑の容態よりも、銀時の精神状態なのだ。

「頼んだぞ」

「はいよ」

そして近藤と土方は、自販機の設置してある待合室まで移動する。

「トシ、何かあった？」

何かあったと聞かれ、何から話すべきなのかと…土方は思う。だが、ここはやはり真選組隊士である紫苑の身体について優先的に話すべきだろうと、土方は口を開いた。

「まずは紫苑の容態についてだが、いつもの発作だ。紫苑の奴、走っちゃまってな。それが原因で発作を起こしてしまったようだ。俺が付いていながら…」

「いや、トシのせいじゃないさ。だが…紫苑自身、走れば身体に負担が掛かる事は分かっている筈だ。紫苑が走らなければならぬほどの出来事が…何かあったのか？」

「思えば治療室の前に万事屋が居たことも気になる、と付け足せば「ここからがある意味本題だ」と…土方が話し始めた。

「単刀直入に言うが…近藤さんも、紫苑に婚約者がいた事は知ってんだろ？」

「ああ、確か攘夷戦争で共に戦った仲間だったとか。しかし、離れ離れになって消息どころか生死も不明と聞いていたが…それがどうかしたのか？」

「見つかったんだよ、その婚約者が」

「…おい、トシ？まさかとは思うが…!？」

「…万事屋だ…」

土方の言葉に、近藤は驚愕する。今…何と言っただろうか？目の前にいるこの戦友であり、それと同時に同志である彼は…今、何かとんでもない事を口にしなかっただろうか？しかし、土方がこんな悪い嘘など吐く筈がないことは、他の誰より一番近藤が分かりきっている。

「…こんな近くに居て…ずっと、会えなかったとは…ッ…」

「ああ、俺ア…紫苑に何て謝ればいい？万事屋と何度も何度も会って、それでいて紫苑は会いたくない奴にずっと会えず…それどころかその生死すら分からず…その身を案じていた。俺達が当たり前のように会っていた万事屋に、他の誰でもない紫苑がずっと会えなかったなんて…こんな現実を…ッ…」

土方が悔しそつに表情をゆがめながら拳を握る。もし自分が、銀時のことを一度でも名前で呼んでいれば、それで紫苑は分かっただはずだ。しかし、土方自身、万事屋と呼ぶことが定着していた為、名前で呼ぶようなことは全く無かった。否、真選組の隊士全員がそうだろう。

「トシよ…あまり自分を責めるな。…誰が悪いわけでもない。今回の事は…決して、誰が悪いわけでもないんだ…」

強いて言うならば、こんな残酷な運命を与えた神という存在だろうか…？

真選組と万事屋。

こんなにも近くにいて、本当に会いたい者同士が会えずに長い間、想い続けていた。

「そりゃあ…紫苑も走りたくなるだろうさ。ずっと…探していた大切な人とやっと会えたのだからなあ…」

そして、銀時もまたそれは同じだろうと近藤は思う。

「…万事屋の野郎…紫苑を抱きしめた時、泣いてやがった…」

「…つまり、万事屋もずっと紫苑のことを探していたという事か…」

「じゃなけりゃ、あんなに取り乱したりはしないだろう。あの様子じゃ、恐らくは万事屋も紫苑の生死については把握しきれていなかったんだろ。そりゃ、泣くほど嬉しいだろうよ…。そしてその会いたかった女が、目の前で血を吐いて倒れたら…取り乱すだろうよ…」

「万事屋の目の前で倒れたのか!？」

「万事屋の腕の中で倒れた。…幸せそうな顔をしてな…」

あれだけの吐血をしながら、しかし紫苑は嬉しそうに笑っていた。笑いながら…泣いていたのだ。そしてその口からは確かに言葉が零れた。

どっしって…？

何に対する疑問か、など…考えずとも分かる。

どうして、こんなに傍にいたのに会えなかったのだろうか？

どうして、こんな時に限って倒れてしまったのだろうか？

どうして、折角会えたのにその命は尽きようとしているのだろうか？

どうして？

たった一言の言葉なのに、その一言には色んな意味が含まれており、何気なくいつも使っているその言葉は…自分達がいつも使っている以上に、とても重い。

「…それで、万事屋は…あんな状態だったわけだな…」

「ああ、あれはまだマシな方だ。今の万事屋は正直言って、何を仕出かすか分からねえ。病院に着いてすぐ、処置室に入っていこうとする医者に掴み掛かって、「紫苑を死なせたら俺がテメエをぶっ殺す」と言いやがった。その殺気に当てられて、総悟が抜刀しそうになった。あの時の万事屋は…正直、俺でも恐ろしいと感じたぐらいだ…」

「…それで、総悟をあの場合に残してきたのか？」

「ああ、紫苑の身体はいつもの発作らしいから暫くすれば薬も抜けて目が覚めるそうだ。容態が急変することも無いというのが今回の医者の見解だな。今、一番危険なのは…精神状態の不安定な万事屋だ。1人放置してたら、何を仕出かすか分からねえ。俺じゃあすぐに頭に血が上るだろうし、万事屋も俺相手だったら形振りかまわねえ。だが、総悟と万事屋は…まあなんか得体の知れねえ仲みたいだから…殺伐とした殺り合いにはならねえだろう」

「なるほど…それで総悟も黙ってその場に残ったという事が…」

誰もが危惧している事。それは、紫苑の身体もだが…銀時の精神状態も同様なのだ。紫苑から聞かされた攘夷戦争時の話では、紫苑は本

隊と離れる直前に婚約者…つまり銀時と会話を交わしたと言っていた。皮肉にもそれは、互いに、「絶対に死ぬな」という約束であり誓いだったという。

「今の万事屋には、誰の言葉も届かねえかもな…。もし、その言葉が届くとするら、それは…」

「紫苑の言葉、あるいは攘夷戦争を共に切り抜けた仲間のみ、か…」

「ああ…。万事屋のガキ共の言葉ですら、今の万事屋には届かないかもしれないねえ」

「その場に子供達はいたのか？」

「居た。そして、紫苑が倒れるところまでしっかり見ている」

「……それで、その後は？」

「パトカーは定員オーバーだから乗せられないと言ったが、その辺りは緊急事態だと察したんだろう。黙って頷いてた…」

恐らく、あんなに取り乱した銀時を見たのは子供達とて初めてのはず。あの時の子供達の表情が、それを物語っていた。その後どうしたのかは分からないが、恐らくはこの大江戸病院に訪れるだろう。

「…トシ…こんな事は不謹慎かもしれないが…紫苑の命は…」

「ああ、今年の春。つまり、今」が…そのタイムリミットだ」

思えば、医者への反対を押し切って入院することなく屯所で過ごすことになった時は、医者にも「その分、命の保証はないということだけは覚悟しておいてください」と言われた。しかし、紫苑はまるでまだ死ぬなと言わんばかりに、何度倒れても、何度吐血しても絶対に生きる事を諦めなかった。

今思えば…会いたい人に会うまでは死ねないと…そう思っていたのかもしれない。

「この事実を万事屋には…？」

「言えるわけねえだろ、今の野郎に。何仕出かすか分からねえぞ？」

「しかし…言わねばならんことでもある。万事屋が落ち着いた時に…きちんと話そう。そして、紫苑の意識が回復した時に…確認をしよう」

「確認？」

土方が聞けば、近藤は少し寂しそうに笑いながら言う。

「真選組に残るか、除隊するか、だ…。俺達真選組は、紫苑を家族同然に慕ってきた。これは確かだ。だが、トシよ…考えてもみる。紫苑はいつだって、遠くを見つめて想いをさせていた…。婚約者を…万事屋を想ってた。その万事屋によろやく会えたというのに、最期の時間を真選組で過ごさせるわけにはいかんよ…」

例え残り少ない時間でも、“家族同然”に過ごしてきた者達と過ぐすより、離れ離れになってもずっと想い続けていた“婚約者”と過ぐした方がずっと幸せなはずだ。

「…そうだな…」

いつの間にか、真選組には紫苑がいて当然だと思う自分達がいた。

しかし本来であれば、紫苑の居場所は真選組ではなかったのだ。

「帰してやろう…本来の居場所に。」坂田 銀時の隣「…本来の居場所に…」

「…ああ…」

「それを、紫苑に選ばせよう。これは俺達が決める事ではない。紫苑自身が決める事だ…」

その時、紫苑がどんな選択をしても自分達は笑って見送ろう。

自分達はいつだって、紫苑の幸せを願ってきたのだから。

近藤と土方が話している頃…集中治療室の前には、呆然と立ち尽くす銀時と、通路の壁際に設置されている長いすに座っている沖田の姿があった。

ぼんやりと紫苑を見つめて立ち尽くしている銀時の背中を見つめながら、沖田は1人考えていた。

(旦那…。アンタ、一体何者ですかイ？前に土方さんが、アンタの事を山崎に調べさせたことがありやした。そんな時は、結局シロという判断でしたが…あの殺気は異常でしたゼイ？普段のアンタからはとても想像がつかねえような殺気で…俺ア、思わず抜刀しそうになっちまった…)

そして紫苑の言葉を思い出す。

『私の大切な人は、凄く強くて、凄く優しい人だった。怖いって言う子達も多かったけど…とても優しく、強くて、そして…とても脆くて、悲しい過去を背負っている人なの。この世界を一番憎んでいる人といっても過言ではないわね。けれど…その人は、コタローや兄さんのように世界をひっくり返そうとはしていない。その理由が…私には分かるような気がするの。きっと、あの人にとって憎むべき世界でも、この世界にはそれ以上に大切な思いが沢山あるから…だから壊せないの。あの人は優しい人だから、自分が傷付けられることよりも、仲間が傷付けられることを嫌がっていた。自分が辛い思いをするより、仲間が辛い思いをする事を辛く感じていた。…私が好きになつた人は…私が愛した人は…そういう人。真っ直ぐで、単純で…けど、

誰よりも…傷付けられることと、失う事を恐れている人。だから、いつも口癖のように言っていたわ…」

「絶対に…護る、って…約束、してたのにな…」

（ああ、確かに紫苑の言う通りだぜい。いつも旦那は口癖のように言ってた…。眼鏡やチャイナを絶対に“護る”って…。強いお人だと思っていたが…そいつア違ってたんだ…。旦那が護ることを第一に考えていたのは…“もう二度と何も失わない為”だったんですねイ…）

失った時の失望

護れなかったという絶望

約束を果たせなかったという後悔

それらを背負い続け、しかし銀時は…いま現在、己が護るものの為に何度も立ち上がってきた。

「何も…護れなかった…」

しかし、銀時は横たわる紫苑を見つめて何も護れなかったと言う。

（旦那、そいつは違うぜい？万事屋のガキ共も、俺達真選組も、そして紫苑も……アンタに護られてるじゃありませんか。紫苑を護れなかった？馬鹿を言っちゃいけませんぜ？旦那という存在があったからこそ、短い寿命を必死に延ばしたんでイ。旦那に会いたいというその気持ち、紫苑を護ったんでさア。だから旦那…）

「すまない、紫苑…」

「そんなに、謝らないでくだせエ…」

もう何度目になるだろうか？ 2人きりになったこの空間で、銀時が謝ったのは…これで何度目だろうか？ その度に、辛そうに表情を歪めながら…何度も何度も謝った。

「旦那…アンタが悪いわけじゃないんでア…」

「うめん…」

「もっと早くに、旦那と紫苑を会わせてあげられなかった…俺達が悪いんでア…」

しかし、どんなに沖田が声を掛けても…

「本当に…うめん…。あの時…俺と晋助がもっと…粘っていれば…、ツラと辰馬を説得できていたら…。うめん…」

その声が、銀時に届く事は無かった。

（辛エ…、そして…痛エ…。旦那…、アンタが背負ってる苦しみに比べたらこんなもん、針で刺された程度の痛みかもしれやせん。けど…俺ア…）

目を閉じれば、死んだ魚のような目で自分を見つめながらワザと名前を間違え、楽しそうに笑う銀時の姿が過ぎる。万事屋の子供達以上に子供っぽい表情を見せる銀時の姿が過ぎる。

そして…

何も言わずに、自分達を助けてくれるその強い姿が、脳裏を過ぎる。

だからこそ、今の銀時は見ていられなかった。

何度も何度も謝り続ける銀時の姿は、見ていて辛くそして苦しかった

た。

銀時の苦しみと比べれば、本当に針に刺された程度の痛みだろう。

それでも…

「やっぱり、痛いのは嫌でさア…。だから、旦那…。謝るんじゃないくて、紫苑の為に笑ってやってくだせエ…。俺ア、旦那のそんな辛そうな顔を見るのは嫌でさア。だから…いつもみたいに“総一郎君”って言うてくだせエ。そしたら、俺もいつも通り、“総悟でさア”って返しやすから…」

いつもとは違う、ちょっと困ったような笑みを浮かべる沖田。しかし、そんな沖田の表情も、そして言葉も…銀時には届いていなかった。

そして改めて、思う。

坂田 銀時にとって、高杉 紫苑は本当に大きな存在だったのだと。そしてまた、逆も然りしかだったのだと。

(真選組から抜ければ切腹…。しかし、志願して局長・副長の合意が得られての除隊だったら局中法度には触れねエ…。紫苑、俺ア…この先も紫苑と一緒に屯所で過ごしたいと思ってる…。けど…やっぱり、紫苑の隣は旦那じゃないと駄目でさア。もう、命の残りは少ねえかもしれねえが…それでも…いや、だからこそ…)

心の底から紫苑が笑って過ごせるというのであれば、例え近藤や土方が反対しても…。自分が処分を食らってもいい。

「紫苑…俺が絶対に旦那の隣に戻してやりませア…」

自分にとって、どこか優しい姉のような存在だった紫苑。本当の姉であるミツバと同じくらい慕っていた。だからこそ、紫苑には心の底から笑っていて貰いたいのだ。

(ああ…旦那が何でモテないのか分かつちまったぜイ…。モテないんじゃないエ…。自分から興味を示さなかっただけなんだ…。アンタの隣は、ずっと紫苑の為に空けていたんですねイ…)

常に銀時は「天パだからモテない」と言っていた。だが、明らかに好意を寄せている女性は多かった。モテないなんて言ってるが、どれだけ鈍感なんだと沖田自身何度か思った事があった。しかし…そうではない。銀時の眼中には紫苑以外の女性は、“ただの女性”でしかなく…恋愛の対象ではなかった。

モテなかったんじゃない、自分から遠ざけていたのだ。

(全く…旦那を好いている女達が泣きやすぜイ?)

しかし、それが銀時の選んだ道といたのであれば…きっと、誰もが納得するだろう。それほどまでに、坂田 銀時という男は皆に慕われ好かれているのだ。

「……………ずっと…一緒に居るって…約束、だったのにな…」

だったらその約束を今から果たせばいい…。

命のタイムリミットはもう残りわずかかもしれない。だが…

「旦那…その約束は今からしっかりと護ればいいじゃねえですか…」。紫苑だって、きっと喜びますぜイ?」

何せ、紫苑は諦めていたのだから。

自分の想い人は素敵で優しい人だから、その隣にはきつと素敵な女性がいる、もう自分の事などきつと忘れていると…。もう、銀時の隣は自分の居場所ではないのだと…。

(紫苑…旦那は忘れてなんかいなかったゼイ？それどころか、紫苑だけを想い続けて…。俺ア、2人が羨ましいでさア…。こんなにも綺麗な愛つてやつを、初めて見やしたゼイ…？)

いつもよりも、とても小さく見える銀時の背中を見つめながら…沖田は思う。

こんなにも綺麗で、そしてこんなにも悲しい愛など…本当に初めてだ、と…。

ひたすら謝り続ける銀時と、その度に声を掛ける沖田。反応が返ってこないと分かっている、沖田は決してそれをやめなかった。土方が、自分にこの場に残るよう指示した理由は、そういう事なのだろうと…そう思ったからだ。そんな事を何度か繰り返していたら、どうやら話を終えたらしい近藤と土方が戻ってきた。土方は銀時を一瞥した後、沖田に視線をやる。口に出さずとも、土方が言いたい事は分かっていた。だから、沖田も言葉にすることなく…ただ首を横に振って答えるだけだった。

(この様子じゃ、紫苑もまだ目を覚ましてねえな。そして万事屋も変わらず、か…。まあ、何も仕出かさなかっただけマシってところだな…)

本当に、先ほどのキレ方は尋常では無かった。沖田だけでなく、下手すれば土方も刀に手を掛けていたかもしれない。医者から銀時を

引き剥がすのにどれ程苦労したことか。

と同時に、土方は思った。

(……紫苑の想い人は攘夷戦争で背中を預け合った戦友でもあったと聞く。つまりは……万事屋がその戦友……。なるほど、それなら桂や高杉との繋がりにも納得がいくって話だ……)

だが、攘夷戦争参加者の中で名前が表立って有名になったのは、“狂乱の貴公子・桂 小太郎”、“鬼兵隊総督・高杉 晋助”、“鬼兵隊副官・高杉 紫苑”、そして現在は攘夷活動とは無縁の快援隊社長である“坂本 辰馬”。この4名だけだ。そこに“坂田 銀時”の名は無い。しかし、さっき土方が感じた殺気は……とても、尋常ではなかった。それに、紫苑自身も言っていたのだ。

『私の大切な人はね、私達の中では一番強かったのよ？子供の頃からそう。私なんて、何度かしか剣で勝てたことは無いわ』

紫苑は得意げにそう自慢していた。それほどの腕を持ちながら、何故……その名前は露見しなかったのだろうか？

1人思索している土方だったが……かすかに、謝罪以外の言葉が聞こえた。

「こんなに待ち続けて……こんなに探し続けて……」

悔しそつに、そして悲しそつに顔を歪めながら……銀時は言う。

「何で……ッ……!!」

その言葉に、真選組の3人が同じ事を思った。

ああ、どうして…

もっと早くに、この2人を会わせてあげられなかったのかと…。

ダンッ!!

銀時が、拳を握り壁を殴る。このまま暴れるのではと、一瞬土方は構えた。

「旦那?」

沖田は心配そうに名前を呼ぶ。

しかし、やはりその声は届かず…

「何が攘夷戦争の英雄だ…何が白夜叉だ…!!結局、俺ア…」

銀時はその場に崩れ落ち…

「最後の最後まで…何も護れなかったじゃねえか…ッ…!!」

口元を自嘲に歪め、頭を抱えて静かに涙を流していた。

その場に居る誰もが、銀時の言葉に耳を疑う。

今…この男は何と言っただろうか…

(白夜叉…だと…!?天人は勿論のこと仲間からも恐れられていたという…、あの白夜叉か…!?攘夷戦争後期でもっとも強かったとされる英雄と言われた者ではないか…!!)

(万事屋が…白夜叉…!?二つ名が先走りすぎて本名すら分からず…

攘夷戦争後は、その生死すら分かっていなかったという、あの伝説の…!?)

(ああ、だから…あの時の殺気は凄かったんですねイ…。紫苑が「一番強かった」って自慢してたんですねイ…。納得でさア…)

銀時の発した「白夜叉」という言葉。真選組という立場上、それは是が非でも今すぐに問い詰めたいところだった。だが……

(……こんな時に、んなことが出来るわけねえだろ…ッ…)

肩を震わせて泣いている銀時に、尋問をするような真似など…いくら「鬼の副長」と恐れられる男でも…出来る筈がなかった。

それは、その場に居た近藤もそして沖田も同じで…結局、目元を押えて泣き崩れている銀時に何と声を掛けたらよいのか…否、声を掛けるべきなのか…そう躊躇ちゅうちゅうしていた。

その時…

銀…時…

声が聞こえたような気がした。自分の気のせいだろうかと、沖田は首を傾げる。しかし、その声は確かに…知った声。自分が姉のように慕っていた大切な「家族」の声。

みんなで、帰ろう…萩に…

今度のははっきりと聞こえた。聞き逃してしまいそうなほど、小さな声だったが…それは確かに紫苑の声だった。慌てて顔を上げて、集中治療室で眠っている紫苑に視線をやる。すると、自分達の方を見つめ…必死に口を動かしている紫苑の姿があった。紫苑と目があつた沖

田は驚いたように目を見開くと、紫苑はフワリと笑う。紫苑が何か言ったが…残念ながら声は聞こえない。しかし、その口の動きから「大丈夫」だと…そう言っていると分かった。

「近藤さん、土方さん!!」

「…どうした、総悟?」

「病院だぞ、あんまりデケエ声を…」

首を傾げる近藤と沖田を注意する土方だったが、慌てて2人の肩を叩きながら沖田が集中治療室を指差す。その意味が分かった2人はすぐに視線をそちらに向けと、力なく笑っている紫苑の姿があった。その表情はどこか、申し訳なさそうに笑っているようにすら見える。

「…やれやれ、手間掛けさせやがって…」

一体、どちらに対しての言葉なのか…。恐らくは双方に向けての言葉なのだろう。土方は崩れ落ちたまま泣き崩れていた銀時に、視線を合わせるように座り込む。

「おい、万事屋。テメエがすっかりしねえでどうする。……それじゃあ、紫苑から笑われるぜ?」

「……………」

やはり、反応は無い。

(やれやれ、いつもの「ロイツなら憎まれ口の1つや2つは返ってくるのに…調子が狂っちまうな…」)

バリバリと頭を掻きながら、銀時の腕を掴む。そしてその耳元で…

「紫苑が目を覚ました。お前の顔をしっかりと見せてやれ。いい歳し

たオツサンが泣いてるだらしねえ面メンをな。そして紫苑に笑われる」

そう言つて、乱暴に立ち上がらせる。その時…

「うおおおっ、紫苑んんんっ!!無事でよかつたああああ!!」

横から有り得ない量の涙を流しながら、そして有り得ない声を出しながら泣いている自分の上司の姿と…

「近藤さん、静かにしなせエ。ここ、病院ですぜイ?...駄目だこりゃ、聞こえてねえや…」

その上司を何とか黙らせようとしている部下の姿があった。そんな2人に苦笑しつつ、改めて銀時に視線を向ける。

その表情は…驚いたように目を見開いていて、思わず土方は溜息を吐く。

(やっぱり、今回は命に別状が無かつた事だけは伝えるべきだったか…?)

まるで永遠の別れを覚悟していたかのようなその表情に、土方が思わず嘆息する。銀時はガラス窓に手を付き、その中に横たわっている紫苑を静かに見つめていた。そしてまた、紫苑もそんな銀時を見つめている。

「銀時…私は、大丈夫よ…」

かすかだが…紫苑の声が聞こえた。その声にまた…銀時は泣きそつな表情を見せたが、それを隠すかのように着流しで己の濡れた顔をぐじぐじと拭く。

(バカヤロウ、今更んなことしたってバレバレだろうが…)

だが、次に見せた銀時の表情は…土方が見てきた中で、一番「らしくない」と思ってしまったほど…幸せそうに笑う銀時の笑顔だった。

「俺、医者呼んでくる!!」

「近藤さん、落ちつきなせエ…。って聞いてねえや…」

後ろはとても慌ただしいのに、まるでそれを感じさせない銀時と紫苑。

まるでそこだけ、空間が切り取られたかのような錯覚にすら陥ってしまう…。

もう、自分が支えなくても己の足で立っていられるだろうと判断した土方は、掴んでいた腕から手を放そうとした。

その時…

「やっと…会えたな…」

銀時の声が聞こえた。

優しく、そしていろんな思いの詰まった…一言。

たった一言の言葉だがしかし、その一言にはきつと銀時のいろんな気持ちが籠っているに違いない。

「……………たく……………」

やれやれと息を吐きながら、銀時から離れ沖田の元に行けば、彼も苦笑している。

「とんだお騒がせカップルだな、コイツらは……」

「けど、俺アいいと思いやすぜイ？ 旦那らしいじゃないですかイ……」

「お騒がせで、迷惑かけっぱなしなところとか特にな……」

「違いねえや……」

そんな話をしていると、恐らくは無理矢理引っ張ってきたのだろう。近藤が医者を引きずるようつにして連れてきた。

「……まあ、こつちも人の事は言えねえか……」

「俺は止めたんですぜイ？ それでも聞いてくれなかつたんでさア……」

「ああ、万事屋も何を仕出かすか分からねえが……今の近藤さんも何を仕出かすか分からねえな」

そういえば身近なところにもお騒がせな人が1人居たと、頬を引き攣らせる土方である。近藤は必死に医者に目が覚めたと伝えていて、それに医者が「落ちついて下さい」と必死に宥^{なだ}めていた。

「つたく、この人は……」

隊士達を何より大事にするが故に、こんなにも必死なのだろう。いや、こんなところで紫苑を死なせたくはない、死なせてはいけないとそう思っているのだろう。近藤 勲とは……そういう男なのだ。

今度は近藤を落ちつかせなければとか、何で自分はこんな役回りばかりなんだか思っていたら、パタパタといくつかの足音がこつちに近づいてくる。

(万事屋のガキ共か？ にしちゃ、足音の数が多いような……)

もうここまで来ると、否が応でも嫌な予感しかしないと再び頬を引き攣らせた。

最初に姿を見せたのは、新八と神楽だった。その後を追うように、お登勢とキャサリン、そしてたまの姿が。

「おいおい、また随分と大所帯だな……」

わざとらしく溜息をつけば、新八が申し訳なさそうに苦笑する。

「すみません、本当は僕と神楽ちゃん、あとたまさんだけで来るつもりだったんですが……」

そこまで新八が言うと、それ以上は何も言わなくていいと……分かっていると言わんばかりに土方が手を上げて制した。

（大方、万事屋の事が心配だったんだろっ……）

何となく、子供達だけではなく下の階に住むスナックの面々も来る事は予想出来ていたため、それを咎める事はしなかった。

（けどまあ、どこかで……もしかしたら桂が一緒に来るかもしれないか……）
思ったが……さすがに、奴もそこまで間抜けではないか……）

この場に来ていれば即刻逮捕してやったものを、と内心悪態を吐きながら子供達へと視線を向けた。

「……銀ちゃん……」

その子供達は……

「銀さん…ッ…」

どこか辛そうに、表情を歪めている。思えば、彼らと別れて子供達がココに来るまで随分と間が空いたような気もする。そして子供達のこの表情。もちろん、視線の先に居るのは銀時だ。その銀時は…今にも泣き出しそうなの、しかしそれでいてとても幸せそうな顔をしている。

(「こっちはこっちで何かあったのか…?」)

何故子供達がこんな表情をしているのか…。 “銀時を誰かに取られた” というような下らない嫉妬心を持つような子供達ではないことくらい土方も把握している。だからこそ、子供達が何故こんな…今にも泣き出しそうな表情かおをしているのか分からなかったのだ。

「おう、チャイナ。随分ヒデエ顔をしてるじゃねえか…」

いつものように沖田が神楽に喧嘩を吹っ掛ける。それを「やめろ」とため息交じりに止める土方。いつもだったら、それに神楽が掴みかかるのだが…その反撃が無い。

何だ…? 本当に何事だ…?

沖田までもが呆けてしまう。そして、土方と沖田は顔を見合わせ…一番事情を知っているであろうお登勢に視線をやった。一方のお登勢は、真選組の2人から視線を向けられ、小さく嘆息する。2人とも口にはしていないが、子供達のこの様子について疑問に思っているのであろうことはすぐに分かった。

お登勢がそれについて、口を開きかけた時…

「僕達は……本当に、何て馬鹿な事を思ってしまったんだろう……」
「銀ちゃん……ごめんヨ……。私、一瞬でも銀ちゃんのこと、見損なったとか……ッ、本当にごめんネ……ッ……」

子供達が先に口を開いた。その言葉は、後悔と謝罪の言葉。

(おいおい、本当に何があったんだよ……?)

ますます分からないと表情を歪める土方だったが、子供達はすぐに銀時のそばに駆け寄る。そして神楽が銀時の右手を、新八が銀時の左手を取った。

「……紫苑……ごめんな……。ずっと、独りにさせちまって……。けど……護るから……、何があっても……絶対に俺が護るから……。もう一度、護らせてくれ……」

しかし、それに気付いていないのか……ただ真つすぐと、集中治療室を見つめたまま銀時は呟く。

(やっぱり……ガキ共でも今の野郎には……)

紫苑が目を覚ました事で、少しは落ち着いた銀時だったが……それでもまだ、視界には紫苑しか映っていない。溜息を吐きながら、今度こそお登勢に事情を聞こうとした時……

「そうネ、銀ちゃんがしつかり護ってあげればヨロシ。だから、そんなに泣かないで、銀ちゃん……」

「銀さん……僕達、家族じゃないですか……。何でこんなに辛いこと、黙ってたんですか……。1人で背負ってカツコつけて……」

「昔、マミーが言ってたネ。嬉しい事は一緒に喜んで、悲しい事は一緒に

に悲しむのが家族アル。私達…家族でシヨ？銀ちゃん…銀ちゃんは、独りじゃないヨ…」

「攘夷戦争の時の仲間比べたら頼りないかもしれないけど…僕が居ます」

「私も居るネ。だから……」

泣かないで…大切な人の為に、笑ってあげて…

子供達の言葉に、その場にいた大人達は誰もが息を呑んだ。自分達よりもはるかに年下の子供達は、自分達大人よりもしっかりと銀時を支えようとしている。

どうしたらいいのか分からないと、何か仕出かさないと見ている事しか出来なかった自分達とは大違いだと…土方は思う。

声を掛ける事しか出来なかった自分とは大違いだと…沖田は思う。

そりゃ、万事屋も反応しないはずだ…。

「銀さん…」

「銀ちゃん…」

ああ、やっぱり旦那のところのガキ達には敵いやせん…。今回ばかりは負けを認めませう…。

「……、神楽…？…新八…？」

だって…どんなに俺達が声を掛けようとも、反応を示さなかった万事屋が…

ガキ達の言葉で、我に返ったんですゼイ？こりゃ、完敗でさア…

銀時は驚いたように、両隣りにいる子供達の名前を呼ぶ。一体、いつからそこに居たのかと…そう言いたげな表情だ。それに、神楽と新八は笑う。

「銀さん、まさか気付いてなかったんですか？」

「さっきから居たネ!! 銀ちゃん、どんだけ鈍感アルか？」

ああ、何だ…何も心配する事は無いではないか。

「しかも泣いたんですか？ 大の大人が情けないですよ…」

「それじゃあ、しーちゃんにフラれるネ!! マダオで泣き虫は、女に嫌われる男の条件ナンバー1アル!!」

ほら、子供達はいつものように銀時をあしらっている。

そして…

「うるせえ…、大人だってマジ泣きする時があんだよ、コノヤロー…!!」

いつもよりかは、どこか言葉に力は無いが、子供達の憎まれ口に反撃する銀時の姿がある。

やっぱり、子供達には敵わない。

そこに居た大人達は皆、一樣に同じ事を思いながら…微笑ましげにその様子を見守っていた。

その様子を、もう1人……ガラス越しに、ベッドの上から見つめている人物がいた。そう、紫苑である。さっきまではどこか瞳も虚ろ

で、自分の身体よりも銀時の方が心配で仕方がなかった。銀時は、松陽を亡くした後から：“大切な人の死”という場面に遭遇すると、かなり情緒不安定になる。それは、さっきの様子からも何となく分かった。自分の事を凄く心配していると同時に、銀時もまた崩れ落ちそうなほどギリギリのところにいると。

心配だった。

だが……チャイナ服を着た女の子と、眼鏡を掛けた男の子が来て……言葉を二言三言交わしただけで、その表情は紫苑のよく知り、そして紫苑が好きだと思った……その顔に戻った。

「今の銀時には……貴方のことを大切にしてくれる人が沢山いるのね……」

銀時のことは、“万事屋”として真選組内でも噂は絶えなかった。皆、好き放題言っただけだが、しかしそこからは信頼も窺えた。近藤も土方も、遠回しではあるが……万事屋を慕っている事は分かった。沖田に関しては自ら“旦那は悪友”だと言っていた。

「……もう、昔みたいに悲しい思いはしてないのね……」

その特殊な髪色と瞳の色から、“屍を食らう鬼”と心無い言葉を浴びせられていた。

その強さから、敵はおろか味方からも“白夜叉”と恐れられていた。

けれど、彼の周りには今……あの頃の自分達のように、銀時を支える人達が居る。

「私も早く、そこに行きたいわ……」

ねえ、銀時…？

その可愛いチャイナ服の女の子は誰？もし彼女だったら、コタローに“銀時はロリコン疑惑”を告げ口するわよ？

そっちの眼鏡を掛けた男の子は…ああ、凄く優しそうなお子。銀時のハイテンションに振り回されていなければいいけど…。

次第に、薬が抜けてきた紫苑の意識ははつきりとしてくる。

ガラスの向こう側で笑っている銀時の姿を微笑ましく見守りながら…。

「ねっ、銀時…？私も混ぜてよ…!!」

紫苑は、幸せそうに笑っていた。

集中治療室の中を何気なく見た沖田は、紫苑の表情を見て…自身もまた笑う。

「なんでイ、紫苑も幸せそうに笑ってらァ…」

さっきまではどこか殺伐としていたこの空間が…

たった1人の女性と、たった2人の子供達の力で…

いつもとなんら変わらない光景に戻った。

【第十一訓】言葉の重み

集中治療室前の殺伐とした空気が、子供達によっていつものそれへと変わったときだった。沖田がクイツと銀時の着流しを引っ張ると、さっきまでの悲しみに揺れていたその瞳は、いつもと同じ…沖田のよく知る、死んだ魚のような目^めになっていた。それを見て、思わず沖田は笑ってしまう。

「…ね、人の顔を見て笑うって失礼じゃない？総一郎君？」

「総悟でさア、旦那」

ああ、いつもの彼だ。

そんな事を考えながら、沖田は屈託なく笑う。それを見た銀時は少し驚いたような表情を見せたが、バツが悪そうに頭をかきながら苦笑した。

「あー、その悪かったねえ…。…ちゃんと聞こえてたから」

「何がですかイ？」

「ん？全部」

さっきまで申し訳なさそうな表情をしていた銀時は、今度はニヤリと笑う。流石の沖田も、あの状態ですべてを聞かれていたとは思ってもいなかったらしく、今度は沖田が参ったといわんばかりの表情を見せた。そして思った。やはり、彼には敵わないと。

「全く、銀さん…まさか沖田さん達に迷惑を掛けたんじゃないでしょうね」

「別にサドとマヨとゴリラに迷惑を掛けようと構わないネ」

子供達の言葉に周りの大人達は笑ったり、一部は眉をヒクつかせたりと反応は様々だったが、沖田だけは違った。大事な事を言いそびれたと溜息を吐きながら、改めて銀時を呼び治療室の中を指差す。

「旦那、紫苑が目を覚ましてますゼイ？多分、薬が抜けきったんでさア

……」

「……!!紫苑……!!」

その言葉を聞けば、またすぐに視線は紫苑の眠る部屋の中へと移る。しかしその瞳は先ほどとは違い、崩れてしまいそうな危うさは無く……心の底から心配していると、そんな表情だ。さっきよりもっぴかりとした瞳で紫苑を見つめていた。

「……なんだよ、笑いながら手なんか振りやがって……」

ガラス越しに見た紫苑は、完全に薬が抜けたのだろう。笑いながら銀時に手を振っている。それにつられるように、銀時もまた笑い小さく手を振った。その様子を、その場に居た全員が微笑ましく見守っていたが、近藤だけがどこか悲しげに笑っている。それを見た土方も、改めて幸せそうに笑っている銀時を見て複雑な心境になった。

紫苑の命は残り少ない。

それを今、伝えるべきか否か……。

どうしたものかと考えていた2人だったが、ガラツと扉の開く音で2人は我に返る。まさか銀時が中に入ってしまったのでは？と一瞬思ったのだ。しかし、予想に反して銀時は先ほどと同じ場所に立っている。中に入ったのはどうやら医者だったらしい。小さく嘆息し、土方は近藤に視線をやる。それに気付いた近藤は小さく頷いた。

土方の言わんとすることが分かっていたから。

(そうだ…隠す事ではない。いや、隠してはいけないことだ…)

相手が他の誰でもない紫苑の婚約者である銀時は、この事実を…一番知る必要がある。意を決したように、近藤は銀時の傍まで歩み寄り声を掛ける。それに、銀時はきちんと反応して振り返った。

「万事屋、紫苑のことで大事な話があるのだが…」

「……分かった。けどよ、俺だけじゃ多分…納得いかねえ奴らがいると思うからよお…」

そう言って、銀時は自分を心配して訪れたのである子供達やお登勢達を見渡す。そして苦笑しながら先を続けた。

「全員に聞かせてもいいかねえ…？ババア達がここに来てる理由は…何となく、分かるからよお…」

銀時は気付いていた。何故、たまもこの場所に来たのかという…その理由が。よく自分の家に押しかけてきては厄介ごとを持ち込んでくる幼馴染の為に、この場所にやって来たのだろう。

(まあ、ツラが来なかっただけでも良しとするか…。流石にアイツも、そこまで馬鹿じゃなかったか…)

桂は時として、形振り構わない時がある。銀時とて人のことを言えた立場ではないのだが、桂は手段を選ばないで突っ込んでくる為、銀時以上にタチが悪い。しかし、その桂が今回あえて来なかったという事は…恐らくはこの場に真選組が居る事を子供達から聞いたのだろう。そこまで考えた銀時は、チョイチョイとたまに手招きをした。

「何でしょう、銀時様？」

「ほら、しっかり見て…しっかり記憶して、しっかり持って返ってやってくれ。アイツも…相当、苦しんだからな…」

「…銀時様はご存知だったのですか？私がこの場所に訪れた理由を…？」

「いいや、知らねえよ？けど…何となく分かったってところかな？」

真選組の面々は訳が分からないとそれぞれ訝しげな表情を見せたり、首を傾げたりしていたがそれに構うことなく、銀時はポンポンとたまの頭を撫でる。

「暫く、紫苑のことを任せた。何かあったらすぐに知らせに来てくれ…」

「了解しました」

「では行くか」と近藤に促され、銀時は頷きその場を離れよつとする。チラリと…紫苑の方に視線を向ければ、どこか不安そうな表情かおをしていた。それに苦笑しながら、ちよつと待つて欲しいと近藤に告げ、紫苑が見える位置に再び戻る。そして…

スツ…、サツサツ…、シュツ…

銀時は両手を大きく動かし、何かを紫苑に伝えた。それを理解したらしい紫苑は、不安そうな表情から、安心したような…それでいてどこかおかしそうに笑う。そして、ゆっくりと紫苑も手を動かす。それは、両腕を使って大きな丸を作っていた。

「…よし、紫苑副官殿の許可も得たし…本当に行こうかねえ…」

どこか懐かしそうに笑いながら、銀時は近藤の隣に足を進める。全員が、今のは一体何なのかと…そういった視線で銀時を見つめてい

た。それに気付いていた銀時は、少し悲しそうに笑いながら…

「合図だ……。鬼兵隊とその仲間達にだけ通じる合図。攘夷戦争中は、爆音やら何やらで声なんて全然聞こえなかったからな。離れた位置にいる場合はこっやって腕で指示を仰いだり、それに対して返事をしたりしてたんだよ…」

そう告げた。全員が驚いたように目を見開く。まさか、銀時の口から「鬼兵隊」という言葉が出るとは思ひもしなかったからだ。否、その口から「攘夷戦争」という言葉が出ること事態予想できなかった。もちろん、紫苑と銀時の関係が分かった以上、今更すぎる事ではあるが…それを誰に追及される事も無く、銀時が自然に口にしたことが意外だったのだ。

「ちなみに、今の合図は何て言ったんだい？」

聞いたのはお登勢である。それに、銀時は笑いながら…

「本陣から離れて敵陣に探りを入れてくる」って…言っちゃった」

ニヤリと笑う銀時に、土方が「誰が敵だ!!」と声を荒げ、それに対して「ウルセエ、土方コノヤロー」といつものように沖田が毒舌攻撃をする。騒がしくなってきた病院の廊下でお登勢は溜息を吐き、キヤサリンは「ウルサイ人達デスネ」などと呆れている。そんな中、さっきの合図に興味を示した子供達は銀時の傍に駆け寄りクイツと着流しを引っ張った。

「他にもあるネ? あんな合図?」

「おー、俺達本陣の人間ですら分からない合図もあるぜ? 例えば…鬼兵隊総督と副官の間でしか分からない合図、とかな…」

「それってつまり…高杉さんと紫苑さん…ですよね?」

「そーゆーことだよ、新八君」

「じゃあ、しーちゃんと銀ちゃんにしか分からない合図もあつたりするネ?」

「え、俺と紫苑? …… そうさなあ …… 俺は鬼兵隊の隊員じゃなかったから、特にねえよ」

「恋人同士なのに平隊員達以下の扱いとか…」

「銀ちゃん、ご愁傷様アル…」

「何? え、何? 何でそこで、お前らは銀さんを哀れんでるわけ!?!」

子供達の視線に哀れみのそれが含まれていることを感じて、何でそんな目をされなければならぬのかと不機嫌そうに言うが、それでも子供達が両の手を放すことは無く。

「けど、羨ましいです…。 そうやって、言葉を交わさなくても通じる何かがあるって…」

「そうネ、私達も結構長い付き合いになるけど… やっぱりしーちゃん達には敵わないアル」

「そうだろう、そうだろう。羨ましいだろう? けどな、肝心な時に言葉が届かないのも… 結構辛いんだぜ?」

「それがイコールで泣いていい理由にはならないネ」

「あ、僕が言おうと思ったのに…」

「だからいつまで経っても新八のままなんだヨ、新一になれないんだヨ。 何だよ、八って」

「コラアアツツツ!!! 全国の新八さんに謝れエエエ!!!」

「はいはい、新八の全力のツツコミは痛いほど分かったから場所を考えような。 ここ、病院だから…」

「うっ… は、はい… そうですね…」

また、銀時もそんな子供達の手を放すことは無く。

そこには、先ほどまで崩れ落ちそうなほどに脆かった銀時ではなく

…皆のよく知り、そして慕っている銀時が居た。

紫苑の担当医から予め許可を得ていた近藤は、銀時を始めとした万事屋メンバーとその場に残ったたま以外のスナック・お登勢メンバーをある部屋へと招き入れた。恐らくは医師と患者、もしくは親族が話し合う場所だろう。そこに人数分の椅子を揃えて、中央には近藤と銀時が向かい合うようにして座る。他のメンバーは思い思いの場所に座っていた。

「……まあ、なんつーか…よ…。ありがとな…」

何とも言えない沈黙。それを破ったのは、銀時の礼の言葉だった。誰もが驚いていたが、構わず銀時は続ける。

「紫苑がどついう経緯で真選組に入ったのかは分からねえし、真選組に入った紫苑を責めるつもりもねえ。ただ…生きてた。それだけで…俺ア十分だ…。多分、アンタらが助けてくれたんだろ、紫苑を？…マジでありがとな…」

正直な話…真選組のメンバーは全員、銀時に罵られると…そう思っていた。何故、その存在を隠していたのかと…そう言われると思っていた。もちろん、真選組メンバーは紫苑の存在を隠していたわけではない。ただ、身体に負担をかけないようにと…あまり大きな任務を与えなかつただけだ。それに、万事屋が絡んでくる事件の時には本当にタイミングが悪く、いつも紫苑はそこに居なかった。

「いや、万事屋よ…。俺達はお前に謝らなければならん。紫苑が攘夷戦争に出ていたことも、元鬼兵隊の副官だったことも、そして紫苑に婚約者がいたことも…本人の口から聞いて知っていた…」

「まさか、その婚約者がお前だとは思いましなかったがな」

「…てえことは、紫苑は俺の名は言わなかったのか？」
「言ってたなら、とっくに旦那と紫苑…会わせてまさア…。流石の俺でも、そこまでドゥじゃありませんゼイ？」

真選組面々の言葉に、一瞬呆けた銀時だったが…確かに、今まで何度も接触してきた真選組の隊士達が、自分を攘夷志士と疑う事はあっても攘夷戦争に参加していた者として扱ってくる事はなかった。それは恐らく、紫苑が銀時に気を遣ってそうしたのでだろう。名前を言えば、その生存が分かる確率は格段に上がる。しかし、もし攘夷志士としてではなく、一般人として平穏な暮らしをしていたら…銀時に迷惑が掛かってしまうと危惧したのでだろう。

「紫苑に気を遣わせちまったなあ…」

苦笑する銀時に、土方は更に続けた。

「まあ、まさかお前が自ら口を割るとは思いもしなかったがな…」

「……はあ、〃白夜叉〃についてか？」

白夜叉

その言葉に、部屋の空気が一瞬にして変わる。新八と神楽は驚いたような…それでいて、どこか不安な様子で銀時と土方を交互に見つめている。お登勢は溜息を吐きながら、それでも事の成り行きをただ見ているだけだった。

「…認めるのか…？自分が…白夜叉だと…？」

驚愕の近藤の声。その声は、驚きからか…それとも伝説とまで言われ、尚且つ最も恐れられたと言われていたその張本人を目の前にしたが故の恐怖からか…少し震えている。問われた銀時は一つ溜息を吐

くと、めんどくさそうに頭を掻いた。

「ま、自分で言っっちゃったからな。攘夷戦争で…ツラが「狂乱の貴公子」、高杉が「鬼兵隊総督」、紫苑が「鬼兵隊副官」と言われていたように…俺は「白夜叉」と呼ばれていた。…迷惑な話だ。こんな二つ名、望んでねえんだよ…俺ア…。しかも、本名より白夜叉こっちの方が有名になっっちゃったから洒落にならねえって話。まあ、そのおかげで…坂田 銀時が攘夷戦争に参加していたという事実が明るみになることは無かつただけだな」

ふと…そこまで話した時、銀時はあることを思い出す。自分と同じような二つ名が…ある時より天人達の間で恐れられるようになった事を。その二つ名が、当時の自分達に「紫苑が生きているのでは？」という希望をもたらしたということ。

「なあ…聞きたいことがあんだけどよ…」

「何ですかイ？」

「…お前ら真選組…いや、幕府でもいいや。そっち側で…」紫怨しおんの鬼
「…と…二つ名は…有名か？」

問われた真選組の面々は、それぞれ首を横に振る。3人が揃って
「「紫苑」という名なら当然知っているが」と付け足す。

(と…二つ名は…二つ名は俺の白夜叉ほど露見しなかったという
事か…。…いや、そもそも紫苑の二つ名かどうかすら定かじゃねえ。
あくまで、攘夷戦争の時だけ広まった二つ名ってことか…)

「それがどうかしたのか」と問うてきた土方に、「いや、なんでもない」と苦笑してその話はそこで終わる。だが、一連の話を黙って聞いていた万事屋の従業員達とスナック・お登勢のメンバーは何ともいえない表情でその様子を見ていた。

“紫怨の鬼”

その名は、さつきまだスナックに居た時…桂の口から聞いた二つ名だ。もしかしたら、紫苑のことかもしれないが、結局は分からなかったと…桂自身がそう言っていた二つ名。やはり、どこかで銀時も気にしていたのだろう。

「ケツ、しかしまさかテメエが伝説とまで言われた男だったとはな。世も末だ…」

「言ってるよ、多串君」

「誰が多串だ、誰が!!」

「…あ、あの…土方さん…?」

「あ?なんだ、眼鏡?」

土方と銀時が毒舌戦を繰り広げているところに口を挟むのはかなり勇気がいったが…しかし、新八にはどうしても確認しておきたい事があった。ただでさえ、銀時は真選組…というよりも土方から、攘夷志士ではないかという疑いの目を向けられていた。

しかし、ここで銀時の正体が“白夜叉”だとバレってしまった。

「…銀さんを…捕まえるんですか…?」

声が震える。

新八は知っているのだ。幕府側についている天人達にとって、白夜又は大量の天人を殺した憎き仇であり、天人が幕府を牛耳っている今でもなお恐怖の対象であるということを。そして、現在攘夷活動をしていなくても…白夜又は捕縛の対象となり、そしてそのまま死刑となるということも。

考えなくても分かることだ。

今の幕府を操っているのは、天導衆と呼ばれる天人集団。その天人集団が白夜叉を憎み恐れていないはずが無い。

新八の問いに、流石の神楽もキツと土方を睨む。

「捕まえるアルか？ 銀ちゃんは今、何もしてないネ。それなのに捕まえるアルか？ “白夜叉” だから？ たった？ そんな名前ひとつで銀ちゃんは捕まらなきゃならないネ？」

神楽はこういったことに非常に敏感だ。自分が天人だと…夜兎だと恐れられ、人々から避けられていたからだ。流れている血が違う、種族が違う。ただそれだけの理由で、嫌な思いを沢山してきた。そんな中で、自分を家族同然に慕ってくれたのが銀時だった。銀時が白夜叉だと知っても、神楽は何も感じなかった。その銀時が、“白夜叉” という名前だけで捕まってしまう。神楽だけではなく、これは新八も危惧していたことだった。神楽同様、新八の表情も険しい。

「僕達にとって、銀さんは銀さんです」

「銀ちゃんが白夜叉だろうと何だろうと、私達には関係ないネ」

子供達の真剣な瞳と言葉を受け、ハアと土方は小さく溜息を吐きながら頭をガシガシと掻く。煙草に手が伸びそうになったが、ここが病院である事を思い出しそれは何とか留めた。

「確かに…幕府からは、白夜叉、及び攘夷戦争で名を上げた者達を見つけ次第捕縛という勅命がある」

「……!! だったら、絶対に私達が銀ちゃんを護るネ!!」

「チャイナ、最後まで俺の話の話を聞け」

少し強い口調で…そして鋭い視線で神楽を睨めば、不満そうではあったが土方の話を聞くために黙る。一方の土方は近藤に視線をやり、ひとつ頷く。そして…

「俺達は確かに幕臣であり、御上の勅命であれば絶対に守らなければならぬ。勿論、白夜叉を捕らえよという命も例外ではない。だがな…俺達は俺達なりの土道トルドを持っている。万事屋がガキ共を護ることを土道トルドにしてるように…俺達は、俺達の魂に従って剣を抜いている。…今の俺達にとって、“白夜叉を捕まえる”ことは…その土道トルドに反する…」

「…それって、つまり…」

「まあ、俺達は万事屋に沢山の借りがあるからな。それに、俺達の目の前におるのは“万事屋”を営む胡散臭い一般人ということだ。捕まえる理由などありはせんよ」

土方はタンタンと、そして近藤はニツと笑いながらそう言った。しかし、この2人が言っている事は…矛盾していないだろうか？近藤は“万事屋を営む一般人”と言ったが、銀時は自ら“自分は白夜叉”だと名乗ったのだ。

目の前にいるのは、万事屋のオーナーでもあり、そして白夜叉でもあるのだ。

「アンタ達、言っていることが無茶苦茶だね。どういつつもりだい？」

胡乱気に聞くお登勢の言葉に答えたのは沖田だった。

「まあ、何と云いますか…俺達はアンタらが思っているほど、御上に忠誠を誓ってる訳ではないんでネ」

「あーあ、そついでにとサラムと言っちゃっていいわけ？」

銀時が間髪入れずにツッコめば、沖田は悪びれた様子も無く笑う。そして土方もまた、口角を吊り上げて笑っていた。

「誰があんな奴らに忠誠を誓つかよ。俺達の国を乗っ取っただけでは飽き足らず、侍の魂である刀まで奪いやがった奴らだぜ？俺が…俺達真選組全員が忠誠を誓い、絶対の頭かしらと決めているのはただ1人だけだ」

誰、と言わずとも…それが誰なのかはすぐに分かる。

「随分愛されてんねえ、局長さんよあ？」

真選組にとって、御上よりも大事な存在は他の誰でもない…真選組局長の近藤 勲ただ1人なのだ。

「あとは俺の決めることじゃねえ。この件は近藤さんの決める事だ。俺も総悟も、近藤さんの命めいに従う…」

「そういうことでさア。まあ、出来れば…めんどくさくない命めいである事を願いたいもんですけどねィ」

「同感だ。白夜叉をとっ捕まえるんなら、随分と骨が折れそうだからな」

「そのまま全身の骨が折れて死んじまえ、土方コノヤロー」

「テメエこそバツサリ斬られて死んじまえ、沖田コンチクシヨ」

勝手に始まった土方と沖田の毒舌戦に「また始まった」と苦笑しつつも、近藤は真っ直ぐと銀時を見据える。それを、死んだ魚のような目で銀時は見返していた。

「坂田 銀時はただの一般人。俺達は、その坂田 銀時と白夜叉が同一人物であることを知らなかった。そして、今後もこの件に関して調

査をするつもりはない。これが…俺の下した判断だ」

「御上に「なんで〜?」って聞かれたらどう答えるつもりだ?」

「一般人を疑っては警察の名が下がる。それとも幕府そのものの名が下がっても宜しいのか?と…脅しでもかけるか?」

「ククッ、〜りゃとんでもねえこと言い出しやがったよ…」

参ったと両手を挙げてへラッと笑う銀時。同じように、近藤もまたニツと笑った。

「そついうことだが…何か問題があるだろうか?」

別に誰に聞いたわけでもないのだからが、近藤が尋ねると子供達はニツと笑う。

「問題ないですね」

「そーヨ!!銀ちゃん銀ちゃんネ!!」

お登勢もフツと笑みを零した。

「銀時、命拾いしたね。アンタ、コイツらに感謝しなよ…」

キャサリンはどこかつまらなさそつにしている。

「坂田サンモ、一度ブタバコニ入ッテミタラドウデスカ?結構、居心地イイデスヨ?」

「キャサリン!!冗談でも勘弁してくんねえ!?!そついうのはよ!!」

キャサリンの言葉と銀時のツッコミに、重い空気が漂っていたその部屋に初めて笑い声が響いた。

「まあ、近藤さんが言った通りだ。テメエじゃなけりゃ話は変わって

きたんだろがな…。マジで感謝しやがれ、ポケが」

「いっそ、土方コンチクショーが白夜又って事で御上に報告しやしようか？」

「おー、それいいね総悟君。けど、ソイツ銀髪じゃねえよ？無理じゃね？」

「んなもん、ペンキでもぶっかけて白く染めれば十分ヨ!!」

「お、チャイナもたまにはいいこと言うじゃねえか」

「オイイイイイイ!!! テメエら、何俺を陥れようとしてやがんだアアアアア!!!」

ギャーギャーと騒ぐ4人を引き攣った笑みで見守りつつ…ふと、新八は近藤に視線を向ける。同じように苦笑しながらその様子を見ていたが…どこか、表情が冴えないような気がする。

「近藤さん？」

「ん？どうした、新八君？」

「いえ……、近藤さん…他に何か銀さんに言いたいことがあるんじゃないですか？」

新八に指摘され、驚いたように目を見開けば新八は苦笑しながら続ける。

「何か凄く…言いづらそうな…それでいて、絶対に伝えなければならぬって…。そんな顔、してましたから」

「新八君には敵わんな…。流石は未来の義弟だ…」

「誰が義弟ですか、誰が」

ツッコむところはしっかりとツッコむ辺りは流石である。冗談はさておき…と、近藤は改めて銀時を呼んだ。丁度銀時は、土方と睨み合いながら火花を散らしていたが、近藤に呼ばれ、それはあっけなく幕引きとなる。

「今度は何だよ……あ、いや……。俺も聞きたいことがあったんだ。たわ。どうしても……聞きたいことが……」

「そうか……。俺も万事屋にどうしても言わねばならんことがある。だがまあ……万事屋の方から先に聞こう」

「……そんなじゃ……お言葉に甘えて……」

どこか聞きづらそうに……否、出来れば聞きたくなど無いとその表情が物語っていた。だが、聞かねばならない事実だと……銀時は腹を括る。

銀時の聞きたかったこと、それは……

「紫苑のことだ……。アイツは……何か、酷い病……なのか……？」

まさに、近藤が言わねばならないと思っていたそれだった。

銀時が離脱した事で、今度は土方と沖田、それに神楽が加わって毒舌戦を繰り広げていたが……銀時の言葉で、それが強制的に終了となる。神楽は首を傾げていたが、土方と沖田は何ともいえない表情をしている。そう、それこそさっき新八が近藤に対して言った「言いづらいが言わねばならない」というような……そんな表情である。

一瞬の沈黙。その沈黙が、僅かに明るさを取り戻しつつあった部屋の空気を再び重くした。

「……万事屋よ、俺の言わねばならんことは……紫苑の病についてだ……」

重い沈黙を破ったのは近藤の一言。

その一言は…

「…紫苑の身体はもう…いつ、限界を迎えてもおかしくは無い…」

銀時が生きてきた中で最も重く…

「1年前の今頃だった……」

最も…

「あと1年、その命がもつかどうか…それが、医者からの告知だった。つまり…“今”が…その告知の時なんだ…」

聞きたくない言葉だった。

近藤から、その言葉を聞いた瞬間…

銀時は目を見開き、その紅い瞳から…

大粒の涙を零した。

「う、そ…、だろ…」

ああ…まただ…。

「な、んで…」

どんっどんっな」...

「俺、達……また、離れ離れに……なるのかよ……ッ……!!」

ひとつひとつの言葉が、重く感じてしまっただろうか…？

いつも何気なく使っている言葉が。
いつも何気なく呼んでいる名前が。

「……………し、おん……………」

どっつして、こんなに重く…苦しいのだろうか……？

その答えは、誰も見出す事が出来るはずも無く……

ただ、涙を零しながら「何で」と呟く銀時が再び壊れてしまわない
よんっどんっ……

「銀さん」

「銀ちゃん」

その手を握り、名前を呼ぶことしか出来なかった。

真選組以外の誰も知らなかった事実。

紫苑の寿命。

それは…銀時だけでなく、その事実を知らなかった誰もが胸を痛める事実であった。

【第十二訓】桜の約束

暫く…何ともいえない沈黙が部屋を支配した。誰か、何か言おうと口を開くが…それが形になることはなく、結局口を噤くんでしまう。銀時は、衝撃の事実を聞かされてからずつと俯いたままだ。

(…やはりまだ、万事屋に知らせるのは早すぎたか…?)

紫苑という最愛の人との再会を果たし、しかしその最愛の人が目の前で倒れて錯乱、その直後に知らされた余命宣告。

喜びよりも、悲しみのほうが大きすぎるこの再会。例え銀時が望んだ事とは言えど、やはり…知らせるにはまだ少し早かったかと近藤は険しい表情をする。

その時…

「なあ…」

ポツリと…銀時が口を開いた。

「何だ？」

それに答えたのは土方である。俯いていた銀時は顔を上げて、真っ直ぐと土方を見た。いつもの死んだ魚のような目ではない…とても真剣な瞳に、思わず土方が息を呑んだ。この男の、こんな顔など…今までに見たことが無かったからだ。

「聞きたいことがある」

「俺達に答えられることであれば…なんでも…」

その気迫に吞まれ、いつものような皮肉のひとつも返せない。そこで改めて土方は思う。やはりこの男は紛れも無く、**「白夜叉」**と呼ばれた男なのだ。

「多分…お前ら真選組の連中にしか分からねえことだ」

「…それで、聞きたいことは？」

近藤が先を促せば、少し苦い表情をしながら…銀時は口を開いた。

「攘夷戦争の最中で、俺達本隊と紫苑が離れ離れになったことは紫苑から聞いてるだろ？」

「ああ、聞いているが…それがどうかしたのか？」

「…攘夷戦争後すぐに…紫苑を見つけてくれたのは、お前達真選組…なのか…？」

戸惑いながらも、しかし確実に銀時は自分の知りえない紫苑のことを尋ねる。しかし、返ってきた答えは意外なものだった。

「いや…紫苑を助けたのは数年前だ…」

「……てえことは、あの噂は…本当だったんだな…」

「あの噂ってのは…何ですかイ？」

納得したように頷く銀時と、首を傾げる沖田。しかし、万事屋メンバーとスナック・お登勢メンバーにはすぐに分かった。銀時の言う**「噂」**が何なのか。

「攘夷戦争集結から真選組が紫苑を助けるまで。その空白の時間…紫苑はどこに身を潜めていたのか…。それこそ俺は、死に物狂いで色んな情報を当たった。そんな時に…聞いたんだよ…。**「鬼兵隊に女の副官がいる」**ってな…」

そう、それは桂が言っていた噂と寸分違わないものだった。桂は銀時に隠していたようだが、どうやら噂は銀時の耳にも入っていたらしく…その事実には僅かながらにお登勢は驚く。

「じゃあ、アンタはその噂を信じていたのかい？」

「まあな。高杉は紫苑を大事にした。だから、もしかしたら…高杉のところに戻ったのかもしれないと…そう、思ったんだ…」

しかし…と、そこで銀時の表情が曇る。何故、鬼兵隊副官の紫苑が、現在は真選組にいるのだろうか？しかも捕らわれの攘夷志士としてではなく、真選組の隊士として。

「紅桜の事件の時…俺は紫苑が鬼兵隊にいと…そう思っていた。だが、紫苑は姿を見せなかった。そんな時、紫苑は鬼兵隊から抜けているという核心はあったが…なんでまた真選組に…？」

もっともな問いだろう。紫苑は真選組…いや、幕府から見れば最重要人物だ。鬼兵隊副官で、実力は鬼兵隊総督であり彼女の兄である晋助に引けをとらないといわれる手練れ^{てだ}。その彼女が真選組の隊士として所属しているということは、それ相応の理由があるはずなのだ。

「これは…俺が聞いても許される範囲の内容か？」

銀時が聞けば、近藤・土方は互いに顔を見合わせるが…やがて問題ないと判断したのだろう。2人とも首を縦に振る。「ただし」と近藤が前置きを付けた。

「正直…万事屋が今、高杉をどう思っているかは分からんが、内容はかなり…残酷だぞ？」

「…別に…どうも思っちゃいねえよ。俺と高杉は、紅桜の件で完全に

袂たもとを別わかつた。それに、どんな事でもそれが現実なら…俺はそれを受け入れなければなるめえよ。紫苑のことであるなら、尚更だ」

強い言葉を隣で聞いていた子供達はそれぞれ思う。

それ程までに、銀時にとって紫苑という存在は大切なものなのだと。

いつもはヘラヘラしていて、マダオの代名詞みたいな生活を送っている銀時。しかし、今自分達の横に居る男は…とても同一人物とは思えない。真剣な瞳も、その口ぶりも、感じる雰囲気も。

(…なんだか…銀さんの存在が遠く感じるな…)

(銀ちゃんが遠くに行っちゃっような気がするヨ…)

だからだろうか？このまま…銀時がどこか、自分達の知らないところに行ってしまうそうで…怖かった。新八も神楽も、無意識に銀時の手を握る。それに気付いた銀時は驚いたように、2人を交互に見つめた。

「新八？神楽？」

「銀さん、その…僕達が居ますからね？」

「…勝手に居なくなっちゃーヨ…」

不安そうな2人の子供達に苦笑しながら、返事の代わりに銀時はその手を強く握り締めた。不思議と痛みは感じない…優しいその手に、新八と神楽は少しだけ安堵する。

そして改めて…銀時は真選組の面々と向き合った。

「頼む、知っている限りの事を全て話してくれ…」

「分かった」

そして…銀時が知らなかった、紫苑の空白の時間が…近藤・土方・沖田の口から語られる。

一体…どれくらいの時間が過ぎただろうか…？まだ、銀時達が治療室の前に戻ってくる気配は無い。医者からは「いつもの発作なので、今日1日入院したら明日退院してもいいですよ。あと、無理さえしなければ病院内を歩き回っても構いません」と、そう言われた。と同時に、「今度、大きな発作を起こした時には命の保証はありませんので覚悟しておいて下さい」とも言われた。それでも、紫苑は決して入院するという選択をせず…真選組の屯所に戻る事を選んだのだ。そして、医者から面会許可が下りたため…現在、紫苑の隣には機械家政婦のたまがいる。

「そっか、じゃあたまちゃんは芙蓉プロジェクトで指名手配になった機械からくりだったのね…」

「私のデータには殆ど残っていないのですが、銀時様からそのように聞いております」

「フッフ、銀時様だなんて…似合わないなあ…」

どこかで見えた顔だと思ったが、まさかお尋ね者の機械家政婦からくりだったとはと苦笑する。しかし、近藤を始めとした上司や同僚はたまの事を見ても何も言わなかった。ということとは恐らく容認しているのだろうと悟り、紫苑も事情聴取のような尋問をする事はなかった。それよりも、自分の知らない間の銀時の話を聞くこと、たまにいろいろ質問をしている。

「え〜、銀時つたらたまちゃんにネジをプレゼントしたの!?趣味悪いなあ…!!女心が分かってない!!」

「いえ、私が欲しいと言ったのです。そしたら、銀時様を買って下さいました」

「そっか、たまちゃんは機械からくりだからそういうのに興味があるのね。たまちゃんはやっぱりネジとか…そういうのが好き？」

「よく…分かりませんが、とても惹かれるものがありました」

「なるほどなあ…!!あ、もしかしてそのかんざしにしているネジが…」

「はい、初めて買った“プレゼント”です」

「ふふっ…」

形は違えど、かんざしがプレゼント。

「私とおそろいね」

「……………？紫苑様もネジを買ったのですか？」

「ううん、私はネジじゃないけどね…銀時にかんざしを買ったのよ」

そう言つと、紫苑はゴソゴソと自分の持ち物を漁る。いつも肌身離さず持っていたそれ。真選組の隊服のポケットに入れている…綺麗な石の付いたかんざし。

「ほら、これよ…」

「これを、銀時様が紫苑様に贈ったのですか？」

「うん…。当時はこんな綺麗な装飾品って中々手に入らなくて…。買った時はとても嬉しかったわ…」

このかんざしと共に、紫苑は銀時から“言葉”フロボースも買った。それから随分と長い時間が過ぎてしまったが…果たして、今でもあの言葉は有効なのだろうか…ふと、思う。

「綺麗なかんざしですね。紫苑様の紫の髪によくお似合いかと…」

「もう、たまちゃんったらおだてるのが上手なんだから…!!そういうええ、スナックのお手伝いをしてるんだったわね。フッフ、それだった

らおだてるのも上手になるわね!!」

「いえ、決してそのようなことでは。銀時様が紫苑様のためにと心を込めて贈ったものであれば、きっと紫苑様が身に付けることで、とても美しく輝くと…そう思いました」

「たまちゃん…」

「そのかんざしも、きっと紫苑様から大切にしてもらって喜んでいてと思います」

「……、そっだといいなあ……」

唯一、銀時から貰ったもの。本隊から離れてしまい、孤独な戦いを強いられ何度も心が壊れそうになった時も。

鬼兵隊に再び戻り、変わり果てた兄の元で形だけの副官を務め、自分の存在理由を見失いそうになった時も。

このかんざしが、いつだって自分の傍にあった。まるでそこに銀時が居るかのよう…そのかんざしを手取るだけで、髪に差すだけで心が落ち着くのだ。

「たまちゃんは…今、幸せ?」

「……? どうしてそのような事を聞くのですか?」

「ん? だって、折角今を生きているんですもの。しかも、銀時のすぐ傍で同じ時間を過ごしている。だからかな? 少し気になったの。たまちゃんは今…幸せ?」

問われ、たまは少し悩むような仕草を見せる。暫くそうしていたが、すつと顔を上げて紫苑の瞳を見つめる。

「機械からくじの私にとって、幸せというものが何なのか…よく、分かりません。けれど…お登勢様やキャサリン様、そして銀時様、神楽様、新八様…スナックに訪れるお客様。皆様と共に過ごす時間は…私にとっては必要なものと認識しております。1人にはなりたくない」と

…失いたくないと…そう、思っております。これは、幸せ…ということなのでしょうか？」

幸せが何なのか分からないたまは紫苑に聞く。すると紫苑は笑いながら、そつとたまの頭を撫でた。

「うんうん、それが幸せっていうのよ。何気ない事で笑い合って、何気ない事で喧嘩して、けどまた笑い合って…。些細な事だけどね、それが幸せなの。フツ…たまちゃんは十分幸せなのね…」

そう…。いつだって銀時の回りは幸せで溢れていた。仲の良かった5人。些細な事で言い合いになることなど多々あったが、それでも笑い合って、辛い時には共に泣き、苦しい局面では互いに背中を預け合って戦った。その中心に居たのは、いつだって銀時だった。

「今でも…中心は銀時のまま。それは変わらないのね…」

それが嬉しくもあり、どこか羨ましくもあった。

自分の居ない間に、銀時は新たな居場所を見つけている。

そして紫苑もまた、自分の居るべき場所に身を置いている。

坂本も桂も晋助も、それぞれがそれぞれの場所で自分の成すべき事をしようとしている。

「もう…元には戻れないのかな…。昔の私達には…戻れないのかな…？」

悲しげな問いに、たまは首を捻ったが紫苑はただ微笑むだけだった。

それは…少し、悲しみを帯びた笑み。

分かりきっている事だ。

自分が真選組に身を置いていいる今、それが容易ではないことぐら
い。

桂と晋助は攘夷志士で、自分はそれを捕まえる真選組。

そして何より、晋助とは兄妹きょうだいの縁が完全に切れてしまったのだ。

どんなに足掻いたところで、もうあの頃には戻れない。

「結局…私は何も護れず、護られてばかりで…。そして、私は何も変え
られず…ただ、死を待つのみ、か……」

晴れた外を眺めながら、紫苑はポツリと呟く。病院の外に咲き乱れ
た桜が、風に舞っているそれを見て…悲しそうに微笑んだ。

「約束…守れなかったね…」

一方、とある一室では…。

「これが…俺達が紫苑から聞いた全てだ…」

真選組の面々が、銀時に紫苑から聞いた全てを丁度話し終えたところ
だった。予想していた以上に残酷な現実。

実の兄との、刀を交えての兄妹きょうだい喧嘩。

それが決定的に2人の縁を切ってしまったと本人が悲しげに話していたことを、真選組の3人は鮮明に覚えている。

「……なんで……。兄妹きょうだいなのに……。それじゃあ、私達と変わらないネ……」

神楽は恐らく、自分の兄である神威の事を思い出したのだろう。悲しげに表情を歪めながら俯いてしまった。

「……銀さん？」

すべての話を聞き終えてから、銀時は俯いたまま……何も言わない。しかし、銀時から感じる雰囲気は……例えようも無いものだった。

殺気とも違う……。かといっていつものだらしない雰囲気でもない。

一体……銀時は今、何を考えているのだろうか？

その場にいる誰もが、分からず……互いに顔を見合わせては首を横に振ったりと、そんな事を繰り返していた。

そんな彼らの戸惑いをよそに……ポツリと銀時が呟く。

「バカヤロー……。やっぱ……お前まへら兄妹きょうだいだわ……」

ククッ……と肩を震わしながら。しかし、その声はどこか震えている。

「兄妹きょうだいの縁が切れた？んなことあるわけねえだろ。アイツは……晋助は今でもお前のことを想ってる……」

その言葉に、ピクリと反応したのは土方だ。

「お前…今までの話を聞いてなかったのか？^{テメエ}自分の妹に刀を向けて、ズタズタにしたんだぞ？んな野郎が、今でも紫苑のことを想ってるだア？」

「ああ…想ってる。アイツは今でも紫苑の事を大事に想ってる…」

「じゃあ聞くがよ、万事屋。テメエは何を根拠に、んなことが言えんだ？」

剣呑を帯びた土方の問い。口調は荒かったが、確かに土方の言う事はもつともで…そこにいる全員が、土方と同じ疑問を抱いていた。

話を聞く限りでは、晋助と紫苑の間には完全な亀裂が生じている。

しかし、銀時はそれを否定している。否定するからには、それなりの確信があつてのことなのだろう。全員の視線が銀時に集中した。

「高杉…いや…晋助はよお。昔っから背が小せえから、男もんの着流しが合わなくてなあ…。いっつも女もんの地味な着物を着てたんだよ…」

どこか懐かしそうに遠くを見ながら、銀時は話す。

「ちょっと前に將軍が来た祭りで、^{からくり}機械技師とその^{からくり}機械が起こした騒動…覚えてるだろ？」

「…あー、あの祭りですかイ。覚えてやすが…それがどうしたんでイ？」

「そんな時に、俺は…久々に晋助と再会した。吃驚したぜ…雰囲気も、何もかも…昔のアイツと変わっちゃまってたからなあ。けど…ひとつだけ、変わらないものを見つけたんだ…」

どんなに変わっても、紫苑を想う気持ちだけは変わらないと言わんばかりに…

「紫苑が攘夷戦争の物資調達の際に、気に入って買った…同じ柄で色違いの着物…。蝶があしらわれた着物でな、ひとつは桜色を基調とした色で、そしてもうひとつは…紫を基調とした色だった…」

「……!!それって、高杉さんが着ている…!？」

その、着物を纏っていた。

「ああ、新八の言う通りだ。アイツの着物…ありゃ、紫苑の着物なんだよ。紫苑とはぐれて、攘夷戦争が終わって…着物だけが俺達の手元に残った。どうするか考えた結果、片方は晋助が持つ事になった。それが…今、アイツが着てるやつなんだよ…」

「だが万事屋よ、それだけでは紫苑と高杉の縁が切れていないとは言いきれんだろう。単に奴が、その着物を好んで着ているだけかもしれない」

近藤のもっともな言葉にその通りだと言わんばかりに土方と沖田も頷く。しかし、銀時だけは違った。

「アイツな、派手な事が好きな割りに…派手な装飾品は滅茶苦茶嫌いであ…。着物は特にこだわってやがったんだわ。出来る限りシンプルで、色も派手な色じゃない…黒とか紺とか…そんなんばっか。柄入ってない無地の着物なんて、女ものの着物じゃなかなか見つからねえから、そりゃもう苦労したわけよ…」

「………、片目の着物…派手すぎるネ」

「だろ？誰の目から見ても派手な着物。だから、知らねえ奴からすりゃあ…ただの派手好きにしか見えねえだろうよ。けど…アイツが今着ている着物は…アイツ好みの着物じゃねえんだよ…」

「つまり……紫苑という存在を忘れないように着ていると……。アンタはそう言いたいのかい？」

「言いたいもなにも、事実だ。ただそこに着物があるから着る、なんて……そんな単純な奴じゃねえからなあ……晋助は……」

それだけで……2人の縁が切れてないと、本当に言い切れるのだろうか？しかし、銀時の口調はとてもしっかりしており、確信があるといわんばかりの表情をしている。

「それに……今の鬼兵隊、副官がいるって情報は真選組そっちにあるか？」

問われ、土方は鬼兵隊の構成を思い出す。

「鬼兵隊は総督の高杉、幹部の武市、来島、河上で構成されている。そこに……鬼兵隊副官というポジションは存在しない。それがどうした？」

不審げに問えば、「それぞれ」と銀時は笑いながら言う。

「元々、鬼兵隊には副官がいた。攘夷戦争の時も、そして……まあ一時的とはいえ、復活した直後の鬼兵隊にもだ。けど、紫苑が抜けても副官のポジションは埋まらない……。妙だとは思わねえ？」

「確かに、旦那の言う通り……普通だったらすぐに副官をそこに当てまさア。土方コンチクショーがいなくなったら、確実に俺が副長の座を頂くように……」

「オイッ!!総悟、テメツ……!!……チツ、それがどうしたんだよ万事屋……」

今は沖田と言っている場合じゃないと、自分の感情を抑えて再び土方は銀時に視線を戻す。

「理由は…俺と同じだ…」

「万事屋と同じ？そりゃ一体…？」

「俺は…俺の隣は紫苑だけのものだと思っている。だから…今、俺の隣に女はいない」

「……まさか…!? 鬼兵隊副官のポジションは紫苑でしかない…高杉はそう思っているのか…!？」

「アイツが副官を従えてねえ理由なんざ、考えなくても分からア。アイツにとって、鬼兵隊副官のポジションは自分の妹だけ…紫苑だけにしか許せないポジションなんだよ。アイツは、仲間が認めるほどのシスコンだったからなア…」

当時を思い出したのだろう。ククツと至極楽しそうに笑いながら銀時は話す。それを言えば、いつだって晋助は声を荒げて「違う、ただ大切なだけだ!!」と言っていた。それをシスコンと言うのだ…そう言っつてよく笑ったものだ。

「じゃあ…なんで高杉って男は、紫苑を斬ったんだい？そんなに大切にしてるなら…何もそんな事をしなくたっていいじゃないのさ。とても大切にしているようには思えないねえ…」

そう…。そこにいる銀時以外の者が、今でも晋助が紫苑を想っている…ということ信じられない理由はそこにある。

本当に大切ならば、何故…紫苑を斬ったのか？

鬼兵隊脱退を望んだ紫苑に、何故刃を向けたのか？

紫苑自身は、鬼兵隊から抜けるという事は直結して死を意味すると言っていた。それは幹部達も例外ではない、とも。しかし、実の妹を思うなら…隠れて逃がす事など、造作も無かつただろう。それなのに何故、晋助は紫苑に刃を向けたのか…？

「……俺も…それだけが分からない。ババアの言う通り…なんでアイツは…紫苑を斬っちまったんだろうな…」

それは銀時にも分からない事。それでも、銀時には「晋助は今でも紫苑のことを大切に想っている」という確信があった。大切に想っているのに何故…刃を交え、斬ってしまったのか。

もしその答えが分かる人物がいるとすれば、それは紫苑本人か…あるいは斬った張本人である晋助だけだろう。

「…アイツら…ホント、不器用な兄妹きょうだいだったからなア…」

その言葉を最後に、再び室内は静寂に包まれる。

銀時はどこか悲しそうに窓の外を眺めていた。

「そっか…、もう春なんだな…」

桜の花びらが舞っている。

その光景を見たとき、銀時は思った。

(もう…あの約束は果たせねえなア…)

晋助とは袂たもとを別わかってしまった。しかし…紅桜の戦いで僅かに垣間見た晋助の表情が…銀時は今でも忘れられないのだ。

“お前の隣に紫苑はいないのか?”

そう…問っていたかのような…あの瞳が。

春、という言葉が銀時の口から漏れた時…。子供達は揃って「あつ!!」と声を上げた。何事かと全員が2人に注目する。

「そうヨ、私達伝言を預かってたネ!!」

「危ない危ない、忘れるところでしたよ銀さん…!!」

「ん？俺に伝言？誰からだよ？」

「銀ちゃんとしーちゃんに伝言アル!!」

「えっと…とある方、からです…」

流石に真選組の連中の前で桂の名前を堂々と出せるはずもなく、そこは新八が濁した。

「…ふうん、そっか…。んで？その伝言って何だ？」

それでどうやら察したらしい銀時は先を促す。新八が口を開きかけた…その時だった。

「コンコン…」

ドアのノック音が聞こえた。

「はい？」

近藤が返事をする。医者だろうか？そう思ったが、そっと開かれた扉の先に居たのは…

「紫苑!？」

「へへっ、来ちゃった」

集中治療室に居るはずの紫苑だった。真選組の3人と銀時は立ち上がって驚くが、その様子を見て紫苑は至極楽しそうに笑う。

「ちょっと、みんな驚きすぎよ」

「無理すんな!! さっきぶっ倒れたばっかだろっが!!」

土方がそう言えば、「それだけ」と紫苑は微笑みながら言う。

「いつもの発作だから、明日退院してもいいって。それから、無理しない程度だったら病院内を歩いてもいいってさ」

「だから、抜け出てきたわけじゃないのよ?」と悪戯っぽく笑いながら彼女は言った。そんな紫苑を見て、呆ける真選組の面々。しかし、銀時だけは違った。

「ククツ… 本当にお前、変わらねえのな。そーゆーとこ、昔のまんま」
「あら? 銀時だって同じよ? 死んだ魚のような目をして… ゼーんぜん変わってない。相変わらず甘いもの好きも治ってないの?」

「おいおい、人を病人みたいに言うなって」

「いやいや、あれはもう病人の域ですよ、銀時君? てか、既に糖尿病とかなってたりする?」

「バツキャロー、まだ糖尿病予備軍だコノヤロー!!」

「それってもう、限りなく糖尿病一歩手前じゃん…」

うつるせえ、と笑いながら銀時は紫苑に歩み寄り… そっと、その身体を抱きしめた。それを受け入れ、紫苑もまた銀時の背中に腕を回す。

「……心配した……」

「うん…」

「生きてるのが、死んでるのか… それすら分からねえで…。 ずっと… 生きた心地がしなかった…」

「私も同じ。銀時が生きていたのか、死んでしまったのか……。 兄さんは銀時のこと教えてくれなかったし、その後も銀時の情報は何も入

らなかったから…ずっと、ずっと心配してた」

「やっとだな…」

「うん、そうね…」

2人とも、幸せそうに微笑みながら互いの温もりを確かめ合うように抱擁する。その光景は見ていて、とても微笑ましくもあり…しかし、これからのことを考えると…なんとも切なくなる光景でもあった。

その時ふと、銀時はあることに気付く。

「お前、」のかんざし…」

そう、それは紫苑が髪に差しているかんざし。他の誰でもない、銀時が攘夷戦争の始まる前に贈ったかんざしだ。

「覚えていたの？」

「当たり前だろ、俺が贈ったんだから…」

まだ持っていたのか、などと思いつつとそのかんざしに触れる。思えば、自分はこのかんざしと共に、言葉を贈った。それは、ずっと自分の隣に居て欲しいと…そう願う言葉だった。

紫苑もまた同じことを思う。自分はこのかんざしと共に、銀時にプロポーズという言葉も貰った。それは、銀時の隣にずっと自分がいるというこの上ない幸せの言葉だった。

果たして…その言葉は、まだ有効期限を過ぎていないだろうか…？

「銀時」

「紫苑」

互いに、互いを呼ぶ声が重なった。2人は驚いたように視線を交わしたが…プツと銀時が噴出し、紫苑の頭をポンポンと撫でる。

「そつちから先にどーぞ」

「…ん、じゃあ…お言葉に甘えて…」

どこかで不安もあった。銀時は優しい人だから、その隣には自分以外の誰かがいるのではないかと。もし誰も居なくても…もう、銀時の中に自分という存在は居ないのではないかと。

しかし…言わなければ…聞かなければ、きっと後悔する。

意を決して、紫苑は口を開いた。

「…」の戦争が終わったならよ…、一緒に暮らそう。だからな、その…俺の嫁さんになって下さいッ!!マジでお願いします!!紫苑以外の奴とか、俺には考えられねエ!!マジでお願い!!断られたら、俺泣いちゃう!!…だったっけ?」

「……お前…!!」

「フッフ、どんなに時間が経ってもね…この言葉だけは忘れられない。ううん、忘れなくなかった…。私も、銀時以外の人は考えられなかったから。それは…今でも変わらない…。ねえ、銀時?このかんざしと一緒に贈ってくれた…あの時の言葉は…フロボース今でもまだ有効かしら…? 私は、銀時の隣にいてもいい…?」

消えない不安。

晋助は自分のためにと鬼兵隊副官のポジションを用意していた。

しかし結局それも、変わり果てた鬼兵隊と晋助から逃げるように…自らそのポジションを捨てた。

銀時だけは変わってないと信じた。

けれど、もし…銀時の隣というポジションにもう自分の居場所が無かったら…？

どこかで覚悟はしていたが、それを考えると…とても辛い。

僅かに漂う沈黙の時間。しかしそれは…

「…バカヤロー…全然有効に決まってるだろうが…。俺の隣は、いつだって…紫苑の為にだけ存在するんだよ。だから…お前さえ嫌でなければ…あの時の気持ちはまだ変わっていないなら…」

俺の隣に、居てくれ…

強く抱きしめて銀時がそう言えば、紫苑は幸せそうに笑う。

「あーあ、あんなに幸せそうに笑って…。やっぱり、紫苑は旦那じゃないと駄目なんですねィ」

「そうだな…。紫苑があんなに幸せそうに笑っている姿を、俺は初めて見るよ…」

「まさか、野郎が紫苑の婚約者だったとは驚きだし、幸先も不安だが…まあ、あの様子じゃ…何を言っても、もう二度と離れることはねえだろ」

そんな2人を見つめながら、真選組の3人は思い思いの言葉を口にしていた。一方、万事屋の子供達はというと…パタパタと、2人の元まで駆け寄る。

「銀さん、いい加減紹介してくださいよ!!」

「そーネ!! 私達にも教えるヨロシ!!」

2人の子供達の言葉に、「あー、そうだな…」と恥ずかしそうに笑いながら、今度はポンポンと子供達の頭を撫でる。

「まさか…銀時の隠し子!？」

「何でそーなる!?!んなわけねえだろ!!」

「あっ!!私、まだ銀時が言おうとしたこと聞いてない!!銀時は何を言おうとしたの?？」

「ん〜…?まあ、言う必要はねえかなあと…。だから忘れろや」

「え、嘘でしょ!?!気になる!!教えてよ、銀時!!」

「はいはい、じゃあお前らに紫苑のことを紹介するからな」

「銀時!!無視するなーっ!!この天パツ!!」

「…お前、ホント相変わらずなの…。今の言葉、グサツときたわ…グサツと…」

「しょうがないネ、本当のことアル」

「今更じゃないですか」

「そつよねー?」

「おいおい…俺の味方は居ねえのかよ…!!」

紫苑と銀時、そして子供達の会話にその場の空気が和む。ただ紫苑が加わっただけで、さっきまではただ重いだけだった空気が軽くなり、そしてとても明るくなる。

「ホント…俺ア旦那にも紫苑にもかないませんねィ…」

そんな様子を見ていた沖田はそつ呟き、微笑んだ。

暫く他愛ない話をしていたが、やがて…神楽は銀時の手を、新八は紫苑の手を握った。

「お、何だ神楽?」

「どっしたの？」

銀時と紫苑の疑問に、子供達は笑いながら言う。

「ある電波野郎からの伝言ネ!!」

「僕達にはさっぱり意味が分からなかったんですが、2人なら…この言葉だけで分かるって聞いていたんですよ…」

電波、と言われて2人の脳裏を過ぎったのは勿論、桂の姿である。紫苑はクスクスと笑いながら、銀時はめんどくさそうに頭を掻きながら子供達を見つめる。

「そーいやお前ら、俺と紫苑に何か伝える事があるっつってたな…。その電波野郎からの伝言か？電波みたいな伝言だったら、アップパーカット食らわせるって伝えておけや」

「それで…どんな伝言だったの？」

紫苑の問いに、2人は口を揃えて言う。

「「そろそろ桜が見頃だぞ」」

「「って…って…言っていましたよ？」」

「それだけで分かるって電波は言ってたネ。しーちゃんも銀ちゃんも分かるアルか？」

桜…

その言葉を聞き、銀時と紫苑は目を見開く。

そう、それは攘夷戦争の最中で交わしたあの約束…。

戦争が終って、全員が無事に生きて戻れたらその時はその桜の

木の下で、宴会しようよ!!

「分からないアルか？やっぱり電波野郎の飛ばした、ただの電波ネ？
アップパーカット確定アルか？」

「そもそも、肝心な部分が抜けてますよね……。これじゃあ、何が言いた
いのか……。やっぱりアップパーカットですね……」

神楽は内心で桂に「使えない野郎アル」などと悪態を吐いており、新
八は苦笑していた。

だが…銀時と紫苑は互いに視線を交わす。

そして…クシヤリと笑った。

「そうね、桜が…見頃だわ……」

「ああ、そうだな……。ったく、電波の癖に覚えてやがったのかよ……」

驚いたのは子供達である。あれだけの言葉で、この2人は桂の言葉を
を理解したのだ。

「死んだら仲間はずれ、だっただけ？」

「そうよ？みんな生きてる、けど……」

あの時の約束は、果たせそうに無い……。

桂自身は、紫苑が真選組に身を置いていようが居まいが、恐らくは
関係なく花見をしようと言いだすに違いない。

宴好きの辰馬も、連絡をすればどんな事をしてでも時間を作って地
球にやって来るだろう。

しかし…晋助はどうだろうか？銀時と桂は袂を別ち、紫苑は兄妹の縁が切れてしまったと思っている。

しかし本当は…銀時も紫苑も、そんな事など望んではいなかったのだ。

だが、自分達が師と慕った人が願っていたことは、全く逆の事をしようとしている晋助がどうしても許せなかった。その目を覚まさせなければならぬ…そう思った。

次に会った時には全力で叩ッ斬ると…桂と共に銀時がそう宣言したのは、まだ記憶に新しい。

「桜の木の下で月見酒…。言い出しっぺが不在、か…」
「やっぱり、全員では無理よね…」

それでも。

交わした約束はやはり、守りたい…。

「萩の私塾の桜…もう満開かしら…？」
「早く行かねえとなあ…」

2人は窓の外を眺めながら、ハラリと舞う桜の花びらを見つめる。

交わした約束…

それを果たす時は、もはや今しかない。

紫苑の命は既に、灯火が消えようとしているのだ。

「…なんだ？お前達、何か約束でもしてたのか？」

近藤が聞けば、紫苑は微笑みながら頷く。

「ええ、とても大切な約束を…。何があっても、違^{たが}えたくない約束を…」

遠くを見つめる紫苑の瞳には果たして、何が映っているのだろうか？

そんな紫苑を見つめながら…銀時は思う。

(晋助…お前、本当にこのままでいいのかよ…ッ…。紫苑…もう居なくなっちまうんだぞ…!!お前ら…兄^{きょうだい}妹^{まい}だろうが…!!不器用も大概にしゃがれよ、コノヤローッ…!!)

あの時交わした約束を、寸分違^{たが}えることなく叶えたいと。

そこには銀時が居て、紫苑が居て、桂が居て、坂本が居て、そして…晋助が居る。

桜の木の下で月見酒をしながら、バカ騒ぎをして…

(…確かに夢のような話かもしれねえ。今の状況を考えると、そりゃ無理だろうよ。けどな…)

攘夷だとか国を壊すだとか…そのような事全てを忘れて、酒を酌み交わすことは…もう出来ないのだろうか？

紫苑と同じように、銀時も窓の外を見つめる。しかし、紫苑とは違い…その瞳はとても強く、真っ直ぐと先を見据えていた。

(簡単に諦めるほど、物分りのいい人間じゃねえぞ俺ア……。無理矢理にでも晋助を引き摺って行って……。紫苑に会わせてやらア……。!!)

その瞳は、決意の眼差しだと……。横でこっそり盗み見た紫苑だけが気付いた。

何を決意したのかまでは分からなかったが……

(……そういつ、強い瞳で真っ直ぐと先だけを見据える貴方が……。私は好きなの……)

ただ、その優しく紅い瞳が強く輝く姿を、紫苑は静かに見つめていた。

【第十三訓】 追憶　〜夜叉と鬼の恨み〜

立ち話では紫苑の身体に障るということ、紫苑も椅子に座る。もちろん、座った場所は銀時の隣だった。本当は新八がそこに座っていたのだが、気を利かせて譲ったのだ。「気を遣わなくてもいいのよ」と大慌てで言ったが、新八は嫌な顔ひとつせず…むしろ、自分がそうしたいのだと言って、席を移動したのだ。現在は神楽の右隣に座っている。

「えーっと改めて…。真選組の奴らはいいとして…そっちのババアは、俺が万事屋を営んでる下の階でスナックをやってる妖怪…アベシツ!!」

「お登勢だよ、よろしくね」

「宜しくお願ひします、お登勢さん。銀時がご迷惑をお掛けしていると思ひますが、本当にすみません」

「なあに、気にしちやいないな。今に始まった事じゃないからねえ…」

お登勢の一撃で伸びてしまった銀時が変わって、恐らく一番迷惑を掛けているであろう家主に頭を下げる紫苑である。

「そして、こっちは従業員のキャサリンさね」

「キャサリンデス。宜シクオ願シマス」

「僕は銀さんの営む万事屋の従業員の、志村 新八です」

「…志村…？もしかして、妙ちゃんの弟さん…？」

「姉上を知ってるんですか？」

「ええ、まあ…うちの近藤さんが…ほら…ねっ？」

「あはは…」

「私は神楽アル。そのの駄眼鏡と銀ちゃんと一緒に万事屋やってるネ」

「そっか…!!うん、宜しくね」

紫苑に抱き付いてきた神楽の頭をそつと撫でながら…ふと、紫苑は思う。

「キャサリンさんは…天人ですね？そして、神楽ちゃんも…夜兔族かな？」

「……？ソウデスガ、ソレガドウカシマシタカ？」

「凄いな、何で分かったアルか？」

「神楽ちゃんの肌、真っ白だし、夜兔族は番傘を使って戦うから…」

攘夷戦争では夜兔族とも戦った。それはもう、苦戦を強いられる戦いだっただが…夜兔族が日の光に弱いため番傘を使っていることも、その番傘を武器としている事も知っている。

しかし、重要なのはそこではない。紫苑にとって重要なのは、銀時が、天人と一緒に過ごしている”ということなのだ。

「あたた…、ババア!!本気で殴るな、本気で!!一瞬、お花畑が見えたぞ!!」

「ねえ、銀時？」

「お、どーした？」

「……銀時はいい意味で変わったのね…」

ニコリと笑う紫苑に、意味が分からないとその場にいる全員が首を傾げる。銀時自身も、何を指してそう言っているのか分かっていないらしい。

「…キャサリンさん、神楽ちゃん…気分を害されたらごめんなさいね。……どうせ銀時のことだから…貴方、何も自分の過去の事なんて話してないんですよ？」

「ああ？いや、話したよ？俺が攘夷戦争に参加してたことも、俺が白夜

又だったことも」

「……いいの、真選組の前でそんな事言っつて？御上おかみからは勅命ちやくめいが下りてるのよ？」

近藤達を指差しながら紫苑は不安げに聞くが、銀時はクシヤリと笑いながら頷いた。

「そいつらにもさっき話した。ほおら、ちゃんとして過去は話してんだろ？」

「……けど、それ以前のこととは？」

それ以前のこと……。つまりは、攘夷戦争に参戦するきっかけとなった理由だ。それは、真選組の面々は勿論の事、お登勢達もそして新八達も知らない。否、真選組のメンバーも紫苑が攘夷戦争に参戦した理由までは知らないのだ。

「もう……話すべきよ。私もそう思ってる……」

「……けどなァ……」

銀時が過去を話したからない理由。それは、銀時が天人を憎んでいるからだ。この場には、キャサリン、そして夜兔族である神楽がいる。だから銀時は話すことを渋っていた。

しかし……

「……変わったなら、大丈夫よ……。きっと誰も傷付かない。だから話すべきよ……」

「……わーった、話すよ……」

やれやれと頭をかきながら、銀時はフウと小さく息を吐く。そしてキャサリンと神楽に視線をやって……口を開いた。

「俺は……皆殺しにしたいほど……天人を憎んでいた。心の底から……」
「銀時に同じく、私もよ」

突然2人の口から出た言葉は、とても衝撃的で……その場に居た誰もが息を呑んだ。キャサリンは大して気にしていない様子だったが、やはり子供の神楽にはショックだったのだろう。動揺を隠せずにいる。

「……お前らがそこまで天人を憎む理由は何だ？」

土方が問えば、紫苑は口を開こうとして……俯いてしまった。その代わりに、銀時が話し始める。

「俺らが攘夷戦争に参戦するよりも前の話だ。俺は……戦孤児だった。戦で死んだ奴らから食いもんや金目の物を剥ぎ取って……そうやって生きていた。こんな派手な頭と瞳の色をしてっから……」屍を喰らう鬼”なんて言われて……人間以下の扱いを受けてきた……」

目を閉じれば、今でも鮮明に思い出すその光景。死体の山の中で、拾った刀を持ちながら金目の物や食料を漁る自分。向かってくる敵は、拾った刀を振り回して形振り構わず殺していった。

そんな……地獄のような場所で、人間以下の生き方をしていた銀時に……ある人物が手を差し伸べてくれたのだ。

「けど……そんな、屍を喰らう鬼”を拾ってくれた……物好きな人が居たんだわ……」

屍を喰らう鬼が出ると聞いて来てみれば……君がそう？またずい分とカワイイ鬼 がいたものですね……

優しく微笑むその人。自分の刀を投げて寄越した、その人は…

人に怯え、自分を護るためだけに振るう剣なんて、もう捨て
ちやいなさい…

微笑みながら手を差し伸べ…

くれてあげますよ、私の剣。そいつの本当の使い方を知りた
きゃ付いて来るといい…

居場所を与えてくれた。

そして…

敵を斬るためではない、弱き己を斬るために…

大切な事を…

己を護るのではない、己の魂を護るために…

教えてくれた。

その人こそ、銀時が絶対の師と慕い、また桂や高杉きよつた兄妹も同じよう
に慕った男。

「吉田 松陽先生…、俺と紫苑、ツラ、そして晋助…。4人が慕って
いた、大切な人だ…」

「私達の中心だった人と言っても過言ではないわ。松陽先生は私達
に、学問だけでなく、剣とはなんたるかを教えてくださった方。とて
も、優れたお方だった…」

銀時や紫苑から語られる、吉田 松陽なる人物の存在。しかしそれ以前に、新八と神楽は銀時の過去に胸を痛めていた。

「銀さんが…そんな風に呼ばれていたなんて…」

「何で…、そんな…」

子供達の言葉に銀時は苦笑しながら「仕方あるめえよ」と言う。

「あん時は、攘夷戦争真っ只中で…周りの人間達はピリピリしてたからな。髪の色、瞳の色…。何もかもが異端な俺は、どうあっても受け入れられない存在だったんだよ…」

「その旦那を受け入れてくれたってエ人が…」

「私達の恩師。先生は私塾を開いていて、子供達に色々なことを教えていたわ」

今でも鮮明に思い出すのは、剣の稽古で一本を取った紫苑に「よく頑張りましたね」と微笑みながら頭を撫でてくれるその姿。

「それで…その先生はどうなさったんだ？いや、それ以前に万事屋と紫苑が天人を恨む理由と、その先生と…何の関係が…？」

近藤が思案しながらそう聞けば、その場の空気が変わった。

ゾツとするほど、冷たいものに。

それにいち早く気付き反応したのは、真選組の3人と神楽だった。沖田は無意識に刀に手を掛けている。近藤、土方、そして神楽は…この言い様の無い空気に飲まれそうになるのを必死に堪えていた。

そう…この2人から感じるのは殺気だ。

銀時から感じる殺気は、先ほどの医者に向けていたそれ以上に凄まじく、紫苑から感じる殺気は…御用改めなんかでかもし出す殺気とはまるで違っている。

憎悪の籠った殺気だ。

「……、じめんなさいね……。この話になると…歯止めが利かなくなるのよ。」

同僚達の変化に気付いた紫苑は、表情は決して変えず…それだけを口にする。

「特に…銀時にとっては…」

そこまで言うと、紫苑はチラリと銀時の様子を伺う。紅い瞳は死んだ魚のような目ではない。ギラギラと…それこそ、紫苑がよく知る、かつて「白夜叉」と恐れられていた時のソレと酷似していた。

「銀時、落ち着いて」

「分かってる」

「分かかってないわ。子供達が怯えてる。気持ちは分かるけど、今は落ち着いて…」

「……………」

紫苑に言われ、ハアと溜息を吐くとスツと立ち上がって窓際に足を進める。そこにはたまが立っていたが、気にすることなく…気分を紛らわせるように外を眺めていた。紫苑も自分の荒れている気持ちを静めようと、深呼吸をする。ようやく、場の空気がある程度落ち着いた頃…静かに紫苑が口を開いた。

「すべてを話すわ。私達が何故、天人を憎み、何故…攘夷戦争に出たのかを…」

「あア…俺達の過去に何があったのかを…」

「こうして、紫苑と銀時の口から…2人の…否、銀時・紫苑・桂・晋助の過去が語られた。

* * * * *

それは…夏の蒸し暑い日のことだった。

「銀時ー、今日はうちに来るの?」

「ううん、今日は先生の手伝いをするから…ここに泊まる」

「そっか…じゃあ兄さんにもそう言っておくね!!」

「おう」

銀時は戦孤児故、自分の家が無い。最初の頃は松陽以外の人間に決して心を開かなかった銀時だったが、時間が経つにつれて…銀時の受けた心の傷も癒えていき、友と呼べる存在も出来た。そして…大切に想う人も。

晋助も紫苑も、銀時のことはとても大切にしていた。他の子供達が見ても分かるほど、この2人は特に銀時のことを大切にしていたのだ。だから、銀時を自分の家に招き泊めることは日常となっていた。時々、銀時はこの私塾兼松楊の家に泊まる事もあったが…それ以外は、大半が高杉家で世話になっている。高杉家の者達も銀時のことを快く迎え入れてくれる為、銀時も本当の家族のように慕っていた。

「おや、紫苑はもう帰るのですか?」

「はい!!コタローと途中まで一緒に帰ります!!」

「ふふっ、道中気を付けるのですよ?」

「はい!!さようなら、先生!!また明日!!」

「はい、また明日」

「バイバイ、紫苑!!」

「うん、銀時もまた明日!!」

いつもと同じ光景。

松陽と銀時で紫苑を見送り、その背中が見えなくなるまで見送った後は私塾に戻って松陽の手伝いをする。

そう…松陽の家に泊まった時はそれが銀時の日課だった。

その日も、同じように過ごすのだと…そう、思っていた。

しかし…、日も暮れて寝る準備をし始めた頃。

1人の男がやってきた。

興味を持った銀時は影で、松陽と客の様子を見ていたが…ふと、銀時はあることに気付く。

(アイツ…人間じゃない。それに…血の臭いがする…)

それは、長い事戦地に居たからこそ分かる臭い。

そう、その男から漂ってきたのは…

あの、戦地で自分がいつも見に纏っていた臭いと…同じだ。

その瞬間、銀時の脳裏で“危険だ”と警鐘が鳴り始める。あの客は危険だと。招かざる客だと。

「せっ…!!」

銀時はすぐに松陽の元に駆け寄ろうとした。だが…

「銀時!!来てはなりません!!」

松陽がそれを止めたのだ。その表情は酷く焦っており、それこそが…緊急事態を告げているようなものだった。

銀時、と松陽が名を呼んだ瞬間…

「ほう、その子供が…“屍を喰らう鬼”か…」

傘を被り、真っ黒のマントに身を包んだ客は…口元に嫌な笑みを浮かべた。

“屍を喰らう鬼”

随分と聞かなかった、自分のもう一つの名に…銀時の動きがぴたりと止まる。

「銀時、逃げなさい!!」

松陽の声で我に返り、気付いた時には…

目の前に、男が立っていた。自分に向けて、刃が振り下ろされる。

もう駄目だと…そう思った、その刹那。特有の金属音が玄関に木霊

した。

「先生!」

「くっ…!!」

自分と男の間に割り込んだ松陽が、自分の刀で男の太刀を受け止めたのだ。

「銀時…早く、奥の部屋に…逃げなさい…!!」

「けど、先生が…!!」

「早くお行きなさい!!」

いつもの温和な松陽からは想像もつかない切羽詰った怒声。いつもと違う松陽に戸惑いながらも、銀時は少しずつ後ずさりする。

しかし、決して銀時は男から目を離さなかった。否、いな離せなかった。

この男が、自分の事をずっと見つめていたから。まるで、銀時を射殺さんとするかのようじ。

ある程度離れたところで銀時は立ち上がり、すぐに奥の部屋へと走る。しかし、逃げる為ではない。

「俺は決めたんだ…!! 護るために剣を振るうって…!!」

銀時の手には、あの日…自分を拾ってくれた時に、松陽が投げて寄せ越した彼自身の刀。銀時は、今こそこの刀を振るう時なのだと…そう思ったのだ。

(俺だって強くなったんだ…!! 俺が、先生を護るんだ…!!)

「ほう、流石は鬼といわれるだけのことはある…。いや、鬼なんて生易しいものじゃあない。その牙は…夜叉だなア…」

ニイツと嗤う男。それがまた銀時の逆鱗に触れ、一度体を引いた銀時は別の体勢で男に斬りかかる。だが、それも容易く受け流された。

男と銀時の間では、圧倒的に力の差がありすぎるのだ。

「その程度では俺を殺す事は出来んよ。松陽があの有様だ…」

「テメエなんか松陽先生の名を軽々しく口にするんじゃないやねえッ!!」

また、銀時は体勢を変えて男に襲いかかった。

グサツ…!!

初めてその刃が、男に届く。驚いたように男は目を見開くが、しかしそれと同時に楽しそうに口元を怪しく歪めた。

「なるほど、なるほど…。流石は、“屍を喰らう鬼”…。しかし、その程度でこの俺を倒す事は出来んよ」

確かに手ごたえはあった。

なのに、目の前の男はまるで痛みなど感じていないかのように…ただ嗤っているだけだ。

途端に、銀時の中に初めて、“恐怖”が生まれる。

(何だ、コイツ…!?)

バツと刀を男の身体から抜き後退すると、刀を構えたまま男を睨

む。一方の男も、同じように銀時を見つめていたが…明らかに、銀時のそれと違っている。

面白いおもちゃを見つけたとでも言わんばかりの…笑い。

ゾツとするようなその笑みと殺気に当てられ、一瞬意識が飛びそうになった銀時だったが必死に気力を振り絞って何とか耐える。

男が僅かに動いた。

咄嗟に、銀時も刀を構えなおす。

しかし、次の瞬間…

ザシュツ…!!

銀時の脇腹に鋭い痛みが走った。

白い寝巻きが次第に赤く染まる。

「ガハッ…!!」

引き抜かれた刀は赤く染まっており、栓をなくした傷口からは留まることなく血が流れ落ちる。痛みにもがいていると、男はその様子を至極楽しそうに眺めていた。

「松陽も本当に面白い子供を拾ったものだ。だが…」

遊びは終わりだと言わんばかりに、男は銀時に向かって刀を振り上げる。

「子供とはいえ、私の姿を見られたとあっては…生かしておくわけにはいかん。死ぬ…鬼よ…」

振り下ろされる刀。咄嗟に、手にしていた刀で受け止めようとしたが…傷が痛み思うように身体が動かない。

(殺される…!!)

そう思って目を瞑った。

すべてを諦めた。

ここで自分の命は終わるのだと…そう思った。

しかし、いつまで経っても予想した痛みは訪れず。

そっと目を開いたその先にいたのは…

「しょう、よう、せん、せ…？」

“鬼”と呼ばれた自分を、本当の我が子のように大切にしてくれた恩師だった。

「銀時…、すみません。怖い思いを…させてしまいましたね…」

フワリと…いつもと同じ優しい笑みを浮かべる松陽。

しかし…

「あ…、ああ…!!せんせ、ッ…!!松陽先生エエエエエ!!!!!!」

その脇腹は、男の振り翳した刃に貫かれていた。銀時の顔にパタパタと…松陽から流れ落ちる血が付着する。そんな様子を、ただ銀時は呆然と…涙を流しながら見ていることしか出来なかった。

「ほう、あれだけの傷を負わせてもなお、まだ動くか…。流石は松陽だな…。しかし、落ちたものよ。ガキ一人を守るために、自らの命を投げ捨てるなど…」

男は吐き捨てるようにそう言つと、松陽を貫いていた刃を抜く。「ガハッ」と松陽が小さく呻けば、男は至極楽しそうに嗤っていた。

銀時の瞳からは涙がボロボロと零れ落ちる。しかし、松陽はただ満足そうに笑っていた。

凶器に満ちた笑みと穏やかな笑み。

同じ空間でこの二つが交差する。

また、男が刀を振り上げた。

「せんせ、にげ…!!」

「銀時…私は逃げません…」

「だめだ、先生が…先生がッ…!!」

「銀時…私が逃げてしまったら…」

お前が死んでしまうではありませんか……

血の気の失せた白い顔で、弱々しくも、しかし確かに銀時をその瞳に捕えて松陽は笑った。

そして…

その刃は、容赦なく松陽の背中を切り裂いた。

「うわああああああっっっ!!!先生、先生エエエエ!!!!」

絶叫する銀時。そんな銀時の様子を、男は至極楽しそうに見つめていた。

「ククッ…その絶望の声…何度聞いても心地よい…。」「屍を喰らう鬼”よ…覚えておけ。貴様のせいで、松陽は死ぬのだ。貴様なんぞを拾ったせいで松陽は死んだ。その罪を一生背負いながら生きていくがいい。もつとも、生き残れたの話だがな…」

ククツと喉を鳴らしながら男はその場から忽然と消えた。憎くて憎くてしかたがなくて、松陽から貰った刀を銀時は握り締めた。しかし、銀時の身体も満身創痍。

とても…男の後を追うような力は残っていない。

「く…うっ…!!」

早く誰かに伝えなければならぬのに。

高杉家でも、桂家でもいい。

早く誰かにこの事を伝えなければならぬのに。

身体が思うように動かないもどかしさ。

更に追い打ちをかけるように…

「な、んだ…この臭い…?」

やたら焦げ臭い、何とも言えない臭いが家中に充満した。働かない思考で何だろつかと必死に考えていると、必死に掴んでいた松陽の身体が僅かに動く。

「ッ、先生!!」

「ぎ、とき……、恐らくは…家に、火が…」

「……え……」

あの男はこの家ごと、自分達を葬ろうとしている。

あの男は最初から、松陽も銀時も殺すつもりだったのだ。

「クソッ…、クソオオオオッッ!!!」

銀時の絶叫。

それを、轟々と燃える家を見つめながら傘を被った男が聞いていた。

その口元は歪に弧を描き、まるでこの光景を楽しんでいるかのよう
にすら見えた。

「ククッ、それでいい…。その断末魔こそ、我の至極の楽しみ…」

「準備が整いました」

「ああ、今行く」

男の部下と思われる別の天人が傍らに跪きそう言つと、男は音を立
てて燃える家に背を向けその場を去った。

「しかし…よかったですか、黑夜叉様？松陽の首を晒し、人間どもに知らしめる作戦は…？」

「なアに、構わん。それに…」

「それに…？」

先ほど見た、銀髪の小さな「鬼」を思い出しクツと口角を釣り上げる。

「面白いものが見れた。十分だ…」

「はあ…」

「さて、次の目的地は…そうだな、江戸の町にでも行ってみるか、クツ…」

「江戸と言いますと…戦場ですか？」

「ああ、久々に血がたぎる。この剣が血を欲している…。人間どもを血祭に…」

そして、男達は萩から姿を消した。

後の話となるが、銀時と松陽以外に…男達の姿を見た者はいなかったという。

そんな会話が外でされていることなど当然ながら知るはずもない銀時は、必死に松陽の身体を引きずって外に出ようと試みた。しかし、火の手の回りが早く…とても大人1人を抱えて逃げられるような場所はどこにも無かった。

「銀、時…」

「絶対大丈夫だ、どこかにあるはずなんだ…、逃げられる場所が…ッ…!!」

薄れゆく意識の中で松陽の瞳に止まったのは、銀時のわき腹からド

クドクと溢れるどす黒い赤。

(私の力が及ばないばかりに…)

何故、今日に限って銀時はこの家に泊ってしまったのか…。

これも運命だったのか…？

そんな事をぼんやりと考えながら、そつと松陽は銀時の手を握った。

「銀時…私の話を…聞いてくれますか？」

「…先生…？」

時間がないことは分かっている。だが、松陽とて自分の命の灯が消えかけている事など十分理解していた。

だからこそ、言いたかった。

「私は…銀時に出会えて幸せでした…」

「……………!!な、に…言っ…!!？」

ふわりと笑う松陽の言葉に、銀時は頭を振る。まるでこれでは、お別れの言葉みたくないか。しかし、松陽は構わず続けた。

「私は…戦場でお前を拾ったあの日からずっと…思う事がありました…。本当に、これでよかったのか、と…。私は天人から命を狙われる身…。いつ何時^{なんどき}、このような事態になっても…おかしくはなかった…。けれどね、銀時…」

松陽が伸ばした手を、銀時がしっかりと握る。

「お前と過ごした日々は…本当に…本当に幸せでしたよ。お前が…変わっていく姿を…成長していく姿を…この目で見ていて…私は、本当に…楽しくて…しかたがなかった…」

「先生、先生…!!」

「本当は…銀時が元服して…立派に成長するその時まで…見届けたかったのですが…それは…無理のようですねえ…」

そんな事はないと銀時は何度も首を横に振る。

「駄目だ、先生!!一緒に逃げるんだ!!俺は…俺は…!!」

「銀時…私はもう、駄目です…。だから、せめて…お前だけでも…いき、な、さ…!!」

「先生!!嫌だ、先生!!」

次第に、松陽の声は小さくなる。必死に銀時は松陽の名を呼ぶが、それが松陽に届いているのかすらわからない。

だが、その優しい瞳は銀時の紅い瞳をしつかりと捕え…

「私の剣を…お前に託しました。お前は…、生きなさい…。どんなに…辛い、ことがあっても…、苦しい事があっても…」

最後の最期まで、松陽は微笑みながら…

「その剣と、ともに…私は、いつでも…ぎん、ときの…そばに…、だ、から…」

私のその剣で、大切なものを護りなさい。

笑顔の松陽が残した言葉。それは…

最後の最期まで…

銀時の将来を、銀時の生を望むものだった。

銀時の手を握っていた松陽の手が、力なくスルリと落ちる。

「せ、んせ…？」

銀時が恐る恐る呼びかけたが…

「先生…、松陽、先生エ…!!」

松陽からいつものように優しい返事がくることは、永劫なかった。

「んで…なんで…ッ…!!」

ポタポタと銀時の瞳から涙が零れ落ちる。

松陽の最期の顔があまりにも…

「微笑^{わら}ってんだよオ…!!先生、先生エエエエエエ!!!」

死とは無縁の微笑み。まるで眠っているかのように、最期の顔は綺麗だった。

暫くその場を動けなかった銀時だったが、やがて近所に住んでいた大人達が無理矢理銀時を炎の中から連れ出した。

「逃げるんだ!!銀坊も死んじゃまうぞ!!」

「るせえ!!先生を、あんなところに…置いて、行けるかよオ…!!」

それに、どうしても銀時には心残りがあったのだ。

それは…

(先生の教えてくれた…本…、俺の…大切な…本…!!)

松陽の塾で様々な事を教わり、大切なことを事細かに書いてくれた
教本。

しかし、銀時達が松陽と共に過ごした思い出の場所は…

「ウワァァァァァァアツツツツツ」

!!!!!!

業火に吞まれ、全て灰へとなってしまった。

自分達に常に武士とは何たるかを教えてくれた、吉田 松陽その人
の身体と共に。

連絡を受け、駆け付けた私塾の生徒やその親達が集まる中…

「銀時!!」

「よかった、無事だったか!!」

最初に高杉兄妹きょうだいがやってきた。そのすぐ後に…

「なんてことだ、俺達の…大切な場所が…」

桂が息を切らしてやってきた。

大人達は必死に消火作業を行っているが、その火は中々消えない。

茫然と見つめる子供達だったが…銀時の怪我があまりにも酷かったため、紫苑は隣ですっと泣いている。しかし、ふと…晋助は思った。

銀時はここにいる。

では…この私塾の先生であり、家主である…その張本人は…？

「おい、銀時…先生は…どこだ…？」

晋助の声が震える。その言葉に反応するかのようには紫苑も銀時に縋りついた。

「銀時!! ねえ、銀時!!」

紫苑の必死な声。

「おいっ!! 松陽先生は…松陽先生はどこだ!？」

桂の切羽詰まった声。

「お前、一緒に居たんだろ!? 松陽先生はどこに居んだよ!!」

晋助の今にも泣き出しそうな震えた声。

それらの声に、銀時はスッと…今もなお衰えることなく轟々と燃える私塾“だった”場所を指差した。

「あそっ!…」

恐怖からか、怒りからか、それとも怪我の酷さからか。

銀時のその手は震えている。

「……………え…っ…?」

紫苑は恐る恐る、銀時の指差した方向を見た。

銀時の指差した方向にあるものは……

燃えている自分達の学び舎だ。

「……………ッ……………!!」

桂が息を呑む。

(あの、炎の中だと!?先生は…先生は…無事…なのか……………!?)

夏の汗とは違う、嫌な汗が桂の額を伝う。

「先生ッ!!松陽先生エッ!!」

最初に動いたのは晋助だった。しかし我に返った桂が必死に晋助を止める。

「晋助、危険だ!!」

それでも桂を振り切って行くこととする晋助を、今度は紫苑の手が止めた。それも振り払おうとしたが……

「兄さん、嫌だよう…!!うっ…!!ヒクッ…!!」

泣きながら行かないで欲しいと懇願する紫苑の瞳めに、負けた。

ただ見てることしか出来ない、非力な己を…この子供達がこんなにも呪った事が未だかつてあっただろうか？

1人は泣きながら師の名を呼び、1人は己の無力さに悔しげに歯を食いしばり、1人はもうそこには居ない犯人を思い憎悪の眼差しを向け、そして…

「……………た…」

1人は…

「銀時？」

ただ、虚ろな瞳からポロポロと大粒の涙を零しながら…

「俺…松陽先生に…護られた。俺…松陽先生を…護れなかった…。俺の…目の前で、先生…殺された……………」

護られた自分と、護れなかった自分を思い出し…

最期の松陽の姿を思い出し…

私塾に来てすぐの頃と同じ、感情の欠片もないその瞳めで…

現実を見つめ続けていた。

「違う、銀時が悪いんじゃない!!」

「そうだが、悪いのは…悪いのは…ッ…!!」

「こんなことをした、その張本人だ…!!」

そんな彼を抱きしめ、そして互いに抱きしめ合いながら…

「先生…、松陽、先生エ…!!」

「やだよ、やだ…」

「……ッ、なんで……ッ、こんなことに…!!」

「………」めんなさい……」

ただ、泣いていた。

それが、高杉 晋助・高杉 紫苑・桂 小太郎・坂田 銀時の人生を大きく狂わせた出来事だった。

「……それから暫くして、攘夷戦争で戦っていた攘夷志士達が私達の住む村を通ったの」

「そいつらを見て、俺達は決めた」

「攘夷戦争に出ることを」

「それからあとは……まあ、大体知ってるだろ？」

「そうね、真選組のみんなには私から色々話しているし……」

「新八達には俺が話したからな……」

シンとした空気が部屋を支配する。何とも言えない空気だった。

長かったようで短かったような過去の話。

しかし……その話は。

「……銀時、大丈夫？」

「………」

「…銀時…」

思い出し、話すには…あまりにも辛すぎた。

ぼんやりと窓の外を見つめている銀時の目には…何も映っていない。

紫苑はそっと、銀時の手を握る。

「…銀時のせいじゃない、銀時が悪いんじゃないの。誰も悪くないの。悪いのは……」

その名前が口から出そうになって、グッと紫苑は呑みこんだ。

今ここで、宿敵であるその名前を言ってしまうば……色々と面倒なことになってしまっ。

紫苑とて憎いわけではない。できることなら、自分の手で殺したいほど憎んでいる。だが…紫苑の立場が、決してそれを許してはくれないのだ。

「銀さん…?」

「銀ちゃん……」

子供達が不安そうに銀時の名前を呼ぶ。

だが、やはり銀時はただ空虚な瞳で外を見つめるだけだった。

「……黑夜叉……」

ポツリ。

そう、銀時は呟く。

「…おい、万事屋。今、何て…？」

土方が怪訝そうに聞く。

その問いに、感情が欠落した……ゾツとするような声で銀時が再びその名を口にした。

「俺達の大切な人を奪った奴の名だ…。黑夜叉…それが…俺達が殺したいほど憎んだ…天人の名前…」

ドクンと紫苑の鼓動が高鳴る。

何故…銀時はその名を知っているのか…？

「ま、待て万事屋!!それは…その情報は…事実なのか!？」

焦った様子で聞く近藤に、感情の掛けた瞳が向けられる。それがあまりにも冷たくて、恐ろしくて…数々の修羅場をくぐり抜けてきた近藤でさえ思わず肩が跳ねる。

「ああ、間違いない。奴は…攘夷戦争の時…俺と晋助の前に現れた」

「え、兄さんと銀時の前に…!？」

困惑する紫苑に、決して視線は向けず…

「お前とはぐれた後に…俺達は奴と会った。その時、ツラは辰馬と、晋助は俺と組んで戦いを仕掛けていた。奴は“白夜叉”の噂を聞いて…わざわざ俺の前に現れやがった。あの時、この手で…殺そうと思っ

たんだがなア…」

フウ…と小さく息を吐き静かに目を閉じる。

ドクドクと鼓動が早鐘を打っているのが分かる。

紫苑以外の者が、自分達を困惑や恐怖の混じった目で見ていることも分かった。

だから、銀時は自身に何度も言い聞かせる。

(落ちつけ…落ちつけ…。俺が壊れるわけにはいかねえ…。俺が壊れちまったら、誰が晋助を止めるんだ…)

何度か深呼吸を繰り返した後、静かに目を開ける。横に視線を向ければ、紫苑が心配そうに銀時を見上げていた。それに苦笑しながらクシャリとその髪を撫でる。

「ワリいな…、俺がもつとしつかり晋助の事を見てたら…アイツの左目、無事だったのかもしれねェ…」

「……兄さんの左目は…奴が…黒夜叉が…!!」

ギリツと齒のきしむ音がした。と同時に、これまでにないほどの殺気を感じた。他の誰でもない、紫苑が…殺気をむき出しにして怒っている。

「…………ッ、旦那…その黒夜叉ってエのは…?」

いつもだったら殺気に当てられ抜刀してもおかしくない沖田ですら、紫苑の殺気は恐怖の対象ではないのだ。どんな争いの渦中で会っても、これほどの殺気を感じたことは今まで一度もない。怒りに

震える紫苑の手を、今度は銀時がしっかりと握り銀時が答える。

「先生を殺し、俺を殺そうとし、晋助の左目をバツサリ斬りやがった憎き仇の名だ。噂じゃ、幕府の中にいるらしいが…」

それは紫苑を探していた時に偶然知った事だった。その時ほど、怒りに震え幕府を潰しに行こうと考えた日は無かった。

だがその時既に、銀時には大切にしている家族が出来ていた。

「……黑夜叉は……」

その時、紫苑がポツリと呟く。「ん？」と銀時は紫苑の顔を覗きこんだ。

「……、近藤さん……ごめんなさい、私……ずっと内に秘めていたことがあったの。」

「それは……黑夜叉」についてだな？」

「ええ……」

話が分からないと首を傾げる銀時。そんな銀時を、真つすぐと見上げる紫苑。その瞳はユラユラと揺れていた。

憎しみの瞳では無い。悲しみの色だ。

「銀時、奴は……黑夜叉は……天導衆なのッ……」

紫苑の言葉に、近藤は頂垂れ「やはりそうか」と呟き、土方や沖田も複雑な表情をしている。子供達は煉獄閑れんごくかんの事を思い出しているのか、「あの天導衆？」と難しい顔で必死に考え中だ。唯一、スナック・お登勢の面々だけがイマイチ内容が掴めないらしく困惑していた。

「何だい、その天導衆ってのは？」

お登勢が聞けば、土方が苦々しく吐き捨てる。

「今の幕府のトップに立ってる天人集団だ」

そう、あるつことか……銀時と紫苑の仇は幕府のトップに立つ天人なのだ。

「紫苑さん、そのこと……ずっと知ってて……？」

新八はそう聞く事しか出来なかった。

そして自分だったらどうだろうか……そう考えた。

銀時と出会った時に、姉である妙が天人に連れ去られた。

もしあの時、姉が自分の元に戻って来ず……その天人に自分がこき使われたら？

自分の姉を自分の手の届かないところに追いやった張本人に仕えなければならぬと言われたら？

果たして……自分だったら耐えられるだろうか？

「知ったのは……つい最近……」

そんな新八の問いに、先ほどまでの殺気を綺麗に消した紫苑は力なく笑いながら答える。

「トシの書類整理の手伝いをしていた時に……天導衆に関する資料が出てきて。何気なく開いたら……黒夜叉という天人について書かれて

あった。その男は、過去に：大量の人間狩りをした天人で、攘夷思想を持っている人間を殺しては、見せしめにその首を市井しせいの人々に晒していたと……」

その言葉に全員がハツとした。

つまり、紫苑はそこから知ったのだ。松陽の仇が黒夜叉だと。

「じめんなさいね、トシ。悪気があったわけではないの……」

バツが悪そうに謝れば、複雑な表情はしていたもののそれを咎める事はしなかった。

「辛かったろ……」

代わりに漏れた言葉は、紫苑を思つての言葉だった。

「…そうね…辛かった。幕府のトップに立つのが天導衆で、その天導衆に黒夜叉かたきが居て、その黒夜叉かたきの言いなりにならなければならぬ。いいえ、なっていた…というべきかしら…？」

けれど、と紫苑は更に続けた。

「もっと早くに知ってたら、私は真選組を抜けてでも…鬼兵隊に戻つても黒夜叉を殺そうとしたかもしれない。けど……全ての真実を知ったのがあまりにも遅すぎた…」

全ての真実を知った時、既に紫苑の身体は病に蝕まれ、刀が握れない身体となっていたのだ。

「しーちゃんは強いアルな……」

神楽の言葉に「何故？」と首を傾げる。すると、神楽は紫苑に抱きつき…声を震わせながら言った。

「私だったら…無理ヨ…。絶対、すぐにソイツぶっ飛ばしに行ってるネ。なのに、しーちゃん…今までずっと誰にも言わないで…ずっと独りで戦ってきたんでシヨ？」

神楽は考えた。

もし銀時が誰かにやられて、その犯人を知っていたら…自分は冷静に居られるだろうか。

誰にも言わず、己の胸にだけ秘めて毎日を過ごす事が出来ただろうか。

答えはどんなに考えてもNOという答えしか出ない。

しかし、紫苑はずっと…誰にも言わず…否、誰にも言えず真選組の屯所で過ごしてきたのだ。それを思うと、神楽は悲しくてしかたがなかった。

「ごめんネ、私達が銀ちゃんと過ごしてたから、しーちゃん…ずっと独りだったアル…」

「神楽ちゃん…」

そんな神楽の頭をそっと撫でる。

「ごめんね、しーちゃん…私達天人が…しーちゃんと片目と銀ちゃんとツラの大事な人を奪ったアル…」

その言葉に、銀時も紫苑も形容しがたい表情を見せた。

そしてそこにいた神楽以外の全員が思った。

攘夷戦争とは無関係であるはずのこの少女は、天人というだけで謝っているのだと。

思わず紫苑は神楽を抱きしめる。

「しーちゃん？」

「悪くない…神楽ちゃんは悪くないの…。決して…悪くない…」

確かに、あの時…松陽を殺されてすぐの頃は天人を憎み続けていた。天人というだけで斬り掛った事も多々あった。

しかし、真選組の隊士になって

万事屋を営むようになって

天人を助けて感謝されて

天人である神楽と共に過ごして

自分達のやってきた事は本当に正しかったのかと…今更ながらに考えさせられたのだ。

「私達は確かに天人を憎んでいたわ、けれど…」

「全員じゃねえよ。少なくとも…誰彼構わず怨んでたあの時とはもう違っつていった」

紫苑の胸の中で泣いている神楽の頭を、ポンポンと銀時が撫でる。

「紫苑さんも銀さんも…強いんですね」

苦笑しながら新八が言えば、いやと2人は首を横に振る。

「強かねえよ」

「本当に強かったら…私達は攘夷戦争という選択をしなかった。もつと別の…松陽先生が望んでいたであろう道を…私達は歩んでいたと思っわ」

けれど、松陽の教え子達の大半は、松陽を殺されたことに怒り狂い…銀時達同様に攘夷戦争に出た。それほどまでに、吉田 松陽という人物は慕われていたのだ。その後、彼の教え子達がどうなったのかは分からない。今もどこかで平穏に暮らしているかもしれないし、あるいは…あの戦争の犠牲者になってしまったかもしれない。

「その松陽って人は、お前達にとっちゃ本当に大事な人だったんだねえ…」

お登勢がそう呟けば、紫苑はクシヤリと笑う。

それは…泣き顔にも等しい…笑顔。

「あの方は、私達…松陽塾に通っていた者にとっては、本当に…大切な人でした。私や兄やコタローが絶対の師と尊敬し、そして銀時が…“父”と…そう思っていた人ですから…」

思えば、松陽が怒った姿など見たことがない。

いつだって優しく微笑んでおり、そっと自分達に道を示してくれた。

「そりゃ辛エだろうつよ…。晋助もヅラも、先生の事を大事にしたた。

あいつらが…攘夷志士になってまで世界を壊そうとするには十分すぎる理由だ…」

銀時の言葉を聞き、ここに居る誰もが思った。

本当に…一番辛いのは、今銀時が口にした2人ではない。

(旦那…そいつア違いますア…)

(本当に一番辛エのは…テムエだろうが…)

そう…本当に辛いのは、他の誰でもない…銀時なのだ。

しかし銀時は、攘夷戦争後…攘夷活動をすることなく、しがない万事屋のオーナーとなった。その理由は恐らく紫苑を探すためだったのだろう。

「銀時様は…攘夷志士になろうと思ったことはないのですか？」

その場にいた誰もが抱いた疑問。しかし、口にできなかった疑問。それを、たまがストレートに聞く。お登勢は小さく「たま…、およしな」と言っていたが…からくり機械のたまには分かるはずもなく。ただ思ったままのことを銀時に聞いたのだ。

たまに問われ、銀時は静かに目を閉じる。

何度…揺らいだらろうか？

桂の言葉に、晋助の言葉に。

けれど…

護るべき者と約束をして、護るべき家族が出来る。

ただ、紫苑を探すためだけではなく…純粹に万事屋という仕事が好きになった。

「…ない、といったら嘘になる。けど…」

攘夷戦争が終わった時、死んでいった仲間達の墓を見て、晒し首にされた戦友達の首を見て。

何も護れなかった自分に失望した。

紫苑とはぐれてしまったあの日から…自分に誰かを護ることなどできないのだと…そう思った。

だからせめて、愛した女がどうなったのか…。

生きているのか、それとも死んでしまったのか。

どちらにしても、しっかりと結末を見届けなければ。

それが、護れなかった銀時がしなければならぬことだと思った。

生きているのであれば、あの時置いていった事を謝らなければ。死んでいるのであれば、墓前で土下座して謝らなければ。

そう思っていた。

「俺は攘夷だ何だと騒ぐより…ただ、残された人生を面白おかしく生きたかった…」

「ドウシテ、ソウ思ッタンデスカ？」

キャサリンの問いに、そうさなア…と頭を掻きながら、いつもの…
死んだ魚のような目とは違う強い瞳で…

「先生がそれを望んでいたからさ。口癖のようにあの人は言ってた。
『お前が元服して、立派に成長して、たくさんの人たちと笑いながら過
ごす日々が来るのかと思うと楽しみです』ってな。まあ…胸張って生
きる人生を送ってるかと聞かれたら絶対にYESとは言えねエが
…けど…」

泣きやんだ神楽、銀時のことを心配そうに見つめる新八。

真選組の3人、スナックお登勢の従業員達。

かぶき町に住む…騒がしい住人達。

そして…隣にいる紫苑。

「少なくとも…この木刀が届く範囲に居る奴らが、バカみたいに笑っ
て過ごせるなら…俺アただまっすぐ突っ走るだけよ。先生に笑われ
ようと、晋助やヅラに裏切り者と思われようと…俺アカまわねエ。こ
れが、俺の人生だ」

自分の国かぶき町でみんなが笑って過ごせるのならばと願い…

そう言った。

「私はそれが一番、銀時らしいと思う。きっと先生も喜んで下さるわ」

銀時の言葉を聞き、紫苑は泣きそうになった。そして嬉しかった。

ずっと会えなかった銀時は…自分の愛した人は…

攘夷戦争の時となんら変わらないまま、現在いまを生きている。

否、あの頃に比べると強くなったとすら思える。

もう、辛い思いはしていない。

“屍を喰らう鬼”

“白夜叉”

「こんな心ない言葉を浴びせられて悲しんでいた銀時はもういない。

「銀ちゃんは今のままでヨロシ!!」

「そうですね!!攘夷なんて、銀さんには似合いません!!」

ほら…慕われてるではないか。

「銀時様は…かぶき町にいて貰わなければ困ります」

「そうさね、家賃も滞納されたままじゃ、たまったもんじゃないよ」

「感謝シロヨ、天パ」

何だかんだと悪態を吐いているが…

「まあ、テメエを逮捕する理由がなくなっちまうのは残念でしょうがねえがな」

「俺ア旦那だけは敵に回したくはありませんからねィ。いつか一緒に、土方を暗殺しようじゃないですかィ」

「おいこら、それどついつ意味だ!!」

「ガハハハハッ!!やっぱりお前には万事屋という肩書が一番似合っ
とるよ!!攘夷なんぞ、万事屋には似合わんな!!」

みんな、笑っている。

「くっそー、テメエら好き勝手言いやがって…」

そんな彼らに、銀時もまた悪態を吐くが…

「いいぜ？テメエらが、出ていけつっても、しつこくかぶき町に居座ってやらア…!!」

楽しそうに笑っている。

「だったら私は…この命続く限り…銀時の隣にいる。ね、銀時…？今度こそ約束よ？」

紫苑は笑いながら、小指を出した。

「ずっと…ずっと一緒よ？」

「……、ああ…ずっと一緒だ…」

その小指に、銀時も己の小指を絡める。

その約束が…永久とわではないことは、紫苑も…そして銀時も分かっていた。

だが…

せめて、君私が生きているその間だけは…

「指切った!!」

憎しみも悲しみも忘れて…

ただ、笑っていよう。

【第十四訓】 仲直りのしかた　　く辰馬と紫苑く

一通り銀時と紫苑の過去を話し終え、2人が落ち着いたところ。一度休憩を入れた方がいいというお登勢の提案で、思い思いの事をしていった。土方は屯所に紫苑は無事である事を連絡している。神楽と新八は紫苑と色々な事を話していた。

そして銀時は…ただ真っ直ぐ、窓越しに空を見つめている。

「どうしたんですかい、旦那？」

その横に並び沖田が問えば、視線はそのままに銀時が口を開く。

「んー…考え事だよ、考え事。やりてえことが色々あるからな…」

「紫苑と旦那が言ったた、“約束”ってやつですかイ？」

「まあ、それもただけどな…」

「……………」

沖田が銀時に視線を向けると、銀時も同じように沖田に視線を向けていた。そして…どこか少し困ったように笑っている。

「ガキの頃とは違って、マジの殺し合^{喧嘩}いをしちゃったからなア…」

銀時の言わんとする事の意味が分からず、沖田は首を傾げる。一体彼は、何の話をしているのだろうか？

「なー、沖田君はさ…喧嘩した時の仲直りの方法って知ってる？」

「喧嘩…？」

「そ。オメエ、いつも土方君と喧嘩してんだろ？何か無いか？」

「旦那…ありゃ喧嘩じゃありやせんぜイ？俺ア本気で土方ぶつ殺す勢

いでせや」

「…真顔でおっかない事いつなよ…」

ああ、そつだ…沖田はこついう男だった。

銀時は苦笑しながらその頭をポンポンと撫でる。

「旦那？」

「いやー、オメエ等らしいなーと思ってな」

互いに互いを嫌いながらも、互いに互いを認めている。だからこそ、どんなに酷い喧嘩になっても、次の瞬間には喧嘩など無かったかのように背中を合わせて戦う。

土方と沖田はそついう仲だ。

「お前ら揃って何の話してんだ？」

そこに、連絡を終えたらしい土方がやってくる。土方の声に、沖田は小さく舌打ちをするが、土方は無視して銀時へと視線を向けた。

「んー？…土方君はさー…喧嘩した時の仲直りの方法って知ってる？」

「は？なんで、んなこと聞くんだよ？」

土方が訝しげに問えば、銀時はただ…困ったように笑うだけ。それを見た土方と沖田は、その表情の意味が分らず…結局、双方視線を交わして首を傾げるだけだった。

「あー、男だけで集まって何の話？」

そこに今度は紫苑が加わる。興味津々と言わんばかりに、土方と沖田の間からひよっこりと顔を覗かせて無邪気に笑っていた。

「おー、紫苑…。ガキ共からは開放されたか？」

「フツツ、私の知らない銀時のいろーんなこと聞いた」

「はあ？何だよそれ…」

一体あの2人は何を話したのやら。

銀時は頭をガシガシと掻きながら小さく溜息を吐く。

「それで…3人は何の話をしてたの？」

私に秘密事は無しよ？

そう付け足す紫苑に、沖田が笑いながら口を開く。

「別に隠すような事は何も話してないぜイ？ただ旦那が…」

「銀時が？」

「仲直りの方法とか聞いてきやがってな。」

万事屋は何を考えているのやら、と言いながら再び視線を銀時に向ける。すると…銀時は今まで真っ直ぐ紫苑に向けていた視線をあらぬ方向へと向けていた。

「…仲直り…？」

「そうでイ。紫苑は知ってるかい？」

「んー…子供の頃はよく喧嘩してたよね…。兄さんもコタローも銀時も。あと、攘夷戦争の時は辰馬が可愛そうなくらい殴られてた…銀時と兄ちゃん。」

「うっ…何でそんなこと覚えてるんだよ、お前は…」

言われて反論しないのは、それが事実だからだ。銀時の目は更に泳ぐ。

「けど、いつも自然に仲直りしてたじゃない。何、どうしたの今更…？」

一体銀時は誰と喧嘩し、誰と仲直りしようとしているのだろうか？

ふと、紫苑はそう考えたが…紫苑自身も銀時の事を言えた立場ではないと苦笑した。

「ホント…あの頃は喧嘩も仲直りも当たり前だったのに…」

時の流れとは酷く残酷で。時には…修復が不可能なほどに、人の感情を根本から変えてしまう。

「……お前らもやっぱり喧嘩はしたのか？」

そんな2人を見ながら、ふと…土方は思ったままの事を口にする。土方に問われ、銀時と紫苑は互いに見つめあった。

「俺と…紫苑？」

「そういえば…喧嘩したことあったっけ？」

「いや、俺ア覚えてない」

「……、あれ？私も覚えてない…。」

んん？と紫苑が首を傾げる。紫苑の記憶力は、銀時達幼馴染+辰馬と、真選組の面々が認めるほどの凄さだ。その紫苑が覚えていないということは、つまり結論は1つ。

「…喧嘩したことがないんで？」

「マジでか」

「そついう…ことだよ…？」

「んー、多分そつなんでしょうね…」

本人達が首を捻っているのだ。恐らくは、それが真実なのだろう。離ればなれになっていた時期が長かったとはいえ、ともに同じ学び舎で過ごし、攘夷戦争を切り抜けてきた2人が喧嘩のひとつもせず互いに想い合うなど…はたから見れば本当に信じられない話だ。

「それだけ旦那が紫苑を大事にしてるってことでスア」

ヘラツと笑った沖田に、紫苑も恥ずかしそうに笑う。

本当に…穏やかな時間だった。

だが…また銀時は窓の外を…空を眺め始めて小さく息を吐く。

「で、万事屋はさっきから何やってんだよ」

窓の外を眺めていたかと思えば、仲直りの方法を聞いてくる。いつもの銀時ならば…前者はあったとしても、後者はあまり考えられない。

「…時間が解決してくれるなんて…あるわけがねえし、それじゃ駄目なんだよなア…」

ポツリとつぶやく銀時の言葉の意味がよくわからず、真選組の3人は互いに顔を見合わせた。

「銀時…？」

なんだかその姿が儂く見えて…紫苑は不安になる。

もう離れないと約束した。

なのに…その背中はとても悲しげで、とても小さく見える。

「……はぐ、考えるのもめんどくせエ……」

暫くの沈黙の後、何を思ったのか銀時は携帯を取り出す。

「旦那、いったい誰に…?」

慣れた手つきで携帯を操作する銀時に沖田が聞けば、へラリというものだらしない顔で笑う。

「ん？まずは……戦友で、一番馬鹿で、頭がスカラカンの奴に掛けるんだよ」

余計に意味が分からないと沖田は首をかしげ、土方は深いため息を吐いていた。今に始まった事ではないが、銀時は人の名前を素直に呼ばないという悪い癖がある。もっとも、銀時自身は…土方・沖田両名が知らない名前だと判断したためあえて言わなかったのだが。

しかし…ともに戦線を潜り抜けてきた紫苑には、すぐに分かった。

「……あ…辰馬…?辰馬でしょ!!」

「おー、さすが紫苑。オメエが無事な事を伝えねえとな。アイツはアイツで苦しんでたからよオ」

何気なく会い、酒を飲み交わし、酔って…いつもはバカ笑いをして

いる坂本が、ポロリとこぼす本音。

『ワシヤ、もし紫苑が死死んでいたらきたらと思うと、怖うて仕方ない。銀時イ…ワシヤ、最低の男ぜよ…』

それは、紫苑の身を案じる言葉であり、あの時紫苑を置いて戦争に戻るという判断をした自分を責める言葉だった。

そんなことはないと言ったが…決して、坂本が納得することはなかった。

あの時、紫苑を置いて進軍するというのは正しい判断だったと今でも思っている。

しかし、人として…紫苑の戦友ともとしては最低の判断だった、と…。

坂本は悲しげに空を眺めながら、いつもそう言っていた。

「紫苑、オメエの声聞かせて…あの馬鹿を安心させてやれ。」

「…ええ…!!フフツ、辰馬かぁ…!!ね、辰馬は相変わらず元気なの？」

「ああ、相変わらず頭スツカラカンで馬鹿笑いしてらァ」

「辰馬らしいなあ…」

楽しそうに笑う紫苑を見て、土方と沖田は思う。屯所に居る時もよく笑うが…こんなに無邪気に笑う紫苑は見たことが無いと。

(…紫苑の幸せがそこにあるなら、俺達はただ見送るだけだ…)

(土方がゆるさねエでも、俺が絶対に真選組から抜ける手筈を進めてやるから安心しなせエ…)

両名とも、思っている事は違っても、紫苑を大事に思っている事は

同じなのだ。

そんなことを2人が思っている間に、銀時は目当ての坂本へと電話を掛けた。コールが数回鳴った後、聞きなれた能天気な声が電話口から聞こえてくる。

「よー、辰馬か？」

『なんじゃ、金時かえ？おまんから電話とは珍しいぜよ。どうしたんじゃ？』

「馬鹿本!!何べんも言わせんな!!俺は銀時!!ぎ・ん・と・き!!金時だったらジャンプ回収騒ぎだっつってんだろっが!!」

『アッハッハッ!!けど、アニメは終わったぜよ!!』

「俺のせいじゃね　ッ!!」

はたからやり取りを見ていた土方は苦笑しながら、沖田はどこか楽しそうに銀時を見つめている。紫苑は、早く電話を変わりたくて仕方がないと言った感じだ。

「ったく…。いいか辰馬？落ち着いて聞けよ？大事な話だ」

『大事な話？……銀時、なんじゃ…その話うちゅーのは…？』

「……約束、覚えてるか？」

約束

その言葉に、思わず辰馬が息を呑む。それが電話越しでも分かった。

「夜桜の下で月見酒……。忘れたとは言わせねえぞ？」

『もちろん、覚えちゅう。やけど…』

「…紫苑が居ない？ってか…」

『ッ…、ほ、ほれっちゃんもあるけど…おまんとジラは、晋助と

袂を別ったじゃなか？おまんがそう言おったぜよ。違っんなが？」

電話越しではあるが、辰馬がオロオロしている姿が目に見え。思わず銀時は苦笑した。そしてそつと携帯を窓の淵に置く。それを見ていた、紫苑・土方・沖田の3名は首をかしげる。しーっと指を立てて笑いながら、銀時は携帯のスピーカーボタンを押した。

「ああ、違わねえよ？俺とツラは、高杉と袂を別った。けどな…状況が変わったんだよ。」

『……………どういことぜよ？おまん、ぎつちりより変ちや』

「いつもよりって何だ、いつもよりって!!」

『金時はぎつちり変ぜよ、アツハツハツ!!』

「テメエにだけは言われたくないわツ!!」

『じゃったら、ツラやったらえいが?』

「よくないわツ!!ふざけんなよ馬鹿!!」

『アツハツハツハツ!!』

電話越しに言い合う2人を見て、土方・沖田の両名はただただ頭にはてなマークが並ぶだけだった。相手が、攘夷戦争を銀時達と共に生き抜いてきた、あの有名な快援隊長の坂本辰馬だということは分かる。それは分かるのだが…………

(ぜんっぜん言葉が分からねエ…。土佐…か…?)

(旦那と紫苑のダチのお国言葉ですかイ。さっぱりわからねえや…)

坂本の言葉があまりにも訛りすぎていて分からない。しかし銀時にはしっかりと通じているらしく、そのやり取りはちゃんとしている。チラリと土方が紫苑に視線を向けると、紫苑もクスクスと笑っていた。どうやら、紫苑も話の内容は分かっているらしい。

「はー…話を戻すぜ?…単刀直入に言うが…辰馬よ…。オメエ、大至

急休みを作れ。陸奥が駄目つっても絶対に作れ。」

『…理由は何じゃ？ワシにもわかるように話しておせ。おまんの話は、肝心な部分がカラじゃ。さっぱり分からんぜよ…』

「……いいか、耳の穴かっぽじってよく聞け？」

そういつと、銀時はちょいちょいと手招きをした。紫苑は自分？と自信を指さし首をかしげる。それに笑いながら銀時は首肯した。そして口ばくで…

“辰馬を驚かせてやれ”

そう、言った。それがわかった紫苑は、楽しそうに笑いながら首を縦に振る。音を立てないようにそつと銀時に近づき、そして…

「んつと……辰馬……、久しぶり……ね？」

戸惑いながら……しかし、優しい声で話しかける。

一瞬……時間が止まった。

シンとした空間。しかし、その静寂は…

『紫苑……？おまん、紫苑が……!?』

「うん、そうよ……辰馬。心配かけてごめんなさいね……」

『……ッ……!!し、紫苑……紫苑!!ワシヤ……ワシヤッ……!!』

「辰馬、大丈夫よ……分かってる。あの時の、辰馬とコタローの判断は正しかったと思ってるわ。だから絶対に謝らないで？」

『けんご……!!』

「……だが、じゃない!!……いいじゃない、こつしてお互い無事で……また話すことができるんだら……」

紫苑が花のような笑みを浮かべる。それを満足そうに銀時が見つめていて、真選組の2人も…言葉はよく理解が出来なかったが何となく…ニュアンスで理解していた。

「どーだ、辰馬ア…。驚いただろ…?」

してやったりと笑う銀時。

『おまん…!!銀時、何ですつと早く教えてくれなかったがやきか!? おまん、いつから知つとつたが!?!』

「まー、落ち着け。実は…俺も今日、紫苑と再会したんだよ…」

「そうそう、本当にね…久々の再会だったのよ…?」

『そうか…そうかア…!!と、とにかく…無事でよかったぜよ…、ほんまに何よりなが…!!』

電話口の向こうから「頭ア、げにまつこと煩いぜよ」という陸奥の声が聞こえてきたが、どうやら今の辰馬には聞こえていないらしい。嬉しそうな坂本の声を聞きながら、紫苑と銀時は互いに視線を交わして笑った。

「あれ、銀さん、紫苑さん…何やってるんですか?」

「お前らも何やってるアルか?」

どうやら電話の音が聞こえたらしい。新八と神楽がひよっこりと顔を出す。

「ん?辰馬と電話してんだよ」

「黒毛ジャとアルか?」

「え、坂本さんと?」

2人の反応を見て土方は思う。恐らく、ここにいるメンバーで坂本

と会ったことが無いのは自分達真選組だけだと。

(……「こりゃ幕府の人間としては黙って見過ごしていいもんか……」)

今は貿易会社の社長だが、その素性は元攘夷志士。しかも、その名は狂乱の貴公子・鬼兵隊総督・鬼兵隊副官・白夜叉同様……とても有名である。

だが……

『おー、その声は神楽ちゃん和新八君かえ?』

『よくわかったネ、ソウアル!!』

『お久しぶりです、坂本さんもお元気そうですね』

『そりゃ違うな。辰馬はただ、馬鹿なだけだ』

『えー、それひどいよ……』

『いや、紫苑さん……顔笑ってますって……』

『アッハッハッ……泣いていい?』

できない……、できるはずがない。

こんなにも幸せそうに笑っている紫苑と戦友ともを引き離すことなど。無事を知って、泣きそうな声で喜んでいた……顔も知らぬ電話の主のことを思つと。

鬼の副長と恐れられる男とて……そこまで非道にはなれない。

(私情は挟むな、俺は真選組の副長だろうが……!!)

しかし、やはり紫苑と銀時の笑顔には……敵わなかった。

「おやまあ、随分と賑やかだねえ……」

「何だ、ちょっと部屋から出ていた間に随分と騒がしくなったな」

同じタイミングで部屋に戻ってきた近藤とお登勢は、何やら騒がしい事に気付き苦笑を洩らす。

先ほどまでの重い空気はどこへやら…。

しかし、お登勢は銀時が無邪気に笑う姿を見て思った。

「アタシは、銀時があんな風に笑った姿を久々に見たねエ…」

笑っていても、いつもどこかに憂いを帯びていた。

それが、紫苑との再会で変わったのだ。

確かに、その再会は手放しで喜べるものではない。

だが…

「アンタが幸せなら、アタシはそれで十分さ」

限られた時間でも、ずっと悲しみを背負い続けてきた男が心の底から笑えるのなら…自分はそれを見守ろう…。

お登勢は満足げに微笑みながら、銀時を中心に騒いでいる面々を見つめていた。

* * * * *

再び全員揃った部屋で、各々元座っていた場所へと戻る。テーブルの真ん中には、銀時の携帯電話。もちろん、通話の相手は先ほどと同じ…辰馬のままだ。

『けんど、なして紫苑は晋助のそばにおらんが？アイツは、げにまっことおまんの事を心配しちよったぜよ…』

辰馬の問いに、紫苑の表情は曇る。

『真選組におるっちゅーがは、局長さんと副長さんの話で大体理解出来たけんど…何でそがあなことになったが？ワシにも分るようになちゃんと話しておせ』

辰馬はずっと宇宙に居た為、紫苑の事情は殆ど知らない。時々地球に来た時に、銀時や桂と会って、話して。その時に「ああ、まだ紫苑は誰の元にも戻っていないのか」と落胆していた。あるいは、2人が把握できていないだけで…本当は鬼兵隊にいるのではないかとすら思ったくらいだ。

辰馬の脳裏に、紫苑とはぐれてすぐに交わした晋助の言葉が過ぎる。

『晋助、鬼兵隊の副官はどうするつもりぜよ？このまま、空席というわけにもいかんきに…』

『いや…誰にも副官の座を与えるつもりはねえ。鬼兵隊副官は、例え不在だろつと何だろつと…高杉 紫苑だけだ。それ以外は、俺が認めねえ…』

「……………喧嘩したのよ……………」

『喧嘩っっ』

辰馬の言葉を受けて、ポツリと紫苑が眩く。それは辰馬にもしつかりと聞こえていたらしく、紫苑の言葉をそのまま返す。事情を全て知っている真選組の面々と、銀時は何とも形容しがたい表情をしているが、紫苑は顔を俯かせたまま続けた。

「そう、喧嘩。もう…きょうだい兄妹の関係が修復不可能なほどの盛大な…殺し合いという名の喧嘩。兄さんは私のことなんか…これっぽっちも考えてない…」

あのニヒルに笑う晋助の瞳に、果たして自分という存在は映っているのかと…そう思うほど、紫苑から見る兄の姿は本当に変わってしまっていたのだ。シユンと項垂れている紫苑の頭をポンポンと撫でながら、電話口の辰馬に問う。

「辰馬…オメエ、今でもアイツと会うのか？」

「…おまん、それを真選組の局長さんと副長さんの前で言わすがか？」

それもそうかとチラリと真選組の面々に視線を向けると、近藤は二カツといつもの人のよさそうな笑みで笑っている。土方はめんどくさそうに頭を掻きながら溜息を吐いていた。沖田に關してはいつものポーカーフェイスで、「お好きにどうぞ」と言わんばかりの表情だ。

「どうやら、今回の事は紫苑絡みだから…聞かなかった事にしてくれ
るみたいだぜ？」

「…、金時イ…おまんはげにまっことえらい男ぜよ、アツハツハツ
!!」

「はあ？何でそうなるんだよ。いいからさっさとさっさきの質問に答え
ろ、馬鹿!!あと、俺は銀時だ!!何度も言わせんな!!」

『アツハツハツハツ!!』

あの鬼の副長と恐れられる男を黙らせる事ができる者など、そうそ
ういないはず。しかし銀時はそれをやってのけたのだ。辰馬は思う。

(おまんは、今も昔も人を引き付ける天才ちゃ)

白夜叉として恐れられたこともあったが、それ以上に慕う人間も多
かった。

それはどうやら、今も変わらないらしい。

サングラスに隠れた目元を細めながら穏やかに笑う。

夜叉と恐れられたあの時の銀時はもういない。今は、万事屋オー
ナー・坂田銀時なのだ。

「で、実際どうだ？」

銀時の言葉で我に返った坂本は、「そうじゃった」と前置きを置いて
口を開く。

「ワシらは快援隊じゃ。取引の依頼があったら例え誰じゃろうと取引
をするぜよ」

「つまり、高杉とも会ったと…？」

坂本の言葉に、紫苑の肩がかすかに揺れ、真選組の面々にもそれな
りの緊張が走る。快諾したとはいえ、やはり過激派攘夷志士と名高い
高杉 晋助は彼らにとっては言いよりの無い緊張の走る単語なのだ。
そんな各々の反応を視線で確認しながら、銀時は辰馬の続きの言葉を
待つ。

「いや、直接は会つちよらん。取引に来ちゅうのはいつも幹部ぜよ。

けんご…』

「ただ？」

『電話じゃと、晋助とよく話すきに』

「そうか…」

そこで銀時は小さく溜息を吐く。てっきり晋助は、もう誰とも…攘夷戦争を共に駆け抜けてきた戦友ともとは、誰とも繋がって居ないと思っていた。しかし、予想外にも…辰馬とはしっかりと繋がっていたのだ。その繋がりに感謝しつつ、銀時は本題を切り出す。

「辰馬、オメエから見て、聞いて…高杉は…晋助は…もう紫苑の事を忘れてると…そう思うか？」

一切を包み隠さないその言葉に、紫苑の肩が再び揺れた。そして小さく震えている。銀時はさっきと同じように頭を優しく撫でている。きつく握られた手は、子供達が自分のそれを重ねていた。

大丈夫、どんな言葉が返ってきてても自分達がそばにいる。

そこに居る誰もが…そういう思いで、紫苑を見守っている。

暫く…何とも言えない沈黙が続く。

そして…

『あくまでワシの聞いて思った限りのことじゃが…それでもえいが…？』

「ああ、かまわねえよ」

『…ワシヤ…晋助は今でも紫苑の事をほりゃ大層大事に想っちよると思っ。』

「……………テメエの妹を殺そつとした兄貴がか？」

そこまで大人しく辰馬の話聞いていた土方が話に割って入った。しかし辰馬は気にした様子も無く話を続ける。

『おんしら真選組は晋助を過激派の攘夷志士としてしか見ちよらんきに、信じとおせつちゅーんが無理な話かもしれんが…晋助は確かに紫苑の事を想つちゅう。』

「やっぱ、オメエの目から見てもそう見えるか…」

『銀時イ、考えてもみい。晋助はワシらが太鼓判を押すほどのシスコンじゃったぜよ!!アッハッハッ!!』

「ま、確かにな…」

笑いながらチラリと周りを見ると、攘夷志士としての晋助しか知らない銀時と紫苑以外の者達は驚きだったり、何とも形容しがたい表情をしている。

そして、紫苑は…

「そんなこと…絶対に無いわ。だって…私にとどめを刺そうとしたのは他の誰でもない兄さんだった…。……銀時、辰馬…。私はどうしても…」

悲しそうに、目を伏せていた。

「俺達の言葉が…信じられないか？」

「…ええ…。ごめんなさい…」

『まあ、おんしがそう思うのも無理はないきに、気にするなが』

「そーそー、あのチビ助が不器用なのがいけねえんだよ」

申し訳無さそうに謝る紫苑に、銀時は笑いながらそして辰馬もいつもの陽気な声で気にするなと言っ。

「けど…旦那方が揃いも揃ってそう言いつつてきたア…やっぱり高杉の野郎は紫苑のことを大切にしていることなんですかねィ…？」
「うむ、俺にはとてもそう思えんが…」

「まあ、よく知る幼馴染が言つんだ。恐らくはそうなんだろつねエ…」

晋助が紫苑を今でも大切に想っているかどうか。沖田にも近藤にも、そしてお登勢にも…今までの経緯を聞く限りでは、到底大切にしているようには思えない。それは紫苑も例外ではないようだ。否、^{いな}変わり果てた晋助の姿を目の当たりにしたからこそ…紫苑は兄を信じることができないのだ。

しかし晋助と紫苑をよく知る戦友の坂本、そして幼馴染であり恋人である銀時は、今でも晋助は紫苑を大切に想っている”という。

「お二人がそう言いきれぬ根拠は何でしょうか？それをお話すれば、紫苑様もお分かりになるのではありませんか？」

たまの言葉に、銀時が頭を掻く。辰馬も「うーん」と唸るだけで黙ってしまった。何か自分は余計な事をいってしまったのだろつかと、たまは首を傾げたがそんなたまを見て銀時がへらりと笑う。

「たまの言つ通りだ。だがよオ…」

『ワシらも、今の晋助が何を思つちゅうかよつわからんきに、これといった確証がないつちや』

「まあ、あるとすりゃあ…」

『晋助の着ちよる着物ぜよ』
「やっぱりそつだよなア…」

その言葉に反応したのは、ほかの誰でもない…

「着物…」

紫苑だった。着物と聞き、思い浮かんだのは…紫苑のことを忘れてくなくなつたと言いながら大切そうに着物を撫でた、あの時の兄の姿。自分が買った2枚の着物の片割れを、それは大事そうに着ていた…あの時の晋助。

「兄さんは…まだあの着物を…？」

「ん？そっか…紫苑は暫くの間は鬼兵隊にいたから知ってるんだな」

『そうぜよ。あん時の着物をほりゃ大事に着ちゆう。ワシも最初は、ほりゃ驚いたぜよ!!』

ここにきてまた、晋助の着物の話。先ほど、紫苑抜きで話していた時にも銀時から聞いてはいたが…やはり、幼馴染と戦友が揃ってそういうのだ。

「……………どうして？あんな派手な着物…嫌いはなすなのに…もう、私のことなんて……………覚えていたくもないはずなのに…」

そして何より、紫苑自身が信じられないと言った口調で言うのだ。やはり、晋助が着ている着物は…彼を良く知る者にしてみれば、ありえないことなのだろうということがはっきりとわかった。

そして、こつも頑なに銀時と坂本が晋助のことを信じている理由も。

「ソレハ、高杉ツテ男ガ紫苑サンノ事ヲ大事ニ思ツテイルカラデスヨ」「そうネ、キャサリンの言うとおりアル!!」

「高杉さんが着ていた着物にそんな理由があつたんですね。きっと、紫苑さんのことを大事に想っているからこそですよ!!」

そう…キャサリンが言った通り、そして2人の男が断言した通り。

「晋助はお前を大事に想ってる」

『それは、ワシらが保証するぜよ』

晋助の中に、まだ紫苑という存在が生きているからなのだ。

鬼兵隊副官としてではなく、自分の大切な妹として…。

「……本当にアンタ達は不器用な兄妹きょうだいなんだねエ」

お登勢が笑いながら紫苑に言えば、少し困ったように…笑う。

「よく…言われます」

兄妹きょうだいだからこそ似てしまったのか…、自分の本音を素直に言えない事は、紫苑自身も分かっていたし、それが兄と似ている事も理解していた。

「ま、不器用もほどほどにな？」

くしゃりと銀時が紫苑の頭を撫でる。すると、恥ずかしいのだろうか…。うつむきながら小さく頷いた。

「さて…話を元に戻すが…辰馬。大至急休みを作れ。花見…するぞ。」
『銀時、そりゃワシア構わんが……なしてそがあに急ぐぜよ？それに、今年の桜はもう散りよる。どうせ花見をするんじやったら、満開の時にした方がええんじやなか？』

「……………」

坂本の言うことはもったもめで、桜の季節と言っても…既に場所に

よって桜の花は散りつつあった。花見をするには、一足出遅れたと言っても過言ではない。

本来であれば、坂本の言つとおり…翌年に花見をするのが得策だろう。

しかし…そんな時間は…ない。

「…坂本殿、実は大事な話がある…」

『大事な話…？局長さん、ほりゃどんな話じゃ…？』

若干声色の変わった近藤の言葉に、坂本はあまり良い予感がしなかった。

(まさか…紫苑が攘夷志士として捕まるが…？それとも銀時かえ…？…いんや、そがあな単純な話でもなとそうぜよ…)

言いにくそうに表情を曇らせる近藤。それを察した土方が代わりに口を開く。

「……落ち着いて聞いてくれ。紫苑は……病に侵されている…」

土方の一言で、先ほどまで明るかった空気が…一気に現実に引き戻されたような…そんな重苦しいものへと変わる。

沈黙が続く。その沈黙を破つたのは…

「……宣告を受けたのは昨年の今頃で、その時の余命宣告は1年だった。つまりね、辰馬……私の命はもう…」

『……ッ、そ…そがあな嘘を吐くな!!冗談にも**ほど**あがあるぜよ!!』
「嘘じゃねえッ!!辰馬、聞け!!」

紫苑の言葉に嘘だと声を荒げる坂本、それ以上に声を荒げて坂本を制する銀時。

また…部屋が静かになる。

(…やっぱり痛エ…。そんだけ、旦那達にとって紫苑は大事で…この事実は信じられねエし信じたくねエ事実ってことかイ。当然でさア…俺だつて信じたくもねエ…)

必死に歯を食いしばり、何とか自分を保とうとしている銀時を見ながら、沖田は思った。それほどまでに、この男達にとって…高杉 紫苑という存在は大きかったのだと。

沈黙は一時と続かず、今度は銀時が先に口を開いた。

「俺は今日、紫苑と再会したつたろ…？そんな時に…紫苑は血を吐いて倒れた。…俺の…目の前で…」
『……………!!』

銀時の言葉に坂本が息を呑む。

『(銀時の前で倒れた…!?)紫苑、それに銀時…!!おまんら…大丈夫がか!?!』

坂本が危惧したのは、もちろん紫苑の身体の事もあったが…銀時の精神状態もだった。銀時は表面上では大丈夫だと装う。決して人に弱みを見せない。だが、一度崩れてしまえば…周りが手をつけられないほど酷く荒れる。攘夷戦争中…特に紫苑とはぐれたあとにも、何度かそういうことがあった。その度に、坂本達が必死に止めたのだ。その心配がどうい内容かすぐに分かった土方は、あの時の銀時の状態

を思い出しながら小さく息を吐く。

(なるほど…仲間内では万事屋の精神状態の脆さは把握済みってことか…)

チラリと土方が銀時の表情を伺えば、なんとも形容しがたい顔をしている。

「私は…まあ、いつもの発作ってお医者様に言われたから、大丈夫よ…」

紫苑が苦笑しながらそう言えば、それに続くように銀時も口を開く。表面上は、誰にも悟られないよう平然を装っている。だからこそ土方には、彼が何を言おうとしているか…手に取るように分っていた。

「ったく…バカ言ってるじゃねえよ、俺ア「大丈夫じゃねえな」……ッおい!!」

だからこそ…大丈夫だと言いかけた銀時の言葉を、土方は間髪いれずに遮った。余計な事を言うなどでも言いたげな銀時の視線を受けたが、土方はそれを綺麗に無視して話を続ける。

「万事屋は紫苑がぶっ倒れた時に動揺しまくった。処置室に入っただろうとする医者に掴みかかってぶっ殺すと言った。そして…目の覚めない紫苑を見つめながら…泣いた…」

「ちよ、ちよっと多串君…!!」

そんなにズバズバと恥ずかしい事を暴露されてはたまったものではないと、銀時は止めに入るが…それでも土方は続けた。“多串君”と呼ばれたことをも、きれいさっぱり無視して。

「殺気もダダ漏れでな、うちの血気盛んなドS隊士が…その殺気に負けて抜刀しそうになったし、俺も下手すりゃ抜刀してた。しかも俺達の目の前で、事もあるうに自分が“白夜叉”であることも暴露しやがったよ…」

『……はあ、銀時ィ…おまん何しちゆうが……』
「うっ、だ、だってよオ……」

銀時の精神状態を考えれば無理もないだろうと坂本は苦笑をもらす。当然だ。愛した女^{ひと}が目の前で血を吐いて倒れて冷静でいられるほど…銀時は強くない。否、^{いな}恐らく誰もが冷静でなどいられるはずがないだろう。

『けんご…白夜叉を暴露したかは…いかんきに』
「……………はい……」

しかし、かといって言っている事と悪い事はある。あえて、殺気をダダ漏れにした事や、医者に対して殺すと言ったことは咎めなかった。坂本が指摘したのは…

『おまん、もう少し自覚しとおせ…。確かに今はヅラや晋助と違って攘夷志士がやらないにしても、元は伝説の白夜叉じゃったが。そがあな事を…幕府御用達の真選組の前で言^ゆつらあて…』

「…け、けどよお…」
『けんごがやない!!』

自分が白夜叉だと暴露したことだった。さすがの坂本も、土方の口からでた“白夜叉”の単語に肝が冷えた。仮にも…幕府御用達の真選組にそれがバレてしまっっては、それこそ銀時の日常が壊れてしまう。

そんな彼らのやり取りを見ながらあ、さつきとはまるで立場が逆転したと…新八は苦笑する。神楽も横で笑っていた。

明らかに怒っていると思われる坂本と、必死にいい訳を考えている銀時。そんな銀時に近藤達が…幕府の人間として、そして真実を知ってしまった者として…口を開く。

「ま、まあ坂本殿…落ち着いてくれ…」

「俺達は今まで旦那に世話になりやした。その恩を仇で返すようなことはしやせんぜい？」

「今回、万事屋が元攘夷志士で、伝説とまで言われた白夜叉だったということは…俺達だけの胸に秘めてそのまま片付けるつもりだ」

電話口から聞こえてきた言葉に驚いたのは…その事実を知らなかった坂本のみ。暫く呆けていた坂本だったがやがて、いつもの陽気な笑い声が聞こえてくる。

『アッハッハッハッ!!』

「……紫苑、どうする？辰馬のバカ、とつとつ壊れちまったぞ？」

「い、いや…私に聞かれても…」

ただ馬鹿笑いする坂本に、銀時と紫苑は顔を見合わせる。

『銀時イ〜!! やっぱおまんは、えらい男ぜよ!!』

「……もうコイツ、何考えてるのかわかんねエ…」

ガクリと頂垂れる銀時を、その場に居た誰もが笑いながら見ている。紫苑もまた、そんな彼の姿を微笑ましく見ている。

そして、坂本同様…自分が愛した男はやっぱり凄いと…そう、思った。

「辰馬、私…嬉しいわ。一緒に過ごせる時間は短いかもしれない…うん、だからこそかな？ 凄く…嬉しいの。銀時に会えて。そして…その銀時が…あの時とは違って、心の底から笑っている姿を見ることが出来る…」

『ほうかア…』

「うん、白夜又なんて…本当にただの戯言よ。銀時は夜叉おにと呼ばれるにはあまりにも優しすぎるわ…」

『ワシも紫苑と同じ事を思っちよったぜよ、アツハツハツ!!』

坂本と紫苑だけではない。

「そうネ、銀ちゃんが鬼なんて似合わないアル!!」

「何と言っても、チャランポランとマダオの代名詞みたいな人ですからね!!」

万事屋の子供達も。

「がはははっ、いやまっただ!! 紫苑と坂本殿の言っとおりだなア!!」

「まあ、いけ好かねえ野郎だがな」

「俺にとっちゃ、旦那は旦那でイ。いつか一緒に土方を殺してくれる良き相棒でスヤ」

「おいこら総悟オオ!!」

「うるせえ土方死ねよ」

「テメエが死ねよ総悟!!」

真選組の面々も。

「たとい何と呼ばれていようと、私にとっては今の銀時様が私の知る銀時様…。私、過去は振り返らない女めいなんです。」

「アホノ坂田サンデアル事ニハ変ワリアリマセンネ」

「そうさね、家賃もろくに払ってくれないただの邪魔な男さね」

スナック・お登勢の面々も。

「ただ…アタシは嬉しかったよ。銀時が、かぶき町この町を大事に想ってくれて。護ってくれてねエ…」

誰もが…坂田 銀時という男を凄い男だと…そう思っている。

白夜叉

屍を喰らう鬼

そう呼ばれるには、本当に…

「う、うるせえ!!好き放題言いやがって…!!」

「あれ、銀時…もしかして照れてる?」

『アツハツハツ!!』

「照れてねエし!!てか、笑うな馬鹿本!!」

優しすぎる男だった。

* * * * *

ひとしきり銀時をからかい終わった頃、看護師が部屋に訪れて紫苑に病室へ戻るよう促した。いつもの発作とはいえ、吐血して倒れた後だ。恐らくは投薬治療もあるのだろう。名残惜しそうにチラチラと見ていた為、また改めてあとで病室に行くと…銀時と真選組の面々は約束した。辰馬も、近いうちに必ず休みをとると…無理にでも作ると紫苑に約束をした。

そして…残された面々は相変わらず携帯を囲む形で座っている。携帯もまだ、坂本と繋がったままだ。

「そんじゃあ、花見はする方向でOKだな？」

確認の意味を込めて銀時が聞けば…

『もちろんじゃ。けんど…1つだけ、条件があるぜよ』

「はあ？条件があるだア？」

坂本が思いもしなかった事を口にした。ここにきて条件など…いったいなんだと、そこにいる全員が思った。胡乱気に銀時が聞けば、先ほどまで明るかった声が嘘のように真剣なそれへと変わる。

『銀時、そしてツラ…。おまんらが晋助と仲直りをする事じゃ…』

「…………、オメエそりゃあ…………」

『無理とは言わせやあせん』

晋助との仲直り。

それが…坂本の提言した条件だった。

苦い表情をする銀時に、なおも坂本は続ける。

『おまんとツラが、晋助と袂を別つたうちゅーことは、晋助から直接聞いちよるから知っちよるぜよ。けんど…………おまん、ほりゃあ本心かえ？』

「…………、それは…………」

晋助と袂を別つた時。全力で叩つ斬ると桂と言いつつ切ったとき。

言いよつのない感情が…銀時を苦しめた。

『違つじやろつ？まっことは、ほがぁなこと望んじやぁいながったがじやろつ？』

そつ…本当はそんなこと望んではいながった。

ただあの時は、松陽の教えに背き世界をなきものにしようとしていた。晋助が許せず…売り言葉に買い言葉であんなことを言ってしまった。

だが本心は…裏腹だった。

言ってしまった後に1人後悔した。桂がどう思っているかは分かんなかったが…少なくとも、銀時は…

「……憎いわけねえだろ……。幼馴染で、そんなもって…背中を預けて合つて戦つた戦友ともだけ……？」

できることなら、あの時の言葉を撤回したいと…また馬鹿みたいに笑い合いたいと…

そつ、思った。

共に笑い

ともに戦い

そして…

『紫苑ッ……』

『…すまねえ…ッ…』

『…晋助ッ…』

『…銀時イ…』

『…すまねえ…』

背中合わせで共に涙を流した大事な仲間を憎むことなど…

出来るはずがない。

「できることなら……、けど…」

仲直り…など簡単な言葉では片付かないほどの壮絶な戦いをしてしまった。

『ワシア喧嘩は好かんぜよ。戦も嫌いじゃ。争い事はげにまっこと嫌いぜよ。やき、ワシア攘夷戦争から抜けた…』

坂本の言葉に、その事実を知らなかった真選組の面々は驚いたように声を上げる。

「最後まで戦わなかったんで？」

代表するように、沖田がそう問えば銀時は頷く。

「こいつはな、戦争の途中で抜けたんだよ」

『ほづじゃ。ワシヤ仲間がいたずらに死きいくのを見ちゆうことしかできなかった…。そがあな自分が許せんかったぜよ。んで、何かワシにも出来ることはなかかと思つた…』

「それで、辰馬は宇宙に行った。商いという名の戦だ。天人と人間の間を取り持つな…」

『地球は銀時達がおったときに、地球の事はまかせたんじゃ
「そうだったのか…」』

何故坂本が戦に出たのか…その経緯は分からない。だがしかし、あの当時は実力のあるものは有無を言わず戦にかりだされていた。坂本もその1人だったのだろうと…近藤は考えていた。

『じゃから…銀時、おまんとヅラは、晋助と仲直りしとおせ
「お前なア、簡単に言うがよオ…」』

『あと、紫苑と晋助もじゃ。紫苑の命が尽きかけちゅうなら、なおさら
ぜよ』

「まあ…その2人に関しては俺ももろ手を挙げて賛成だが…」

しかし、本当に自分達と晋助は仲直りが出来るのだろうか？

そのやり取りを見て、土方と沖田は悟った。

(ああ、だから万事屋は…)

(仲直りのしかたなんて聞いてきたんですねィ)

紫苑と晋助の仲直り、そして銀時・桂と高杉の仲直り。

その方法を…銀時は考えていたのだと。

『えいが？紫苑と晋助に関しちゃ当日でも問題ないじゃろうとワシア
思うちゅっ』

「まあ、あの2人は当日でも大丈夫だろうな…」

『けど、おまんら2人は…当日までに仲直りしとおせ。無理そう
じゃったら、花見は無しじゃ』

「……………まあ、生き残った全員で花見ってえのが約束だったからな…」
『ほづじゃ…。それに、花見の提案は紫苑で月見酒の提案は晋助じゃ』

「……そうだな、そうだよなア……」

他の誰でもない高杉兄妹きょうだい提案の花見。

この2人がいなければ意味がない。

「やれるだけのことはやってみる」

『おー、それでこそ銀時じゃ!!』

果たして…今の晋助に自分の言葉が届くだろうか？

師を失い、戦争に出て、負けて…。

ふらりと晋助達の前から姿を消した銀時は、攘夷活動には一切手を染めず万事屋という仕事を始めた。

徐々に晋助と再会したあの祭りでは…恐らくはお互い様だったの
だろうが、その変わりように驚き、落胆した。

そして紅桜の件で…完全に袂たもとを別わかった。

そう、思っていた。

『大丈夫ぜよ、おまんらなら』

「お前なア、人ごとだと思っ…」

けど…あの時から、ぽっかりと心に穴があいたような…そんな虚しさも感じたのだ。

決して、新八や神楽、そして桂の前では口にしなかったが…いつも思っていた。

もう、あの頃の…師を中心にして笑い合っていたあの頃の自分達には戻れないのかと。

それと同時に怖くもあった。

晋助と仲直りしたら…あの時晋助と敵対した新八と神楽が自分を軽蔑して、自分の元から去っていくのではないかと。家族をまた…失ってしまうのではないかと。

だが…

「全く…何で銀さんの周りの人達ってこんなに素直じゃない人が多いんですか…」

「類友ネ」

「あー、なるほどそうか…」

「けどね、銀ちゃん…」

「仲直り、ちゃんとした方がいいですよ？」

「じゃないと、私達みたいになっちゃっヨ。もちろん、しーちゃんも

…。だから…」

「ちゃんと仲直りをして」

「銀ちゃんの友達を紹介するヨロシ!!」

銀時が思う以上に、この小さな家族は強かった。

呆けたように2人を見つめる銀時。

それを電話越しに聞いていた坂本。

『…銀時はげにまっこと幸せもんじゃ…。こがぁないい家族を持って…』

坂本の言葉に、お登勢も目元を和ませる。

(坂本さんの言うとおりのさね。銀時…アンタ、私が拾った頃よりも…)

「うるせー、テメエに言われなくてもだなア…」

「なるほど、自覚がありなのですね」

「た、たま!?!いや、その…だな…」

「万事屋、素直になれよ」

「いいじゃないですかイ、旦那」

「コレジャドツチガ子供力分カリマセンネ」

「がははっ、全くだな!!」

「だーからっ、うるせーっつてんだろオオ!!」

(いい顔で笑うようになったよ…)

いつの間にか騒がしくなった連中を眺めながら、静かに笑う。

それは…

(げにまっこと、おまんは天才ぢや…)

坂本もまた同じだった。

【第十五訓】 仲直りのしかた　　〜銀時と晋助〜

坂本との電話を終え、先ほどまでの賑やかさが嘘のように静けさを取り戻す。他の誰もが、何とも言えない表情をしていた。それは…

「……………」

銀時が難しい表情で、自分の携帯電話を睨んでいるからだ。一体、今銀時は何を考えているのだろうか…？そこにいる誰もが、それを把握できず…戸惑いだったり、心配だったりの感情で銀時を見守っていた。

やがて…

「なあ……」

銀時が静かに口を開いた。銀時は近藤・土方・沖田…真選組の面々を視界に入れる。その事からすぐに、3人は自分達に何か言おうとしているとすぐに分かった。

「何だ？」

代表するように近藤が聞き返すと、少しバツが悪そうな…しかしそれでもどこか覚悟を決めた表情で先を続けた。

「ちっきの俺と辰馬のやり取りを聞いてて…何となく、今から俺がしよつとしてる事が分かるかもしれねえがよオ……………。俺ア今から、晋助に…電話してみよつと思つ。」

銀時の言葉に、真選組の3人の間にはいいよつが無い緊張感が走っ

た。

高杉 晋助。

紫苑の兄にして、攘夷戦争の英雄。

そして現在は、超過激派の攘夷志士・鬼兵隊の総督。

“血も涙もない鬼の高杉”と天人達からは恐れられ、まさに修羅の道突き進む男。

否が応でも、その単語が脳内をかけ巡る。それは真選組の面々だけではなく、万事屋の子供達も同じだったらしい。不安そうに銀時を見つめていた。無理も無い。この子達は、紅桜の件で直に晋助じかを見ている。神楽に至っては、直接対峙した相手だ。

「銀ちゃん、大丈夫アルか…？」

他の誰よりも、あの男の危険を本能で感じ取った神楽は心配そうに、それでいて不安そうな表情で銀時を見つめていた。そんな神楽の頭をそっと撫でながら、銀時はへラリいつもの顔で笑う。

「なあに、今から直じかに会おうってわけじゃねえ…。電話で話すだけだ。大丈夫さ…」

確かに、銀時の言う通りなのだが…それでも、やはり不安は拭えないのだろう。笑っている銀時とは対象的に、神楽の表情は暗かった。

と同時に、真選組の面々も何とも形容しがたい表情をしている。まず真っ先に口を開いたのは…

「そもそもテメエ、高杉の連絡先なんざ知ってんのか？」

土方だった。土方の言葉を受け、その質問も最もだと納得したのは

新八である。銀時と桂は、紅桜の件で晋助と袂たもとを別わかっている。そんな相手の連絡先など…知っているのだろうか？

「さっき、坂本さんから聞いたんですか？」

土方に便乗するように新八が聞けば、「あー」と頭を掻きながら、今度はめんどくさそうなの…いつものやる気のない表情を見せた。

「この携帯な…実は辰馬から貰ったもんなんだよ」

「へえ、さっきの人からですかイ？」

「そ。んで…この携帯には…辰馬、辰馬の部下の陸奥、ツラ、そして…晋助の番号が入ってた…」

「…なんだい、だったらアンタはいつでも連絡を取ろうと思えば連絡する事が出来たって事かい？」

「まあ、そういうことだ」

ガシガシと頭を掻きながら、「何度も晋助の番号は消そうと思ったんだけどなア…」と呟く。それでも、消せなかったのは…

(…やっぱり、俺アアイツの事を心底憎んじやいなかったってことだな…)

どこかで、晋助を信じたいと…そう思っていたからだ。

どこまでも未練がましいな、と自嘲しながら改めて銀時は真選組の面々を見る。それぞれ何とも形容しがたい表情をしていた。無理も無い。今から銀時が連絡をしようとしている相手は、彼らにとっては敵であり、逮捕しなければならぬ最重要人物。しかし、それと同時に紫苑のたった1人の家族でもある。もちろん、高杉兄妹きょうだいの関係があまりよろしくない事も把握済みだ。しかし、2人の幼馴染である銀時と坂本ははつきりと言いきったのだ。

今でも、晋助は紫苑の事を想い続けていると。

それに、紫苑の命のリミットはもう残り僅か。できることなら、会わしてやりたいというのが…それぞれの本音。だが、真選組である以上…やはり、見過ごしていいものかと…そう思ってしまう。

どんなに考えても、同道巡りをしてしまう土方は溜息を吐きながら近藤に視線をやった。近藤も慎重に考えているのだろう。いつものおチャラけた表情とは違う、真選組局長としての…とても真剣な表情だ。それとは対象的なのが沖田である。いつものポーカーフェイスで、何を考えているのか分らない。

(こりゃ参ったな…)

どつするべきなのか…?

紫苑を晋助と合わせるべきか否か。

銀時と晋助の電話を許すべきか否か。

私情を捨てれば…どちらも許すべきではないことだ。そんなことは、土方も…もちろん、近藤・沖田も分かっている。

しかし…

「…頼む、これが多分…仲違なかたがいしちまった俺達がまた縁えにしを戻す最後の機会でもあるし、紫苑と晋助を会わせてやれる最後のチャンスだ…」

いつも自分達を助けてくれるこの男に、こんなにも必死に頼み込まれたら…当然のこと、覆したくなるほど…激しく揺らぐ。

真選組局長と言えど

鬼の副長と言えど

DS隊長と言えど

みんな同じ人の子。

それと同時に、血も涙も無い鬼だテロリストだと恐れられている晋助もまた人の子であり、紫苑はそんな彼の妹なのだ。

土方は自身を落ち着かせるように、静かに目を閉じる。

思い出したのは自分の過去。

土方とミツバの過去だ。

沖田の姉で、病弱だったミツバ。そのミツバを突き放して故郷に残し、そして…最後の幸せをも奪ってしまった。彼女の婚約相手が犯罪者で、ミツバを利用していた相手だったから…尚更、その男のことが許せなかった。

と同時に、そんな事でしかミツバを護る事ができなかった…幸せを奪うことでしかミツバを護れなかった自分が酷く許せなかった。

沖田の言っていた通り、あの時見て見ぬフリをすれば…あるいは、表面上だけでも彼女は幸せな最期を向かえる事ができたのかもしれない。

けれど…土方はそれを良しとしなかった。

そんな表面上の幸せなど…無意味で悲しいだけだと。

彼女から最初の幸せを奪った自分は、最後の最後まで幸せを奪うことしかできなかった。

そうすることでは、護れなかった。

しかし…紫苑と晋助は違う。

確かに真選組隊士と攘夷志士という…決して相容れない対立関係にある2人だ。

だが…それ以前に、この2人は血の繋がった正真正銘の家族なのだ。

紫苑の余命宣告がされた時…ミツバと紫苑が重なった。ミツバを幸せにできなかった分、せめて紫苑は幸せにしてやりたいと思った。彼女が入院を拒み、屯所で過ごすと言った時も…近藤・沖田両名は考え直せと紫苑に言ったが、土方だけはそれを快諾した。彼女が屯所で過ごす事を望んでいるならば…それが幸せならば…叶えてやりたい。そう思ったからだ。

それが…土方なりのケジメだと思っていた。

今ここで、銀時と晋助の電話を止める事は、その幸せを奪う事になる。

紫苑から最後の幸せを奪う……ミツバの時となんら変わらない結末だ。

公私混同であることは百も承知。

しかし…

やはり…

『……兄さん……』

遠くを見ながら、晋助あにを想う紫苑の姿を幾度と無く見てきた土方にとって…彼女から、最後の幸せを奪う事こそ、己の土道ルルに反すると…その結論に至った。

静かに目を開け、改めて近藤・沖田両名を見る。近藤は全て分っていると言わんばかりにニカッと笑い、そして沖田も…いつものポーカーフェイスを崩し苦笑気味に笑っていた。

「いいんじゃないですかイ？俺ア…俺達ア旦那に数えきれねえほど救われたんですゼイ？その恩を、今返すべきだと…俺ア思いまそア」
「ふむ、俺も総悟の意見に同意だ。それに紫苑の事を思うと…やはり無理に引き離したりする事はできんよ。何だかんだ言っても、2人は兄妹きょうだいだ。これが俺の出した結論だ。あとは…トシ、お前の判断に任せる…」

2人の意思は決まっていた。

そんな2人の言葉を受けて、土方もフツと笑う。

「ああ、そうだな…」

両名の言葉を聞き、土方は改めて銀時と向き合う。紅い瞳は真っ直ぐと土方を捉えていた。それを土方もまたしっかりと受け止める。

そして…

「万事屋と高杉の電話を許可する」

真選組の決定が、下された。その言葉に、銀時は一瞬呆けたが…すぐにクシャリと笑った。

「サンキュ」

考え抜いた末の結論。これが真選組幹部達にとってどれほど重い決断だったことだろう。下手をすれば、賊に加担したと言われ首が飛びかねない判断だ。否、いな立派に切腹ものだろう。

それでも彼らは、国の法律ルールではなく己の土道ルールに従ったのだ。

その覚悟に感謝し、銀時は深々と頭を下げた。

「銀時、これは凄いことだよ」

「お登勢様、何が凄いのですか？」

一連の流れを見ていたお登勢はフツと笑う。言葉の意味が分からないまは、ただ首を傾げるだけだ。

「そりゃ凄いことさね。真選組が攘夷志士との電話を見て見ぬふりする…。これは、下手すりゃこの3人の首が飛びかねない…本当に重い決断さ」

「……近藤さん、本当によかったんですか…？」

「お前らのことなんか別に心配してないけど…もし何かあった時に後味が悪いアル」

不安そうな新八と、口ではいつもの毒舌を吐いているがやはり表情の優れない神楽。そんな2人を見て沖田がニヤリと笑った。

「何かあった時？んなこたア起きねエよ。オメエらさえ口を割らなければねイ」

そう…この事実を知る者は、ここにいる人間だけ。あと、この後電話するであろう晋助にも知れる事となるだろうが…攘夷志士がそれを暴露する事もあるまい。

つまり、ここにいる全員が黙っていれば…この話は外には漏れない。

不安そうだった新八と神楽の表情がパツと明るくなる。成り行きを見守っていたお登勢とキャサリンも同様だ。たまも…機械なりに理解したのだろう。小さく頷く。

そして…

「これで貸し借りは無しだな」

ニツと笑う銀時。

本当ならば、こんな事で返せるほど…銀時から受けた恩は軽いものではない。しかし、銀時にとってこの電話を見逃してもらおう事は…真選組の面々が思う以上にありがたかった。

これで自分達と晋助の縁が…以前のそれに戻るきっかけとなるならば。

これで紫苑と晋助が再び仲の良い兄妹に戻れるなら。

真選組が恩に感じていることと同じくらい、銀時も恩を感じる。

下手をすれば、逆に貸しができてしまったのではないかと思うほど

に。

だからまた、何か起きた時…その時は、彼女が愛した…第二の家族を、自分の手で護ろう。

銀時は密かにそう決意する。

晋助との電話に許可は出たものの、やはりいくつかの条件はあった。それは、先ほどの坂本の時同様、スピーカーで話す事。そして…今、彼が紫苑をどのように思っているか聞く事。何故、彼女を逃がさずに殺そうとしたのかを聞く事。これが絶対の条件となった。もっとも、真選組の面々が聞きたいと思った2つの内容は銀時も聞きたいことだったし、聞かれて困るような話をするわけでもない為、スピーカーでの通話も聞きたい事についても銀時は異を唱えなかった。

時計は既に午後19時を指している。空にはポツカリと…大きな満月が昇っていた。

「問題は、俺が電話をかけて…晋助が出るかどうかだな…」

そこが唯一の不安だった。袂たもとを別わかっているから、銀時からの電話だと分れば…もしかすると晋助は出ないかもしれない。それ以前に、坂本の手渡した携帯に登録されているであろう銀時の携帯番号を、彼が消去していたら…不審電話としてやはり出ない可能性もある。

「……………頼むぜ……………」

これはもう、一種の賭けだ。正直、銀時自身も何度か晋助の番号をアドレス帳から消そうとした事があった。しかしその度に…

『銀時、お前は優しくそして強い子です。私との約束を覚えていますか？その剣は、護るために使うと…そう約束をしましたよね？…お前の剣は、お前の大切な人を護るために振るいなさいな。そして…もしもお前の大切な仲間が道を誤りそうになった時は…その剣で、お前が止めてあげなさい。きつと…銀時の剣ならば届きますよ。強いだけではない、優しい剣ならばきつと…その想いが…』

松陽の言葉が脳裏を過ぎった。

そしてそれは、今なのだ…そう思った。

完全に攘夷活動から足を洗ったわけではないが、桂は過激派から穏健派になった。

あとは…晋助を止めるだけ。

「……先生…、俺達…またあの時のように笑えるかな…？馬鹿みたいに笑って、たまに喧嘩して、互いに泣いて。そんな日々…また…戻れるかな…？」

晋助の番号が表示されたディスプレイを眺めながら、銀時がポツリと呟く。その言葉は、その場にいた全員の耳に届いた。

銀時の本心。

全力で叩ッ斬ると言ったが…やはりそれは本心ではなかったのだと…今更ながらに銀時は気付く。

本心は…

「オメエがどう思っているかは分らねエし、今の俺を見てオメエが俺

を許せねエのも分る。けどな……それでも俺ア……やっぱ、昔みてえに笑いてえんだよ……」

“屍を喰らう鬼”と恐れられた自分を友だと言ってくれた幼馴染……。そんな幼馴染と笑いながら酒を酌み交わしたい……。

「戻りてエ……あの頃の俺ら……」

ただ、それだけだった。

銀時の思いを聞いた各々の心中もまた、その気持ち^{おのこの}が痛いほど分かった。

絶対に叶えたい願ひがある。

もつと強くなり、大切に思う姉を護りたい。

夜兎の血に打ち勝ち、兄である神威を自分の手で止めたい。

自分の住んでいる町と、その町を護ってくれるこの男を見守りたい。

盗人だった自分を雇ってくれている人に恩を返したい。

自分のデータに存在する人物達の笑顔を護りたい。

真選組を、この国を護りたい。

近藤という男の元に付き、彼の理想とする侍になりたい。

近藤が護りたいと願うものを、自分の手で護りたい。

そして……

坂田 銀時という、1人の男の心を護り、そしてその幸せを取り戻したい。

高杉 紫苑という、1人の女の最期の幸せを……心からの笑みを取り戻したい。

全員の場合は…今、1つとなった。

「先生…、もしどこかで見てるなら…頼む、俺に力を貸してくれ……」

今は亡き師に願いながら…銀時は通話ボタンをプッシュする。

そして、先程と同じようにテーブルの中心に置いた。

暫くの沈黙の後、コール音がなり始める。

1回、2回、3回…

コール音が鳴り止む気配はない。

(高杉さん…お願いです、出てください…!!)

(しいちゃんと銀ちゃんと仲直りするヨロシ…!!)

4回、5回、6回…

まだ、鳴り止む気配は無い。

(もし今出なかったら、アンタは一生後悔することになるよ…)

(何ヤツテンダヨ、サツサト出ロヨ…)

(出なければ、紫苑様も銀時様も桂様も、そして貴方も…きっと悲しむ事になりますよ…?)

7回、8回…

コール音は無情にも、無機質に鳴り続ける。

(やっぱり…駄目なのか？幼馴染でも、もうお前の中に万事屋と紫苑の存在は気にかけるに値しないものなのか、高杉よ…)

(テメエの妹と、テメエの戦友ダチなんだろうが…!!出る、出やがれ…!!)
(知ってるかい、高杉よオ。家族が死ぬってえのは、辛エし痛エ…。どんな形でも、オメエら兄妹きょうだいだろイ…!!)

9回目…

「やっぱり…駄目、か…」

銀時が自嘲の笑みを浮かべながら、電話を手に取り切ろうとした…その時だった。

響いていたコール音が鳴り止んだのだ。

全員が息を呑む。

そして…

『よお、銀時イ…。』

電話口から、出て欲しいと…そう願った相手の声が…聞こえた。

子供達は互いに顔を見合わせてニコリと笑う。スナック・お登勢の面々はどこかホツとした表情をみせた。真選組の面々は…やはり職業柄だろウ。その声が聞こえた瞬間に、安堵しつつも緊張の表情を見せる。そんな彼らを見渡しながら、銀時は思わず苦笑を漏らした。

(なんでお前らがそんなに必死なんだよ。でも…ありがとな…)

内心で礼を言いつつ、銀時は晋助の言葉に耳を傾ける。

『袂たもとを別わかつたはずのテムエが、俺に何の用だ…?』

その声は、最後に相對した…紅桜の件の時となんら変わらない、冷めた声色。しかし銀時は、それを気に留める事無く口を開く。

「よお、久しぶりな高杉。紅桜ん時以来だな…」

『ククツ、ああ…そうだなア。だがさつきも言った通り…その時に俺達は袂たもとを別わかつた筈だ。銀時イ…オメエ、今更何を考えてやがる…?』

さっきの坂本とは、ま逆の…何とも殺伐とした会話。これを聞いた土方は、苦い表情を浮かべる。

(…今、万事屋ヤロウはどんな気分で高杉と話してんだらうなア…)

チラリとその表情を伺うが…今の銀時からは何も読みとる事ができない。どうやら、最初からこうなる事は予想していたらしい。それは、万事屋の子供達も分かっていたらしく…最初こそ喜んではいしたが、今は真剣な表情で銀時と晋助の会話に集中していた。

「…なあ、オメエ…約束を覚えてるか…?」

晋助の問いには答えず…ただ、銀時はそれだけを口にする。一瞬、電話口の向こうにいる高杉が黙った。

『…ああ、覚えてるぜエ…?俺達の学び舎に咲いてる桜の木の下で月見酒…。オメエ、まさか約束を果たそうなんだ、馬鹿な事を言い出すんじゃないかあるめえな?』

銀時以外の全員が驚いたような表情を見せる。特に「もう兄さんは大切な約束をも忘れてるに違いない」と…そう紫苑から聞かされて

いた真選組の面々は驚きも一入ひとしめだった。

晋助が銀時に向けて言っている言葉は否定的な言葉であったが…問題はそこではない。

晋助は、彼らが交わした約束を覚えている。

そこが重要なのだ。

(本当に…高杉は今でも紫苑の事を…!?)

銀時や坂本から聞いても、どこか信じる事ができなかった。紫苑の口から着物の事を聞いても、やはり…釈然としない部分が土方にはあった。

しかし、高杉は…土方の予想を見事に裏切り、銀時達の言葉を決定付ける言葉を発したのだ。

本当に紫苑や銀時達の事をどうでもいいと思っている人間の言う事ではない。

(やっぱり高杉さんも…本当はどこかで、銀さん達の事…)

あのニヒルな笑みの印象が強く、新八にとって晋助は恐怖の対象でしかなかった。

だが…自分の大切な家族同然の人が信じた幼馴染は…

その空虚な笑みの裏に、本心を隠していた。

もちろん、まだ少し会話を交わしただけだから…何が本心で偽りな

のか…そんなのは分らない。しかし、銀時の表情を見て…そこにいる全員は思った。

今にも泣き出しそうで…それでいて、どこか安心したような…そんな顔をしている銀時。

その表情が…晋助のすべてを物語っているのではないかと…。

「もし…そうだとしたら、オメエは笑うか…？」

そんな事を周りの者達が思っているとは当然気付かず、銀時は晋助の問いに返した。今度は明確な答えをだ。その言葉を受け、僅かに晋助の口調に嫌悪が混ざり始めた。

『オメエがふざけた事を抜かすのはいつものことだが…、今回はいつも以上にふざけた事を抜かしやがるなア。次に会う時は全力で叩つ斬る…。オメエとツラの言葉だ。……銀時イ、どういつつもりだ…あア？』

電話越しでもはっきりと分りそうなほどの殺気。急に部屋の空気が一変したかのような錯覚にさえ陥ってしまう。それぞれの表情が、緊張のそれへと変わる中…銀時だけはいつもの表情のまま、晋助と対峙した。

『どうも…つもねえ。言葉のままの意味だ。月見酒がして言って言い出したのは高杉だろうよ。それを無下にするなんて無粋な事をする気か？』

『オメエの耳は節穴か。俺ア今更オメエと酒を酌み交わす気もねエし、ツラと会う気もねエ。分ったら、とっとと失せなア…。耳障りだ…』

「晋助ッ!!!俺の話聞けッ!!!」

『……ッ……!!』

それは突然の事で…周りにいた者達だけではなく、電話の向こうにいる晋助もまた息を呑んだ。

(……銀時の野郎、何を考えてやがる……、待て…今、俺の事……?)

銀時の怒声で先ほどの怒りが一気に冷めた晋助は、そこで初めてあ
ることに気付く。攘夷戦争で離れた後、銀時は晋助の事を名前で呼ば
なくなった。しかし今…銀時は自分の事を名前で呼ばなかっただろ
うか?

それに…何故、今更あの時の約束を果たそうなどと言い出した? 何
も、今でなくとも…その機会はいつでもあったはず。

なのに、何故このタイミングで…?

(……まさか……?)

そんなの自分の都合のいい妄想でしかない…晋助は頭を振る。
あの夜を最後に、自分の妹は忽然と姿を消し、その消息も分らなく
なってしまった。紅桜の事件の時…銀時と桂、そして晋助。それぞれ
相対したが…銀時の瞳も、桂の瞳も…紫苑はどこだとそう問っている
かのような瞳だった。

だから…紫苑はもう、この世にはいないのだと思っていた。

そう思う事で、ずっと引き摺っていた想いにケジメをつけようとし
ていた。

『……聞かせる、銀時。オメエの…言いてエことを。何で今更、花見を

しようなんざ言い出したのかを…』

しかし、晋助は知っている。

銀時が必死になる時、泣きそつな声で叫ぶ時はいつだって…紫苑を想っていた時だった事を。

戦争中に危うかった時も

紫苑とはぐれた日の夜も

紫苑を置いて進軍すると決めたあの時も

銀時は…今と同じように、泣きそつな声で怒鳴った。

だからこそ…銀時が今から話そうとしている事が、紫苑絡みの話しだということはすぐに分かった。

問題は…その内容が、生か死か。

態々、^{たもと}袂を別つた相手にこうして電話を掛けて来るぐらいなのだから…そのどちらかだろうと晋助は考える。

できれば良い知らせであって欲しいと…そう願いながら、静かに銀時の言葉を待つ。

「……紫苑な…生きてたんだ…」

銀時の言葉に…思わず、晋助が息を呑む。それが、電話越しにも分った。

『お、んじき…それは…、それは……本当、なのか…？』

一体：誰が想像しただろうか？

あの過激派のテロリストと名高い高杉 晋助が。
鬼だと恐れられている攘夷志士が。

『紫苑は…ッ、紫苑は…生きているのか…!?!』

こんなにも声を振るわせ…取り乱すなど。

真選組の面々も驚いてはいたが、直接晋助と相對したところのある神楽、そしてチラリとではあったが晋助の事を見た事があった新八にとっては驚きも一入だ。

あのニヒルな笑みを浮かべていた晋助が…こんなにも取り乱している。

(高杉さん、貴方もやっぱり紫苑さんの事を忘れられずにいたんですね…)

そこで改めて、新八は銀時の言葉を思い出す。

『兄妹の縁が切れた？んなことあるわけねえだろ。アイツは…晋助は今でもお前のことを想ってらあ…』

自分がいつも追い続けていたその男は、自分をいつも護ってくれる強くて優しいこの男は。

何一つ、偽りなど言っただけはいなかった。

銀時の言った通り…

高杉 晋助は、今でも高杉 紫苑の事を想い続けていたのだ。

「ああ……生きてる、生きてるんだよ……」
『そう、か……』

言い聞かせるようにゆっくりと銀時がそう言えば、刃のように尖っていた晋助の声は……誰もが知らない、聞いた事の無いような……とても優しいそれに変わる。

しかし……銀時の表情は、優れない。

そう……この話にはまだ続きがあるからだ。

紫苑の生存を知って安堵している晋助に彼女の今の状態を伝える事は何とも酷な事だと……銀時は小さく溜息を吐く。そこまで考えて、ああそうかと銀時は1人納得した。

(真選組も……こんな気分だったのかねエ……)

真選組の面々は、自分に紫苑の病を打ち明ける時……とても辛そうな顔をしていた。もしかしたら、自分も今……同じ顔をしているのかもしれない。

だが……これは伝えなければならないことだ。

だからこそ、こつして態々電話をした。

紫苑が生きていた事と、紫苑の命にリミットがある事を伝える為に。

小さく深呼吸をし、意を決して……銀時は更に続けようとする。

が、それよりも…

『紫苑は…オメエのそばにいたのか？ずっと…オメエのそばに…』

先に口を開いたのは晋助の方だった。言いかけた言葉を呑み込み、銀時はガシガシと頭を掻きながら真選組の面々を見渡す。銀時自身、本当の事を言うべきか否か…判断に困っているのだ。晋助は、幼馴染の中で誰よりも幕府を嫌っている。それは攘夷戦争の時から変わっていない。ここでもし、紫苑が真選組の隊士だと話したら……それこそ、兄妹きょうだいの縁が切れかねない。だが、真選組の面々はそれぞれ首を縦に振る。

真実を…

それぞれの瞳が、そう物語っていた。それを受けて銀時は小さく頷く。

「いや、俺と紫苑が再会したのは今日の昼頃だ。それまで俺も、紫苑が生きていた事は知らなかった」

『…じゃあ紫苑は…今までどこに…』

戸惑う晋助の声に銀時が苦笑を漏らす。

ああ、シスコンは今でも顕在か。

昔と今では見違えるほど変わってしまったかと思っていたが、根本的な部分…本来の優しさや仲間想いなところ、松陽を大切に想う気持ち、そして傍から見ても分るほど紫苑を溺愛していたその想いは…何一つ変わっていない。

それが嬉しくて銀時の口元は緩い弧を描く。

「まあ…俺も初めて知った時はちいと驚いたが……いいか、晋助。落ち着いて聞けよ?」

『分ったからさっさと見え』

「あー、はいはい。……紫苑は真選組にいた」

『真選組……だ、と…!?まさか、捕まって……!!』

まあ、実際に紫苑の姿を目で見ても再会した銀時と、銀時の言葉で聞いた晋助では発想が180度違ってくる事は分っていたため、この反応もしょうがないかと銀時は苦笑を漏らす。

『銀時、オメエとは一時休戦だ!!今からヅラと…それから辰馬も呼んで、真選組の屯所に…!!』

「おいこら、俺の話最後まで聞けよ晋助。誰が真選組に捕まってるって言った?」

『オメエが自分で言っただろっが!!』

「俺アただ、真選組にいたって言ったただけだぜ?捕まったなんざ一言も言っつてねエし。」

『……おい、どういふことだコラ。俺にも分かるようにきっちり説明しやがれ』

2人のやり取りを見ていたお登勢は、その会話を聞き思った。

(銀時…アンタ、アタシに「高杉とはもう昔のように、一緒には笑えない」って…そうだったねエ。けど今のアンタ達は…)

楽しそうに笑っている銀時と、電話口から聞こえてくる晋助の声。

これは、誰の目から見ても、そして誰の耳で聞いても…

(親友同士の会話さね。アンタと高杉って男の縁えにしもまた、アンタが思うほど脆くは無かったってことさ)

親友同士の会話にしか聞こえない。

今まで色んな銀時の表情を見てきたが、今日ほど楽しそうに笑っている銀時を見た事は無い。紫苑や坂本と話していた時もそうだが、晋助と話している今も…その表情は酷く穏やかで、そしてとても楽しそうに見える。

口では何と言っても、やはり親友同士なのだ…改めてお登勢は思った。

そんな事をお登勢が思っていることなど当然知るはずも無い銀時は、電話相手の狼狽している姿でも思い浮かべているのだろうか…？笑いを噛み殺しながら、晋助に促された先を続ける。

「紫苑は今、真選組の隊士だ。しかも…真選組副長補佐っ…一ポジションにいますぜ？」

『…………マジでか…………』

「おう、マジでだ」

思わず零れたのであろう晋助の言葉は…心底驚いているような、そんな言葉。

(さて…晋助、オメエは…やっぱり紫苑を憎むか？仇のいる幕府に就いている紫苑を…オメエは憎んじまつか…？)

その答えは、晋助しか持っていない。しかし、晋助の幕府嫌いは今に始まった事ではなく…思えば、松陽が生きていて幕府から目を付けられていたその時から…晋助の目に幕府は敵としてしか映っていない

かった。

(俺の気掛かりはそこなんだよなア……)

晋助が銀時を許せないのは、真選組との関係が故だろう。だからこそ、銀時はそこを一番不安に感じていた。

紫苑が真選組の隊士だと知ったら……やはり、妹ですらも憎しみの対象になってしまふのだろうか……？

暫くの沈黙。その沈黙は、銀時のみならず……紫苑の同僚でもある真選組の面々にとっても、何とも形容し難い……重苦しい沈黙だった。

『……そうか……、アイツはあの晩……俺に言った通りの事をしたんだなア……』

それは、侮蔑でも怒りの言葉でもない……

悲しみと憂いに満ちた声だった。

「……晋助、俺ア大体のことは真選組の連中から聞いた。紫苑が真選組隊士になった理由もだ。だが……オメエが紫苑を斬った……その理由だけがどうしても分らねエ。晋助……なんで紫苑を斬った。返答次第じゃ、俺ア許さねえぞ……」

紫苑を責めるわけでもない、むしろそうである事が至極当たり前だとしても言いたげな晋助に、ついに銀時は確信に迫る質問をぶつけた。

晋助が紫苑を斬った理由。

紫苑から聞いた限りでは、鬼兵隊脱退の処刑……それこそが理由だった。

た。

もしそれが晋助の真意ならば…坂本には悪いが、仲直りはできないし、紫苑と晋助を会わせるつもりもない。例えそれで紫苑に本物の笑顔が戻らなくても…愛する人を護りたい。

それが銀時の強い思いだった。

『……鬼兵隊の脱退…それは直結して死刑。三下であろうと、幹部で
あると、副官であろうと、だ……』

「けど…紫苑はオメエの妹だろうが!!何で妹に手を掛けた!?何で紫苑を斬った!!テメエが鬼兵隊の頭かしらだろうが!!頭かしらだったら、自分の妹テメエを護るくらい出来ただろうが!!なのになんで斬った!?答える、晋助!!」

銀時は声こそ荒げていたが…その表情は、今にも泣きだしそうな…
それでいて、何かの間違いであって欲しいと、そう願っているかのよう
な…とても辛そうな顔をしていた。

(銀ちゃん…辛いアルか…?友達に怒鳴るのが…辛いアルか…?)

いつも自分を護ってくれるその人が、今日ばかりはどこか小さく見える。

紫苑の死に怯え

かつての仲間を罵る事に苦しんでいる

まるで何かに耐えるかのように、唇はきつく噛み締められている。

「どうなんだ…、どう…なんだよ…ッ…!!」

どうか何かの間違いであって欲しい…。そんな切実な銀時の願い

が滲み出すような言葉。

『頭だからこそ……妥協ができなかった』

そんな銀時の言葉を真っ向から受けた相手の返答は…

『頭が揺らぐ軍隊は、すぐに崩れちまう。だからこそ…情けを掛けられなかった。だったらいつそ、この手で殺すことが…紫苑の為だとも思った』

嘘偽りの無い、真っ直ぐな言葉。

『けど……俺にはやっぱり、できなかった。鬼だ修羅だと言われる俺でも……』

そっと、晋助は目を閉じる。

蘇るは、紫苑にとどめを刺そうとした時の光景。

あの時紫苑は、微笑いながら…晋助の刃に掛かって死ぬなら本望だと言った。

やっぱり、兄を殺すことなど自分には出来ないと言った。

その時…初めて、晋助は鬼兵隊の常識を覆したいと思うほど…心が酷く揺らいだのだ。

それが…気まぐれの処刑ゲイムに変更した最大の理由。

信じていた。紫苑なら…あの傷でもきつと逃げのびることができると。

『紫苑を殺す事は…できなかつた…ッ…』

事実…河上すらをも制し、紫苑は見事鬼兵隊から逃げのびた。

一切、表情・態度には出さなかつたが…晋助はどこかでそれで良かったのだと安堵した。

紫苑の消息が分からなくなつてから、地球に降り立ち江戸の街を歩くたび…どこかに紫苑が居ないだろうかと、そう思いながら視線でその姿を探す事も多々あつた。

喧嘩している事を承知で、万事屋に足を運ぼうと思つた事も1度や2度のことではない。

しかし…

『俺ア…怖かつた。俺のそばにいと、紫苑はどんどん昔みてエに笑わなくなる。俺を見るその眼が…次第に悲しみと怒りで染まつていく。そんな姿を見てるのか怖かつた。そしていつか、鬼兵隊脱退なんて真似をするんじゃないかねえかと…そう、思つた…』

『そして、紫苑は本当にそうしちまつた…』
『あア…そうだ…。俺が…アイツの人生、全部狂わせちまつたんだ…』

自分と再会した時、紫苑がまた空虚な眼を向けてくるかもしれないと思うと…自ら動くことができなかつた。

だから、晋助は自分に言い聞かせたのだ。

『だから、俺は…“高杉 紫苑は死んだ…俺が殺した…” そう、思うようにしていた。いやア…実際、俺が殺したようなもんだ…。俺が、アイツの心を殺しちまつたんだ…』

それが、晋助が紫苑を斬った理由で、消息不明となった後も紫苑を探さなかった理由。

誰も…紫苑でさえも知り得なかった、晋助の本心。

(……何と悲しい……)

(…紫苑、お前が想っていた兄貴は…決して、お前を憎んじやいなかった。それどころか、お前を苦しめたと…ずっと、その十字架を背負ってやがった…)

過激派攘夷志士としてしか晋助を見る事が出来なかった真選組の面々。

しかし、銀時と晋助の会話を聞き、真実を知り…“血も涙も無い鬼の高杉”というイメージは崩れ落ちる。

(何でイ…。ホント、不器用なだけで…妹想いの兄貴じゃねエですかイ。高杉が鬼、か…。鬼どころか、ただ器用に立ち回れねエ普通の人間でさア)

紫苑が兄と慕い、銀時が戦友と慕った男は…

過激派攘夷志士・鬼兵隊総督という鬼の面を被った…

ただの、妹想いの人の子だった。

「……………馬鹿野郎…、オメエら…なんでそんな不器用なんだよッ…」
『うるせエ…』

「紫苑も、オメエも…ホント不器用で、手の付けられねエ困った馬鹿だ…」

『づるせエよ…、そんなこと…オメエに言われなくても、分かってらア』

ああ、今の彼にならば…聞く事が出来る。聞くことが怖かった。その返答が怖かった。けれど…今の彼だったら、きっと大丈夫。

銀時は外を眺めながら…ポツカリと浮かんだ満月を眺めながら晋助に問う。

「オメエ…今でも紫苑のこと…好きか…？兄貴として、紫苑のこと…好きか…？」

答えなど分りきっている。

銀時に対する、晋助の答え。

それは…

『ククツ、そりゃオメエ…当たり前だろうがア』

「だよなあ、このシスコンが」

『うるせえ、腐れ天パ』

「天パ言うなチビ助!!」

そこにいる全員誰もが予想した通りの答えだった。

『銀時イ』

「あー、何だよ？」

つい昔を思い出してしまい、何気なく会話してしまったが…ふと思いで出したのは今の関係。自分達は袂を別たもとわかってしまったている。

だが…晋助はこの電話で、改めて認識した。

『紅桜ん時は…悪かった…』

「…晋助、オメエ…」

やはり、憎む事などできないと。

否、始めから…銀時の事も桂の事も…憎んでなどいなかった。

ただ、世界を一番憎んでいるはずの銀時がノリククリと生きている様が許せず、憎いはずの幕府の関係者である真選組とつるんでいることが許せなかった。

と、そこまで考えて…晋助は違うのだと思った。

『俺ア…オメエが羨ましかった。人間達から屍を喰らう鬼だと蔑まれて、そんなオメエを拾ってくれた先生を目の前で殺されて、国のために先生のために戦ったのにその国に裏切られて…。世界を一番憎んでるはずのオメエが…馬鹿みてえなツラして笑ってるその姿が…羨ましかった…』

そう…憎んでいたわけではない。

ただ、許せなかった。

ヘラヘラと笑いながら生きている銀時が許せなかった。

けど、それと同時に…羨ましかったのだ。

世界を一番憎んでいたはずの銀時が、笑いながら過ごしていることが。

自分とは違つ…護るための剣を…松陽の教えを貫き通しているその強さが。

『俺ア…ただ…羨ましかったんだ…』

ただ、羨ましかった。

「…んな羨ましがられるような人生を歩んじゃいねーよ」

晋助の言葉にテレを隠して素っ気無く返すが…

『ククッ、無自覚かい？オメエんこのガキ共見てりやわかららア』

「チッ、ホントそういうとこばっか…変に敏感だよなア…」

『これでも一応、オメエの兄として一緒に過ごした仲だからなア』

「ああ、違えねエ…」

それも幼馴染には通用するはずもなく。晋助の言葉にただ笑うだけだった。

「…んじゃ、俺もあの言葉は撤回だ。次会った時は、全力で叩ッ斬るつったアレ。無しな…？」

『おう』

「問題はヅラだよなア」

『アイツのことは知らねエし、めんどくせエ…。それはオメエに任せるぜエ？』

「うわっ、サラッと人に押し付けやがったよコイツ!!」

ああ、何だ…。仲直りの仕方など考えていた自分が馬鹿みたいではないか。

そんな方法などいらなかった。

昔となんら変わらない。

自然と流れて仲直りしてしまった。

銀時が周りを見渡せば、それぞれが穏やかな表情をしている。

改めて、銀時は思った。

(本当に…よかった…)

これで一つ、紫苑の憂いは晴れただろう。

あとは、この不器用な兄妹きょうだいを仲直りさせるだけだ。だが…この様子だと、それも苦労はしないだろうと銀時は満足げに笑った。

『銀時イ』

「あ?」

完全に自分だけの世界に入っていた銀時は、晋助の言葉で我に返る。反射的に短く返事をすれば、少し…間を開けて晋助が話し始める。

『春雨にオメエを狙ってる奴が居る。第七師団団長の夜兔族の餓鬼だ。名は…』

「神威、だろ?」

その名に、真選組の面々は驚いた表情を見せ、そして誰よりも神樂が何か言いたそうな顔をしていた。だが、晋助との電話をする際に約束した事がある。

例えどんな内容の会話になっても、誰も口を挟まない事。

特に真選組は厄介だからと…銀時からそう言われているのだ。故に、口を出したくても出せずにいる。銀時も神楽を心配したのだから。視線を向けるが、それにも気付いていないらしく…神楽はただ俯いていた。

『何だ、知ってるのか？』

「ああ、神楽の兄貴だからな」

『…オメエが預かってる夜兔の…？』

「まあ、な…」

その言葉で、更に真選組は驚き…今度は神楽に視線が集中する。神楽の心がグラグラと揺れていることがすぐに分かった新八は、その手をしっかりと握った。ハッと顔を上げた神楽に、新八はニコリと笑う。

大丈夫、独りじゃないよ

その笑顔に、神楽も笑顔で返した。

『そっぴや、神威の野郎が言ってたなア。ったく…テメエ、今度は何をやらかした…？』

「んー、吉原桃源郷で…鳳仙ブツ倒した…かな…？」

『鳳仙ついたら、夜兔の中でも相当強エ男だと聞いたぞ…!?殺ったのか!?!』

「ま、色々あってな」

電話の向こうにいる晋助が素っ頓狂な声を上げる。それ程までに、信じられない事実なのだ。と同時に、真選組の面々もまた驚愕の視線

で銀時を見ていた。

『オメエ……俺ら5人の中で一番攘夷志士らしい事やってるじゃねーか。ったく……』

「うるせー、こつちだって好きでやってんじゃねーよ。あんなのと戦ってたら命がいくつあっても足りやしねエ」

しかしその春雨も、今は鬼兵隊と手を組んでいる。白夜叉と狂乱の貴公子の首を差し出すという条件付で。

『…ま、オメエの無茶は今に始まったことじゃねえが…こつちでも出来る限りの事はしてやらア』

「マジでか？」

『おう、神威には貸しがある。それを無下にするほど、奴も腐っちゃいめエ』

しかしそれも、神威の命を救ったという貸しをうまく利用すれば何とかなるかもしれない。否、誰に何と言われなくとも…晋助はそのつもりでいたのだ。

自分達以外の家族が出来たというのであれば…世界を壊しながら、銀時の家族を護ろうと。だからこそ、かぶき町だけには手を出さなかつた。

そこで銀時が…昔のように笑っているのなら。

それを奪う事だけはもう二度とするまいと…そう決めていた。

『だから、オメエはオメエらしく生きる。紫苑と一緒にな』

「晋助…」

『その様子じゃ、まだ籍も入れちゃいねえんだろ？俺アお前にだった』

ら紫苑を預けられる。だから、俺のことは構うな。アイツにも幸せになつて貰いてエ。だから…』

オメエがアイツを幸せにしてやってくれ。

晋助の言葉に…そこにいる全員が胸が痛んだ。

嗚呼、何でこんなに運命は残酷なのかと。

ようやく分かりあえるかもしれない…ようやく縁えにしが戻るかもしれないというのに。

紫苑の命はもう…尽きかけている。

「晋助…、花見しねエとな…」

『ん、ああ…そうだなア。けど、どうせやるなら満開の時がいいだろ？それまでに、やる事終わらせて俺も攘夷活動から足を洗う。それからでも会うのは遅くあるめエ』

攘夷活動から足を洗うという言葉には流石の銀時も驚いたが、しかし…それでは駄目なのだと、晋助にそう伝える。

ああ、まただ…。

こうして紫苑のことを伝えるたびに…銀時は自身に言い聞かせるような感覚に陥る。

「晋助、落ち着いて聞いてくれ。紫苑は…病に侵されている。余命宣告は昨年の春の時点で1年だったそうだ…。」

『何…だと…』

「今日、俺は紫苑と再会した。俺の目の前で…血を吐いて倒れた。正

直な話……怖かった……」

何度も何度も同じことを繰り返して。

それが現実だと……そう自分に言い聞かせているかのような錯覚に。

『もつ……どうにもならねエのか……？』

「辰馬が宇宙中から薬を探してみるとは言ってたが……医者が余命を下したんだ。多分、もつ……」

折角会えたのに、折角また会えるのに。

折角……縁えにしが戻りそうなのに。

運命とは時に残酷だ。

『銀時イ、すまねえ……』

『晋助……』

『オメエのことだ。紫苑がぶっ倒れた時……辛かっただろうよ……。すまねエ、お前1人に背負わせちゃまって……本当にすまねエ……』

謝る晋助に、銀時は俯く。近藤らもまた、何とも形容し難い表情をしていた。

(高杉よ、謝るな……。本当に謝らなければならぬのは、俺達だ……)

(万事屋と紫苑。こんなに近くに居たのに……俺達はこの2人を会わせてやることができなかった)

(すいやせんねイ……。俺達が、旦那と紫苑、そして高杉と紫苑の幸せを奪っちゃまったようなもんでさア)

しかし……そんな彼らのことなど全て分かっているとでも言わんば

かりに、銀時は微笑みながら…

「謝るな…誰も悪くねエ。誰も悪くねエんだ…。俺こそ…紫苑を見つけてやれなくて、幸せにしてやれなくて…本当にすまねエ…」

逆に、晋助に謝った。

今までのやり取りをずっと静かに聞いていた子供達やキャサリンは、とつとつ耐え切れなくなりお互いに肩を抱き寄せ合いながら涙を流す。お登勢もまた、着物の袖で目元を拭っていた。たまは悲しげに銀時を見つめている。

「…晋助ッ…」

『…銀時イ…』

『』…すまねエ…』

それは、あの時…戦争中に紫苑と離れた時を思い出させるような…

とても悲しい響きだった。

* * * * *

それから花見の日程については、出来る限り早い時期に行うということまで双方話が付いた。

「じゃあ、考えといてくれ」

『あぁ』

それを最後に、電話は切れる。

長かったようで、短かった電話が終わった。

結果的に銀時達の仲は修復され、予想に反して良い結果に終わった
電話。

しかし…

「……やっぱり駄目だ…」

気分はただ、沈むばかり。

「何で…ッ、やっと…やっと俺達全員元に戻ったのにッ……!!」

晋助と銀時達の仲が戻っても。

花見の約束が果たしても。

紫苑という存在が消えるまでのカウントを止める事はできない。

「銀ちゃん」

「銀さん」

子供達が銀時の手を取る。それを銀時もしっかりと握った。

「大丈夫…俺ア、大丈夫だ…」

そう言ってへラリと笑うと手を離して立ち上がる。

「ちよっくら便所に行ってくる」

そう言って部屋を出た。

だが…

「……ッ、ごめ……ッ、ごめん……ッ!!紫苑ッ、晋助ッ……俺……、一番大事なもん……護れなかった……ッ……!!」

扉を閉じたと同時に聞こえてきたのは、謝罪と嗚咽。

「ごめんなさいッ……松陽先生ッ……」

今は亡き、恩師への謝罪。

「俺ア……ッ、無力だ……!!」

自分の無力を嘆く声。

部屋に残された者達全員が……ただそれを聞いていることしか出来ず……

「謝るな……万事屋、謝るな……馬鹿野郎ッ……!!」

ただ、涙を流す事しか出来なかった。

【第十六訓】それぞれの朝

いろいろな出来事があった1日が終わり…その翌朝。

「ん……」

紫苑が目を覚ますとそこは、見慣れた屯所の天井……ではなく、真つ白な天井だった。一瞬、自分はどこにいるのだろうかと思いつき、呆けてしまったが、昨日のことを思い出す。

ここは大江戸病院だ。

けれど、いつもの発作だから今日の午前中には退院できる。医者はそういつていた。そして、次に発作が起きたらその時は覚悟をしておくようにとも言われた。命の覚悟など、とっくの昔から出来ていた。

攘夷戦争に出たあの日から。

攘夷戦争で仲間と逸れたあの日から。

鬼兵隊から抜け出したあの日から。

病に侵されたあの日から。

けれど、今頃になってもう少しだけ長生きしたいと思ってしまった。それは…恐らく。ずっと会えなかった恋人に…生死の分らなかった恋人に、ようやく再会出来たからだ。

けれど、医者の宣告したタイムリミットは今年の春。つまり…今だ。

(高望みはしない。せめて今年いっぱいくらいは生きたい。けど…)

己の身体が悲鳴を上げている事はよく分かっている。少し前までは、少々走ったぐらいで発作を起こす事などなかった。だが、それすらも出来なくなっている。

確かに…紫苑の命の灯火は消えようとしている。

それが怖いと思った事は今まで一度もなかった。心残りはいろいろあったが、それでも恐怖を抱く事はなかった。

しかし…愛する者と再会して。

初めて心の底から“死にたくない”と思い、そして“怖い”と…そう思ったのだ。

「…銀時…」

彼と再会して…紫苑の心が揺らぎ始めた。

いつ死んでもいいと思っていたのに、死にたくないと…そう望んでしまう。

「どーした、紫苑？」

「えっ!？」

と、自分の思いに耽っていた紫苑は…突然の返事に驚き体を起こす。声のした方に視線をやれば、ベッドの傍らにおいてあった椅子に座っている銀時の姿。

「ぎ、銀時!？え、何で!？」

「んー？昨日は俺、ここに泊まったんだよ。医者にちゃんとは許可も貰ったぜ?？」

ニツと笑う銀時に呆ける紫苑。しかし気付けば…手に感じる温もり。どうやら、紫苑が眠っている間、ずっと握っていてくれたらしい。

「ありがとう、銀時」

「ん、どーいたしまして」

ヘラリと笑う銀時に、つられて笑う紫苑。

それはまるで…

『おはよー、銀時!!』

『おう、おはよう紫苑!!』

まだ平和だったあの頃を思い出させるような…穏やかな一時ひとときだった。

真選組屯所…

「……………」

昨日の出来事後、病院から帰ろうとした一同だったが、銀時のみ
がその場に残った。否、別に銀時が残りたいと言った訳ではない。銀
時は何も言わなかったが、その表情が…「少しでも紫苑と共にいたい
”と物語っていたのだ。それに最初に気付いたのは土方と新八だっ
た。新八は土方にそつと耳打ちをして、何とか銀時だけでも紫苑のそ
ばに残す事は出来ないだろうかと相談したのだ。土方もどうやら
思っていた事は同じだったらしく、銀時以外のメンバーを帰らせ、医
者に頼んで銀時のみ病院に残ったのだ。医者も、紫苑の寿命を考えた
のだろう。彼女の望むことであればと、快諾してくれたのだ。

それから土方も屯所に帰り、一眠りしてから早朝に大江戸病院に行こうと思っただが…いろいろな考えていたら、結局眠れなかった。

紫苑の事、銀時の事、電話越しに話した紫苑と銀時の戦友である坂本の事、そして紫苑の兄…晋助のこと。彼らの過去のこと…とにかく昨日だけで、いろいろな事を知った。

特に晋助のことについては何度も何度も、銀時とのやり取りが脳内で再生される。あの過激派で血も涙もないと恐れられた晋助の本心。それを知って…いつもは冷静な土方の心が珍しく波立っているのだ。

あの電話で晋助は、「やるべきことをやったら攘夷活動から足を洗う」と言った。そのやるべき事が何なのか…それは分からない。だが、今まで自分達が追っていた過激派攘夷志士は…修羅の道を歩みながらも、妹の事を想っていた優しい兄だった。やるべき事がなんなのか…。あくまで土方の予想でしかないが、それは彼ら共通の師だった吉田 松陽の敵討ちではないかと…そう睨んでいる。

「天導衆・黑夜叉がアイツら共通の仇…」

たまたま紫苑が見てしまった資料に書かれていた名前。

天導衆・黑夜叉。

土方がこの資料を持っていたのもまた、偶然などではなかった。煉獄関で騒動を起こしてから、土方なりに天導衆についていろいろ調べていたのだ。その時にいきついた名前が、一人の天人の名前。それが黑夜叉だった。

「奴の殺した思想家は山ほどいる。その1人1人の名前を洗って…そ

の中の1人が…」

引き出しに入れていた資料を引っ張り出し、付箋を貼っていたペー
ジを捲る。

「吉田 松陽…アイツら共通の恩師…」

最重要人物と書かれた資料の中に唯一名の上がっていた思想家。
それが、紫苑達の恩師だと知ったのは…昨日だった。何故、黒夜叉が
最重要人物としたのかは分らない。だが、彼の教え子達…少なくとも
も、真選組が追っている桂と晋助、そして腐れ縁というなんともいえ
ない縁で繋がっている銀時、真選組隊士である紫苑。松陽の元で育つ
たこの者達の剣の腕はなるほど、確かに松陽が教えたというのであれ
ば危険人物として名が上がってもおかしくはないだろう。だが、紫苑
が教えてくれた松陽なる人物は…

『とても優しく、とても優れた方だった。生徒達1人1人を息子の
ように可愛がっていたし、決して無意味な殺生はしなかった。いつ
だって先生が剣を手にした時は、私達松陽塾の生徒を護るためだっ
た』

教え子想いのよき先生だった。

「だからこそだったのか…」

松陽が処刑された時期は、丁度天人が幕府に侵食し始めていた時期
でもある。あるいは、松陽の殺害は見せしめだったのかも知れない。
「どんなに腕の立つ侍でも我々には敵わない」と…その現実を叩きつ
けるためだったのかも知れない。

そんな下らない理由で、人を殺す。

天導衆ならばやりかねない事だ。

それは、煉獄関の時に見せ付けられた。天導衆は人間を平気で殺す。そこに迷いは一切ない。

「桂や高杉が天導衆を殺す。…なるほど十分考えられるな…」

彼らの目的は恐らくそこなのだろう。それを止めるのが真選組の仕事…なのだが。

(存外、それも悪くねえと思っちまっあたり…俺も相当狂ってるな…)

土方は真選組副長という肩書きを持った幕臣だ。しかしそれと同時に、1人の人間でもある。天人側に付くか、人間側に付くかと問われたら…迷うことなく人の方に付くだろうとそう考えている。今、何も言わずに幕臣として身を置いているのは、そこに近藤が居るからだ。それがなければ、こんな場所は願い下げだと…そう思っている。

そこまで考えると小さく溜息を吐き、資料を再び引き出しへとしまふ。隊服を調べ、刀を腰に差して自室を後にする。向かう先は、近藤の部屋だ。

一方、近藤の部屋はというと…

「近藤さん、俺アどうしても頼みてえ事があるんでさア」
「だろっつな…。総悟がこんなに朝早くに俺の部屋に来るなんてありえんからなア!!」

既に先客が訪れていた。昨日、すべての真実を聞いた者の1人であ

る沖田だ。

「単刀直入に言いやすゼイ？」

「して、頼みとは？」

「紫苑を真選組から除隊させてやってはもらえないですかねイ」

沖田の申し出。それは…高杉 紫苑の真選組除隊の申し出だった。深々と頭を下げる沖田に近藤は苦笑を漏らす。

(やっぱりそうだったか…)

昨日、すべての真実を知って屯所へと帰る道中。パトカー内には近藤・土方・沖田がいたが…誰も何も言葉を発しなかった。その時にチラリと近藤が沖田の表情を見たとき…彼は何かを考えている様子だった。

何を考えているのか。

そんなこと…考えずともすぐに分かる。それは、近藤や土方も考えていた事だったからだ。

高杉 紫苑を真選組から除隊させる。

それが…3人の願いだった。

「総悟、その件についてはトシとも話したんだが…」

土方の名前が出た途端、沖田の表情は険しくなる。だが、それに気が付かぬフリをして近藤は続けた。

「俺もトシも、紫苑が望むようにと…そう思っている」

「…そりゃ、どついでキア？」

「つまり…」

「紫苑が万事屋のところに戻る事を望むなら除隊を許可し、紫苑が真選組隊士であることを望むなら現状維持、ってこつた」

近藤の言葉の続きを、土方が言う。突然の事に、近藤も沖田も驚いたが、それ以上に沖田は土方の言葉に目を丸くした。

「…紫苑の除隊を許可するんで？」

「自分で聞いて信じられねえのか？許可するつってんだろーが」

「でも…」

「総悟、確かにトシの立ち上げた局中法度には、真選組を抜けし者は切腹」とあるが…それはあくまで、無断で真選組を抜けた場合だ」

てつきり、紫苑の除隊は反対されると思っていた沖田。だが、近藤も土方も…第一に考えていたのは紫苑の気持ちだった。

「総悟、これだけは忘れるな。どんなに俺達が紫苑を万事屋のところに戻してやりてえと望んでも、紫苑が真選組の隊士であることを望んでいるなら俺は紫苑の気持ち優先させる。紫苑が望む事を、俺は受け入れる。例えそれが除隊であつてもだ。」

土方の言葉に、沖田はクシャリと笑った。

「何でエ、土方さん…いつにもなく、らしくねエことしてるじゃねーですかイ。明日は暴風雨だぜイ、こりゃ」

「うるせえ」

「まっ、すべては紫苑次第ということぢ」

だが…と近藤は続ける。

「出来れば、紫苑には幸せになってもらいたい。だから万事屋の元に戻ってもらいたいとは思っている。が……やっぱり、一緒にいたいと思うのも事実だ」

近藤だけではない。土方も、沖田も思う事は同じだ。紫苑の幸せを願うなら、銀時の隣という本来あるべき場所へ戻すべきだという事は重々承知。だが…それでも。

「同じ真選組の隊士として、そして…」

紫苑が笑いながら、真選組を第二の家族と言ってくれたことを思い出す。

「第二の家族として…」

その笑顔に偽りはなかった。心から真選組を慕ってくれていた。だからこそ、彼女とずっと一緒にいたいと願うのも当然なのだが…それでも。

彼女の本当の幸せを願うのもまた、家族の務め。

「すべては紫苑次第、ですかイ」

「ああ」

紫苑が幸せになれるならば、彼女がどんな選択をしようとも…しっかりと受け止めよう。

それが、真選組3人の下した決断だった。

万事屋・銀ちゃん…

本来ならそこにいるはずの住人である銀時、そして居候の神楽の姿はない。いるのは、桂だけだ。昨日、ずっと万事屋で銀時の帰りを待っていた桂は、戻ってきた新八と神楽から1本のビデオテープを渡された。聞けば、たまが取り込んだ映像を、機械からくり技師の平賀 源外に頼んでテープにダビングしてもらったらしい。新八と神楽はこれを桂に手渡すと、揃って万事屋をあとにした。どうやら神楽は、新八の家に泊まったようだ。それは、ビデオテープを1人で見たいだろうと…桂を気遣つての事だった。

「リーダーと新八君には要らぬ気を遣わせてしまったな」

苦笑しながら、唯一万事屋に残っている定春を撫でる。何となく…すぐには見る事が出来ず、夜が明けたら見ようと…そう思っていたのだ。

(すぐに見れなかったのは、紫苑を置いていったことを彼女の口から指摘される事が怖かったから、か…。ふん、俺もまだまだだな…)

あの時の判断は間違っていないかったと今でも思っている。だが、彼女の友としては最低の判断だったと思うのもまた事実。それ故に、紫苑本人からそう指摘されるのをどこかで恐れていた。

(だが…折角たま殿がこうして映像に残してくれたのだ。見ぬ訳にはいくまい…)

それに、紫苑のことが気掛かりだったのも事実。意を決し、万事屋のテレビに設置されてるビデオデッキにテープを入れた。するとパッと画面が変わり、白が特徴的な部屋が映し出される。その、白い部屋に…

『たまちゃん、もう喋ってもいいのかな？』
『はい、構いません』

一際目立つ綺麗な紫の髪をした女が映っていた。

思わず…息を呑む。

最後に見たときより大人っぽくなり、より一層美人になった…紫苑の姿。しかし、紛れもなく…銀時が愛し、晋助が大事にしている、桂と坂本が友と慕った…高杉 紫苑。真っ直ぐとこちらを見つめる紫の瞳は、昔と変わらず透き通っていて…そしてとても強く輝いている。

『コタロー、久しぶりね』

画面の中の紫苑が自分の名前を呼んだ。幼馴染達の呼ぶ失礼極まりないあだ名ではない、彼女がいつも呼んでいた…ちょっと癖のある名前の呼び方だ。

ああ、お前はまだ…俺のことをそうやって呼んでくれるのか。

それが嬉しくて、口元が緩んでしまう。すると、画面の中の彼女もまた…昔と変わらない笑顔を見せた。

『訳あって、私は今…真選組の隊士になってる。そうする事でしか、生きる術すべがなかったから。兄さんとは派手に喧嘩しちゃったし、銀時が生きているのかどうかも分らなかったから…。けど真選組の隊士になったから、コタローと会うことも難しくなっちゃったなーって…ずっと思ってた。でもね…どうしても伝えたい事があった。ずっとずっと、コタロー達に言いたいことがあった。だから、たまちゃんを通して……この言葉を送ります』

ゆっくりと紫苑は目を閉じる。

彼女の伝えたい言葉、それは…

『ありがとう、そして…「じめんなさい」…』

感謝と、謝罪の言葉だった。

『銀時から聞いたわ。コタロー…戦が終わった後も、ずっと私のことを探してくれてたって。真選組の隊士になった事は少なからず攘夷志士達の間でも噂になっていたはずなのに…。それでも、コタローは私を恨まないでいてくれた。本当にありがとう』

紫苑の言葉に、桂は目を見開く。

確かに、紫苑が真選組の隊士であるという情報は、確かではないが“という程度に入っていた。それが確信に変わったのは、昨日の出来事を知ってだった。確かに、何故仇であるはずの幕府に…真選組の隊士になっているのかと疑問を抱いた。しかし、恨むよりも…やはり、生きていた事が嬉しかった。

「憎めるはずがないだろう。俺達は友だぞ…？」

もし、敵として相對する事があっても…恐らく、自分は紫苑を憎む事は出来なかつただろう。それは、銀時と真選組の関係が腐れ縁という形で繋がっていると知った時もそうだった。どこか釈然としない気持ちもあったが、それでも昔のような蔑みの中ではない…笑顔で溢れた場所で生きている彼の姿を見て、銀時のあるべき場所がかぶき町であり、万事屋なのだ…そう思った。だからこそ、紫苑が真選組の隊士と知っても…それが彼女の選んだ道だと割り切れたのかもしれ

ない。

『けど…私のはぐれたことで、コタローと辰馬には辛い選択をさせてしまったことも、銀時から聞いたわ。本当にごめんなさい。コタローと辰馬はとても優しいから…きっと、凄く悔やんだんじゃないかって…。いいえ、今でも悔やんでるんじゃないかって…そう思ったわ。2人の判断は正しかった…。私はそう思ってる。だから、絶対に自分を責めないで?』

紫苑の言葉に、込み上げてくる何か。

思わず桂は、自分の目元を押さえる。

「……………ッ、優しいのは…どっちだ…ッ……………」

恨まれても当然の選択だったと思っていた。紫苑から罵られる事は覚悟の上だった。

しかし、幼馴染にして戦友の彼女は…

昔となんら変わらない…優しい彼女のままだった。

『誰も悪くないの。コタローも辰馬も、もちろん…銀時も兄さんも。だから…絶対に謝らないで?ちゃんと会えたとき、開口一番の言葉が謝罪だったら殴り飛ばすからね?』

大人になっても、お転婆てんぱは健在か。紫苑の言葉に、笑みが零れる。

『ね、コタローは覚えてる? 私達が戦争中に約束した…花見…。兄さんは、月見酒がいいって言ってたけど…萩の桜の下で月見酒…。頃合よ…。』

約束、と言われて桂はフツと笑う。

ああ、紫苑も覚えていたのか…。

もしかしたら、自分だけがあの約束を覚えていて、他のみんなは忘れていたのではないかと思った。しかし、紫苑はちゃんと覚えていたのかと…笑みが零れる。否、紫苑だけではない。新八と神楽に頼んでいた伝言を銀時に伝えたら、それは嬉しそうに笑っていたらしい。そして…

『桂さん、銀さんもですけどね…』

『黒毛ジヤと片目も忘れてなかったネ!!ちゃんと約束覚えてたヨ!!』

銀時だけではなく、坂本と晋助もまたあの約束を覚えていたのだという。どういう経緯で晋助の真意を知ったのかは定かではないが…どうやら、誰一人としてあの時の約束は忘れていなかったらしい。

『私はもう、来年まで生きられない。だから…』

ああ、出来ればその事実だけは嘘だと言って欲しかった…。しかし、悲しげに微笑む紫苑は続ける。

『私がこの世を去る前に…約束…果たそうね…』

その言葉も…どこか悲しい響きだった。

そこで映像は切れる。

「……………そう、だな……………」

約束を果たさなければ。

紫苑が真選組の隊士だろうと、晋助と喧嘩中だろうと構わない。

紫苑の命の灯火が消えかかっているといつのであれば…せめて、最期に楽しい思い出を作りたい。

「約束…だからな…」

夜明けの日差しが万事屋の室内を明るく照らす。桂の頬を伝う涙が…日の光を受けて光る。

「くうくん？」

定春が心配そうに桂の手元に鼻をこすりつける。それを優しく撫でながら…

「大丈夫だ、定春殿。俺は…」

朝日を見つめて、微笑む。

「俺は…幸せだよ…」

鬼兵隊本部…

「……………ハア……………」

これで何度目の溜息か分らない。晋助は頭をガシガシと掻きながら、さでどつしたものと考えていた。銀時の電話を受けて、紫苑が存命であることも、しかしその命が病によって消えかけている事も

知った。いい知らせと悪い知らせ…どっちも一緒に入ったものだから、気持ちの整理がつかずにいたのだ。

(それに、今更どんな顔して紫苑に会ってんだ…)

晋助の不安はそこにもあった。確かに、紫苑には会いたい。だが…またあの空虚な瞳で見つめられたら…？

そう思うと、怖いのだ。

「ハア…」

「これで何度目の溜息だろうか。どれだけのがれが逃げたのだから…などと、柄にもない事を考えていたら。

「どうしたでござるか、朝からそんなに溜息を吐いて」

「貴方らしくもありませんね」

「けど、そんな晋助様も素敵ツス!!」

いつの間にか自分の部屋に来ていた幹部達。その気配に気付かないほど、晋助は悩みまくっていたのだ。

「オ、オメエらいつからそこにいた!？」

素っ頓狂な声を上げる晋助に、珍しいものでも見るかのような表情を見せた武市。来島もまた「気付かなかったんスか？」と首を傾げている。

「お主が拙者達の気配に気付かぬとは珍しい。それほど思い悩んでいたとっ？」

河上の言葉にピクリと肩が跳ねた。それを見た3人は「ああ、凶星だったのか」と思いながら、晋助の言葉を待つ。

「……昨日の晩…銀時から、電話があった…」

「ほう、白夜叉から電話でござるか」

予想外の名前に、思わず河上も聞き返す。銀時のことを「白夜叉」と呼ばれて、いつも以上にイラツときたのは…恐らく、銀時と和解したからだろう。絶対そうだ。

「万斉イ…。次、銀時のことをそんな風に呼んだら叩ツ斬るぜエ？」

「……!? な、何故でござるか!? 今までは何と呼ぼつと、何も言わなかったではござらんか…!!」

「今まではそれなりに我慢できてたんだよ。もう我慢の限界だよし、斬ろう。万斉、そこに座れ」

「え、何その京に行こう的なノリは!? お、落ち着いてください!! ちよつと、何事ですか!? 100%シリアス要因の貴方がこんなに取り乱すなんて…!!」

「テメエも死にてえか、武市イ…!!」

「ヒイ!!」

何だこれは。いつもの冷静でニヒルな笑みを浮かべている晋助はどこにいったんだ？

ぼかんとその様子を見ていた来島は、ワイワイと騒ぐ3人に口を挟む勇気もなく…ただ見つめるだけ。しかし…

(…なんだか、晋助様…)

「切腹しろや。介錯ぐれえはしてやるぜエ? 江戸城まで首をカツ飛ばしてやらァ」

「お、落ち着くでござる晋助!! 拙者が悪かった!!」
「私を巻き込まないで下さい、私を!!」

いつもの取り繕った姿ではない、ありのままの晋助の姿を見ているような気がしたのだ。ある意味、鬼兵隊に入ってから…怒の感情以外で初めて人間らしい感情を表に出しているような気がする。

(嬉しそう。何かいいことがあった…?)

そう、それは喜びの感情だ。晋助は隠そうとしているが、彼がまとう空気はいつもとは違い…何だか温かみを感じるものだった。その理由を聞きたいのだが…

「では、拙者はあの男の事を何と呼んだらいいでござるか?」

「普通に銀時って呼べばいいだろうが」

「今更それを私達に求めますか!」

いかんせん、彼らのやり取りに口を挟めない。どうしたものかと成り行きを見守っていたら…

「して…電話の内容は何だったでござるか?」

やれやれと溜息を吐きながら、河上が聞いてくれた。そう、明らかに彼の機嫌がいいのはその電話の内容が原因だろう。しかし、銀時と晋助は袂を別わかつたのではなかったのか…? また、来島の頭上にはクエスチオンマークが浮かぶ。

「……紫苑が…生きていた…、という知らせだ…」

紫苑、という名前に…その場にいた誰もが目を丸くした。

紫苑とは…彼の妹であり、一時期は自分達の上官だった…あの紫苑なのだろうか？

「…なんだその顔は。 正真正銘、鬼兵隊副官の高杉 紫苑だ…」

それとももう忘れたか？と…どこか悲しげな瞳で聞いてくる晋助に、その場にいた全員が首を横に振った。

「忘れるわけがないじゃないですか!! あんなお美しい女性を…!! いやあ、幼かったら本当に…」

「あ？紫苑が幼かったら…なんだって？」

「い、いえなんでも…」

「…生きていた…？晋助と拙者にあれほどの傷を負わされてなお…生きていた…？」

「…ああ、今はどうやら真選組の隊士としているらしい」

そして…と、晋助は少し伏目がちに続ける。

「紫苑は病に侵されている。 医者が下した余命は……1年。 丁度、去年の今頃に余命宣告をされたそうだ…」

「し、晋助様…、それってつまり、紫苑は…!!」

もう、限界だそうだ…

晋助の口から語られた真実は、生きていたという知らせと、病に侵されていてもう長くは生きられないという…嬉しくもあり、悲しくもある内容だった。

「俺達は…銀時とツラと辰馬と紫苑は…戦争中にある約束をした…」

窓の外を眺めながら…

「萩の桜の木の下で月見酒……」

ポツリと呟く。その姿は、いつもの近寄りがたい“鬼の高杉”と呼ばれる彼からは想像も出来ないほど……弱く見える。

そこで初めて、ああ……と3人とも思う。

彼は、紫苑を傷つけた事を後悔していると。

そして、会いたいけれどどんな顔をして会ったらいいのか分らずに悩んでいるのだと。

けれど……その約束を果たしたいと、そう願っているのだと。

「何事かと思えば、お主らしくもない……」

「そうですね、会いたいなら会いに行けば宜しいではありませんか」

河上と武市は口々にそう言う。その言葉を受けて、「だがなァ」と頭を掻く姿は……本当にいつもの彼からは想像もつかないほど、人らしい仕草だと思えてしまう。

「晋助様、会いに行つて下さい。きっと紫苑も会いたがつてるツス」

「来島……」

「それに、紫苑の命がもう……長くないなら、尚更ツス……!!絶対に会つて下さい!!お願いツス!!」

じゃないと、後悔するのは貴方だ……。

来島の言葉に、河上と武市も頷く。

「……そう、だな……。折角、銀時との仲も戻つたんだ……。紫苑にも謝らねえとなァ……」

流石に、銀時との仲直り発言には驚いた。

だが、彼がまとう空気が優しく、そして暖かく感じたのは…それが理由だったのだろう。

「だったら晋助様!! 膳は急げッス!!」

「ふむ、紫苑の身体のことを考えるとのんびりしてはいれないでいづるな」

「ご安心下さい。鬼兵隊の方は私達でしっかり管理しますので」

だから、戦友達と水入らずで楽しんできて下さい。

彼らの好意に、自然と晋助の表情も柔らかいものになる。が、それと同時にふとあることが脳裏を過ぎった。

(「コイツら…紫苑のことを忘れずにいてくれたんだなア…」)

誰も何も言わなかったから、もう紫苑という存在は誰の心にも残っていないものだと思っていた。

しかし…そうではなかったのだ。彼らもどこかで思うところはあったのだろう。来島は特にそうだったに違いない。存命の知らせ、そして余命の知らせを話したとき、一番反応を示したのは彼女だった。

だったら…

「……よオ、オメエらさえよければ …」

晋助の言葉に3人が驚く。

しかし晋助はニツと笑いながら…

「安心しろ。話は俺がつけてやる」

いつものように、しかしいつもより人らしい表情で煙管キセルを吹かせた。

快援隊・船内…

「……ほつかア、ほりゃよかったぜよ…!!……、わかったきに、こっちはこっちで何とかするぜよ」

朝一で携帯がなり、誰かと思えば昨日話したばかりの戦友・銀時からだった。その内容は、晋助と銀時が仲直りをしたという喜ばしいものだった。もつとも、桂と晋助についてはまだらしいが…銀時と晋助の関係が修復されたのであれば、この2人の関係もすぐに修復されるだろうと坂本は思っている。

これで、あとは晋助と紫苑を仲直りさせるだけだ。

しかし、銀時から聞いた限りでは、晋助も紫苑の事は気に掛けているし、今でも紫苑のことを大切に思っているようだ。この2人の仲直りに関しても、恐らくは問題ないだろう。満足そうに笑いながら携帯をズボンのポケットにねじ込む。

「頭かしらア、例の件について調べが…」

「おー、陸奥ウ!!仕事が早くて助かるぜよ!!して…どうじゃった?」

彼の優秀な部下であり、坂本のよき理解者(というより保護者?)で

ある陸奥が、数枚の紙を手坂本の元にやってきた。

坂本が陸奥に頼んだ事。それは…

「頭の戦友の病気じゃが…もう手遅れじゃ。余命宣告されてすぐじゃったら、どぎゃんかかったかもしれんが…」

「遅すぎたが？」

「……力になれんですまんのお。許しとおせ…」

「陸奥のせいじゃないきに、謝ることはないぜよ」

紫苑の病を治すための薬を探す事だった。しかし、余命宣告をされてすぐだったらいざ知らず、余命宣告をされて…その宣告の1年を迎えている。宇宙にはいろいろな薬があるが、特效薬といわれる薬でも…病魔の進行した紫苑の体を救う薬にはならない。逆に、今の紫苑の体力では薬が強すぎて、残された僅かな寿命を縮めてしまいかもしれない。

天人技術に特化したこの時代でも…病にだけは勝てないと痛感した瞬間だった。

「けんど…頭に聞いてげにまっこと驚いたぜよ。銀時に婚約者がおったとはのう」

しかも相手は、あの過激派攘夷志士・高杉 晋助の妹だということではないか。晋助に妹がいたという情報ですら驚いたというのに、その妹が銀時の婚約者だった事に更に驚いた陸奥である。

「頭は肝心な事を話してくれやせん。もっとも…今回の件については話とうなかった、ちゅーのが頭の本心なんじゃろうが…」

「陸奥ウ、許しとおせ。ワシは怖かったんじゃ。紫苑のことを話すと…紫苑を置いて進軍したあの日のことを嫌でも思い出す。じゃから

…おまんにも話せんかった…」

「どつせそんな」とじやろつと思つとつた」

「アツハツハツ、さすが陸奥ぜよ!! いやあ、敵わんきに!!」

いつも通りに振舞っている坂本だが…陸奥にはわかっていて。彼が無理をして笑っていることも、いつも通りに振舞おうとしている事も。

紫苑の病気を治せないことを、泣きたいほど悲しんでいるという事も。

だが、坂本はいつものようにただ笑っただけで、決して弱みを見せようとしなない。

(この男はそれが頭の務めとでも思つとるが? 阿呆、ワシとおまんの仲じゃ。少しは晒しとおせ)

しかし、この男は決して自分の弱みを見せない。どんなに追求しても、馬鹿笑いをして誤魔化される。長い付き合いで、陸奥はそれを理解していた。

だから…

「頭ア、今回の件…この短時間で星という星の薬を調べたんじゃ。ほりゃ、げにまっこと大変な作業じゃったぜよ。やき…」

せめて、これぐらいのわがままは言わせて貰おう。

陸奥の言葉に坂本は目を見開いて驚く。だが…

「おお、ほりゃええ!! 紫苑にもおまんの事を紹介したいと思つとつた

ぜよ!!」

陸奥の出した条件：「おまんの戦友に合わせる。ワシも月見酒の一員に入れるぜよ。」という要求をあっさりとのんだ。あまりにもあっさり過ぎて、逆に陸奥が驚いたくらいだ。

「おまん……戦友水入らずの月見酒やなか？ワシが言つのもおかしな話かもしれんが……ワシが加わってもえいが？」

もっとこう、仲間に連絡を取って了解を得るとか……いろいろやる事はあるだろうに。この男はあっさりとOKしたのだ。

「大丈夫ぜよ、晋助もヅラも銀時も紫苑も、そがあな事で怒るほど心の狭いやつじゃないきに!!」

この男のこの自信は一体どこからくるのやら……。

陸奥は溜息を漏らしながら、しかしその表情は……

「げにまっ」と、おまんはよつ分からん男じゃ……」

いつものポーカーフェイスとは違う、穏やかな笑みだった。

志村家……

「おはよう、神楽ちゃん」

「おはようネ、新八」

いつもは寝汚い神楽も、今日に限っては早起きだった。それは、いつもと寝る場所が違うからとか……そんな単純な話でもない。

「銀ちゃんとしーちゃん…大丈夫アルか？」

銀時、そして紫苑のことを心配していたからだ。神楽の問いに、新八はニコリと笑う。

「大丈夫だよ。銀さんの強さは僕達が一番知っている。そうでしょう？」

「……おつネ!!」

「紫苑さんも、銀さんがついてるから大丈夫だよ」

昨日の銀時は…どこか弱々しく、崩れ落ちてしまうのではないかと思ってしまった。自分達の事を家族のように大事にしてくれて、いつも護ってくれた強い人。しかし…昨日の銀時を見て、新八は思ったのだ。

もしかしたら、自分達に弱みを見せないよう…ただ強がっていただけなのではないかと。

現に、紫苑が銀時の目の前で倒れた事を坂本と晋助に伝えたら、紫苑の身体のこともだったが、銀時の精神面も酷く心配していた。

きつと…銀時は精神的に酷く脆い一面がある。

それを昨日、初めて知った。

「…大丈夫、僕達はいつも銀さんに護ってもらっていたけど…これからは、僕達が銀さんを護ればいいんだ」

彼の身体ではない、心を…。

「まったく、銀ちゃんも素直じゃないネ。辛いなら辛いって言ったらヨロシ。私達は家族アル」

「ホントにね。銀さん、そういう弱みを絶対に見せないから…ホントに苦労するよ…」

2人の子供は互いに顔を見合わせて笑う。

「新ちゃん、神楽ちゃん。ご飯が出来たわよー」

と、妙の呼ぶ声が聞こえた。「ご飯という言葉に、神楽の表情がパツと明るくなったが…あの可哀想な卵焼きを思い出してサツと血の気が引く。

「しししし、新八!! 姉御がご飯作ったアルか!？」

「大丈夫、ご飯は僕が作って…姉上はただそれを準備しただけだから」

苦笑しながら神楽を促し、妙の元へと行く。

が…食卓に並ぶは、新八が炊いたご飯と、新八が作った味噌汁。それ…

「……………」

「ご飯と味噌汁だけじゃ足りないと思って、卵焼きを作ったわ。神楽ちゃん、遠慮なく食べてね!!」

可哀想な卵焼きが添えられてあった。

銀さんを護る前に、まず自分の身体が死んでしまつかもしれない…。

遠くを見ながら新八がそう思ったのは、また別の話である。

何とかダークマター…^{もと}基、卵焼きをやり過ごし、新八と神楽はある人物達を待っていた。

「お妙さーんツツツ!!!」

「何しに来たんじゃ、このストーカーゴリラアアアア!!!」

「あ、来たネ」

「分りやすいインターホンだな…」

そう、待っていたのは真選組の連中である。昨日別れる間に、どうせ明日も大江戸病院に行くなら途中で拾って乗っけてやると土方が言ってくれたのだ。神楽は「上から目線で言つなヨ」などと言っているいきりしかめっ面をしていたが、志村家から大江戸病院に行くんだったら、タクシーを使うより真選組に拾ってもらった方がいい。その方がタクシー代も浮く。そう思った新八は、土方の好意に甘えることにしたのだ。

「おはようございます……って何やってるんですか…」

「ストーカーってホントに怖いアルな」

「あら、もしかして新ちゃん達に用事があったんですか？」

「もしかしなくてもそうなんだが……ったく、近藤さん…アンタ、何やってんだよ…」

本来の目的は新八と神楽の迎えのはずだったのに。それなのに、近藤の開口一番は自分が一途に想っている人の名前だった。それを容赦なくグーで殴り飛ばす妙も妙なのだが、毎度お馴染みのことだし、どう見ても正当防衛なので何もいえない。否、妙が怖くて何も言い返せない…というべきか？

「昨日新ちゃんと神楽ちゃんが話してくれた、銀さんの……？」

「そうなんです。紫苑さんの様子も気になるし、銀さんのことも心配だから、万事屋に行く前に銀さんを迎えに行こうかと思って…!!」

妙には昨日、新八と神楽がいろいろ話した。銀時には将来を約束していた恋人がいたことや、その恋人が病に侵されている事。過激派攘夷志士である高杉 晋助の妹である事など…。とりあえず、かいつまんで重要な部分だけを話したのだ。ただ、妙も紫苑の事は真選組の隊士として知っていたらしく、「あの綺麗な人が銀さんの婚約者だなんて」とそれはもう驚いていた。

「じゃあ姉上、行ってきます」

「行ってきますヨー!!」

「行ってらっしゃい」

土方によって回収された近藤と、それについて行くようにして志村家を出た新八と神楽。さつきまで賑やかだった志村家が、一気に静かになった。

「銀さん…」

紫苑のことを聞いていたときに、少しだけ聞いた銀時の過去。

「貴方だって、幸せになる権利は十分あるんですよ…?」

彼を慕う女性は意外と多い。さっちゃん、月詠、吉原の遊女達、すまいるのホステス達、それに…

「そりゃ、私だって銀さんのこと…。けど、貴方の強さと優しさの理由を知ってしまったら…私なんか敵うわけじゃないじゃないですか…!」

彼女もまた、銀時を1人の男として意識していた。

だが銀時の強さの理由を知った。そして、紫苑が時々話してくれたいた、強くて優しい大切な人”の事も知っている。

この2人がどれほど互いに互いを大事にしているか…それを知っているから。

「私は2人の幸せを願うわ。例え…」

ひらりと舞い散る桜を見ながら、妙は少し寂しそうに微笑む。

「それが…一時ときの幸せでも。紫苑さんと銀さんが…心の底から笑って
いられるならば…」

私は私が大切に想う人達の幸せを願おう。

スナック・お登勢…

「おはようございます」

お登勢が店の清掃をしようと起きてきた頃には、既にたまはモップを片手に店内清掃を始めていた。どうやらキャサリンは買出しに出かけたらしい。毎度の事ながら、本当によく働く1人と1体だと思ってお登勢である。

キャサリンも口ではいろいろ言っていたが、銀時のことが気になっているはずなのに。

それはたまも同じで、いつも通り店内清掃をしているように見えるが…どことなく、無表情に拍車が掛かっているように思えた。

「たま、アンタ…銀時のことが気になってるんじゃないのかい？」

お登勢に聞かれ、思わず手が止まってしまっ。

「図星かい。まあ、アタシも…気になってるんだけどねえ…」

煙草に火をつけながらポツリと…お登勢が呟けば、たまは顔を上げてお登勢を見つめる。

「…私は、皆様の笑顔をお護りしたいと思っています。私は銀時様に護られました。だから…今度は私が銀時様の笑顔をお護りたいと…そう、思っていました…」

確かに昨日の銀時は、今までに見たことのないような…幸せそうな顔で笑っていた。

と同時に、今まで見たことがないほどに…弱々しく、そして…泣いていた。

「けれど…私にはどうやったら銀時様の笑顔をお護り出来るのかわかりません。紫苑様がいなくなってしまうたら…銀時様に笑顔が戻らなくなるのではないかと…。そう思うと…機械からくりなのに…心こころがとても痛むのです。」

たまは自分の胸の辺りを押さえながら静かに目を閉じる。たまはいつも彼の姿を見続けてきた。記憶メモリーにははっきりと残っていないが、以前彼に救われたこともボンヤリと覚えている。彼には沢山、大事な事を教わった。

だからこそ、たまは彼の笑顔を護りたいと…そう思った。

しかし、その強さと優しさが紫苑を護る為だったと知り、その紫苑がもうすぐいなくなってしまうと知り…。もうあの笑顔が見られなくなるのではないかと…。そう、思ってしまった。

「私は機械からくりです。だから、人の心の事はよく分かりません。けれど、紫苑様が銀時様にとって大事な人だということはとてもよく分かりました。だから……」

だからこそ、彼女がいなくなったら…。銀時が壊れてしまうのではないだろうか…？

不安そうなたまを見て、お登勢は苦笑を漏らす。

(まったく、銀時を好いてる女が結構いる事は薄々気付いていたけど…まさか、この子たまもだったとはねえ…)

もつとも、たまには恋愛感情など難しい事は理解できないのだから…傍はたから見れば、彼女も銀時のことを慕う女の1人にしか見えな

い。
「たま…アンタは銀時のことを弱いと…そう思うかい？」

突然の問いだったが、しかしその言葉にたまも即答で返事をする。

「いいえ、銀時様はとてもお強い方です」

「そうさ、銀時は強い。けど、弱い部分もある…。たまにはちよいと難しいかもしれないが、これが人間というものさね」

確かに銀時の場合は、精神的に脆い面がある。それは、お登勢も薄々感じてはいた。けれど、人間は誰しも強さと弱さをもって生きている。

「キャサリンが盗人になったのは彼女の弱ささ。けど、盗人から足を洗って出頭したのはキャサリンの強さだよ。人間は不完全な機械からくりさね。だからこそ、過ちを犯すこともある。けどね…アタシは信じたいんだよ」

フーツと紫煙を吐きながら、お登勢は笑った。

「銀時の強さをねえ。確かに、紫苑の死という現実には避けて通れないことさね。けれど…アタシは銀時がそこで壊れてしまうほど、弱い男だとは思っちゃいないよ」

確かに、紫苑を探している時の銀時には危うさを感じた事があった。けれど、それを支えてくれる家族や仲間が出来て…少しずつだが、銀時は変わってきたのだ。

「アタシが拾った時よりも…銀時は強くなった…」

昨日、確かに銀時は天人を酷く憎んでいると言った。けれど、神楽を救い、そしてキャサリンを救った。それは彼が変わった証拠であり、強くなった証だ。

「銀時が壊れてしまいそうなほど落ち込んだら、その時は…」

「ソノ時ニ、私達ガ支エテヤレバイイ…デスヨネ？」

お登勢の言葉を続けたのは、買出しから戻ったキャサリン。キャサリンの言葉に、お登勢は頷く。

「そう、キャサリンの言う通りさね。たま…、アンタが銀時を護りたいと思うなら…とことん護ってやりな。もしアイツが、紫苑の死をきっかけに壊れそうになったら、その時はしっかりと助けてやりな。そう

すればきつと、銀時は立ち上がるよ」

「マア、私二八アノ人ガソソナニモロイ人二八見エマセンケドネ」

「……私、馬鹿な女からくりですね……。銀時様の強さは、良く分かっていたはずなのに……」

不安がなくなったと言ったら嘘になるだろう。けれど、お登勢の言葉で……たまの気持ちは軽くなった。

彼が笑わなくなることを恐れるのではなく、彼が辛い時にはそっと手を差し伸べればいい。

答えは単純で、そして簡単なもの。

否、だからこそ……難しいのかもしれない。

「単純なよつで複雑……。それが人の心さ……」

煙草を揉み消しながら、ふと……初めて銀時とであったあの日のことを思い出す。

(もつとも、アタシもアンタの強さに救われた1人なんだけどねえ……)

旦那の変わりに護ると彼が誓った、雪の降る寒い日。

その言葉がどれほど心強かったか。

「ちっ、暗い話は仕舞いだよ!!ほら、すぐに準備を始めな!!夜はあつと
いう間に来るんだからね!!」

「清掃モードに再度切り替えます。お登勢様、何なりとお申し付け下さい。」

「キャサリンは食器を洗っておくれ。たまは床掃除とテーブル拭きを

頼むよ

「ハイ」

「了解しました」

だから、彼の護ってくれるこのかぶき町で…

私達は私達らしく生きよう。

2階の騒々しくて迷惑極まりない住人達が戻ってきた時に、いつものように笑えるように。

それぞれが動き出した。

それぞれの想いを抱いて。

【第十七訓】いつか帰るところ

近藤・土方・沖田、そして新八・神楽が大江戸病院に訪れた時には、既に銀時と紫苑は病室に居なかった。どういうことだと首をかしげた一同だったが、近くを通りかかった看護師から話を聞くことが出来た。

「まったく…俺達が来るまで待てねえのか、あの野郎は…」

話によると、紫苑と銀時は片付けを済ませて早々に屋上に向かったらしい。もし誰か面会人が来たら、その時は屋上にいると伝えて欲しいと看護師に言伝ことづてしていたのだ。エレベーターで屋上まで向かい、扉を開けると…

「そうそう、あの時コタローがメツチャ怒って怖かったよね!!」

「怖かったっつーか、煩かったの間違いだろ…?」

「えー、そお? 結構…銀時も兄さんも辰馬も、顔引き攣こってたけどなア…」

「だから何でそんな事ばっか覚えてんだよ!?!」

「あと…私塾で兄さんと銀時がいたずら書きしてたら、松陽先生が背後から来て…」

「あー、あれなア。あん時はマジでビビッたぜ。だって松陽先生、気配を完全に消して来るんだもんなア」

楽しそうに話している2人の姿があった。紫苑は真選組の隊服を着ている。倒れた時に着ていた服がそれだったからだろう。2人で屋上の手すりに体重を預け、江戸の街を見下ろしながら他愛ない話で盛り上がっていた。

「何と…」

「お似合いネ!!」

2人の背中を見て、子供達は顔を見合わせて笑う。あんな美人が銀時の婚約者とは本当に勿体無いものだど、最初こそ思ったが…こうして見ると、本当にお似合いの2人だ。

「ね、辰馬は宇宙にいるのよね？」

「おう、そうだけど…それがどうかしたのか？」

「宇宙ってどんな感じなのかなーって。少し興味あるの。」

「……宇宙ねエ…。アイツ、自分の船で船酔いしてんぞ？」

「やだ、なにそれ!!辰馬らしいっちゃんらしいけど…」

「どこまでも馬鹿だよな、アイツ」

「い、いや…だから、そこは辰馬らしいって…言っただけだよ…」

「そー言ってるワリには…紫苑、声が笑ってるぜイ？」

突然聞こえてきた第三者の声に、2人は驚いたように後ろを振り向いた。子供達は銀時を呼びながら駆け寄ってくる。そして真選組の3人はそれぞれ…いろんな表情をしていた。近藤はいつもと変わらず、豪快な笑みだ。土方は…何となくバツが悪そうな顔をしている。昨日のことを思い出して居心地が悪いのか、それとも2人の話を聞いてしまった罪悪感かは分らない。沖田はというと…2人の話が面白かったらしく、「坂本って人はそんなに(いろんな意味で)ヒドインですかイ？」と聞いていた。

「あー…、そっか…紫苑を迎えに来たんだな」

もうそんな時間かと銀時は苦笑しながら頭を掻く。しかし銀時の言葉に、「それもだが」と近藤が前置きを言う。

「実は万事屋にも屯所まで来て欲しい。もちろん、新八君達もだ。」

「……………?何だ、まだなんか俺らに聞きてえことがあんのか？」

昨日だけでも十分いろいろな事を話した。攘夷志士と真選組という超えてはならない壁を超えて…それはもういろいろいな事を。しかし、彼等はまだ聞きたいことがあるという。少し…紫苑にも不安の色が見えた。

(まさか…天導衆に銀時のことが…?)

そんな紫苑の表情を的確に読み取った土方が、苦笑しながら口を開く。

「安心しろ、万事屋をとっ捕まえるとかそんな話じゃねえよ。どっちかっていうと…紫苑、お前関係での確認事項だ」

「…私…?」

まさか自分の事とは思いつかなかった紫苑は、自分を指差し首を傾げる。確認とは一体何なのだろうか?しかし、続きをここで話すつもりはないらしい。

「とりあえず…落ち着いて屯所で話そう」

何も心配は要らないと、近藤は笑いながら紫苑と銀時に言う。近藤が言うのだ。悪い知らせではないだろう。

「じゃあ…屯所に戻りましょうか。あ、確か報告書が今日までだった…!!」

「ああ、それはいい。俺が片付けておく。今日は休め」

「何でイ、土方さん。俺にはそんなこと、一言も言ってくれたことないじゃないですかイ」

「テメエは日頃の行いが悪すぎんだよ!!」

ギヤーギヤーと騒ぐ2人を「病院だから静かにな!!」と必死に宥める近藤。結局、騒がしいまま3人はエレベータへと向かっていった。

「…何だろ…?」

「さアな…?」

2人揃って首を傾げていると、銀時の手を新八が、紫苑の手を神樂が取る。

「銀さん、僕達も早く行きましようよ!!」

「じゃないと、アイツらに置いて行かれるネ!!」

それもそうかと笑いながら、4人仲良く手を繋いでエレベータへと向かった。

真選組の屯所に着くと、色んな隊士達が紫苑の身体を心配して出迎えてくれた。なるほど、紫苑は相当慕われているらしい。それは、彼等の表情ですぐに分かった。

「愛されてんねエ、紫苑?」

「ふふっ、いいでしょー?」

「あーあ、ジェラシー、ジェラシー」

「銀さん…いい年したオッサンが何言ってるんですか…」

「しーちゃん、ムッサイ男ばかりの中で辛かったアルな。きっと凄
い拷問だったに違いないネ」

口々に好き放題言ってる万事屋の面々を紫苑は面白そうに見つめる。子供達の言葉に、銀時がムキになって返す様は、見ていて大人気おとなげないとも言えるが、微笑ましくもあった。その姿は、松陽がまだ健在だった頃の自分達のようにだ。

「紫苑さん、よかった〜…無事だったんですね!!」

万事屋の3人を見ながら笑っていると、山崎がこちらに駆けて来る。「心配したんですよ?」という彼に、紫苑は申し訳無さそうに眉を八の字にさせた。

「けど…理由は局長から聞きました。紫苑さんの大切な人、見つかったよかったですね!!」

山崎は笑いながら紫苑、そして銀時に視線をやった。どうやら、真選組隊士の間では既に紫苑と銀時の仲については広まっているらしい。恐らく…いや絶対、噂を振りまいたのは沖田だろう。それ以外に考えられない。

「えっと…それで、近藤さん達はどー!?」

恥ずかしそうに笑いながら紫苑が聞けば、「局長室です」と言っ—礼する。どうやら仕事の途中で態々紫苑の顔を見に来たようだ。

「……………これだけ男が居て…しーちゃんはよく無事だったアルな……………」
「うん、僕も今同じこと思ってた」

傍から見ても紫苑が真選組の皆に慕われているのはよく分った。本当によく、男所帯の真選組で何事もなく過ごせたものだ…いろいろな意味で感心してしまう。そんな2人の言葉に、紫苑はちょっと困ったように笑っていた。

「別に誰からも声が掛からなかった訳ではないのよ?」

その言葉にギョツとしたのは銀時である。

しかし、次の紫苑の言葉で…

「ただ、私は…銀時が活着ているって信じていたから。だから…いつもお断りしていたの。信じ続けてよかった!!」

今度は恥ずかしそうに頬を紅く染めるのであった。

局長室に向かう途中も色んな隊士達に声を掛けられ、そのたびに大丈夫だと紫苑も伝えて…そうしてようやく局長室へと辿り着いた。

「随分遅かったな？迷った…ってことはねえよな。紫苑も一緒だし…」

「いやア？ここの隊士達がそりやもう紫苑を大事にしてるみてえでなア。会う奴会う奴、全員が紫苑に声掛けるもんだから…」

「なるほど」

そりやご苦労だったと土方が苦笑気味に労う。それに銀時も苦笑で返した。思っていた以上に紫苑は真選組の隊士に好かれていらしい。元攘夷志士という肩書きが、もしかすると隊士達と紫苑の間に少なからず壁を作っているのではないかと思ったが、その心配もどうやら銀時の杞憂だったようだ。

(…紫苑が真選組に残ることを望むなら…)

本当だったら、万事屋で一緒に僅かな時間を共に過ごしたいと思っただ。けれど、真選組の隊士達が皆笑顔で紫苑を出迎える姿を見て、銀時は思ったのだ。

真選組に残るか、万事屋に来るか。それを決めるのは紫苑でなけれ

ばならないと。

(とは言っても…真選組って除隊出来んの……?)

しかし、疑問はそこなのだ。近藤達は自分達に紫苑の事で何か話そうとしているようだ…もし紫苑が除隊を望んだとして、果たして真選組の局中法度には触れないのだろうか?そんなことを考えながら、近藤・土方・沖田に向かい合っようように銀時が座る。その横には紫苑がいて、少し後ろの方には新八と神楽が座っていた。

「さて…話というのは…紫苑の事についてだ…」

どっしりと構えて座った近藤が開口一番に言ったのは…

「単刀直入に聞こう。紫苑…素直な気持ちを俺達に聞かせてくれ。紫苑は真選組に残りたいと思っているか?それとも…除隊して万事屋の元に行きたいと思っているか?」

まさに銀時が疑問を抱いていた内容だった。唐突な質問だった為、紫苑は思わず呆けてしまう。しかし我に返って、今度はどうしたものかと銀時と近藤達を交互に見始めた。

「紫苑、近藤さんも言ったが…素直な気持ちでいい。話してくれ。」

土方に促され、今度は俯いてしまう。しかし、それは紫苑なりにいろいろと葛藤があるのだろうか。

(どうしたい…? 除隊したい…? けど、銀時と一緒に時を過ごしたい。だからといって、真選組から除隊したいの…? ううん、除隊は…したくない。私は真選組が好きだから。けど…あれ? ちょっと待って、私…どうしたいんだろっ…?)

中々顔を上げてくれない紫苑を見て、沖田は苦笑を漏らす。

「とりあえず…紫苑がどう思ってるか聞かせてくれやせんかねイ？除隊とかそーゆーのは抜きにして…紫苑はどうしたいんでイ？」

どうしたいかと問われ、紫苑はゆっくりと顔を上げる。どうやら酷く悩んでいるらしく、視線が泳いでいた。

「えっと…私は銀時の傍に居たいと思ってる。けど…真選組のみんなも大切だから、除隊はしたくなくて…。でも、銀時とはもう絶対に離れたくなくて、けどそれだったら真選組は除隊しなきゃいけないよなア…って、色んな気持ち^{こころ}が堂々巡りして全然纏まらないの…」

なるほど、彼女はいろいろ考えた結果…真選組の除隊は望まないが、しかし銀時と一緒に居ることを望んでいるのか。

それでは答えも出ないはずだと近藤は豪快に笑う。一方、銀時は呆れたように笑っていた。

「お前…どんだけ欲張りだよ…」
「うっ、だ…だって…」

元攘夷志士だった自分を本当の家族のように大切にしてくれた真選組には恩を感じている。銀時が見つかったからと言って、簡単に切れるような縁^{えんじ}ではないのだ。

「しーちゃんはきつと、銀ちゃんの経済力が心配ネ!!」
「あー…なるほど、それ確かに言ってるね…」

しかし子供達はそんな紫苑の思いに気付くはずも無く、好き放題

言っている。何せ家賃もロクに払えない上に、給料すらもロクに払えないほどの経済力だ。子供達に指摘されて、思わずウツと言葉に詰まってしまう銀時である。

「紫苑、俺達のこたア気にしなくていいんだぜイ？ 氣イ遣ってんなら大丈夫でさア。何れは俺が副長になって真選組を引つ張っていくという未来に変わりはないぜイ？」

「オィィィィ!! 何勝手に未来想像してんだよ!? 副長は俺!! テメエいい加減にしるよ!？」

「……うん、こんな人達ばかりだったら……紫苑さんだって不安ですよね、凄く分かります……」

突然始まった土方と沖田の言い合いを見て、新八は頬を引き攣らせる。これでは確かに、真選組からは離れられないと……。

「し、新八君そうじゃないの!! 銀時の経済力とか、トシと総ちゃんの殺し合いとか……そんなのが理由で悩んでるんじゃないの!!」

「え、何か、殺し合い”って書いて、喧嘩”ってルビ振られなかった? しかもそれを、”そんなの”で片付けたよ? え、何それ、銀さん怖い」

「そうネ、もうそのまま、殺し合い”でヨロシ」

「っておィィィィ!! 何の話だよ!! 話戻して!! 戻してエエエ!!」

脱線しつつあった話は、さすがというべきか……ボケが飽和したこの空間で新八が見事にツッコみ、話を戻す。

「で? 結局のところ、紫苑は何が理由で悩んでんだ?」

「除隊の件なら心配はいらんぞ? 俺もトシも紫苑が望むのであれば除隊を許可する。法度には触れないから、それも心配はいらん!!」

銀時と近藤の言葉に紫苑は苦笑しながら、慎重に言葉を選ぶ。

「私は…銀時の隣という場所に戻りたい。けど…真選組もまた、私の居場所なの。だから…どちらか、なんて…選べないわ…」

本当に欲張りよね、と苦笑する紫苑。しかし、紫苑の言葉が近藤達にとってはとても嬉しかった。遠くを見つめながら思いを馳せている紫苑の姿は、屯所内でも色んな隊士達が目撃している。それは恋人を想ってか、かつての仲間を想ってか、はたまた兄のことを想ってか…それは分らない。だから、もしかしたら何れ紫苑は真選組から居なくなってしまうのではないかと思っていたのだ。昔、命を預け合って戦った仲間と、自分達真選組を比べれば重みが違う。きっと、紫苑は迷うことなく真選組から離れていくだろうと。

しかし、彼等が思っている以上に…紫苑にとって真選組は大きな存在だったのだ。

「銀時が万事屋の子供達やお登勢さん達を大事に想っているように…私もね、真選組のみんなのことを大切に想っている。私にとって、真選組は第二の家族だから…」

だから、どちらかなんて選べない。本当は選ばなければならぬことだ。選べと言われれば銀時と共に居る事を選びたいのだが…その後後悔してしまいそうなのだ。

「……ふむ、これは参ったな……」

紫苑にすべてを一任するつもりだった近藤は、さてどうしたものかと腕を組む。しかし、紫苑が胸を張って、第二の家族 と言ってくれた事は嬉しかった。銀時という探し人が見つかったもなお、自分達の事を大切に想ってくれる紫苑の優しさが嬉しかったのだ。

しかし、紫苑の身体のことを考えると…やはり、最期の幸せは想い人である銀時と共に過ごして欲しい。真選組はもう、十分紫苑と共に楽しい時を過ごした。

「おい」「リラ」

そんなことを考えていると、神楽が近藤を呼ぶ。ゴリラと言われて泣きそうになった近藤だが、あえてそれを聞かなかったことにして視線をやると、まん丸で綺麗なブルーの瞳はキラキラと輝いていた。

「私から提案ネ。しーちゃんもお前らも決められないなら、私が決めるアル!!」

「えええ!? ちょっと待って神楽ちゃん!? これ紫苑さんの問題だから!! 僕達が口を挟んでいい問題じゃないよね!!」

まさかそんなことを言われるとは思わなかった近藤はポカんと呆け、土方は溜息を吐きながら頭を抱える。沖田も「何言ってるんでイ、寝言は寝て言いやがれイ」と毒舌を吐いていた。しかし、そんな彼等をよそに銀時と紫苑は苦笑を漏らしている。

「ったく、何でオメエが提案したがるんだよ。でもまあ…このままじゃ埒が明かねえし…とりあえず言ってみ」

「うん、神楽ちゃんの提案…参考にしたいな。聞かせて?」

紫苑は優しく笑いながら神楽の頭を撫でる。彼女に頭を撫でられて嬉しかったのか、華のような笑みを浮かべながら…

「銀ちゃんと私としーちゃん万事屋に住むヨロシ!! そして、万事屋から真選組に通えば問題ないネ!!」

そう言った。

神楽の言葉に、その場にいた全員が驚く。シンと…室内が静まり返った。

「……………駄目アルか……………?」

誰も何も言わない為、もしかしたら場違いな事を言ってしまったのかも知れないと神楽は俯く。だが、次に神楽が感じたのは…暖かい温もり。そう、紫苑が神楽を抱きしめていたのだ。

「しーちゃん…?」

「うん…、神楽ちゃんは天才ね……………!!」

誰も思いつかなかったこと。全員が、どちらか片方を取る事ばかりを考えていた為、全くと言っていい程それ以外の方法を考えなかった。

紫苑がどちらか片方のみを選べないのであれば、どちらを選べばいい。

神楽の提案は…まさに、紫苑の悩みを万事解決する名案だったのだ。

「何でイ、チャイナもいい事言うじゃねーかい」

「うるせーヨ、サド!! 別にお前らのことを思って言ったんじゃないネ。私はしーちゃんが大事だから、しーちゃんのために言ったアル。銀ちゃんだってしーちゃんと一緒にいたいでシヨ?」

「おお? おお、そりゃもちろん……………!!」

突然話を振られて、反射的に返せば神楽は満足そうに笑った。

「マヨ、これじゃ駄目アルか？万事屋から真選組に通つのは駄目ネ？」

ずっと黙っていた土方。紫苑がどうするのが最善か…それをずっと考えていたのだが、どうやら今回ばかりは真選組の頭脳も神楽には勝てなかつたらしい。フツと小さな笑みを零す。

「俺ア近藤さんの指示に従うまでだ。近藤さんがそれを許すなら、俺はそれでいい。紫苑が幸せになれるなら…それでいい…」

土方の言葉に、全員の視線が近藤に集中する。

「……ふむ、では…紫苑の処遇を決める。我々真選組は紫苑の幸せを願う。よって………」

* * * * *

すべての話を終えて、万事屋に戻った一行。銀時がいて、新八がいて、神楽がいて、そしてその中に…

「お前…驚くほど荷物少なくなえか？」

「まあ、元々荷物なんて殆どなかったからね。着物もあまり買ってないし…」

「しーちゃんの部屋はどこアルか？押入れは下だったら空いてるヨ」

「いや、押入れで寝ようとか考えるの神楽ちゃんぐらいだから…」

「んだよ、うるせえヨ。ドラ もんだって押入れで寝てるネ」

「ドラ もんと紫苑さんを一緒にしないのッ!!」

紫苑の姿。

近藤の下した判断は、万事屋から真選組に通うことを許可するといふものだった。原則、真選組の隊士達は何かあったときの為に屯所に住み込むことが絶対条件となる。だから、今回の判断は特例中の特例だった。もっとも、この判断に真選組の隊士達は誰も不満を言うことなく…むしろ、紫苑が真選組のことを見捨てないでくれたことに喜んだ。紫苑自身は、こんな中途半端な気持ちのままでもよいものかと悩んだが、近藤も土方も気にしないでいいと言ってくれた。だったらと…その好意に甘えることにしたのだ。

「ふーん…ここが万事屋、か…。銀時の住む家…」

「新八、神楽、こっちに來い」

「何ですか？」

「どーしたネ？やっぱりしーちゃんの部屋は押入れアルか？」

「それまだ言ってるの!？」

ワイワイと騒ぐ子供達に「いいからこっちに來い!!」と言い、とりあえず言い争いは落ち着く。そして銀時が神楽と新八の耳元でゴニョゴニョと何かを言つと、2人はパツと明るい顔になった。

紫苑は不思議そうに首を傾げる。

新八と神楽が紫苑の方を向いた。銀時も同じように紫苑を見る。

そして…

『万事屋へようこそ!!』

3人は声を揃えて、紫苑を迎え入れた。突然のことに目を丸くして驚く紫苑。銀時は笑いながら紫苑を抱き寄せる。

「これからは、ここがオメエの家だ。昔約束した…2人で一緒に暮らすって約束…。まあ、餓鬼が1匹いるが…」

「匹ってなんネ!?失礼アルな!!」

「これで約束、果たせたな…」

「……ッ、うん……!!」

紫苑の瞳から零れ落ちる大粒の涙を銀時が指で掬い取る。泣いてはいるが、紫苑は嬉しそうに笑っていた。

「宜しくお願いしますね、万事屋の旦那?」

「じゃ、オメエは万事屋婦人だな…!!」

「あーあ、しーちゃんがとうとう銀ちゃん^{マダオ}の毒牙に掛かったネ…」

「もし生活に耐えられなくなったら遠慮なく僕に言ってくださいね!!」

アハハハハッツ!!!

その日、万事屋からは元気のよい声が絶える事がなかった。煩いと怒鳴り込んできたお登勢も、紫苑のことを聞きそれは良かったと目元を和ませた。

そして、その夜…

「で、お前はいつからいたんだよ…?」

「ずっと天井裏でスタンバツてました」

「ホント…何やってたんですか、桂さん…」

「馬鹿アルな」

いい加減、天井裏の気配が鬱陶しく感じてきた銀時は、天井に思いつきり木刀を投げつけたのだ。紫苑も気配には気付いていたらしく、時々天井をちらちらと見ていた。そして、天井から降ってきた人

物は、銀時・新八・神楽が予想した通りのさっちゃん……ではなく。

「…「タロー…」」

昨日から万事屋の留守を預かっていた桂だった。

「は…、何で普通にリビングにいなかったわけ？何で天井裏？テメエ何してんの？」

「ま、待て銀時!!俺の話聞いてくれ!!」

桂の話によると、銀時達万事屋のメンバーが戻ってくるのを待っていたが、待てど暮らせど戻ってくる気配がなく、置手紙を残してアジトに戻るうとした。だが表で真選組の沖田の声が聞こえてきた為、慌てて天井裏に隠れたのだ。しかし、万事屋に戻ってきたのは銀時達だけ。だったら大丈夫かと思いつりようとしたのだが…そこに紫苑の姿があった。服装は真選組の隊服。そこで桂は降りていいものか否か…悩み続けていたのだ。そして今に至るのでした。あれ、作文？

「ったく、何やってんだよ…」

「一瞬、さっちゃんさんかと思いましたがよ、ホントに」

白い目で見つめてくる紫苑以外のメンバーに、申し訳ないと頭を下げる桂。しかし…自分を見ても何も言わない紫苑に、少し不安も感じていたのだ。

ビデオテープで見た紫苑は、あんな風に言っていたが…やはり、自分の事を怒っているのではないだろうか？だったら…やはり、謝るべきなのだろうか？いやけど、謝ったら殴ると言っていた。じゃあどうすればいいの!?

そんな葛藤を勝手にしている桂である。

新八の言葉を最後に、騒がしかった万事屋に沈黙が広がる。その沈黙を破ったのは…

「ふふっ…コタロー…逮捕しちゃっぞぞ？」

紫苑の悪戯っぽい声。手錠を指でクルクルと回しながら言うのだから、どこまで本気でどこまで嘘なのか分かったもんじゃない。しかも彼女の服装は未だに隊服のままだ。もしかしたら本当に逮捕されるのかもしれない。冷や汗をかく桂を見て、紫苑はニコリと笑った。

「冗談よ、コタロー。」

「冗談でもよしてくれ、寿命が縮むかと思ったぞ…」

「そのまま縮みまくってサクッとくたばっちゃまえ、ツラ」

「ツラじゃない桂だ!!」

ああ、いつもの彼に戻った。新八と神楽は顔を見合わせて笑う。

「ったく、オメエは何の心配をしてたんだよ…」

「……、それは…」

「私がコタローのことを恨んでるとでも思った？」

「……………」

「思ってたんですね」

「分りやすいアルな」

全くもつ、と紫苑は苦笑しながら桂の手を取る。そしてフワリと笑いながら…

「ただいま、コタロー。心配掛けて…ごめんなさい…」

そう言った。突然のことに桂は驚いたが、やがて目元を和ませなが

ら…

「ああ、おかえり…。やっと…銀時の元に戻ってこれたのだな…」

本当によかったと…そう思った。

それから新八は実家に戻ると帰って行き、リビングには銀時・神楽・紫苑・桂が残っていた。と言っても、時計は既に深夜を指している。神楽は銀時に体を預けて深い眠りに落ちていた。

「まったく、寝るんだったら押入れに戻って寝ろっての…」

「それだけリーダーが銀時のことを大事に想っている証拠だろう？」

「そういうえば、何でコタローは神楽ちゃんのことをリーダーって言うの？」

「む、それは…企業秘密だ」

「何が企業秘密だよ、この電波が」

「電波じゃない桂だ!!」

ある程度桂を弄り倒した後、ゴホンとワザとらしく銀時が咳払いをした。そして意を決したように口を開く。

「オメエら…約束の事は覚えてんな？」

「萩で、夜桜の下月見酒…だろう？」

「もちろん、覚えているわ」

約束という言葉に、全員が頷く。それに満足そうな表情をする銀時に「だがしかし」と桂が難しそうな顔をした。

「辰馬はともかくとして…」

「晋助のことか？」

「ん、ああ…そうだ、高杉のことだ……………、ちょっと待て、銀時…。」

今、何て…?」

銀時は今、何と聞いた? 袂たもとを別わかつた幼馴染のことを、名前で呼ばなかったか? もうずっと…攘夷戦争以降、銀時は晋助のことを名前で呼ばなくなった。しかし今、銀時は確かに「晋助」とそう言ったのだ。

「んー? 実はな…俺、晋助と仲直りした」

「な…何イイイイ!!?? 何でだ!? 俺の知らないところで貴様、何をやっておる!! 俺だけ仲間はすれエエエ!」

「まあ、話の流れでなー。さアて、どーすんよ…ツラ。オメエだけ晋助と喧嘩したままでゼエ? 辰馬曰く、仲直りできなかつたら月見酒には参加させないってさー」

ケラケラと楽しそうに笑う銀時に、これは参ったと桂は苦笑する。どうやら、晋助と仲を戻したいと思っていたのは、自分だけではなかつたらしい。否、もしかすると…晋助に向けて斬ると言った事自体、銀時にとっては辛いことだったのかもしれない。だが、その晋助と銀時の仲は戻ったという。

(だったら、俺だけが意地を張る必要もないな…)

桂とて晋助を心底憎んでいたわけではない。ただ、晋助が許せなかつただけなのだ。どういふ経緯で銀時と晋助が仲直りをしたのかは分からないが…だったら自分もそうしなければならぬ。

「ならば、仲直りせざるを得んぬ。月見酒…これでも楽しみにしていたのだぞ?」

「違いねーや」

ハハッと笑う銀時の着流しを、控えめに引つ張られて「ん?」と銀

時がそちらに視線を向ける。すると、どこか不安そうな表情の紫苑がいた。

「……………」

言葉を探しているのか…中々、紫苑は口を開こうとしない。それに苦笑しながら、銀時は紫苑の頭を撫でる。

「心配はいらねえよ。お前らは花見の当日に仲直りしろ。大丈夫、晋助の想いは…決して紫苑から離れてねえ。それは…ちゃんと確認した」

だから、何も心配はいらない。

不思議なもので…銀時に言われると、不安なこともそうではなくなる。きつと大丈夫だと…そう思えてしまう。

「うむ、紫苑よ…銀時の言う通りだ。あ奴は口では悪態ばかり吐いておるが、身形みなりを見ればすぐに分かる。紫苑が戦争中に買った着物を今でもそれは大事に着ているからな。」

「…仲直り…できるかな…？」
「できるさ、紫苑と晋助なら…絶対に…」

だから、何も心配は要らないと銀時と桂は笑う。

この2人が大丈夫というのなら、きつと大丈夫。

紫苑はそう信じて…静かに目を閉じた。

再会した時に見せたニヒルな笑みをまた向けられるかもしれない。今更何しに来たと言われるかもしれない。

また空虚な瞳を向けられるかもしれない。

それを思うと…怖い。

けれど、やはり信じたいのだ。

友の言葉を。

そして…優しくかった兄を。

「うん、私…頑張ってみる…」

だったら、逃げずにまた向き合おう。あの時は刃を向けること
が語ることが出来なかったが、今だったら…きちんと向き合える。

高杉 晋助の妹、高杉 紫苑として。

「もう、逃げない」

力強い言葉に、2人も頷く。

「…あ、着物で思い出した…!!」

と、これまで張り詰めていた空気はどこへやら。紫苑は忘れていた
と言わんばかりに声を上げる。

「銀時、」
「タロー。兄さんの着物のことでずっと疑問に思ってたこと
があったんだけど…。あの時私は、今兄さんが着ている紫の着物と、
桜色の着物を買ったわよね？」

戦争中に立ち寄った店で気に入って買った2枚の着物。結局、紫苑
と離れ離れになったため、着物だけが彼等の手元に残った。2枚とも

晋助が持つべきだと、そう言ったが…晋助は紫の着物しか自分のものにしなかった。

「あとの一枚って……？」

誰かが持っているのだろうか。しかし戦争中に購入したものだ。もしかしたら、もう誰の手元にも無いのかもしれない。だが、そんな紫苑の思いは杞憂に終わる。

「ああ、それなら…銀時」

「おう」

とりあえず神楽を押入れに寝かせて、銀時は奥の部屋へと入っていく。紫苑は首を傾げていたが、桂は小さく笑みを零していた。

「他の誰でもない、お前の着物だ。晋助と銀時が蔑ろにするわけな

ら」

「じゃあ…」

「着物とはこれのことですか、お嬢さん？」

ニツと笑いながら戻ってきた銀時の手元にある物。それこそ紫苑が探していた物だった。

「……私の、着物……大切に持っててくれたのね……」

「当たり前だろ？他の誰でもない…紫苑の着物だからな。安心しろ、誰も袖は通してねえし、ババアに頼んで時々手入れしてもらってたから、いつでも着れるぜ？」

着物を広げて紫苑の肩に掛ける。

「ふむ…よく似合っな」

「ああ、花見の時はそれを着て行ったらどうだ？」

「…ええ、そうするわ…!!」

兄妹きょうだい色違いでおそろいの着物。

これでまた、皆が晋助をシスコンと弄るに違いない。それが手に取るように分った紫苑は思わず笑ってしまう。

「その色合いだと、色の白い銀時でも似合いそうだな」

「ツラ、オメエ何言ってる…っておい、紫苑!」

「あ、ホントだ!! 銀時にも淒く似合う…!!」

自分の肩に掛かっていたそれを、今度は銀時の肩に掛ける。銀髪に色白と…アルビノ体質である銀時に、桜色の着物は良く似合っていた。

それを見て、紫苑はフワリと笑う。その意味が分からなかった銀時は首を傾げていたが、紫苑はただ「よく似合うよ」と言うだけだった。

(もし私がこの世を去ったら、その時は…その着物を銀時が着てくれたら嬉しいな、なんて…。そんな事、今は言うべきではないわね…)

けれど、できればそうして欲しい。

紫苑の微笑みには、そんな想いが込められていた。

そんなことを知るはずも無い銀時は…

「いやア、けどそうしたらオメエ…晋助とおそろいだけ？」

「ペアルックという奴か…。ふむ、男同士でペアルック…」

「……ヤバイ、ちょっとそれ面白そう!!」

「うへっ、やめるキモいわッ!!」

慌てて着物を脱いで紫苑の肩に掛けなおすのであった。

そんな彼等の様子を…影から見るものが2人。

今は話に夢中の為、誰もその気配に気付いていないが、そこには…

「不思議だわ…。銀さんを他の女に取られたのに、全然悔しくないなんて。」

「何というか…あんなに幸せそうに笑っておる銀時を見ると、こっちも嬉しくなるというものじゃ…。」

密かに(?) 銀時に思いを寄せていた2人の女性。

「して…主は諦めるのか?。」

「しょうがないじゃない、あんな素敵な女がいたんじゃ…私なんて勝てるわけないわ。ツッキーこそどうなのよ?。」

「…わっちは元々銀時のことなど眼中にありません。銀時が笑っていられるなら…わっちはそれで十分であります。」

「ホント、ツッキーって素直じゃないんだから…。」

猿飛 あやめと死神太夫・月詠。 銀時に女が出来たという情報をいち早く掴んだあやめはすぐに月詠にそれを知らせ、どんな女が見極めると言って天井裏に潜んだのだ。 最も月詠は、そんなコソコソと誰かの私生活を覗き見ることなど嫌だったのだが、日輪に「銀さんにいい人が出来たとして…それがとんでもない悪女だったらどうするんだい? 月詠はそれでもいいの?。」と言われたのだ。 そう言われてしまうと気になるもので…結局、あやめと仲良く万事屋の天井裏に忍ぶことになったのだ。

「銀時にも似合ってるのにな…。あ、だったらせめて写メ撮らせてよ!!」

「オメエ、どーせそれを沖田君とか土方君辺りに見せるんだろ？絶対ヤダ!!」

「ありゃ、バレてた」

「バレバレだっつーの!!オメエ花見の時に、辰馬にも見せる気だったろ?」

「え、そこまでバレてたの!」

「ふむ、これが以心伝心というやつか…」

「いや、それ絶対ちげーだろ…」

だが、今この場に自分達は不釣合いだ。自分の目で見て確認して納得したのであれば、「こ」に残る必要はない。

「わっちは百華のことも気になるからそろそろ戻るが…主はどうするのじゃ?」

「私も戻るわ。銀さん達の邪魔はしたくないし…」

あやめと月詠は視線を交わしてフツと笑みを零す。最後にもう一度、下で騒いでいる3人を視界に入れて、2人は万事屋を後にした。

こうして、賑やかな夜は更けていった。

いつもだったら煩いと怒鳴り込んでくるお登勢も、この日はかりは住人達の好きにさせていた。スナックに来ていた長谷川が「珍しく銀さんのとこ、賑やかだね」と上を見ながら零したが、それにお登勢は笑いながらこう言った。

「まア、アイツの婚約者が来てるからねエ。そりゃ賑やかにもなるだろ?」

その一言でスナック・お登勢が騒がしくなったのは……また、別の話である。

【第十八訓】恋空　　春、夜空の下で

紫苑が万事屋に身を置くようになって、状況は目まぐるしく変わった。

まず、紫苑に残された時間を考えると早い方がいいだろうという近藤とお登勢の提案で、銀時と紫苑は入籍をし、式を挙げたのだ。最も紫苑は…

「私はもう遠くない未来にこの世を去ってしまうから、入籍は…」

と、銀時のことを思ってたのだが、

「いや、そんなの関係ねえな。言っただろう？俺の隣は…紫苑のものだけだ。例えお前が居なくなっちゃっても…ずっと、な？」

銀時にこう言われて…紫苑は嬉しさのあまり抱き付き号泣した。

ただ式に関しては、大人数を呼んで行うのではなく、身内だけで簡潔に済ませたいと両名がそう希望した為、真選組屯所で行われた。必然的に真選組の隊士は全員出席となり、そこに万事屋の子供達と妙、スナック・お登勢の面々が顔をそろえた。しかしどこから聞きつけたのか、外に漏らさないように準備したはずなのに、恐ろしい数の祝電が届き、近藤を始めとした真選組の面々は、その対応に追われることとなる。

「万事屋、ちょっといいか？」

「あー、何だよ？」

手招きをする土方に、やれやれと溜息を吐きながら立ち会ってそち

らに行くくと、土方から3通の電報が手渡された。1通は坂本 辰馬と陸奥の名義で来ているが、他2通は無名だった。

「まあ、誰かなんて…俺には想像できるけどな。そんな憶測で動くのも馬鹿らしいから、そいつはテメエに預けるぜ」

それだけを言い残して土方は再び奥へと引っ込んでいく。一体なんだと首を傾げながら紫苑の元に戻れば、「どうしたの？」と紫苑も首をかしげた。

「いや、電報が来てたらしんだけど2通…無名の電報があったらしくてね」

「無名の電報？」

だがそこまで考えて、「待てよ」と銀時は手を止める。態々、坂本の電報と無名の電報2通を一緒に渡す理由。

無名という事は、すなわち真選組に名前を知られたくない誰か。

「まさか…」

銀時が2つの電報を開けば…

『銀時、紫苑。お前達の幸せを俺は願う。とりあえず、チューは花見の時まで取っておけよ？俺達が先に見る権利があるのだからな!!幕府の犬共に先に見られてたまるものか!!』

『紫苑を泣かせたら、今度こそ本気で袂たもとを別わかつから覚悟しとけや。』

誰といわずとも分る内容の言葉が。

「ククッ…シスコンめ…!!」

「じつじつ…兄さんったらもつ、恥ずかしい…!!」

紫苑は顔を隠して恥ずかしがっていたが、心中にはまた別の思いがあった。

(兄さん…ありがとう…)

どこかで不安があった。花見の時に仲直りをすると言ったものの、すべての不安がなくなつたわけではない。無理だつたらどうしようとか…そんなことを考えていたのだが、そんな不安を吹き飛ばすような…攘夷戦争時の兄を思わせる文面に、紫苑は嬉しくもあつたのだ。

そんな彼等を見ていた神楽と新八は、首を傾げる。楽しそうに笑いながら銀時が無名の電報2通を子供達に渡せば、それぞれ呆れたり笑つたりしていた。

「こつちの電波の内容は何ネ？チューはここじゃないアルか？」

「か、神楽ちゃん!!そんなに残念がることじゃないから、ねっ？」

「銀さん達が紫苑さんのお兄さんの事を“シスコン”って言う理由が良く分かりました」

「だろ?…たく…態々電報で言うことでもねーだろ?だからアイツはシスコンなんだよ…」

そんな吃驚な電報もあつたり、例の如く沖田と土方が取っ組み合いの喧嘩を始めたり、妙が近藤を殴り飛ばしたり、神楽が沖田と取っ組み合いの喧嘩を始めたり…。

密かにやるはずだった式が、とんでもなく騒がしいものになったが、それも何とか無事に終え…

「おー、辰馬か。電報あんがとなア。…おつ、おつ…、俺ア大丈夫だ

ぜ？紫苑？まあ、事情を言えば何とかかなんたる。晋助とツラはどうなんだ？……あー、なるほどな。そんじゃ晋助の方は任せませ？ツラはこっちで見つけてとっ捕まえるわ。……あ？陸奥ウ？…俺ア別にいいけど…。あー、じゃあうちのガキ共も連れて行っていいか？……おー、そんじゃーな。」

あとは花見の日程を合わせるだけとなった。式を終えた翌日、坂本から銀時に連絡が入ったのだ。坂本もようやく仕事が一段落つき、地球に戻ってこれそうだとのこと。あとは晋助と桂、そして紫苑の都合を合わせるだけだが…恐らく都合の心配などは要らないだろう。真選組の面々は紫苑の為だったら出来る限りの事はしたいと言っていたし、桂と晋助は時間を気にする必要のない攘夷志士だ。銀時の万事屋も依頼など殆ど入らない。

「やっと…約束が果たせるな…」

刻一刻と…約束を果たす時が近づいていた。

そして…

「たま、帯を取っておくれな」

「はい、かしこまりました」

「すみません、お登勢さん。夜の準備があって忙しいのに…。たまちゃんも「めんね？」」

「なあに、気にする事はないさね。馬鹿息子の嫁に来てくれたんだ、これくらいは事はさせておくれよ」

「私は紫苑様と銀時様のお手伝いがしたいのです。気になさらないで下さい。」

花見の日がきた。

花見をするから休みが欲しいと紫苑の代わりに銀時が頼み込み、紫苑は問題なく休みを貰うことが出来た。晋助と桂も問題ないと連絡が来たため、花見の日はあつという間に決まったのだ。

そして、ついに紫苑は念願だった着物に袖を通すことが出来た。

「この着物は戦争の途中で買ったものだ、銀時様からお聞きしました。お兄様とお揃いとか…」

「ええ、そうなの。本当は兄さんが着ている着物も私が着る予定だったんだけどね。あ、お登勢さん…着物の手入れ有難うございました」「なあに、お安いご用さ。銀時じゃ、こんな上等な着物の手入れなんて出来やしないからねえ」

蝶のあしらわれた、淡い桜色の着物。

そつと…その着物を撫でて微笑む。

「これで完了だよ。鏡で見てごらん」

「わあ、凄い…!! 私1人じゃこんなに綺麗に着付けできませんでしたよ!! 本当に有難うございます!!」

嬉しそうに笑う紫苑を見て、お登勢とたまもまた自分の事のように嬉しそうに笑った。

「あとは…」

「ごそごそと真選組隊服のポケットからかんざしを取り出し、鏡を見ながら差す。それは、プロポーズ言葉と一緒に銀時から贈ってもらったかんざしだった。

「銀時にしちゃ、いい物を選んだね」

「紫苑様の髪の色、そして今着ている着物の色にとてもよくお似合いです」

お登勢とたまの言葉に、紫苑は嬉しそうに笑う。

一方、リビングの方では紫苑以外の万事屋の面々と、プラス土方がそこに居た。近藤が「萩まで万事屋達を送ってやれ」と言ったのだ。とは言っても、真選組がゾロゾロ揃って行くと何かと目立つ。よって、たまたま休日だった土方が送迎の担当となったのだ。

「ったく…こっちは休日だったのに…」

「へーへー、ありがとーござえますよーだ」

「テンメエ…!!」

「銀さん、折角の好意ですよ!!全く…。土方さん、本当に有難うございます。助かりました…!!」

「ゴリラの割りに気が利くネ。とりあえず感謝するヨ」

口々に好き放題言ってる連中に、深々と溜息を吐く土方。新八と神楽は早く紫苑の着付けが終わらないかと楽しみに待っている。もちろん、銀時もそうなのだが…何となく、その表情は優れない。その理由を、土方は知っている。

「万事屋、ちょっといいか」

どうせこの男のことだ。子供達や紫苑の前では平然を装って、弱味を見せていないに違いない。

そう思った土方は、銀時だけを外に呼ぶ。何となく、呼ばれた理由が分かった銀時は口では「めんどくせえ」と言っていたが、素直に土方の後に続いて外に出た。2人で手すりに体重を預けてかぶき町の町を見下ろしながら、暫くはポーツと人々と天人達の往来を見つめてい

だが、やがて土方が口を開く。

「紫苑の…病のことだが…」

本当はこんな日に話す事ではないのかもしれない。しかし、紫苑の体は日に日に弱っているのだ。特にここ最近の顔色の悪さは、あまりにも酷すぎる。無理に花見に引っ張り出してはそれこそ身体に障るのかもしれないが…だからこそ、銀時達は花見の日程を早々と決めたのだ。

「…んー…、分ってる…」

土方の言葉に、銀時は少しトーンの落ちた声で答える。

「恐らくもう…限界だ…」

「…ああ…分ってる…」

「…万事屋、その…だな…」

ずっと言いそびれていたことがあった。紫苑とすぐに会わせてあげられなかったことに対する謝罪。意図的にそうしていたわけではないといえ、やはり…謝らずにはいられない。だがいつもタイミングを逃してしまい、ずっと謝れずにいたのだ。中々、思う言葉を言い出せない土方を見て、銀時は苦笑を漏らす。

「別にいーよ、謝らなくて。オメエらだって、知らねえでそうしてたんだ。前にも言ったがよ、今回の事に関しちゃ…誰も悪くねーんだ。」

驚いたように土方が銀時を見れば、銀時は空を見上げながら更に続ける。

「確かにもう…紫苑は長くねえかもしれない。けど…生きてまた紫苑

に会うことが出来たし、妻として迎えることが出来た。俺ア…それだけで十分幸せだよ…」

本当は…もっと長い時間を共有したかったけれど…

「…幸せ、だよ…」

「そうか…」

「…ッ、…あぁッ…」

それは…叶いそうにない。

俯き肩を震わせる銀時。

土方はそんな銀時の肩に手を乗せ…

「花見、楽しんで来いよ」

一言、その声を掛けた。

暫く外で過ごし、再び室内に戻ると…

「わぁ…!! 凄く綺麗ですね…!!」

「すげーアル!! しいちゃん、いつも以上に美人ネ!!」

という、子供達の声が聞こえてきた。どうやら着物の着付けが終わったらしい。リビングに戻ると、抱き付いてきた神楽の頭を撫でている紫苑の姿があった。

淡い桜色に蝶があしらわれた着物。そして、頭には銀時が以前に贈ったかんざし。

その姿はまさに、大和撫子という言葉がぴったりだった。

「すげえ……」

いつも見慣れた真選組隊服の紫苑とはまた違う彼女の姿に、土方がポツリと漏らす。

「ふふっ、どーお？ 似合っっ？」

紫苑が問えば、土方は「ああ」と笑いながら頷く。少し遅れて戻ってきた銀時もまた、紫苑の姿を見て心を奪われた。

「銀時、似合っっ？」

フワリと笑いながら問ってくる紫苑に、相変わらず呆けていたがハッと我に返りブンブンと首を縦に振った。

「やっべー……、美人過ぎて直視できねエ……」

口元を押さえてあらぬ方向に視線をやる銀時。その顔は紅い。

「全く、呆れた男だね。自分の妻だろう？」

お登勢の呆れた言葉に、万事屋に居た全員が声を上げて笑った。

それからパトカーに全員乗り込み、目的の場所へと向かう。紫苑に体調はどうかと聞いたら、今日は思いの外身体が軽いと笑いながら言っていた。人の病というものは分らないもので、時には末期ガンの患者がひよんな事をきっかけに健康体になる場合もある。そうであればいいと…銀時も土方も、そして子供達も思ったが…出発する前に

お登勢に言われたことが嫌でも脳裏を過ぎった。

『あの子の着付けを手伝ってる時に思ったんだけどね、正直…今日の花見はやめさせた方がいいんじゃないかってアタシは思ったよ。本人は元気そうに振舞っているけどね、顔色がそりゃもう…悪いなんてものじゃないさ。今は化粧で誤魔化してるから分からないけど…』

心配そうなお登勢の声と表情。くれぐれも無理だけはさせないよっとうとお登勢に釘を刺された。もちろん銀時とて、無理をさせる気など更々無い。だからこそ、真選組のパトカーで目的地まで送って貰ったのだ。またお登勢自身も分っていたのだろう。紫苑を止めても花見に行きたがることを。そして…来年の花見という願いは決して叶わぬ願いだと。だからこそ、何も言わずに紫苑を送り出したに違いない

「おら、ついたぞ。…いいのか？」

ボーツとそんなことを考えながら窓の外を眺めていると、土方の声が聞こえてきた。気付けばパトカーは止まっており、窓の外には…

「……萩……」

懐かしい、故郷の風景が。全員パトカーから降り、銀時は紫苑の身に負担が掛からないよう、そっとその身体を支える。そして改めて…ぐるりと辺りを見回した。

「…俺達…帰ってきたんだな…」

「ええ、そうね…。私達の故郷…、私達の…大切な場所…」

銀時も、そして紫苑も…その瞳に故郷を映しながらいろいろな事を思っていた。

松陽との出会い

私塾で過ごした楽しいひと時

すべてが音を立てて崩れたあの日

攘夷戦争に出ると決意したときのこと

「……なんも、変わらねえな……。萩は…こほ…静かなままだ……」

攘夷戦争後、各地で天人の技術が使われるようになったが、田舎町はその影響も少ないらしい。それは、この質素ながらに趣のある萩の情景が物語っていた。

「そんじゃ、俺アここから少し離れたところで待つ。どこで花見をするかは知らねえが…とつとつと行って来い。」

土方は煙草に火をつけるとそれだけを言い残してパトカーの中へと戻った。そしてパトカーを走らせてどこかに行ってしまった。恐らくは紫苑達を気遣っての事だろう。攘夷志士の前に真選組が居たとあっては、楽しめるものも楽しめないと…そう思ったに違いない。

「ここが…銀さんと紫苑さんの故郷…」

「何かスゲエ田舎アル。こんな綺麗な景色初めて見るヨ」

かぶき町と比べれば本当に質素で静かな場所だ。

「俺達の故郷へよーこそ」

「ふふっ、歓迎するわ。新八君、神楽ちゃん!!」

しかし紛れも無く紫苑の故郷であり、銀時が育った場所。新八と神楽は互いに顔を見合わせると、嬉しそうに笑いながら銀時と紫苑の元に駆け寄った。

村に足を踏み入れると、松陽亡き後の年月を思わせるかのように、その風景は少しだけ変わっていた。行き交う人も、昔に比べると随分減ったような気がする。そんな中…

「ん？もしかして、お前さん…高杉さんちの紫苑ちゃんじゃないか？それにそっちは…銀坊か!？」

「どうも、お久しぶりです」

「てか、銀坊って言うな!!いつまでも餓鬼じゃねーんだよ!!」

銀時達のことを知る村人が、懐かしむように集まってきた。あっという間に銀時達の周りには人だけが出て来る。

「風の噂で銀ちゃんと紫苑ちゃんが入籍したって聞いたんだけど、本当かい？」

「ええ、まだ日は浅いんですけどね」

「そーそー、だから何かまだ実感が無くてなア…」

「あれまあ、じゃあ銀時と紫苑は今となっっちゃ夫婦か!!よく晋助が許したなあ〜!!」

どこからともなく笑いが起こる。そんな集団の背後から…

「あア、腐れ天パに妹を預けるのは不安だったけどなア」

数日前に電話越しに聞いた、幼馴染の声が聞こえる。全員がそちらに視線を向けると、そこには晋助と、その後ろに河上、武市、来島の姿があった。

「何だよ晋助エ。随分大所帯じゃねーの。」

「ふん、そっちなだって似たようなもんだろつが」

一瞬、神楽と新八は身構えたがそんな子供達を見て晋助は小さく笑う。

「安心しな、電話で話した通り…俺達アもう争ったりしねえよ」

その笑みは、新八や神楽の知らない…優しい笑みだった。あまりのことに呆けてしまつ子供達である。

「紫苑」

そして晋助は、視線を子供達から紫苑に向ける。名前を呼ばれた紫苑は一瞬、ビクツと肩を震わせた。銀時の手を握っていたが…無意識に力が入ってしまう。しかしその手をしっかりと握り返し、銀時は大丈夫だと微笑んだ。

「俺ア…」

晋助が口を開こうとした…その時だった。

「アッハッハッ!!げにまっこと迷ったぜよ!!萩までの道のりがよう分らんかったきに!!」

「頭が地図を見らんのがいかんぜよ。こっちまでいいとばっちりじゃ。」

空気の読めない男が馬鹿笑いをしながら近づいてきた。ピキッと晋助の額に青筋が浮かぶ。その顔を見て、銀時は思わず「うわぁ…」と口元に手を当てて漏らしてしまった。

「ゴホンッ」

「ワザとらしく晋助が咳払いをすると、坂本は「何じゃ?」と首をか

しげながらも黙る。改めて…晋助が口を開こうとした。

「銀時、銀時イィイ!!何故俺を置いていった!?同じ江戸から発つのだから、一緒に行こうと約束したではないか!!」

またもや空気の読めない男が、今度はしてもない約束にギャンギャンと文句を言いながら近づいてきた。さすがの晋助も、これにはキレる。

「辰馬ア、ツラア…! テメエらせてってーワザとだろ、そうだろ? そうだと
言え。よし、斬ろう。」

「晋助、何事じゃ!? おまん、なんでいつもよりそがぁに短気ぜよ!!」
「短気は損気だぞ? 先生からそう教わっただろう? それからツラじゃ
ない、桂だ!!」

「誰のせいだ、誰の!! それからテメエはもう永遠にツラだ、このクソ電
波!!」

その様子を、慣れてない鬼兵隊幹部達、そして万事屋の子供達は…
ただ呆けて見てる事しかできない。一方の陸奥は、深々と溜息を吐い
ていた。どうやら、止める気は更々無いらしい。そして、銀時と紫苑
は…

「なんか…緊張していた私が馬鹿みたい。何も変わらないのね、あの
頃と一緒に…」

「あー…ホントにな。うるせえし馬鹿ばっかだし…何も変わらねー
や」

ギャーギャーと村の真ん中で騒ぐ大の大人達を傍観しながら、呆れ
半分楽しみ半分で眺めていた。彼等のことをよく知る村人は「本当に
変わってないな」とか「相変わらず仲がいいな」と言っていて笑っている。

「……紫苑……」

そんな喧騒の中、紫苑を呼ぶ声が聞こえた。声のする方に視線を向けると、そこには来島が。顔は俯いており、表情が分らない。しかし、スカートをきつく握り締めているその手を見て、紫苑は悟った。

来島は来島なりに、紫苑の身を案じ、ずっと不安で心配してくれていたのだと。

「また子……ごめんね、ありがとう……」

そんなまた子を、紫苑は力いっぱい抱きしめる。驚いたように顔を上げる来島。しかし紫苑は更に抱きしめて、その顔を来島の肩に埋めた。

「ありがとう」

そして再び、そう口にする。優しい声音と、なんら変わらないその雰囲気に来島の目から涙が零れ落ちた。

「しっ……紫苑ッ……紫苑……!!」

「うん、また子……私はここに居るわ。」

泣き出してしまった来島を抱きしめ、小さな子供をあやすようにその背中を優しく撫でる。

「拙者、紫苑に会わず顔がないでじゅる……」

「貴方と晋助様が一番紫苑さんを傷付けましたからね。私は何もしていませんから、何の気兼ねも無く抱擁できます。ああ、喜ばしいことです。」

「武市イ、テメエも死ぬか？」

「じよじよじよ」冗談に決まっているではありませんか!!!」

「最低ツス。死ぬ、武市変態」

「流石の拙者も見損なっただけじゃある」

一瞬和やかな空気が漂ったのに、それも一時と続かないとは…本当に騒がしい連中だと村の者達は笑った。

「おーい、賑わってるどころ悪イけどよー。そろそろ移動しねーか？
「じよじよ」村の連中にも迷惑掛けんだろ？」

チラリと銀時が村の方を見れば、晋助を鬼兵隊の総督としてしか知らない連中は完全に恐れている。物陰からビクビクとこちらの様子を伺っている者もたくさん居た。

「頭かしら達は騒ぎ出したら騒ぎ出したで收拾がつかんきに。げにまっごと、面倒じゃ」

「その点は拙者も全く以って同意見でござる。お主も相変わらず苦勞しているよつでござるな、陸奥殿。」

「もんワシァ諦めよぬ」

「そつでいづるか…。して、坂田…場所はどつでいづるか？」

河上に名前を呼ばれた銀時は、「俺？」と驚いたように自分を指差した。今までこの男は、自分の事を「白夜叉」と呼んでいなかったらどうか？その銀時の疑問を的確に受け取った河上は小さく嘆息する。

「白夜叉と言ったら、晋助に殺されそつになっただけじゃある。主と晋助が仲直りした後の話でいづるが…」

「あー…そーゆーつが…」

桂も晋助も坂本も紫苑も、銀時のことを白夜叉と呼ばれるのをそれは毛嫌いしていた。戦の時は仕方が無いと諦めていたらしいが、後で

桂に聞いた話によると、特に高杉兄妹きんしょうたいのキレツぷりはそれはもう凄かったらしい。

「ったく、晋助の奴…そーゆーところも変わってねーのな…」

「それってつまり、銀さんが好かれてるってことですよね？」

「スゲーアルな。片目はシスコンだけじゃなくて、銀ちゃん馬鹿でもあったアルか？」

「……強ちそれも否定はできませんねエ……」

「頭かしらは真正銘の銀時馬鹿ぜよ」

「陸奥さんお墨付きだ!!良かったねー、銀時。あーあ、ジェラシー、ジェラシー!!」

「男にモテても嬉しくねーッッ!!てか紫苑!?ジェラシー感じるところが絶対に違っだろ!!」

そんな彼等の姿を見ながら、村人達は楽しそうに笑っていた。何より嬉しかったのだ。松陽の教え子達が帰省してくれたこと、そして…唯一生死の分らなかつた銀時が無事だということを知ることができた事。村人達はそれが何よりも嬉しかった。

「松陽さんもあの世で喜んでるだろっさ…!!」

1人の村人の言葉に、他の村人も笑いながら頷いた。

騒がしい一団は、騒がしいまま移動し、そして…目的地だった松陽塾跡地に辿り着く。

「…村の人から聞いた話なんだけど、銀時や兄さん、コタローが帰ってきた時、先生と会えるようにつて…焼け落ちた私塾は暫くそのままだったの。私が攘夷戦争から命からがら逃げ出して、ここに辿り着いた時は…まだそのまま残っていたから…」

しかし、時が経ち…晋助と桂は攘夷志士になったという噂が、萩まで流れてきた。銀時に至っては生死すら分らないと村人は肩を落とした。

「この場所は、村の人達にとっても松陽先生と会える場所…そう思っていたみたい。だけど、ずっとあのままじゃ…時が止まったままじゃ…松陽先生が可哀想だからって…」

松陽塾の跡地は数年前に綺麗に片付けられた。ただそこに、新たに建物を建てる事は無く、代わりに村人達は石碑を建てた。

「吉田 松陽、此処に眠る」か…。墓もあるのに、これじゃあ松陽先生…どっちに帰ったらいいかわからなーで迷子になっちまうだろうぜ…」

思わず苦笑を漏らす銀時。そと…その石碑の前に膝を付く。

「…せ、んせ…」

ポツリと…呟いた銀時の言葉は、思った以上に震えていた。その背中中は、いつもよりも小さく見える。子供達は心配そうに見つめていたが、紫苑が新八と神楽の肩にポンと手を置いて微笑んだ。きつと大丈夫だと、そういう意味を込めて。

「…ッ…、松陽、先生…ッ…」

大丈夫だと思っていた。ちゃんと受け入れる覚悟は出来ているつもりだった。しかし改めて感じたのは、自分に剣のすべてを教えてくれた師、そして鬼だと蔑まれていた自分のことを息子だと言って愛してくれた父だった人の死。本当にあの人は…吉田 松陽はこの世に居ないのだと、現実を突き付けられた気分になった。

「…銀時…」

そんな銀時の頭をガシガシと撫で回すのは晋助だ。

「オメエがそんなツラしてたら、先生が悲しむだろうが」

「晋助の言う通りだ。それに…俺達は先生に言わねばならぬことがあるのではないか？」

「そうよ、銀時。先生のために泣くのではなく…先生のために笑いましょっ？」

幼馴染達の言葉を受けて銀時は小さく頷くと立ち上がる。銀時の左隣に紫苑が立ち、右隣には桂が立つ。紫苑の左隣には晋助が立ち横一列に並んだ。そして視線を交わし合い…スツと息を吸い込む。銀時はゴシゴシと目元を着流しの袂で拭ってバツと顔を上げた。

全員、満面の笑みを浮かべ…

『先生、ただいまッッ!!!』

全員で、恩師に帰還の挨拶をする。まるでそれに答えるかのようにフワリと優しい風が吹く。

全く…待ちくたびれましたよ？けれど…よく来てくれましたね。おかえりなさい…

それはまるで、帰ってきた教え子達を松陽が出迎えているかのよう…とても優しい風だった。

そして一同は、松陽塾敷地内の唯一焼けずに残った桜の木の前に立

つ。桜はまるで彼等を待っていたと言わんばかりに、丁度見頃の満開だった。

「村人から少し話を聞いたんですけど、萩全体ではもう桜は殆ど散ってるらしいんです。けど、松陽塾の桜だけ咲くのが遅かったとかで…」

「きつと、銀ちゃん達が来るのを待ってたアルな!!」

無邪気に笑う子供達に、釣られて紫苑も微笑む。

「よかったわ、本当に…」

もう、みんなでこの桜を見る事は叶わない夢だと思っていた。

しかし…夢は実現したのだ。

紫苑の隣には夫の銀時が居て、周りには仲間がいる。あの時の約束は、坂本・桂・晋助・銀時・紫苑の5人で花見をする約束だったが…

「時間も丁度いい頃合じゃねエか。しかも今日は三日月だよ」

「満月だったらもつと良かったのだが…」

「まっ、月見酒だけでもワシヤ十分ぜよ、アツハツハツ!!」

「何か不思議な気分でござるな。ついこの前まで敵対していた者と酒を飲むというのは…」

「いやあ、私としてはあの時の可愛い娘さんが居てくれるだけで…」

「…」

「ロリコンは気持ち悪いツス、私に近づかないで下さい武市変態」

「おまんら、ちと黙るといふ事はできんか? げにまっこと喧しいぜ」

「や」

「いや、陸奥さん…それをこの人達に求めても無理でしょう…」

「黙らせる方法があるとすれば、永眠させることしか思いつかないア

ル。ムツチー、それでもいいアルか？」

「神楽、オメエの意見は却下な、却下!!流血沙汰は勘弁だぞ、マジで!!」
倍の人数に膨れ上がって、いつも以上に騒がしくなってしまった。
そんな彼等を、銀時の隣で紫苑は静かに見つめながら微笑う。トンツ
と紫苑は銀時に体重を預けた。

「どっした紫苑? 身体、辛いか?」

銀時の気遣いに、紫苑はただ微笑むだけだ。そして、シートと口元に手を当てる。紫苑は何も言わなかったが、恐らく場の雰囲気壊したくは無かったのだろう。その意思を的確に感じ取った銀時は、そつと紫苑の肩に手を回して身体を支える。そして耳元で…

「無理はするなよ?」

とだけ言った。恐らく、言っても聞かないだろう。それは銀時も分っている。でもそう言わずにはいられなかった。銀時の言葉に、紫苑は曖昧に…少し困ったような笑みを浮かべる。そんな紫苑を見て、銀時はペシンと軽く紫苑の額を叩いてニコリと笑った。

やがて全員が思い思いの場所に座り、酒やジュースを酌み交わす。
そして…

「えー…とりあえず、紫苑と銀時は入籍おめでとうということ!!」
「何だよ、そのとりあえずってえのは!!ちゃんと祝えよ、ツラ!!」
「喧しいぞ、銀時!!それから、こうして敵味方関係なく再び松陽塾の敷地内で互いに酒を酌み交わせること、袂たもとを別わかっていた俺達の縁えにしが再び戻ったこと、高杉一派と桂一派の亀裂の解消は…したのか? まあそれは追々というところで…。それから辰馬との再会…ええい、上げるとキリがないな…」

「ツラ、いいからさっさと乾杯の音頭をとれや。披露宴で長々とくんちくを語るウゼエ上司じゃあるめえし」

「そこっ、煩いぞ晋助!!ゴホン、まあとりあえず…なんやかんやで…」

『乾杯ッッッ!!!』

カッンとグラスや盃さかずきのぶつかる音が聞こえてくる。花より団子の神楽は、坂本が準備した豪華な料理に早速食らい付いている。他の者達も桜を見上げながら酒を飲んだり、思い思いに話したり…いろいろだ。

そんな中、銀時と紫苑、そして晋助は桜の木の下に座っていた。

「はー…ホント、コーユーのはオツだねエ…。夜桜もいいが、月見酒ってえのは更にいい」

「あア、それは銀時と同感だなア」

互いの盃に酒を注ぎあい、そして紫苑のグラスにはジュースを注いでカッンとぶつけ合う。それをチビチビと飲みながら、晋助は口を開く。

「ちっき…言いそびれたんだがよ…」

スツと紫苑に視線をやれば、綺麗な紫の瞳が真っ直ぐと晋助を見つめていた。その瞳は…不安からか少し、揺れている。そんな彼女に思わず苦笑が零れた。だが、そうさせてしまった理由は己にあると自覚している晋助は、紫苑に深々と頭を下げた。

「紫苑…すまなかった…」

「兄さん…ッ…」

「謝って許してもらえるなんぞ思っちゃいねえ。それだけのことを俺

は紫苑にしちまったんだ。けど…もし、可能ならば…」

また、昔のように他愛の無いことで笑い、喧嘩し、泣き、喜び合う…そんな兄妹きょうだいに戻りたい。

そんな晋助の想いを感じ取った紫苑は、銀時に預けていた体重を今度は晋助に預ける。

「怒ってない…今は、怒ってないよ。兄さん…私の方こそごめんなさい。兄と認めないなんて…私、酷いこと言ったわ。本当に…ごめんなさーす…」

紫苑の謝罪に晋助は驚いたように目を見開く。その様子を見ていた銀時はただただ苦笑を漏らすだけだ。

「ホント、オメエらは不器用な兄妹きょうだいだな」

「うるせエよ。言ったらろつが…自覚してるって…」

晋助はフイツと顔を背けて盃に入っていた酒をグイツと飲み干す。

「兄さんは…私が今、真選組の隊士だってこと…知ってる？」

「ああ、銀時から聞いてる。副長補佐らしいじゃねーか。ククッ…やっぱりオメエは何処にいてもその頭脳をかわれるんだなア」

「フツッ、それはどうかしらね？」

「真選組の奴等は…いい奴等か…？」

「……、ええ…。とんでもなく人の道を踏み外してる人が多いけど、でも…みんないい人達よ？それはきっと、銀時だって知ってるはず…」

チラリと銀時に視線をやれば、あーだのうーだのいいながら頭を掻いている。それに喉を鳴らして晋助は笑った。

「ククツ…だからこそ、あの動乱の時…銀時は真選組側に居たんだろ
うよ…」

「あの動乱…？」

「あー…伊東君の時の…？」

「ああ…万斎が言ってたぜエ？紅桜の時と同じだったってよ…。奴等
を護るためにと木刀を振り回してた時のオメエの目は、キラキラ輝い
てたって…」

そういえばそんなこともあったな、何て思いながら酒を飲み干す。
紫苑は話だけ聞いていたため、「ああ、伊東先生の…」と複雑そうな顔
で視線を落とす。

「やっぱりオメエは、護るもんがあつてこそ…輝けるんだなア…。ク
クツ、とことん攘夷には向かねえな。」

「うるせー、攘夷とか興味ねーし。けど…実際、どーなんだろうな
…。よく分からねえ…」

「けど、神楽ちゃんや新八君、お登勢さん、たまちゃん、キャサリンさ
ん…みんな銀時を中心に笑ってる。ううん、近藤さんやトシ、総ちゃ
んだって同じ。口ではどんなに憎まれ口を叩いていても…みんな、銀
時のことが大事なのよ…」

自分がそうであつたように、きっとかぶき町に住んでいて銀時のこ
とを知っている者は、みんな彼の周りで笑っているに違いない。

それは、ここ数日万事屋に暮らすようになって分かったことだ。騒
がしい連中がいつも銀時を中心に笑ったり喧嘩したりして、いつだつ
て笑顔が絶えない。

その場所がとても居心地よくて、紫苑も前以上に良く笑うようにな
つた。

「あつと、一緒」

できれば、その喧騒の中に自分もずっと一緒にいたかった。

けれど…それはもう、叶わない。

「……紫苑、オメエ…随分と軽くなつたな……」

ポツリと呟いた晋助の言葉に、銀時も視線を伏せる。「…最近、食事や喉を通らないことが多く、体重は日に日に落ちていた。そんな日々が続いて、どんどん紫苑が痩せていくのを目の当たりにして…銀時はいつも恐れていた。

愛した人が、自分の妻が…

また手の届かないところに逝ってしまうことを。
今度こそ手の届かないところに逝ってしまうと。

「今日はね…、やっと…この着物を着ることが出来たの。戦争中に買った2枚の着物の片割れ…桜色の方。お登勢さんと、たまちゃんに着付けを手伝ってもらって、トシに見てもらって、新八君と神楽ちゃんに綺麗って褒めてもらって、銀時が凄く照れて…そして…」

紫苑は静かに目を閉じて微笑む。

「兄さんと…お揃いの着物。…こうして一緒に横に並ぶ日がまた来るなんて思いもしなかったから…凄く、うれしい…」

「そう、か…。本当は俺が着てる着物もオメエのもんだが…」

「それ、は…これからも兄さんが、着て…くれると嬉しいな」

紫苑の声が…何となく途切れがちになり、少しずつ…小さくなって

いくのが分った。銀時と晋助は、紫苑が何処にも行ってしまわないようにしっかりと手を握り締める。

「オメエが…それを望むならッ…」

声が…震えてしまう。みっともないほどに声が震えてしまい、その後の言葉が出てこない。紫苑は再び銀時に体重を預け、紅い瞳を見上げた。

「そして、ね…今、私が…着ている着物は、銀時に…受け取ってもらいたい、の…」

「……ッ、何…言って……!!」

そんな…これが最期みたいなことを言わないでくれと銀時は頭を振った。しかし紫苑は小さく微笑みながら、更に続ける。

「兄さん、と…銀時の元に、ね……。私の、心はずっと…一緒だよ、って証を…残したい、の。」

「ッ、紫苑…」

「わ、すれない…で。私の、ことを。私が、生きていたこと、を…。私という、存在を…。お、願…ッ…。もう…独りは…いやだ、よ…」

紫の瞳から零れ落ちる涙を、そっと銀時は指で掬い取る。晋助は優しく紫苑の頭を撫でていた。

「忘れるわけねえだろうよ。可愛い妹のことを」

「忘れられるわけがねえ。愛した女のことを」

「オメエが忘れてくれと願っても」

「俺達は絶対に紫苑のことを…」

「忘れたりはない」

晋助と銀時の言葉に、紫苑は涙を流しながら微笑む。

「あ、りが、と…」

それだけで、私は幸せだ。

紫苑は視線を騒ぎの中心へと向けた。

紅桜の時はあんなに敵対していた来島と神楽が仲良く話しながら、ロリコン全開の武市に一斉攻撃を仕掛けている。

桂は坂本と何かを楽しそうに話していた。もしかしたらエリザベスのことを話しているのかもしれない。桂がジェスチャーでそれっぽい形を描いたような気がする。

新八はどうやら寺門 通のプロデューサーである“つんぽ”が河上だと知ったらしく、それは熱く語っていた。若干、河上が引いているような気がするの、きつと気のせいではないだろう。

陸奥は我関せずと貫きながらゆっくり酒を飲んでいたが、いつの間にか坂本に引っ張られて、桂との話に無理矢理混ぜられたようだ。無表情のまま銃を構えている。坂本が必死に笑って誤魔化しているようだ。うだが…ああ、あれでは逆効果だろう。

嗚呼、私がいつか叶えたいと願った…みんなで酒を酌み交わすという光景だ…。

そして自分の隣には恋人の…否、夫の銀時が居て、そして兄の晋助がいる。

どんなに幸せだろう。

この萩の夜空の下、桜の下で月見酒が出来た事は…最高の思い出だ。

「な、んだか…眠い、なア…」

本当はまだ起きていたのに、次第に瞼が重くなる。自分の意思とは関係なしに、どんどん瞼は重くなってくる。

「きつと疲れてんだらうよ…」

そつと晋助が紫苑の頬を撫でた。その手が暖かくて、不安が次第に薄れていく。

「よく…頑張ったな。よく…頑張ってくれたな…。ありがとう、紫苑…」

銀時に褒められたことが嬉しかったのか、紫苑の口は嬉しそうに弧を描く。

できれば、もっと一緒に居たかったけれど…どうやらそれは許されないらしい。

ワイワイと騒がしい中、紫苑はゆっくりと目を閉じた。

「ちや、んと…起して、ね？あ、した…は、銀、時と私が…、一緒に…敵陣に、先陣きる、日…、なんだ、から…」

遠い昔を思い出しているのだろうか？彼女がまだ、鬼兵隊副官と呼ばれていた…あの頃のことを。

「わーってる…、起すぞ…。ちゃんと…起すぞ…ッ…」
「うん…」

「だから紫苑、ゆっくり安め。これは総督命令だ」
「うん…」

銀時と晋助の手を握っていた力が、次第に抜けていく。

いよいよ…別れの時が訪れようとしていた。

銀時の頬を涙が伝う。

しかし、愛した妻の最期をその目でしっかり看取るうと…決して
紫苑^{現実}から目を逸らしはしなかった。

「……、おもしろき…ともなき世を…おもしろく…」

紫苑の綺麗な声は、辞世の句を紡ぐ。しかし…下の句が続かない。

「すみなすものは…」

「心なりけり…」

それに続くように、銀時と晋助が下の句を続けた。

最期に紫苑は小さく笑う。

「おもしろい…なア………」

それが、坂田 紫苑の最期の言葉だった。

一際強く風が吹き、桜の花弁が舞い上がる。騒がしかった連中がそ

のあまりの風の強さに、思わず桜の木を見た。

そこには晋助が居て、銀時がいて、そして…

「…紫苑…？」

微笑みながら目を閉じている紫苑がいる。桂が紫苑の名を呼ぶが…返事はない。

「…ッ、紫苑は…逝ってしもうたが…？」

坂本の言葉に新八と神楽は「えっ!？」と声を上げた。坂本の問いに答えたのは…

「最後の最期まで…紫苑は鬼兵隊副官のまま、逝っちまった…。総督の俺を…置いて、先にッ…」

顔を伏せて肩を震わせている晋助だった。

「紫苑」

留まることなく流れ落ちる涙を拭うこともせず、銀時は静かに眠る紫苑の唇に己のそれを落とす。

まだ温もりは僅かに残っていたが…その唇からは、死の味がした。

「愛してる」

例えその身体が滅びても…

「愛してる…紫苑…マジで、好きだぜ…」

俺は…

「お前と共に背中を預けあい戦えたこと…俺は誇りに思うぞ」

「げにまっこと…おまんとの日々は楽しいことばかりじゃった…!!」

「紫苑さん、貴方が私達のことをどう思っていたかは知りませんが…私達鬼兵隊にとって、貴方はよき副官でした。感謝します。」

「結局最期まで、あの日のことを謝ることが出来なかったでござるな。それが心残りでござるよ。」

「紫苑…ッ、本当に紫苑は私の…姉上みたいな人だったッス…ッ…!!」

「頭がげにまっこと世話になったぜよ。おんしと、すつと早くに知り会つちよつたら、宇宙にも連れて行けたんじゃがのオ」

俺達は…

「紫苑さん…僕、紫苑さんに出会えてよかったって思ってます。一緒に過ごした時間は短かったけど…本当に良かった…」

「しーちゃん…ずっと辛かったアルな。けどきつと、銀ちゃん達とまた会えて凄く楽しかったアルな…。しーちゃん…私もしーちゃんのこと、大好きヨ…!!」

決して、君を忘れたりはいしない。

「…ほらっ、愛されてんのはぶっちだよ…!!」

全員を見渡しながら、銀時は小さく微笑む。

そつとその身体を抱きしめながら…

「大丈夫だ…忘れねえ…絶対に…忘れねえ…。ずっと、一緒だぜ…?」

銀時は今まで誰も見たことがないような顔で、優しく微笑んでいた。

静かに眠る紫苑を挟んで、銀時と晋助は桜を背に座る。

月見酒はまだまだ始まったばかり。

紫苑の分はジュースからいつの間にか酒に変わり、盃に注がれて置かれていた。

銀時と晋助は改めて盃をぶつけ合い、グイッとそれを飲み干す。

まるで紫苑の死を弔うかのように、しかし騒がしい連中は騒がしいまま……

花見の夜を過ごしていった。

少しの間だけ、かつて攘夷戦争を共に駆け抜けた者達だけで居たいと……銀時達がそう頼んだ為、鬼兵隊のメンバーは自分達の船へ、新八達はどこかで待っているだろう土方の元へと戻る。そして陸奥と、銀時達は坂本の船へと乗った。

そこで、紫苑の身体は綺麗に清められる。

紫苑の着ていた着物は紫苑の遺言通り、銀時の手に渡った。

そして清められた紫苑の身体が見に纏うは、黒に金色のラインが入った真選組隊士の隊服。

「ワシア操縦室に戻るぜよ」

陸奥はそれだけ言つと、部屋を後にする。残されたのは、攘夷戦争を共に切り抜けた仲間達だけだ。

「出来れば鬼兵隊副官として葬つてやりたかつたけどなァ……」

「紫苑は最期まで真選組の隊士でありたいと願つてた」

「まつたく…俺達とそんなに敵対したいのか？紫苑は…」

「おまんはいつも真つ直ぐと先を見据えちよる、強い女やつたぜよ」

口々にいろいろ言いながら…

暫くぶりの再会を改めて噛み締めながら…

紫苑の死を悼みながら…

その日、全員同じ部屋で一夜を明かした。

その翌日、万事屋に銀時が戻ってきた。心配していた新八は家に帰ることなく、ずっと万事屋で銀時を待っていた。神楽にしては珍しく早起きしていたし、さらに万事屋にはスナック・お登勢の面々と、真選組の面々も揃っていた。

「大げさなんだよ」

銀時は苦笑を漏らしながら、横抱きにしていた紫苑の身体を、自分の寝室まで運ぶ。新八に布団を敷くよう頼んでから、布かれた布団の上にとつと彼女を寝かせた。スナック・お登勢の面々も真選組の面々も耐えられず、皆波を流している。

「新八、神楽」

「はい…なんですか、銀さん？」

「どしたネ？」

いつもと雰囲気の違う銀時に少し心配そうな新八と神楽。そんな2人を見て小さく笑いながら、2人の頭をポンと撫でた。

「俺ア暫く万事屋を空ける。真選組の奴等に…紫苑を、真選組の隊士として葬ってやってくれと…そう伝えてくれ。」

そういつと銀時はくるりと踵を返して玄関へと向かった。

本当は新八も神楽も…銀時を止めたかった。

止めなければいけないと思った。

けれど…

「…帰って…くるんですよね…？」

「記憶喪失になった時みたいに…勝手にいなくなっちゃーヨ…」

その背中が、止めてくれるなどそう物語っていた。

子供達の切なる願いに、銀時は…

「バカヤロー、ちょっと開けるだけだつってんだろ」

いつものようにそう言っつて、万事屋をあとにした。

その日から、銀時はかぶき町から姿をくらませた。

真選組も総出で探したが見つからず…

銀時が不在のまま、紫苑の葬儀が執り行われることとなる…。

【第終訓】 悲しいだけの葬式なんてぶち壊せ!!

人の死は、いつの時代でも悲しく、そして寂しいものだ。

たくさんの方が、坂田 紫苑の死を悼み、涙を流した。

万事屋の子供達や真選組の隊士は勿論のこと、僅かな時をかぶき町で過ごした間に知り合った数多くの者達が葬列に参加した。

しかしその葬列の中に、彼女の夫となった坂田 銀時の姿は見られなかった。

花見の最中に紫苑が息を引き取って、万事屋に彼女の身体を運んだ後、新八と神楽に万事屋を暫く空けるとだけ言い残し、忽然と姿を消したのだ。最後に銀時と言葉を交わしたのは新八と神楽だったが、この2人も銀時の行き先は聞いておらず、万事屋からも、かぶき町からも姿を眩ませたのだ。

もしや、彼女の後を追って自ら命を絶ってしまったのではないかと、最悪のケースが脳裏を過ぎった。それを危惧して、真選組、御庭番、かぶき町の人達、そして万事屋の子供達総出で銀時を探したが、死した形跡もなく、それどころか足取りすらも掴めなかった。

「……………銀ちゃん……………」

きつと辛かったに違いない。花見で紫苑を看取った時、銀時は微笑んでいた。けれど…最愛の人を亡くして、銀時が心穏やかに居られるはずなどないのだ。精神的に銀時は弱い。もしかしたら自分達の知らないところでひっそりと逝ってしまったのではないか？

そんな事はないと何度も思い直しても…最悪のケースが脳裏から離れる事はなかった。

やがて、紫苑の身体が納められた棺が墓前に埋められる。その墓は、真選組隊士が殉職した際に葬られる場所に立てられた。【坂田紫苑之墓】と刻まれたそこに、棺が埋められる。

いよいよ…紫苑と会えなくなると、周りのすすり泣く声も増えてきた。

「では…最期に別れの挨拶を。近藤局長…宜しいですかね？」
「うむ…」

住職に言われ、紫苑の墓前に立とうとした…その時だった。

『その挨拶、待ったアアアツツツ!!!!!!』

聞こえてきた声に、全員の視線が背後に集中する。

そこに立つ者達の顔ぶれに、全員が目を見開いて驚いた。

「…か、桂ア!？」

「おいおいっ…過激派の高杉だぞ!？」

「あれって、快援隊の社長か…?」

悲しみに包まれていたその場所が、一気に殺気立つ。真選組の面々は皆、刀に手を掛けようとするが…

「待てイイイツツツ!!!!」

「きよ…局長…!？」

それを、近藤が制する。真選組隊士達がどよめく中、近藤・土方・沖田は…ただ真っ直ぐと4人の男を見つめる。

桂 小太郎、坂本 辰馬、高杉 晋助、そして …

「銀ちゃん!!」

「銀さん!!」

坂田 銀時。

皆が隊服や喪服など…黒で統一された服を着ているのに対し、彼等の服装はバラバラだった。坂本はいつものロングコートで派手な身形だ。^{みなり}派手で言えば、晋助の着ている蝶のあしらわれた紫の着物も負けていないだろう。桂は真選組の面々がいつも見てきた着物姿だ。そして銀時は…

いつもの流水模様の着流しではない、蝶のあしらわれた桜色の着物。

それをいつものように着崩して、下に黒のインナーを着ている。

喪に服すような格好ではない。そして…更に特徴的だったのが、全員がその腰に刀を携えていたことだった。あの銀時でさえ、いつもの洞爺湖^木ではなく刀を差していた。

ピリピリとした空気。住職もどうしたものかとオロオロしている。一方、銀時達と近藤達はただ…無言で視線を交わしていた。

そして…

「真選組隊士、全員に告ぐ!!……道を開けてやれ……」

近藤が発したそれは、あまりにも信じられない言葉だった。

「何を言ってるんですか局長!! 過激派攘夷志士の高杉が居るのですよ!!?」

「桂も居ます!! 捕まえるチャンスです!!」

「局長!!」

隊士達は口々にそう言い、刀を抜こうとした。しかし…

「真選組局中法度オオオツツ!!! 局長の命に背きし者は、土道不覚悟で切腹ウウウツツツ!!!!」

今度は土方の怒声が響き渡る。局中法度を持ち出されては、どうしようもない。誰もが納得いかないという顔をしていたが、それでも局長・副長の命とあらばと… 渋々刀を納める。

「オメエら、聞こえなかったのかイ? 局長は道を開けろって言うてんだろつが。道を開けてあげなせエ。」

それとも、俺の刀の錆びになりたいかイ?

沖田の言葉に全員の血の気が引く。更に、近藤・土方の気迫に負けて… 中央が綺麗に開いた。それを確認した4人は、それぞれ視線で確認して頷き合うと、ゆっくりと… その中央を歩く。隊士の中には隙あらばと思っただ者もいたが… 中央を歩く4人には一切の隙がない。そんな隊士達の殺気さえも綺麗に受け流しながら、4人は悠々と歩く。そして… 近藤・土方・沖田の前に立った。

誰も、口を開かない。ピリピリとした空気。万事屋の子供達でさえ、この成り行きは見守ることしか出来なかった。

やがて…晋助が動く。全員が息を呑んだ。

しかし、晋助はそんな周りの一挙一動に構うことなく…

「武装警察・真選組…局長・近藤 勲殿、副長・土方 十四郎殿、一番隊長・沖田 総悟殿…。妹、坂田 紫苑が世話になった。命を救い、真選組隊士として受け入れてくれたこと…心より感謝する。」

深々と頭を下げ、感謝の意を表した。誰もが驚いた。あの、“血も涙もない鬼の高杉”と名高い男が、ここまで律儀に頭を下げる姿など…想像もしなかったからだ。

否、晋助だけではない。

「げにまつこと…ワシの戦友が世話になったぜよ」

「紫苑を家族と慕い大事にしてくれたこと…礼を言う」

坂本も、桂も、そして…

「妻・紫苑の事を慕い、最期まで紫苑を真選組の隊士として手厚く葬ってくれたこと…かたじけなく思う所存」

銀時もまた、それぞれの思いを口にし、頭を下げた。それを真剣な表情で見っていた近藤はニカッと笑う。土方と沖田も同じように笑みを零した。

「最期の別れだ。ちゃんと済ませろよ？」

「ったく…最後の最期まで紫苑に心配掛けやがって…。紫苑の夫が聞いて呆れるぜ」

「けど…旦那達は絶対に来てくれるって…俺ア信じてやしたぜイ？」

3人の言葉を受けて、頭を上げた4人もまた笑う。

それは…

捕らえる側 真選組と逃げる側 攘夷志士とは思えない程…

穏やかなものだった。

やがて、近藤ら3人も銀時らに道を開ける。4人が紫苑の元に辿り着くと、再び視線で合図をし合う。そして4人一斉に腰に下げている刀を鞘ごと抜いた。

真選組隊士達の間にも再び緊張が走る。

だがしかし、そんなことはお構い無しに4人は刀を墓前に差し出した。

シンとした空気。それを先陣切って裂いたのは銀時だった。

「我ら、この刀に勝利を誓い、紫苑と背中を預け合い、攘夷戦争にて共に戦えたことを誇りに思う!!」

それに続くように…それぞれ思い思いの言葉を口にした。

「松陽塾の幼馴染として」

「戦地で知り会った戦友として」

「兄として」

「夫として」

『共に笑い、苦しみ、泣き、喜んだ日々は何物にも変えられない宝だ!!』

「安心せえ、ワシらは大丈夫じゃ!!」

「紫苑よ…俺達はもう仲違いしたりはしない。だからゆっくり眠るのだぞ?」

「大丈夫だ、もう…お前が悲しむようなことア…お前の愛したこの世界を壊すようなことアしねえ…」

「だからよ、先に松陽先生んとこ行って…先に説教される。攘夷戦争に出たことをなッ!!」

皆が悲しみ、涙を流している中…

一番辛いはずの彼等は、誰よりも重く紫苑の死を受け止め、そして

…

「大丈夫…紫苑はいつでも俺達の中で生きてる」

誰よりも真っ直ぐに先を見据えていた。

更にグイツと刀を前に差し出し、銀時は真っ直ぐと墓石を見つめる。

「紫苑…一緒に生きよう。俺が…俺達が生きている限り…」

『俺達は…ずっと、一緒だ!!』

全員が息を呑んだ。

「ククッ…しみったれた別れは性にうよこ合わねエからなア…」

「だから我々は紫苑を笑って見送ろう」

「アッハッハッ!!げにまっこと、ワシらは不謹慎じゃのオ!!」

「紫苑、不謹慎だつて呪うんだつたら真っ先に辰馬を呪えよ?こいつ

が一番馬鹿笑いしてんだからな!!」

これが攘夷戦争の英雄と謳われた男達の強さなのかと。

憎しみも、悲しみをも乗り越えて…

彼等は戦友のために涙を流すのではなく、戦友のために笑って見送るといふ選択肢を選んだのだ。

男達の強さに…全員が敬意を表した。

殺気立っていた隊士達は全員、銀時達に敬礼をしている。万事屋の子供達も満足げに笑っていた。

やがて4人の男達は墓標に背を向け、再び真つ二つに分かれた中央の道を引き返す。その道が途切れた場所で全員が立ち止まり、そして銀時だけが振り返った。

たった一言…

「鬼兵隊副官・高杉 紫苑殿、俺達の背中…預けたぜ…?」

笑いながら、そう言った。

何とも彼等らしい言葉だと…近藤は笑う。

「…さあて…そろそろ…テメエらを攘夷志士としてしよっ引いていいよなア?」

ニイツと土方が笑った。それにつられるようにして、銀時も笑う。

「捕まえられるもんなら捕まえてみ？俺ら、逃げ足だけは速いよ？」

ドーンと聞きなれたバズーカの音がする。どうやら沖田がぶっ放したらしい。住職は腰を抜かして驚いている。しかし、彼等のことをよく知るかぶき町の者達は「ああ、始まった」と呆れていた。

「ククッ…逃げるぜエ!!」

「了解ぜよッ!!」
ラッシャー

「フハハハッ、捕まえられるものなら捕まえてみるのだな、幕府の犬共よ!!」

さっきの感謝の言葉はどこへやら。

しかし、悲しみの色など似合わない。

「新ハイ、神楽ア!!万事屋全員集合だア!!逃げるぞオ!!」

「銀ちゃん、待つネ!!定春居ないヨ!!」

「待ってくださいよ、銀さん!!」

「」は騒がしい連中が自由奔放に生きるかぶき町。

「よおし、俺が10数える間に逃げろよーッ。その後はデメエら全員とっ捕まえろからなア!!」

「土方さん、旦那も捕まえるんですかイ？」

「廃刀令違反だ。とっ捕まえねえでどーする。」

「えっと……時効はいつですかね？」

山崎の問いに、近藤はニカッと笑う。

「日付が変わるまでだ!!」

こうして…坂田 紫苑の葬儀は、騒々しいまま幕を閉じた。

住職はただ呆けることしか出来ず、残った参列者達も成り行きを呆然と見つめていたが…やがてどこからともなく笑い声が聞こえ、葬儀には似付かない…大きな笑い声が墓場に響き渡った。

* * * * *

その後、晋助と桂は手を結び、晋助は宇宙海賊春雨と完全に手を切る。鬼兵隊は過激な攘夷活動から身を引いた。狙いを天導衆にのみ定めて動き出したのだ。

坂本は相変わらず空を飛び回っては船に酔い、女を追い掛け回しては陸奥から説教される日々。

かぶき町もまた、なんら変わらない。

真選組は相変わらずチンピラ警察と言われているし、相変わらず騒ぎを起こしている。ただ、桂や晋助を執拗に追うことをしなくなったと、かぶき町の者達は何となく感じていた。

唯一、かぶき町で変わったことがあるとすれば…

「おーし、依頼料も入ったしスーパー行くぞ、スーパー!!」

「最初に酢昆布買っネ!!」

「バックヤロー、俺のいちご牛乳が先だつってんだろ!!」

「どっちも買えばいいじゃないですか。ったく…みっともない…。定春もそっと思っつてしょっ。」

「アンアンッ!!」

万事屋の店主が、流水模様の着流しではなく、蝶のあしらわれた桜色の着物を着崩して、かぶき町を闊歩するようになったことぐらいだ。

そして…

「あ、そうそう。この前、高杉さんから電話がありましたよ？そろそろ桜が見頃だぞって…!!」

「おー、そついやツラと辰馬も言ってたなー」

「じゃあ萩で花見アルな!!」

毎年、夜桜の下、萩で花見をするようになった。

春…夜空の下で酒を酌み交わす。

かつて戦場で交わした何気ない約束は…

「よー、晋助ー。待った?」

「いや、俺も今来たところだ。…よオ、久しいな…新八、神楽…」

「久しぶりネ!!」

「いやあ、桜が散る前にみんなの都合が合って、本当に良かったですよ」
「!!」

「おー、おまんら先に来ちよったが〜!!」

「む、もう来ていたか…出遅れてしまったな。」

いつしか、毎年の恒例行事となっていた。

ヒラリと舞い散る桜を見つめて銀時は笑う。

「紫苑…今年もまた大騒ぎしようじゃねーか…!!」

ブワツと吹いた桜吹雪は、銀時が伸ばした手をすり抜ける。

それはまるで…

もう…待ちくたびれたんだから…!!

紫苑が笑いながらそう言っているかのようだった。

【終】

【あとがき】と書いて言い訳と読む

えーっと、恋空連載開始はにじファン時代の……うん、もう忘れてしまっただけに昔でした（苦笑）それからチヨイチヨイUPしていったんですが、東日本大震災の影響で仕事がメッチャ忙しくなったり、その後も仕事やリアルの都合で中々小説を書く時間が作れず、今年に入っただけでようやく落ち着いたかなーと思い、月1ぐらいのペースで更新を再開させました!!しかし、まさかのにじファン閉鎖で突然のホームロン移転（苦笑）だった18話（エピソードも含めると19話）書くのにとんだけ時間が掛かってるんだよ、って話ですよ、いやホントに（苦笑）しかし、こうして最終話まで書き繋ぐことができたのも、ひとえに皆様のコメントや支えがあったからこそです!!本当にありがとうございました^^

まず何でこの話を書こうと思ったかと言いますと……突然の思い付きが始まりでしたね（笑）私は銀魂キャラの中では高杉が凄く好きなんです、その高杉に妹がいたらどうなるだろう?という妄想から、高杉紫苑というキャラが生まれました。その妹が鬼兵隊の副官だったらどうなるだろうとかいろいろ考えている内に、何となくこの恋空のプロットが浮かんだんです。ただ当初の紫苑は、銀時の恋人設定でもなければ真選組隊士の設定でもなく、過激派攘夷志士で晋助に次いで2番目に危険な人物という……現設定とは真逆のキャラでした。けどそれだと、結構ありがちな設定かなー……と思い、だったら思い切って晋助を裏切らせてみよう!!と冒険に出ました（笑）ただ、裏切るには裏切るだけの理由が必要だし、そうなった根本的なきっかけも必要だよな……ということ、紫苑だけが攘夷戦争で逸れてしまったという設定にしました。なので、晋助と再会した当初、多少は攘夷思想を持っていたけれど、変わってしまった晋助を見て自分が止めなければ!!という思いを抱くようになったわけです。銀時の恋人設定になっただけは、この話の大きなテーマともなりました。花見の約束”

をするにあたって、JOY4には切っても切れない縁で繋がっていてもらいたかったんです。ただ、原作を見る限りだと…あんな殺伐とした連中が、わっほいきゃっほい言いながら花見をする絵図なんて想像もできませんでした、ええ本当に(笑)なので、ここは銀さんにちよつと頑張ってもらいましょう!!ってことで、銀時と紫苑を恋人同士にさせました。ただ、その結果銀時が一番辛い立ち位置になってしまったなーと反省もしております(苦笑)

まあ、あくまで私の願望の塊なので「いやいや、高杉がこんなことするわけないじゃん」と思う方も多々いらっしゃるかと思いますが、私的には本当に…攘夷戦争の頃みんな背中を預けあって戦っていた頃の関係に戻って欲しいなーと思っております。銀魂原作の展開が凄いいことになってるので、今後目も離せませんが、銀時と晋助の間に生じた亀裂が戻る事は果たしてあるのか…とても気になるところです。

今回の話で何度か追憶と題打って過去の話を書かせていただきましたが、丁度一国傾城篇に入る前に書き始めた小説だった為、松陽先生の最期は原作と大きく異なっております。そこがちよつと個人的には気になるところなんです…そこを書き直すと、いろいろまた修正しないといけない場所がでてくるので、この話はこの話で…あくまで雪音個人の書いた二次小説ということで、ご理解いただければと思います。

本当は第十八訓で話は終わる予定だったのですが、何となく締めが悪く、どうしたものかと頭を悩ませました(苦笑)プロット段階では、紫苑が辞世の句を言って息を引き取るところで終わらせるつもりだったんですけど、何か小説を書いてたら「もうちよつと…いや、もうちよつと…」ってなって、結局凄くキリが悪くなってしまったというオチです(苦笑)だったらいっそ、エピソードをつけて銀魂らしく、そして坂田銀時らしくこの小説を締めてもらおうじゃないかと

思い、最後は悲しいエンディングではなく、彼等らしい騒がしい終わり方となりました。ここで1つ補足すると、紫苑の身体を万事屋に運んだ後、銀時が何処に居たのかという謎が残ると思いますが…実は晋助のところ居たという裏設定があります(笑)もう落ち込むところまで落ち込んで、気分もどん底で…けど、そんな姿を新八達には見せたくないと思い、万事屋から…かぶき町から一時的に姿をくらませて、彼なりに落ち着いた場所で気持ちの整理をつけようとした…というのを本当は小説のどこかで書きたかったんですが、長くなりそうなのでそこをバツサリと削りました(笑)鬼兵隊の船で、晋助や万斎が必死に励ましてたんだと思います(笑)ただ、銀時が後を追って自ら命を絶つというプロットは最初から浮かびませんでした。しかし銀時が紫苑の死を乗り切って生きようと思うだけの何かが必要だったのも事実で、何にしようと思んだ結果…紫苑が桜色の着物を銀時に託すという結論に行きついたわけです。紫苑だったら、銀時が後を追ってくるかもって思うだろうなー、だったら銀時に何か生きる意味を与えなきゃだよなー…と思い、初期プロット段階で、紫の着物は晋助が、桜色の着物は最終的に銀時が…という形になりました。ずっと晋助の着物ばかり話に出ていたので、桜色の着物のこと忘れてるんじゃない? って思われてるかもしれない…と思いながら小説を書いておりました(笑)

書けばいろいろとキリがないわけですが、本当にこの恋空は私にとっても思い入れの強い小説です^^何より私自身、結構高杉紫苑というオリ主を気に入っております…実は一時期、銀魂小説として恋空や龍と夜叉以外にもう1つUPしようかと考えた時期もあったんです。その小説にも紫苑は元鬼兵隊副官で尚且つ、現在は真選組副長補佐として登場する予定で、結構重要なポジションでした(笑)その話は、銀時が白夜叉に戻りつつあり、それを晋助が拾い上げて銀時を鬼兵隊に迎え入れる…という話でした。その話では銀時と紫苑は恋人同士でもなければ、花見の約束もしていませんし、着物なんて何のこっちゃという話です(笑)当然紫苑も元気なので、元気よくテロ活

動撲滅のために動き回っているという設定で、実は恋空にはあえて設けなかった彼女の詳細プロフィールなるものも作ったりしました。しかし、プロットを書いてもなんか話がありきたりというか……色んな方が二次創作の小説として書いてそんなネタばかりが上がってきて、結局没になったんです（苦笑）けど、機会があれば書きたいな一と思っっているのも事実だったりします^^

さて、長々と書いてしまいましたが【恋空、春、夜空の下で】……いかがだったでしょうか？この小説が、皆様にとってどのような小説か……作者としましては、何らかの形で気に入っていただけたら幸いですなあと思っております^^

問題の次回作ですが……銀魂×落乱のクロス小説でファイナルアンサーです!!（笑）ただ、トリップするような話ではなく、龍と夜叉同様、銀魂世界に落乱キャラを不自然じゃない程度に混ぜていく……という形で書いていきます。ただ……この小説も龍と夜叉同様、結構特殊で、JOY4……メツチャ仲良しです（笑）銀魂よりのオリキャラが3人ほど登場する予定ですが、とりあえず小説としてUPできる段階まで進んだら、またちまちまと書きながらUPしていこうと思っております!!ただ……その前に龍と夜叉を更新せねば（|| ||）いやホントに吃驚するくらいの高評価を得ております……!!まさか、るる剣の実写版放映効果か!?と思っただぐらいです（笑）龍と夜叉の続きも少しずつ書いておりますので、気長に待つただけでしたら幸いです^^

最後になりましたが、改めまして……結末を見届けていただき、本当にありがとうございました!!にじファン時代からの読者様、ハーメルン移転後の読者様、また別の形でこの小説を知った方……様々だと思いますが、そのすべての方に感謝です!!感想など、返事がかなりの勢いで遅れますが可能な限り返していきますので、何かありましたら送っていただけると嬉しいですよ^^

では、ここまでお付き合いいただきありがとうございます。
（*）